

使徒行伝1章(12/3/95)

使徒行伝1章8節(Acts1:8)

「聖霊のみわざ」#8597

交読文：詩編51章

福音書が終わりましたね。私たちの聖書通読の学びは、使徒行伝に入ります。それで今週は使徒行伝1章です。使徒行伝1章を読み返して、今晚の使徒行伝1章からの神の御言葉の学びに参加されることをお勧めします。

今朝は、使徒行伝1章8節に注目してください。そこでイエスは弟子たちに、次のように言われました。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるととき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

イエスは弟子たちにガリラヤに行くように命じられ、そしてそこでまた会うと言われました。弟子たちはイエスを待っていましたが、イエスがお見えにならないと、ペテロは、他の弟子たちに「私は漁に行く。」と言って、他の弟子たちも、「私たちもいっしょに行きましょう。」と言いました。そして、彼らは夜通し漁をしましたが、何もとれませんでした。朝になって、イエスは岸のところ立っておられました。弟子たちは気づきませんでした。しかし、イエスは、「子どもたちよ。何かとれましたか。」と呼びかけられました。弟子たちが、「いいえ。」と答えると、イエスは、「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」と言われました。そして、弟子たちが舟の右側に網をおろすと、すぐに網はおびたらしい魚のためにいっぱいになり、舟に引き上げられなくなりました。ヨハネは、おびたらしい魚のために網が舟に引き上げられなくなったのを見て、「主です。」と言いました。このことは、私たちにいつもわかります。網が満杯になって、引き上げることができず、いったい何が起きているのか訳がわからないときには、理由は一つしかありません。それは、「主です」という理由です。今朝「偉大な御業を行なわれた神に、栄光あれ。(訳者注：賛美歌の一つですが、日本語に訳されているかどうかわかりません。)」と歌いましたが、私たちは、神の行なわれる偉大な御業を見る特権にあずかることができ、それが「主で」あることを知っています。

しかし、この(使徒行伝1章8節の)時点ではイエスはエルサレムに戻り、弟子たちとともにおられ、オリブ山まで行かれました。弟子たちに、「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテズマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテズマを受けるからです。」と言われました。さて、イエスは、復活の後40日間、姿を現されたり消されたりして、弟子たちにお語りになっていました。イエスの中心的な話題は神の御国でした。イエスは、闇の力に支配されている世界に弟子たちを遣わそうとされていたのです。弟子たちは恐ろしい敵に直面しようとしていたのです。弟子たちは世の悪と邪悪なものを見るようになり、邪悪なものはキリストの弟子、キリストを代表する弟子らに、襲いかかるうとしていたのです。ですから、イエスは、来たるべき神の御国のことを語り、弟子たちを励まされました。人の子が統治するために来られるときは、この地が神の御国で統治される日が来て、全ての過ちが正され、全ての悪が征服され、地上は平和と義で統治されるようになります。ですから、イエスが弟子たちに、「エルサレムを離れないで、あと数日待っていれば、あなたがたは父の約束を、聖霊を受けます。」と言われました。ヨエル書に書かれている、「わたしの霊をすべての人に注ぐ」という約束です。すると、弟子たちは、「主よ、今こそ、イスラエルのために国を再興して下さるのですか。」と言いました。イエスは、こう言われました。「いつとか、どんなときかということは、あなたがたは知らなくてもよいのです。」「いや、

わたしが今話しているのは御国のことではなく、聖霊のバプテズマのことです。」そして、「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と言われました。

この信じる者の内々に働く聖霊の力が、キリスト教を世界の他の宗教と相違させ、分けているのです。イエスが誕生される約500年前に、インドにゴータマ・シッダルタという名の人がありました。この人は平和を探求していました。29歳の時に、妻と生まれたばかりの子供をおいて、平和を求めてインド全土を放浪しました。まず、あらゆる物質的な世界から自分を絶縁することによって、平和を求めました。そして、私たちの感じるすべての動揺や思い煩いや不安は、物質に対する執着の結果であるという結論に達しました。ですから、もし私たちが物欲から解脱することができるのなら、私たちは平和を見出すことができる。それで、この人は食欲からも自分を絶縁しようとしました。ある一定期間一日米一粒で生活したこともありました。自分のひげを一本づつ抜いていきました。しかし、これでも平安がもたらされることがないとわかると、さらに探求をしました。ある日、木の下で座っている時に、この人は悟りを受けました。この悟りを他の人に伝え始めました。この人がこの悟りを伝えると、人々はこの人を仏陀と呼ぶようになりました。それは、悟りを得た人という意味があります。そして、仏陀には、真実への八つの門あるいは道がありました。真実への八正道（はっしょうどう）です。仏陀は、第一に、真実の知恵がなければならないと言いました。第二に、悪に抵抗する意思がなければならない。第三に、他人を傷つけるようなことは何も言ってはならない。第四に、生命や、道徳、他の人のものを尊重しなければならない。第五に、他の人を傷つけない仕事に就くこと。第六に、自分の精神を悪から解放するように努めること。第七に、自分の感情と考えを制することを学べ。第八に、適度な集中力を養い、実行すること。これを仏陀は、平和への八正道と呼びました。もしこれを達成することができるなら、涅槃に入ることができる。仏陀は、自分がしてほしいことは他の人にもしてはいけないと言いました。また、いったん自分を全ての世俗的なものから分離することができるなら、それが涅槃だとも言いました。仏陀が生きていた時代から100年弱さかのぼった時代に、孔子という名の中国の思想家がいました。孔子も道徳を基礎とした、正直、善良、真理、親切に基づいた哲学を切り開きました。孔子には多くの言行録があり、多くの人が引用し「子曰く」といって、他の人が教え学ぶことができるように孔子の哲学をこじんまりとした真理の断片の形にしました。孔子は、「自分がしてほしいものを、他人にしてはならない。」と言いました。さて、孔子と仏陀とイエスの教えには、かなり類似点があります。みな、ほんとうに私たちが幸せになるには、良い、道徳的な正直な生活をしなければならないと認識しました。世俗的なものは、強欲や不安、問題、争い、混乱をもたらします。ですから、霊の生活の方が、肉の生活よりも優れていて、それは肉の生活では決して平安を見出すことができないからだとの結論が出ました。旧約聖書が教えているように、「悪者どもには平安がない。」のです。教えにはかなりの類似点がありますが、一つ大きな違いがあります。仏陀と孔子は、より高尚な生活の道を指し示しましたが、どちらもあなたがその道を歩むのをあるいは崇高な理想を達成することを助けることはできませんでした。さて、誰かが私に、良くならなければいけない、親切にならなければいけない、正直にならなければいけない、愛さなければいけないと言い、「あなたはそれらに同意しますか。」と言うのであれば、私は、「はい、それらはとても良いことです。親切になりたいし、癩癩を起こしたくないし、寛容でありたいです。良くなりたくたいです。」と言うでしょう。しかし、それらに同意して「私は親切にし、寛容になり、優しくなり、愛する者になり、癩癩は起こさず、怒りません。」と言った途端に、ちょうどイエスがペテロに「心は燃えていても、肉体は弱いのです。」と言われたような状況に自分がいることを発見します。使徒パウロが

見出したことを私も見出すのです。「律法は良いものであることを認めているわけです。」とパウロは言いました。私も認めているけれども、どのようにしたらできるのかがわからないのです。ですから、パウロは、「私は、ほんとうにみじめな人間です。誰がこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と言いました。ですから、真実を知っていても道を知っていても、それを実行する能力がないのであれば、罪意識のコンプレックスと挫折感を待つことになるだけです。そして、知ることによってだけでは、私は何も恩恵を受けることはないのです。以前よりもっと挫折感を味わうだけです。なぜなら、私がどのように生きるべきかを知って、それを認め同意しているのに、それをおこなう能力がないからです。

イエスは道を示されただけでなく、「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と言われました。「あなたにはできませんが、わたしの霊があなたの上に臨むとき、わたしの証人となる力を持つようになります。」と。さて、聖書はイエスについて、「忠実で、真実な証人」だと教えています。これは、どういう意味なのでしょう。イエスは、とても真実に神を代表しておられたので、神が真にどういうお方であるかを知りたいのであれば、イエスを見ることができたのです。イエスは神の証人でした。パウロは、イエスのことを「見えない神のかたち」と呼んでいます。ヘブル人への手紙の中では、イエスが「神の本質の完全な現れ」と言われています。イエスは、「わたしを見たものは、父を見たのです。」と言われました。「わたしを見たものは、わたしを遣わした父を見たのです。」と言われました。なぜでしょうか。それはイエスは、神の証人であられたからです。忠実で、真実な証人でした。さて、イエスは、「あなたにわたしの証人になってほしい。あなたの人生がわたしの証になってもらいたい。他の人があなたを見る時に、わたしがどのようなものであるかを知るようになってもらいたい。」と言われたのです。「わたしが愛であるように、あなたも愛でありなさい。わたしが赦すように、あなたも赦しなさい。わたしがあわれみ深いように、あなたもあわれみ深くありなさい。わたしが親切であるように、あなたも親切でありなさい。わたしが敏感で、情け深いように、あなたも敏感で情け深くなりなさい。わたしが清いように、あなたも清くありなさい。」そして私は、そのようになりたいです、と言うのですが、なれないのです。私の能力では、私の肉の力では、できないのです。ですから、イエスは、「あなたがたができないことはわかっています。しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれたあと、あなたがたは力を、デユナミスを受けます。そして、あなたがたはわたしの証人となります。」と言われました。

弟子たちは聖霊の力を受け、エルサレム・ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、イエスの証をするようになりました。使徒行伝を学んでいくと、弟子たちがこのパターンにどのように従ったのかを見ます。まず、エルサレムで証をしました。これは、ある日弟子たちが逮捕され裁判にかけられたとき、検察官が、告発した際に「この人の教えを町中に広めてしまった。」と言ったほどのものでした。私なら、「ハレルヤ！」と言ったでしょう。私なら、イエス・キリストの教えを町中に広めた、と告発されたいです。そして8章で、彼らは迫害が激しくなると、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされて、いたる所で御言葉を宣べ伝えたと書かれています。そして、ピリポがサマリヤに行き、キリストを宣べ伝え、ピリポのおこなった奇跡を見て多くの人が信じバプテズマを受けた様子が書かれています。そして使徒行伝13章では、聖霊がアンティオケの教会に語られて、「『バルナバとサウロを私のために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。』」と言われた。そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、聖霊が第一回の伝道旅行に送り出し、彼らが福音を地の果てまで伝えはじめた。」と書かれています。そして、その後の使徒行伝は、ほとんどすべて、福音を世界に宣べ伝える事柄を取り

扱っています。それで、弟子たちに聖霊が臨まれてから30年後にパウロがコロサイ人に手紙を書いたとき、「世界中でそうであったように、福音の言葉があなたがたに届いたのです。（訳者注：英語の訳です。）」と宣言することができたのです。30年経って、その教会にイエス・キリストの福音が伝わりました。

30年前のきょう、カルバリー・チャペルがミニストリーを始めたことは、私にとって興味深いことです。コスタメサのチャーチ通りにあった小さい教会でした。教会出席者は25人。礼拝のあと、教会出席者のほとんどが、シズラー・レストランに昼食を食べにいき、そのころは親しい交わりをしていました。神は、私たちの心の中、そして生活の中で御業を始められました。「次の日曜日までに、創世記の最初の10章を読んでください。私たちは聖書全部を学んでいきます。次の日曜日の晩には、その10章の要約をします。何か疑問が出てきたら書き留めておいて下さい。次の日曜の晩に答えますから。」と発表した、あの日曜日のことでした。そして、一週間に10章のペースで聖書を学び始めました（大爆笑）。ペースが落ちましたね。今は週に1章です。10章の要約をするのに、2時間半かかっていました。毎日曜日に、聖書を10章ずつ学んでいきました。いろいろな家で、ほとんど毎晩、家庭集会の聖書の学びを始めました。毎晩私たちは集まり、聖書のいろいろな巻を学びました。婦人が家庭で執り成しの祈り会のグループを始めました。男性は、毎週土曜日の夜に、教会のために祈るために、小さなチャペルに集まりました。また、最初の日曜日の朝に、人々に、食前感謝の祈りをするとき、最後に神がカルバリー・チャペルを祝福して下さるように付け加えて祈って下さい、と頼みました。そして、神がカルバリー・チャペルを祝福して下さるようになりました。1年半後にこの小さなチャペルは全員を収容できなくなり、大きな施設を建てるために物件を探し始めました。コスタメサのベイ通りに理想的な物件を見つけたと思いました。こじんまりとした、3分の1エーカー（訳者注:1エーカーは、4046.8m²）の広さの土地でしたが、フォード社が会社の駐車場を使わせてくれることになっていました。それで、私たちは教会を売りに出し、1週目で売れました。しかし、市の当局がベイ通りにあった物件を教会に使用する許可を出さなかったので、教会は成長していましたが施設のない教会でした。しかし、企画部にいた女性が、「ニューポート・ビーチにあるルーテル教会を調べてみてはどうですか。あの教会は教会堂を新しく建ててますから、引っ越したらその教会に移れる可能性があるかもしれませんよ。」言ってくれました。それで私は、ニューポート・ハーバー・ルーテル教会の牧師と接触をとり、その教会が新しい教会堂を建設している期間中は、私たちが日曜日の午後と木曜の夜に古い会堂で礼拝をし、その教会が引っ越した後は私たちが入居する取決めをしました。ほぼ一年後に、まだその教会が新しい教会を始めていないのに、私たちは、その教会の古い会堂では収容しきれない数になっていました。それで私たちは、自分たちの礼拝堂を建設するための物件を探し始めました。サンタアナ学区には、グリーンビル・カントリー・スクールという学校がありました。その学校は、ど田舎にあって、豆の畑に囲まれ、サンフラワー通りとグリーンビル通りの角にありました。私たちはその物件に入札し、学校はそれを受け入れました。それで、私たちは古い学校の建物を取り壊し、大半の建築材料を新しい礼拝堂をつくるのに用いました。屋根の瓦は、一枚ずつはがして行って、新しい礼拝堂にのせていきました。床のジョイストをとって、新しい日曜学校の部屋にそれを天井のジョイストとして使えるように日曜学校の部屋を設計しました。日曜学校の部屋の枠組みをたてたときに、ジョイストが一つ足りませんでした。建築を担当していたジム・ディーマーに、私は、「ジム、どうも主が数えまちがえたみたいだ。」と言いました。「128のジョイストが必要だったのに、127しかない。でも、主は恵み深いお方だ。結構いいせんいってる。感謝します。」と。ジムは、「先週の日曜日、雨が降っているとき、ツー・バイ・トゥエルブ（2×12）をひとつとって泥

たまりにかぶせた。それがどこにあるかわかると思う。」と言いました。行ってみると、果たしてそのとおりで、ジムは泥の中から最後のジョイストを掘り出し、主は数えまちがいなかなかなさらなかったことがわかりました。主は、最後のジョイストまで全部計画して下さっていたのでした。

このころ、私は月曜日の晩の家庭集会での聖書のクラスを始めていました。それは高校生のクラス、若い人たちのクラスで、コスタメサのある家庭で始めていました。4週間ぐらいですぐに家がいっぱいになってしまい、コンクリートのベランダがあったので、そこにランプを取り出して、月曜の晩の若い人たちのクラスはコンクリートの上で集まるようになりました。この若い人たちの聖書の学び会は、現在グレッグが月曜日に続けて教えているのと同じものです。私たちは、神が驚くべきすばらしい御業をなされるのを見るようになりました。小さい礼拝堂は300人が座れるように設計されました。一番最初の日曜に、小さい礼拝堂は定員いっぱいになり、床にすわる人がでました。私は、グランド・オープンだからだと思いました。みんな、グランド・オープンが好きだから、だから来てくれたんだと。次の日曜日は、収容しきれぬ数に減るだろうと。ところが、次の日曜日には、礼拝堂がいっぱいになっただけでなく、ロビーも人でいっぱいでした。それで、もっと椅子を買って、通路に置き、ロビーにも置きました。しかし、3週目か4週目の日曜日には、「どうも何かがおこってるみたいだ。第二礼拝もやろう。」ということになりました。それで第二礼拝を持つようになりました。しかし、ほどなく第二礼拝もいっぱいになってきました。それで、第三礼拝をするようになりました。それも、いっぱいになりました。それで、小さい礼拝堂の壁を拡張し、定員数を倍増させました。それも間もなくまたいっぱいになりました。結局、日曜日に来る人のために、中庭に500脚の椅子をならべるようになりました。とにかく爆発的な成長をみたのです。

小さい礼拝堂のときに、いや、実際はルーテル教会にいたときの最後のころから小さい礼拝堂のときに、ヒッピーが来はじめて、神はヒッピーの中で御業をはじめられました。神が何百人もの、何千人もの若者を引きよせてくださるのを私たちは見ました。ちょうどこのころ、ダウニーぎっての麻薬密売王ジェフ・ジョンソンが主を受け入れて、ダウニーで聖書の学び会をはじめたいと思っていました。それでジェフはダウニーで聖書の学び会を始めて、神がそれを祝福しはじめられました。サンディエゴ州立大学の学生がサンディエゴで聖書の学び会を始め、週末に運転してここに来ていたのですが、週の半ばの学びをしたいというので、水曜日の晩の聖書の学び会を始めて「水曜日の聖書の学び会を教えてください人を誰か送ってくれますか。」と電話をかけてきました。それで、水曜日の晩の聖書の学び会を教える人としてマイク・マッキントッシュをサンディエゴに遣わしました。ラウル・リースが主を受け入れ、自分のカンフー道場を金曜の夜には聖書の学び会にかえてしまい、ウェスト・コビーナでの聖書の学び会が始まりました。チャック・ジュニア

(訳者注：チャックの息子) はリバーサイドの監督教会で若い人たちに日曜の夜聖書の学び会を教えていましたが、チャックはユッカ・バレーに行っていてそこでカルバリーチャペルをつくる召しを受けていたので、リバーサイドの聖書の学び会を代わって受け継ぐようにグレッグ・ローリーを遣わしました。そして、私たちは、私たちにとってのユダヤに広がりをはじめました。そして、スキップ・ハイゼックはアルバカーキーに行き、ウェイン・テラーはシアトルに行きました。ジョン・コーソンはオレゴン州アップルゲートへ。ジョー・フォウシはペンシルバニア州フィラデルフィアへ。ビル・ガラティンはニューヨーク州ビクターへ。トム・スタンプはコロラド州デンバーへ。そして、私たちは私たちにとってのサマリヤに広がりをはじめました。そして神は若い人たちを祝福し、海外へゆく重荷を与えられました。インドへ行った人もいますし、中国へ行った人もいますし、日本へ行った人もいます。この他にも、フィリピンへ行った人もいます。南米に行った人もい

ます。中米に行った人もいます。フランク・ローブリスはメキシコのアーラモスに行き、そこで私たちは聖書学校を始め、ここから生徒がアーラモスに行きスペイン語を学んでいます。その言葉の文化の中で生活し、スペイン語圏の国々へ宣教師として出かけて行く準備ができるようになっていきます。また、他の若い人たちがアフリカに行った人もいますし、東欧の門戸が開かれたときヨーロッパへ行った人もいます。そして、1965年12月の最初の日曜日から30年たったきょう、聖霊のお働きを見ることが出来ます。私たちは、私たちにとってのエルサレム、ユダヤ、サマリヤ、そして地の果てにまで広がりました。昨年というか今年、エルサレムにいったとき、私はエルサレムにあるユダヤ人クリスチャンの集会で話しました。その礼拝に若い女性がすわっていて、礼拝の後で、「チャック牧師、あなたにエルサレムでお目にかかれてとてもうれしいです。」と言いました。この女性は、次のように言いました。「私はハンガリー出身で、母に、人生の意味は何かと尋ねました。母は、『世俗的な物をできるかぎり手に入れること。』と言いました。私は、その答えに満足しませんでした。それで、祖母に人生の意味は何か尋ねました。『靈的になること。』と言いましたが、どういうふうにすればいいのかわかりませんでした。ハンガリーにある川で若い人たちのグループをみかけました。何をやっているのか見にくくと、洗礼式がおこなわれていました。グレッグ・オーピンがイエス・キリストについて語るのを聞きました。私はオーストリアのお城にある、あなたのバイブル・カレッジに行きました。神は、私をここエルサレムでの宣教師に召してくださいました。」神が聖霊をとおして、ここ30年間にどのように働いてくださったのか、それは栄光に満ちあふれています。イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。

私たちがテントを使っていたときに、1ブロック離れた小さな礼拝堂で土曜の晩の男性が集まって祈り会をしたときのことを私は決して忘れることはできません。私たちが物件を手に入れたこと自体、奇跡でした。ある女性がその物件を所有していました。その女性は不動産屋のシンジゲートにそれを売却しました。そのシンジゲートは物件を売って利益を得ようとしていました。その物件に関して、サンタアナ市議会に持ち込んだ案件はすべて却下されてしまい、45万ドルの手形をかたに、その女性は物件の抵当権を行使しました。しかし、そのシンジゲートに加わっていた不動産屋の一人が、「チャック、主は、あの物件をあなたのためにとっておかれたのだと思う。教会のために、あの11エーカーは君には必要だ。」と言いました。私は、「そんな11エーカーも、どうするんだ。」と言いました。その人は、私が買うべきだと思う、と言いました。私は、「とんでもない。あの女性は45万ドルで、あなたたちに対して、抵当権を行使したところじゃないですか。私たちにはそんなお金はありません。まったくケタちがいです。銀行には6万ドルしかありません。無理です。」と言いました。それで、別の人がやってきて、「あの物件について、教会の名であの女性に現金30万ドルのオファーをする許可をもらえないだろうか。」と言いました。「ばか言わないでくださいよ。30万ドルで、うん、と言うわけがないでしょ。ついこの前、45万ドルの約束手形をたてに抵当流れにしたところじゃないですか。」と私は言いました。その人は、「あの女性に聞く許可をくれませんか。」と言うのです。私は、「ああ、どうぞ。」と言いました。すると、その人は戻ってきて、「彼女はオファーを受け入れた。」と言うのです。私は、「なんてこったい。どこから30万ドルを捻出するんですか。」と言いました。その人は、「銀行は地価の50パーセントの金額を貸してくれる。私は、90パーセントを無利子で貸しましょう。あなたは、6万ドル持っていますね。これで、取引成立ですよ。」と言いました。それで、私たちは11エーカーを購入しました。そして、私たちが半分の金額を貸してくれた銀行に対して第一回目の利払いの準備をしていると、最初に取り引にかかわっていた不動産屋が電話をかけてきて、「チャック、さっきシェル石油会社から電話がきて、15万ドルで角地を買いたいと言ってきているんだが。他の部分は教会の土地として残るけど。」と言いました。それ

で、シェルのガソリン・スタンドがそこにあります（訳者注：このあたり爆笑が続いています）。神は、第一回目の利子支払の後、手形の残高を完済してくださいました。

私たちが巨大な古いサーカスのテントを張ったとき、こちら側の駐車場に巨大な古いサーカスのテントを張り、ちょうど運動場があるところですが、そこに張りました。土曜日の晩に祈り会が終わった後、テントを見にいきました。ちょうど、椅子をならべるための止め金をかけ終わろうとして、ライトをすべて消そうとしているところでした。私は、ひとりの長老の方を向いて、「ねえ、ドゥエイン、主がこの場所を満たして下さるのにどのくらいかかると思うかい。1600脚以上の椅子があるよ。あたり一面椅子の海だ。」言いました。ドゥエインは自分の時計を見て、「えっと、チャック、だいたい12時間くらいかな。」と言いました。はたしてそのとおり、次の日の朝9時にテントの中のすべての椅子は人で埋まり、まわりに人が立っていました。私は、「ばかだなあ、第三礼拝から第二礼拝に変わったから、みんな第一礼拝に来てしまって、第二礼拝はガラガラになる。みんな、第一礼拝に来てしまった。まあ、1、2週間もすればバランスがとれてくるだろう。そうすれば、第二礼拝の人も出てくるだろう。」とっていました。ところが、びっくりしたことに、11時にすべての席が埋まりました（訳者注：チャックは感無量で言葉につまってしまいました。会場から大きな拍手。）。人々は、まわりに立っていました。結局、ここに新しい礼拝堂を建設している間、テントを拡張しなければなりません。この礼拝堂をオープンすると、また第二礼拝をしなければなりません。この礼拝堂は、青写真段階で建設を始める前に、実際三回拡張しました。実際に建設すると、最初の二回の日曜日は、第二礼拝で済みましたが、（その後は）第三礼拝にうつらなければなりません。私たちは、もちろん引き続き神が御業をなさるのを見ています。だから、私たちは今朝、「偉大な御業をしてくださった神に、栄光あれ。」と歌ったのです。

聖霊の力をおして、イエスは、「あなたがたは、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と言われました。そして、30年間で、初代教会は、世界に広がっていきました。神は、これを繰り返されました。イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。神が引きつづき栄光に満ちた御業をおこなわれるなら、向こう30年間にいったい何が起こるのだろうか、不思議に思われるばかりです。聖霊の御業に、つねにオープンで敏感でありたいと祈ります。パウロはガラテヤ人への手紙で、「ああ愚かなガラリヤ人。・・・だれがあなたがたを迷わせたのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。」とのべています。今日の世界では、神は決して、私たちに監視したり、支配したり、私たちに型にはめたりなさることなく、私たちに自由にしておいて下さり、神がなさりたいことを、聖霊がご自由に働いてくださることをお許しになっておられます。神はよくしてくださり、神は祝福してくださいました。この30年間でふりかえり、私は神の祝福とよいことで圧倒されています。私たちが夢見る、また、計画する、希望する、発展するより、さらにたくさんの偉大な聖霊の御業を成しとげてくださいました。この場所すべては、神の聖霊の御業により、神がもたらしてくださったものの記念として立っています。私たちは、神にあってそれを喜びます。

使徒行伝 2 章 (12 / 10 / 95)
使徒行伝 2 章 22 - 23 節 (Acts 2:22-23)
「彼は死ぬために来られた」 # 8598
交読文：ルカの福音書 2 章 21 - 35 節
第一礼拝

私たちは聖書の通読の学びを続け、今週は使徒行伝 2 章に来ました。みなさんがこの聖書の箇所をお読みになったと信じます。今晚また集まって使徒行伝 2 章を学ぶ前に、今日の午後も読み返して下さいをお勧めします。

今朝は、使徒行伝 2 章 22 - 23 節に注目していただきたいのです。弟子たちが集まっているところに、大勢の人が集まっていました。聖霊が注がれて、その他超自然的な現象が起こり、人々の関心を集めていました。人々はこのような経験の意味を理解していませんでした。それで、ペテロは立ち上がり、何が起きているのかについて人々に語り始めました。ペテロはこのように語りました。イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。あなたがたの間で、神が彼によって行なわれた、奇跡と不思議とするしによって、神が承認された、あるいはもっと文字通りには、神のものであると証明された、ナザレ人イエスは、みなさんがよくご存じのように、神の定めた計画と神の予知によって引き渡され、あなたがたはこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。イエス・キリストが来られた目的は、人を罪の罰から贖うためでした。

クリスマス・ライトがつけられ、リストが作成され、プレゼントが買われ、クリスマス・カードが送られ、ショッピング・センターは人でごった返し、親戚縁者の集まりが計画され、今年もまた人類の歴史で最も重要な日を祝う準備がなされています。ほぼ二千年前のその日に、神がご自分の愛のゆえに御子を世に遣わされました。御子は、神のために世を贖い出すために来られました。これは、人間への神の愛の最高の現れでした。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。」「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが、不敬虔な者のために死んで下さったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」神が、私たちに示された御自身を犠牲にした愛のゆえに、この時期になると、私たちは自分の愛している者に対して犠牲的に与えることで愛を現し示すようにうながされます。このため、私たちは、クリスマスの時期に借金をするのです。(訳者注：アメリカでは、大盤振る舞いでクリスマス・プレゼントを買って、支払いはクレジットカードでという人がかなりいるようです。) 私たちが持っている愛を示すために、犠牲を払う用意があるのです。イエスの誕生の際に、天使は、「私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。」と宣言しました。それは、御子を地上に遣わして下さいによって、神がご自身の愛を現して下さいからです。それは、神が、地の上に平和が、御心になう人々になうことを望んでおられたからです。

では、聖書の観点から、イエスが来られた出来事をみてみましょう。「初めに神が天と地を創造した」と教えられています。この「初めに」とは、いつであったのか私たちにはわかりません。誰にもわかりません。いろいろな憶測はありますが、今日生存している人は、だれ一人としてその時点にはいませんでした。ですから、宇宙の起源についてわずかでも説明するものがあるとしても、せいぜい良くても、それは想像の域でしかありません。例外は、聖書によって認めることのできる、その時点で存在された方が、初めに天と地を創造されたことです。しかし、神の創造に何かゆがみが生じました。そして、地は荒廃し、荒れ果ててしまいました。そして、やみがたいなる水の上であり、神の霊は水の上

を動いていた。（訳者注：チャック牧師の創造に関する見解は、創世記1章1節と2節の間にサタンが堕落があり、神はもう一度宇宙を造り直したという考えです。）創世記1章には、神がご自分のかたちに、似姿に創造された人間を美しいパラダイスに置いて、人間が神の天才的な創造をすべて享受してまた神との交わりの生活をするために、どのように地をその時再設計されたかが書かれています。それは、神を知り、神を礼拝し、神と交わりを持つためでした。神は、地を再び創造し、神を知る能力を持たせて、神を礼拝し、神と交わりを持つように、その上に人間を置かれました。しかし、神の人間への計画に何かゆがみが生じました。人間が自分のいのちに関して神に不従順となり、神の権威に反抗しました。人間は、ほぼ完全な自由を与えられていました。神が人間に課された制限は一つだけで、それは、園の中央にあった木から実をとって食べてはならないことでした。神は、それを取って食べる時、死を招くことになる、必ず死ぬ、と警告されました。しかし、人間の最大の潜在能力を發揮する、神のようになる誘惑を退けることが、人間にはできませんでした。それで、神の命令に反抗し、それを取って食べました。その結果、即座に霊的な死を体験しました。それは、神から引き離されることでした。罪は、常に人を神から引き離します。霊的な死の結果、神との交わりが失われました。このため、神が人間を創造された目的がゆがみました。人間は、もはや神との調和と交わりの中に生活しなくなりました。人間は、神の権威に反逆し、神との調和からはずれ、神の目的にはずれた生活の結果に苦しまなければならなくなりました。地はもはや、神が意図されたパラダイスではなくなっていました。神の人間への意図と目的は、損なわれてしまいました。人間は、神の霊ではなく、自らの欲に支配され、左右されるようになりました。このため、人間が神を第一に愛せよ、そして自分を愛するように隣人を愛せよとの神の命令を無視し、人間は強欲や自己中心に支配されるようになったのです。嘘をつき、盗みをし、ごまかし、争い、憎み、破壊するようになりました。これらは全て、自分の欲、願いを満たすためでした。ヤコブが新約聖書のなかの短い書簡を書いた時に、「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で、戦う欲望が原因ではありませんか。」と述べました。

さて、歴史の中のある時点で、聖書に描写されているように、「その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾く」状態に至ってしまったとき、地は暴虐で満ちていました。人間は、欲に身をゆだね、互いに殺しあい、強者は制圧的になり、弱者の弱みに付け込み、あまりに状況が悪くなって自分自身を破滅させる一歩手前にまで至りました。そこで、神が介入されました。神は、ノアとその家族を洪水から免れさせましたが、ノアが暮らさなければならなかった悪に満ちた世界と環境を破壊されました。「地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です」と聖書が言っている時が再び到来します。神は常に、怒るのにおそくあわれみ豊かな方です。人間が滅ぼされることは、神の御心ではありませんでした。いや、神は、人間が自己中心の生活から神中心の生活に変えられることを望んでおられます。人間が自らの欲に支配されるのではなく、神の霊に支配されることを望んでおられます。人間が自分の良い暮らし向きを求めるのではなく、他の人を愛し、他の人がよい暮らしができるように助けることを追い求めるよう望んでおられます。このため神は、救いの計画を立てて下さいました。

ペテロが五旬節（ペンテコステ）の日に、群衆を、集まった何千人もの人を前にして、神の定めた計画と神の予知とによって、神が御自分の御子を人々に遣わして下さいましたが、この方は、不法な者の手によって十字架につけられ殺されたと述べました。しかし、ペテロが十字架について語った時、つまりイエスが十字架上で死んで下さったことについて語った時、神の定めた計画と神の予知とによって、という文脈の中で語っています。神の初めの意図が回復されるように人間の罪のために死ぬこと、これこそが、神が世に御子を遣わして下さいました目的だったのです。罪は、人間を神から引き離しました。神はそれを取

り組もうとされました。預言者は、「主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなった」と言いました。神の目的、交わり(fellowship)、深い霊の交わり(communion)は、罪の結果さまたげられ、神はそれについて何とかしたいと思われました。神が人を愛している、人が滅びることを望んでいないことを人が知るようになるような方法でなさろうとし、また、いのちを、まことのいのちを、終わることがない神から来るいのち、永遠のいのちを人が知るようになるような方法で何とかしようと思われました。

この世が創造される前のある時に、人間がこの地に置かれる前のある時に、神は、ご自分の設計と、計画、天の計画のうちに、創造に関する、人間に関するご自分の目的と計画を決定されました。人間の弱さを御存じだったので、ひとり子を遣わされることにより、神はご自身の愛を示して下さいました。それは、御子が人の罪を取り去り、人の身代わりとなって死んで、誰でも望む者がみな肉によって支配されている生活から解放され、霊によって支配される生活をして、よって創造主である神と交わる生活をする方法を提供するためでした。ですから、定めの時が来ると、神は御子を遣わされました。神の御子は、ベツレヘムで処女マリアからお生まれになりました。マリアは、その子をうぶぎでくるみ、飼葉おけにねかせました。宿屋には彼らのいる場所がなかったからです。

御子をとおしてご自身を啓示なさることが、神の目的でした。罪の罰のために御子が苦しみを受け、神の愛と喜び、平安を望む人が、それらを知るようになる機会を提供することは、神の目的でした。御子を遣わす何百年も前に、神は敬虔な人たちに御自分の計画をお話しになり、救いの計画の様々な側面を明して下さいました。神は、「わたしは、あなたがたにひとつのしるしを与える。処女がみごもり、男の子を生み、その名は『インマヌエル』と呼ばれる。これは、訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。」と言われました。神は、預言者イザヤをとおして、「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りない。」と言われました。神は、預言者ミカをとおして、「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。」とおっしゃいました。詩篇の著者ダビデに対し、神は、「犬どもが私を取り巻き、悪者どもの群れが、私を取り巻きました。私の手足を引き裂きました。彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにする」ことを示されました。神はイザヤに対し、「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」ことを示されました。そして、預言者はこう続けています。「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。」神は預言者アモスに語り、こう言われました。「その日には、
— 神である主の御告げ。 — わたしは真昼に太陽を沈ませ、日盛りに地を暗くし、あなたがたの祭りを喪に変え、すべての腰に荒布をまとわせ、すべての人の頭をそらせ、その日を、ひとり子を失ったときの喪のようにし、その終りを苦い日のようにする。」イエスが十字架にかけられた日には、日盛りに地が暗くなったことがわかっています。そして、ひとり子への喪がありました。神は、人を罪から救おうと願われました。人の救いは、神の御子の犠牲的な死によってのみ達成可能だったのでした。十字架にかかる前の晩に、イエスが園におられた時のことを思い出していただけるのでしょうか。そこで、

イエスは、こう祈られました。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせて下さい。」と。何が、「できますならば」だったのでしょうか。それは、人の救いです。もし、良い行いによって、宗教によって、誠意によって、人が救われることができますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせて下さい。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。」イエスが十字架にかかって下さった事実は、救いの方がひとつしかないこと、つまりイエス・キリストの死という神の方法しかないことを証言するものです。

弟子たちが、イエスはメシヤであると初めて認識した時、イエスは弟子たちに、「エルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならない。」とおっしゃいました。弟子たちはこのことに衝撃を受けて、その考えを退けましたが、再びイエスは、マタイの福音書20章で弟子たちに、「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」と言われました。「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」そして、マタイの福音書26章で、イエスは、「あなたがたの知っているとおり、二日たつと過越の祭りになります。人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」とおっしゃいました。イエスが弟子たちと過越の祭りの晩餐をされ、杯を弟子たちにお与えになるとき、「これはわたしの契約の血です。多くの人のために流されるものです。」と言われました。ヨハネの福音書10章15節で、イエスは、「わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」とおっしゃいました。イエスは、地上に来ることの代償をご存じでした。神の目的を遂行するのに何をすべきかをご存じでした。ですから、ベツレヘムでの美しい馬小屋の場面を見ますと、母親が子供の方によりかかっていたり、腕に子供を抱いてあやしていたり、天使の御告げで羊飼いたちが導かれ、その後には、賢者が訪問するというものです。クリスマスの場面を組み立ててゆくときに、私たちは、その馬小屋の上にかかっている十字架の影を認識する必要があるのです。そこに生まれた子供は、生まれる前から死刑の宣告を受けていたのです。神の定めた計画と神の予知とによって、死刑の宣告を受けていたのです。私たちがいのちを知るようになるために、キリストを通して神のいのちを知るようになるために、死刑の宣告を受けて下さっていたのです。ですから、真のクリスマスのは、12月25日だけのことではないのです。その日は、誕生を祝う時ですが、なぜイエスが生まれて下さったのか、なぜ来て下さったのかを認識しなければならないのです。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

いのちと、喜び、平安にあずかることが可能となりました。自分の罪のためにかつて神から離れていた私たちですが、今や神との交わりの喜びがどのようなものかがわかるようになりました。それは、私たちの罪の身代わりとなって死ぬために、イエスが生まれて下さったからです。イエスは、私たちに贖う代価を払って下さいました。「イエスがすべてを支払って下さいました。すべては、イエスのおかげです。罪は真っ赤な染みを残したが、イエスが雪のように白く洗って下さいました（訳者注：ある賛美歌の折り返し部分）。」今年、どうかこれをおぼえて、クリスマスを祝う準備をなさってください。

使徒行伝3章(12/17/95)
使徒行伝3章25-26節(Acts3:25-26)
「彼はあなたを祝福するために来られた」 # 8599
交読文：詩篇115篇

今週の私たちの通読箇所は使徒行伝3章です。今朝は、いっしょに使徒行伝3章25-26節を見ていきたいと思います。ペテロとヨハネは、祈りの時間に、だいたい午後の3時ごろに、宮に入って行きました。宮の門のところまで横たわっている男がいました。この男は、まったく歩くことができませんでした。遺伝的な問題をかかえて生まれてきたため、生まれつき足がきかない男でした。神を礼拝するために入ってくる人から施しを求めることができるように、毎日この男は門まで運んでもらい、そこに置いてもらっていました。ペテロとヨハネが入って行くと、この男はペテロとヨハネにお金を求めました。ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。」と言って、この男に信仰の言葉を語りました。ペテロは言いました。「ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」ペテロが、この男が立ち上がるのを助けると、たちまち神はこの男をいやされ、男は歩いたり、飛び跳ねたり、神を賛美しはじめました。この奇跡に驚いた人々は、ペテロが神ご自身か何かであるかのように見はじめました。ペテロは、「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。これはイエス・キリストが死者からよみがえった証拠です。」と言いました。

そして、ペテロは、イエス・キリストに関して人々に説き明かし始めました。25節では、ペテロは、「あなたがたは預言者たちの子孫(訳者注:children)です。また、神がアブラハムに『あなたの子孫(訳者注:ここの英語は、seedで、単数です)によって、地の諸民族はみな祝福を受ける。』と言ってあなたがたの先祖と結ばれたあの契約の子孫です。神は、まずそのしもべ(訳者注:英語では、「しもべ」のところは、「御子イエス」となっています。)を立てて、あなたがたにお遣わしになりました。それは、この方があなたがたを祝福して、ひとりひとりをその邪悪な生活から立ち返らせてくださるためなのです。」と述べています。ここでペテロは、メシヤに関するアブラハムへの神の約束に言及しています。神は、メシヤがアブラハムの子孫を通して来る、そして、アブラハムの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになると言われました。ガラテヤ人への手紙の中で、パウロは、「神は『子孫たちに』と言って、多数をさすことはせず、ひとりをさして、『あなたの子孫に』と言っておられます。」と指摘しています。そして、パウロは、その子孫(訳者注:ここの子孫にあたる英語はseed。単数。)はキリストですと宣言しています。換言すると、世が祝福を受けるように、神はイエス・キリストを世に遣わされたのです。

そして、ペテロは続けて次の節で、神はキリストを「あなたがたにお遣わしになりました。それは、この方があなたがたを祝福」するためである、と宣言しています。ですから、私たちが今年もまたクリスマス・シーズンを祝うとき、ベツレヘムでお生まれになったみどりごを考えると、イエス・キリストがこの世に来られた目的を考えると、おぼえていただきたいのは、イエスが来られた目的の一つは、みなさんに神の祝福をもたらすことだったことです。それは、神がみなさんのことを愛しておられ、神はみなさんを祝福したいと願っておられるからです。

罪は、世にのろいをもたらしました。アダムの子孫のために世界全体がのろいを受けました。神は、アダムに言われました。「土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざ

みを生えさせ、あなたは、野の草（訳者注：英語では「野菜」となっています。）を食べなければならない。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない」「あなたの罪のために土地はいばらとあざみを生えさせる。あなたが食べるためには、顔に汗を流さなければならなくなる。苦しみと厳しい労働によらなければならなくなる。」と神は言われました。最初神は、野菜や穀物は、雑草のように勝手に成長するように、設計し計画されたと思います。耕作の必要はなかったのです。耕作や、植え付け、収穫といった様々な労働をしなくても、みんなに十分な食べ物があるように設計し、計画されたと思います。神の最初のご計画では、雑草と同じくらい豊富にすることであったと思うのです。雑草と同じくらい多くの実を結び、繁殖するものであったと思うのです。しかし、のろいの結果、神は、「これからは、顔に汗を流さなければならなくなる。苦しんで食を得なければならない。土地はあなたのしたことによってのろわれたからである。」と言われました。今日世の中で見られる、すべての惨めさや、苦しみ、悲しみは、人間の罪の直接的、あるいは間接的な結果なのです。実際には、神が創造された世界をみているのではないのです。神が創造されたそのままの世界をみているのではないのです。神が創造された世界は、荘厳で美しいものでした。すべては神と完全に一致し、調和がとれていました。人間は、こうであるべきだと神が意図されたような人間を見ることができません。罪のためにのろわれた世界が見えます。罪のためにのろわれた人間が見えます。老化の過程にある人間が見えます。苦しみや、悲しみ、惨めさ、病気が見えます。そういったものは、神の最初の設計には入っていなかったものです。しかし、それらは、罪のために、また罪の結果、人類社会にもたらされたものです。痛みや、悲しみ、苦しみ、死、こういったものはみな、人間の罪のため、のろいによってもたらされたのです。しかし、神は、祝福を約束して下さっているのです。アブラハムに対して、「あなたの子孫（訳者注：decendent）によって、地のすべて、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。」とおっしゃいました。一人の人間、アダムによって、私たちはみなこのろいをうけましたが、一人の方、イエス・キリストによって、私たちはみな神の祝福を経験することができるのです。

ペテロは人々に対して、人々を祝福するために神は御子を遣わして下さったと宣言しました。事の真相は、神があなたのことを愛して下さっているということで、神はあなたのことを祝福したいと願っておられます。それが、神の願いです。おおむね、クリスマスとは、そういうことではないのでしょうか。プレゼントを贈るために、なぜ私たちは犠牲をいとわないのでしょうか。それは、自分が愛する人を祝福したい（訳者注：英語は**bless**が使われていますが、「喜ばせる」と言う意味合いも**bless**と言う言葉には含まれていると思います。）からです。自分にとって大切な人だからです。いとしい人だからです。喜ばせ（**bless**）たいのです。ですから、そのような人たちを喜ばせるために、私たちはつらい経験をするをいとわないのです。

昨日、妻は婦人の集会で話すため、南の方へ行かなければなりませんでしたが。このため、私が孫たちのプレゼントのリストを持って、買いに行かなければならなくなりました。ごった返す人ごみの中をかきわけて、行かなければなりませんでしたが。私は、大、大、大きいです。（訳者注：このあたり爆笑が続いています。）トイザラス（訳者注：おもちゃやの名前）から2ブロック離れた所に駐車しなければならなくなりました。（訳者注：アメリカ人は、ほんのちょっと歩くのも大嫌いで、車に乗りたがりです。）目当ての場所を決めていました。車のトランクにご丁寧に買ったものの包みを積むために、延々と時間をかけている人を、私は忍耐深く待っていたのです。なんで、さっさとほうり込んで、車に乗って、その場所から車をどかせないのかと思ってしまいました。どうせ動いてしま

うのだから。しかし、注意深く買ったものの包みを置いていました。でも、私は忍耐深く待っていました。この人が出たら、ここは私の駐車スペースになるんだとみんながわかるように、方向指示機を出していました。ようやく、車が出始めたと思いきや、別の車が角を曲がってきて道をふさいでしまいました。さあ、私は身動きが取れません。さっと、そのスペースに入られてしまいました。ちょっとの間、私はクリスマスの精神をなくしてしまいました。（訳者注：ずっと爆笑が続いています。） 結局、2ブロック離れた所に駐車し、歩きました。しかし、そこには必要なものが全部そろっておらず、ベストに行って、そしてフェドコに行って、それからプライス・クラブに行って、その後にターゲットに行って・・・（訳者注：ベスト、フェドコ、プライス・クラブ、ターゲットいずれも、ダイエーやイトーヨーカドーのようなディスカウント・ショップです。）女性の方々は何でもこんな事ができるんだろうと思ってしまいます。しかし、テレビで、幾つかおもしろそうなフットボールの試合があったのですが、それでも私はいとわずやったのです。（訳者注：大半のアメリカ人は、この時期、試合を見るためにテレビにかじりついています。）孫たちのことを愛しています。すでに、孫たちはクリスマスに何が欲しいか、リストを作成しています。孫たちがちゃんとそれを受け取れるようにしたかったのです。私は、孫たちに、愛を示したかったのです。それで、贈物を与えることで、喜んでもらおうとしました。

さて、神はあなたのことを愛しておられます。そして、神はあなたを祝福したいと考えておられます。神は、あなたを祝福することで、ご自分の愛をあなたに示したいと願っておられます。それで、神はあなたを祝福するために、御子を遣わされたのです。それは、アブラハムとの約束を守るためでした。アブラハムの子孫によって、地のすべて、地のすべての国々は祝福を受けるようになるためです。

これから、みなさんがすぐには同意して下さらないかもしれないこととお話します。後になってからも、同意して下さらないかもしれません。しかし、少なくとも聞いて下さい。神が律法をお与えになったのは、愛に促されてのことだったと私は思います。神は、人間の性質を理解していらっしゃいます。神は人間の体を理解していらっしゃいます。神は私たちを創造され、とても賢明な方であり、関係についてすべてご存じであり、人間の体の機能をすべて知っておられます。ですから、神は、人を祝福するために律法をお与えになったのだと思います。何が人に痛みを与えるか、傷つけるか、苦痛をもたらすか、死の原因になるのかを、人に対して宣言されたのです。それで、神は、ルールを設定され、「ごらん、このルールを守れば、あなたは良い、幸福な、健やかな生活をおくることができるよ。」とおっしゃったのです。私は、それが律法の目的だったと信じています。実際、詩篇1篇には、「祝福なことよ」あるいは「幸いなことよ。悪者のはかりごとには歩まず、罪人の道にたたず、あざける者の座に着かなかった、その人。まことに、その人は主のおしえ（訳者注：「おしえ」は英語では、law で、律法と同じ言葉。）を喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木のような。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」と書かれています。幸福な、繁栄した、健やかな、良い生活のための、これこそが良い生活であるというためのルールがこれです。しかし、人間は、律法の目的をすべて理解しませんでした。人は、神がいくつか間違いをしたと思ったのです。神が禁止しておられたことをいくらか行えば、幸せになれると思ったのです。それを行ってしまったために、自らの上に、痛みを、苦しみを、不安を、ストレスを、争いを、惨めさをもたらしました。では、例えば、律法の中で、出エジプト記（訳者注：レビ記のことか。）20章13節で、神は、「男がもし、女と寝るように男と寝るなら、ふたりは忌みきらうべきことをしたのである。彼らは必ず殺されなければならない。（訳者注：英語では単に「死ぬ」となっています。）」と言われ

ました。男の人の中には、この神の律法を嘲笑した人がいます。同性愛者をあたかも普通と同じであるように取り扱うべきであると要求しています。実際、この人たちは、「別の生活様式の選択肢にしすぎないのだから。」と言っています。この人たちは、この別の生活様式の選択肢を選んだので、特別扱いを受けるべきだと。この人たちは、この別の生活様式の選択肢を選んだので、特典を与えられるべきだと。しかし、同性愛者の間で、いかにエイズがこの人たちを死に至らしめているかを見て下さい。「あなたは、エイズが同性愛者に対する神のさばきであるとしてもおっしゃるのですか。」と言われるかもしれません。いいえ、私はそんなことは言っていないです。そんなことは信じていません。私は、ただ、エイズが不自然な関係の自然の帰結であると言っているのです。神が人間の体を創造され、設計されたとき、神は私たちが免疫システムと呼んでいるものを創造されましたが、これは驚くべきすばらしいものです。ウィルスでも何でもよいのですが、異質な蛋白質あるいは、異物が体の中に運びこまれると、あなたの体は、それがウィルスであっても蛋白質であっても、それを異物であると識別します。そして体は、それに対する防御を構築します。それを識別し、それに対して防御を構築し、それを単離し、包囲し、体からそれを拒絶します。あなたの体は究極的に異質な蛋白質あるいは、ウィルスを拒絶します。私たちが生存できるように神はこうなされたのです。そうでなければ、最初のはしか、あるいは風邪か何かで死んでしまっていたはずで、最初のウィルスで、あなたはおしまいになってしまっていたはずで、しかし、神はそれに対し免疫システムで防御できるように体を設計されました。しかし、神は、免疫システムが対処できる量の異質な蛋白質がどの程度であるかご存じでした。ですから、セックスをする相手が多数になり、こういった蛋白質がすべて体に導入されると、免疫システムは崩れてしてしまい、体のシステムの中に注入されたこういったたくさんの異質な蛋白質を対処できなくなります。このため、免疫システムが対処できなくなり、崩れてしまい、崩壊してしまいます。免疫システムが崩れてしまうと、ウィルスにさらされ、あなたの体はもはやそれに対して、免疫を構築することができなくなります。そして、神がおっしゃったように、死ぬのです。今それが起こっているのを見ているのです。これはただ単に同性愛者の関係だけでなく、みだらな関係ならどのような関係にも言えることです。性的にみだらな人なら誰でも、その人の体はすべての性的接触によって伝染するウィルスやいろいろな病気に対し、抵抗あるいは対処することができなくなります。それをご存じであった神は、愛のゆえに、人を守るために律法をお与えになりました。そのような行為は、人間を破壊してしまうことをご存じだったからです。神が姦淫を禁ずる律法をお与えになったとき、神は姦淫がどのように関係を壊すかをご存じでした。姦淫は、結婚を崩壊させ、家族を崩壊させます。家族単位が破壊されると、壊れると、社会全体が崩壊してしまうことを、神はご存じでした。ですから、社会秩序を守るために、神はルールをお与えになったのです。愛を持ってお与えになったのです。神は、あなたのことを守ろうとされたのです。神は社会秩序を守りたいと思われたのです。人間が神の命令をもっともっと平然と無視するようになると、もっともっと人々はだめになってゆきます。栄光に満ちた幸福な国民になっているのではなく、今日ではこれまでにないほどの惨めさや悲しみや痛みや苦しみがあります。それは、神の言われることを聞かない選択をしてしまったからです。私たちは自分の本能に、自分自身の肉の欲に従うことを選びました。しかし、ペテロは、「神は、まずそのしもべを立てて、あなたがたにお遣わしになりました。それは、この方があなたがたを祝福して、ひとりひとりをその邪悪な生活から立ち返らせてくださるためなのです。」と述べました。私たちのこのろいが入ってくるのは、ここです。私たちの邪悪な生活からです。しかし、それは、神が、まずそのしもべを立てて、あなたがたにお遣わしになり、それは、この方があなたがたを祝福して、ひとりひとりをその邪悪な生活から立ち返らせてくださるためでした。

イエス・キリストを通して神が下さった祝福の中には、どのようなものがあるでしょう

か。天使から羊飼いに御告げを聞いてみましょう。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。」民全体のためのすばらしい喜び、大きな喜びです。「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主、メシヤ、主がお生まれになりました。」翻訳者は、「救い主、・・・この方こそ主キリストです。」と付け加えています。しかし、天使は、「救い主、キリスト、主」とだけ言いました。その三つの中に三つの祝福があります。

まず、救い主ですが、私たちが何から救って下さるのでしょうか。それは、自分自身の罪の帰結からです。神は、罪に対して、すべての罪に対して、死の宣告をして下さいました。しかし、この赤ちゃんが生まれたのは、あなたが自分の邪悪な生活から、罪から立ち返り、あなたの罪のためにご自分のいのちをお与えになるためでした。自分の罪が赦されたとわかることは、なんたる祝福でしょうか。キリスト・イエスにある者が、罪に定められることがないとは、なんたる祝福でしょうか。自分は神にすべての罪を赦していただくとは、今日神が私をごらんになる時に、私の欠点や失敗、罪、たりなさは全くごらんになりません。ただ、イエスにあって完全な私のみをごらんになります。これは、なんたる祝福でしょうか。おわかりでしょうか。私は、死刑の宣告のもとにいたのです。想像できるでしょうか。想像することが可能でしょうか。もう数ヶ月も死刑囚となっている人で、とうとう死刑執行の日が出され、控訴もし尽くし、もう死刑執行の日が設定され、小さな部屋に連れてゆかれて椅子に固定されるその日をただ待つばかり。もうあと数時間しかありません。その人の感情を想像することができるでしょうか。あと数時間で、電気の衝撃がこの人の体の中を通過すると、いのちが終わることを認識している人の頭をよぎっている考えを想像することができるでしょうか。この人が待っている時に、突然扉が開いて、「君は、自由の身になったよ。」と宣言が出たらどうでしょうか。「判事がすべての証拠を調べ、新たな証拠が出され、判事は君の罪をすべて赦した。君は自由だ。自分が犯した罪のために死ぬことはない。」と。そのような状況で、その人がどう感じざるを得ないか、あるいはどう感じるか想像してみてください。それと同じ感情を私も持っているのです。私は自分の罪をすべて赦されました。自分が犯した罪のために私は死ななくてもよいのです。私に救いの祝福を与えるために、神がイエスを遣わして下さいました。罪をぬぐい去り、邪悪な生活からあなたを救って下さる救い主が、お生まれになったのです。

この方はキリストです。キリストという言葉は、油注がれた方という意味で、ヘブル語の「メシヤク」に由来しています。それは油注がれた者のことです。旧約聖書の時代に、支配する王が選ばれると、王座に着く前に、その王になる人に預言者が角から油を注ぎかけ、その注ぎの油は、この人が人々を支配するために油注がれたことを表して、意味していました。大祭司の時も同じことが言えました。大祭司就任の前に天然の油を注ぎかけ、よって人々に対し油注がれた大祭司となったのです。以前から神が油を注いだ方を、神が王に選ばれた方を、神が大祭司に選ばれた方を遣わすと神は約束しておられました。神はこの方がどのような方であるか説明してこられました。この方の誕生の地、誕生の方法、誕生を取り巻く環境、この方の人生、死について説明してこられました。神に油注がれた方について、これらすべてを神は語ってこられました。そして、御使いらはここで羊飼いらに、「きょうダビデの町で、あなたがたのために、メシヤが、油注がれた方が、王にするために、そして大祭司とするために神が油注がれた方がお生まれになりました。」と述べています。

しかし、この方は主でもあられます。自分の人生を支配して下さる方をどれ程私たちは必要としてきたでしょうか。心から私たちの最大の利益を考えて下さる方を。政府、あるいは指導者、支配の問題の一つは、支配者が必ずしも自分が支配している人の最大の利益を考えていないことです。通常、支配者は、自分が支配している人の利益ではなく、自分の利益を心に考えています。私たちの多くは、人生が自分の肉によって支配されていまし

た。自分の欲の奴隷となっていました。人は誰かに仕えざるを得ない存在です。もし、自分の欲に仕えるなら、それはあなたにとって最大の利益にはなりません。サタンに支配されている世俗的システムに仕えている人がいます。そのようなことは、あなたを破滅させます。人は誰かに仕えざるを得ない存在です。イエスは、主となるために、あなたの人生の主となるために、あなたがイエスに仕えるために来られました。イエスに仕えるということは、イエスから祝福をいただくことです。それは、イエスがあなたのことを愛しておられ、あなたの最大の利益を心にかけてくださっているからです。イエスは、あなたに最高を願っておられます。

「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主、メシヤ、主がお生まれになりました。」この方が、王の王、主の主であり、この方に仕える者は、この方の御国の永遠の栄光を知るようになります。馬小屋に横たわっている小さな赤ちゃんは、王の王、主の主。その方は、私たちひとりひとりを、その邪悪な生活から立ち返らせてくださることにより、神が私たちを祝福して下さるために神が遣わして下さった方なのです。

また御使いは、「地の上に平和があるように。」と言いました。さて、人は神と神の律法に敵対してきました。しかし、預言者は、「おのれを造った者と争う者はわざわざ口語訳。」と述べました。かつてギリシャ人の諺には、神のさいころは特定の目が出るようにおもりがいれてあるというのがありました。つまり、それはどういう意味かと言いますと、神と戦っても勝つことは出来ないということです。神にはむかう態勢をとったとたんに、確実に敗者となってしまいます。で、人は神と敵対しており、人は敗者となっていました。しかし、神は地の上に平和があるように、ご自分の御子を遣わされました。御子の十字架上の死を通して、私たちが神と和解することができるようにして下さいました。これによって、神との平和が可能になったのです。地の上に平和があるように。今日、ようやくボスニアに平和が訪れたと信じるうぶな人がいます。人が集まって、「私たちは、あなたがたを殺すのをやめる」との協約あるいは条約に署名すれば、平和が訪れたとその人たちは感じているのです。心の中に憎しみがある限り、苦みがある限り、「お前が憎い。殺してやりたい。でも、お前を銃でうたないと約束するぞ。」と言っている限り、平和だと。憎しみがある限り、平和はありません。深い恨みや苦みがある限り、平和ではありません。愛がある所にのみ平和があります。もはや害を望むのではなく、善を望むとき、有益なことをしたい、よいことをしたいと思うとき、神との敵対に終止符が打たれます。降伏したのです。戦うのをやめたのです。従って、おのれを造った者と争うのをやめることにより、私は神との平和を持つようになったのです。神との平和を持つようになり、神は私の心に愛を入れて下さいました。それで、私は今、愛して、よいことをしたいと思うようになったのです。主がおっしゃったように、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません。」全く異なる次元に光が当てられています。これは、真の平和です。制約された怒りではないからです。「俺が車をとめようとしているところに入ってきたら、ぶっ殺すぞ。」というのではなく、これは愛です。どうも私は運動が必要なようです。もう少し遠くまで歩きます。ですから、愛が平和をもたらすのです。これは、神の愛を通して私たちにもたらされた愛です。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」私たちから邪悪な生活を取り去り、祝福を与えるため、神は御子を遣わされました。最後に、御心にかろう人々ですが、それは神との平和があってはじめて、神の愛があなたの心の中で働いてはじめて、持てるものです。

これらが、神が人にもたらされた祝福です。祝福の一部は、ベツレヘムで御子が生まれることによってもたらされたものです。しかし、贈物とは、あなたが実際に受け取ってはじめて贈り物になるものです。神の私たちへの贈物を自分のものにするためには、それを受け取らなければなりません。ベツレヘムで生まれた、メシヤである主である小さな赤

ちゃんを受け入れた人はみな、その人たちに対してはみな、神の子となる特権をお与えになりました。すなわち、その御名を信じた人々には、神の子となる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。あなたも今日新しく生まれることができます。罪をぬぐい去っていただき、地の平和を体験することができます。真に御心にかなうとはどのようなことかを経験することができます。あなたを愛して下さっている、心からあなたに最高の利益を考えて下さっている主に仕えるという祝福にあずかることができます。救いをいただくことができるのです。御子をこの世に遣わすことによって神が備えて下さった祝福はこれです。

使徒行伝4章(1/7/96)
使徒行伝4章12節(Acts4:12)
「この方以外にはない」#8602
交読文：詩篇118篇

数週間のお休みがありました。聖書通読の学びを再開します。クリスマスと年末の休暇に時間をさいて、いくつか主題を追加して取り扱いましたが、また聖書通読の学びに戻り、今日は使徒行伝4章に進んでいます。今夜は使徒行伝4章を学び、その次は5章へと進み、聖書全体の通読の学びの一環である使徒行伝の学びを進めてゆきます。今夜は、使徒行伝4章を学び、その注釈をしますが、今朝は使徒行伝4章12節を見ていただきたいのです。

祈るためにペテロとヨハネが宮に入っていき、施しを求めていた物乞いと出会ったとき、ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言いました。するとたちまち、この男はいやされ、歩いたり、跳ねたりしはじめました。このことはその日の午後、宮で大騒動を引き起こしました。というのも、たくさんの人がこの男のことを知っていたからです。人々は、この男のことを見たことがありました。この男は、宮の名物男のような存在になっていました。この男は、何年も「美しの門」で物乞いをしてきたからです。その男が歩いたり、跳ねたりするのを見ると、人々はとても驚きました。どうして、いったい何が起こったのかと。男がヨハネとペテロにつきまると、さかんに感謝していると、多くの人が集まってきました。するとペテロは、それを利用して、群衆に説教をはじめました。人々は、どのようにしてそんな事が起こったのかと尋ねていましたので、ペテロは人々に、「ナザレのイエス・キリストの名によって、またその御名を信じる信仰が、この人をみなさんの目の前で完全なからだにしたのです。」と言いました。すると人々は、魅了されました。ペテロは、イエスが生きておられること、死者からよみがえられたことを証明するために、この奇跡を利用しました。イエスは十字架につけられましたが、死者から復活し、その御名を信じる信仰のゆえに、この男は癒されました。この奇跡が起こされたのです。

ペテロがイエスの復活について説教していることに、祭司たちとサドカイ人らは非常に困り、ペテロとヨハネを捕らえるために人を遣わしました。そして、足のきかない男も捕らえ、投獄しました。朝になると、裁判、宗教裁判を開き、重要な宗教指導者が全員集まり、罪状認否のためにペテロとヨハネと足のきかない男を連れてきました。検察側の弁護士は、誘導尋問をしました。それは、彼らを罠にはめるためのものでした。その男は、「あなたがたは何の権威によって、また、だれの名によって、この足のきかない男を歩かせたのか。」と言いました。律法のもとでは、彼らの律法、申命記13章では、「もし預言者あるいは夢見る者が出て、人々の間で実際に起こるような預言をする、あるいは不思議を行い、その預言者あるいは夢見る者が他の、神以外のものを礼拝するように導くなら、その人は殺されなければならない。」となっています。さて、彼らは不思議を行いました。足のきかない男が歩いているのを見ると、人々はみな畏怖の念と驚きのために立ち尽くしていました。そこで、質問ですが、「あなたたち、どのようにやったのかね。」「あなたがたは何の権威によって、また、だれの名によって、この足のきかない男を歩かせたのか。」この人たちは、ペテロが何か他の神に賞賛を与えることを願っていましたが、ペテロはこの人たちに言いました。「私たちがぎょう尋問をう人が、何の権威によって、または、何によって歩くようになったのか、ということのためであるなら、よく知って下さい。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたが殺し、木に

かけたが、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです。『あなたがたが家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった。』というのはイエスのことです。」ペテロは、私たちが今朝読んだ詩篇118篇を引用したのです。

「『あなたがたが家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった。』というのはこの方のことです。この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」「この方以外には、だれによっても救いはありません。」ペテロがこの発言をしたのは、イエスが言われたことを再確認しただけなのです。イエスは、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と言われました。

さて、世俗的な人は、私たちがイエスについて排他的な主張すると、とても狼狽し、敵対的になります。「自分の道が唯一の道だと思って、人を自分の信じていることに常に改宗させようとする人には、我慢ならない。」と言うのを聞いたことがあります。私たちは、唯一の道だと思っていますよ。(訳者注：ここで爆笑。)イエスは、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と言われました。しかし、「この道以外にはない。」と言うと、人は狼狽します。人々は、すべての道が神に通じると思いたいのです。ある意味で、その通りかもしれません。「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっています。あなたは、いつの日か神にお目にかかることになります。しかし、その時には、自分が望んでいる状況ではない状況で会うことになるかもしれません。しかし、人々は、「すべての人に、自分が信じたいと思うことを信じる権利がある。誰にも自分の信じていることを他の人に強要する権利はない。了見が狭すぎる。」と言います。そうです。イエスは、「いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」とおっしゃいました。さて、あなたは真理がお聞きになりたいのでしょうか、それとも誰かに背中をよしよしとたたいてもらって、「兄弟、精一杯やればいいんですよ。だいじょうぶだ。誠意を持ちなさい。」と言ってもらいたいのでしょうか。世はそれを望んでいます。世は、自分たちの生活のありかたを認めてもらいたいのです。「悔い改めないと滅びます。もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。罪から来る報酬は死です。」とは言われたくないのです。そのようなことは聞きたくないのです。慰められたいのですが、地獄にまっさかさまです。イエスは、「わたしは羊の門です。わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。」と言われました。ですから、イエスは、非常に排他的な主張をされました。パウロは、「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。」と述べました。ですから、ペテロも同じことを確認しているわけです。「この方以外には、だれによっても救いはありません。」つまり、良い行いによっては、救われないということです。律法を守ることによって、救われないということです。パウロは、「もし、義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。」「彼の死は空しい。」と述べました。もし、あなたを義とすることができるルールや、規則、法律があったなら、イエスが死ぬ必要はなかったはずです。「律法の行いによって義と認められる者は、ひとりもないからです。」と聖書は教えています。宗教的になることで救われるようなことはありません。誠意を持つことで救われるようなことはありません。救いを金で買うことはできないことは、確かです。「わが身ののぞみは、ただ主にかかれり、主イエスの外には、よるべきかたなし。わがきみイエスこそ、すくい岩なれ、すくい岩なれ。」(訳者注：賛美歌280番と同じですが、英語の歌詞はやや違います。My hope is built on nothing less than Jesus' blood and righteousness. I dare not trust the sweetest frame, but wholly lean on Jesus' name. On Christ the solid rock I stand, all other ground is sinking sand.)

イエスの十字架は、人が救われる道は一つしかないことを証明する最大の証しだと私は思います。というのも、イエスが捕らえられ死刑の宣告をされた夜に、ゲッセマネの園で、苦しみ悶えて祈られた時、イエスの祈りは、「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」でした。何が、「できますならば」だったのでしょうか。「人の贖い、罪の赦しです。人の贖いが他の手段によってできますならば、もし人を罪の結果から救うことが、他の手段によってできますならば・・・人が良い人であるとか、義であるとか、誠意を持っているとか、宗教的であるとか、他の手段によってできますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」どの「杯」ですか。先に、弟子たちと最後の晩餐をとっておられた時、イエスが、杯を弟子たちに与えられた時、「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。罪を赦すために流されるものです。」と言われました。「もし、十字架上で流されたイエス・キリストの血以外の手段で人が救われるのなら、では、その代替の計画にしましょう。」とイエスはおっしゃいました。「この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」と。イエスが十字架にかかってくださった、不名誉な拷問の死を苦しんで下さったという事実は、声高に、はっきりと、わかりやすく、「この方以外に救いはない」ことを宣言しています。「この方以外には、だれによっても救いはありません。」

神は、律法の下で、罪をおおうためのいけにえをささげる儀式を備えられました。このために、罪のためのいけにえ、罪過のためのいけにえ、と様々ないけにえがありました。動物がたずさえて来られ、罪の告白がなされ、罪をおおうために、動物が殺され、その血が祭壇に置かれました。律法のもとで、レビ記18章で（訳者注：レビ記17章11節のことか。）、「なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしは、あなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。」と神は言われました。「肉のいのちは血の中にある。」ですから、血が流されることは、いのちが与えられた事実を示していました。聖書は、「罪から来る報酬は死です。」と教えています。それより大目にみられたことはありません。旧約聖書で、神は、神がひとり子を遣わされるまで、身代わりの動物の死をお許しになりました。ペテロが述べたように、「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、傷もなく汚れもないこ羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」

神があなたを受け入れて下さるために、あなたは何に信頼を置いておられるのかに、私は興味があります。「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっています。あなたが神の前に立ち、申し開きをするとき、神があなたを永遠の住まいに迎え入れて下さるために、あなたは神に何を提示しますか。あなたは神に対し、どのように自分の申し開きをするのでしょうか。あなたが犯した罪すべての贖いのために、神に何を提示しますか。私が知っている人の中で私が他の誰よりも尊敬している人がいます。それは、ビリー・グラハムです。彼は、男の中の男だと思います。私が知っている人の中で他の誰よりも神の御国のために働きをしたのは、ビリー・グラハムだと思っています。すばらしい人です。謙そんな人です。驚くべきすばらしい人です。ビリー・グラハムは人々の間で、プリンスのような存在です。勿論、ビリー・グラハムは伝道のために大きなビリー・グラハム協会を、またビリー・グラハム財団を設立しました。この他にもビリーは、たくさんのすばらしい働きをしてきました。しかし、神の前に立つとき、ビリーは、「神よ。私は偉大な伝道者でした。これまでの他の誰よりもたくさんの人に福音を伝えました。私はあそこにコーブヤ（訳者注：ナッシュビルに建っている大きい集会所の名前。）その他の訓練センターを残しました。そして、主よ、働きは続きます。私はあなたのためにたくさんのことをしました。」と言うと思われませんか。いいえ、そんなことは言わな

いでしょう。私はビリーのことをよく知っています。「神よ。罪人の私をあわれんで下さい。私の罪のために死んで下さった御子に感謝します。主よ。どうかあなたがお話下さい。私の申し開きをして下さい。」と言うでしょう。

「わがきみイエスこそ、すくい岩なれ。」私ののぞみは、義の行いではなく、イエス・キリストにかかっています。私の信頼はイエス・キリストに置かれています。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」仏陀の名前は、決してあなたを救いません。モハメッドの名前は、決してあなたを救いません。イエス・キリストの御名のみがあなたを救うのです。足のきかない男がいやされることによって、イエスの御名の力が、証明されたところだったのです。イエスの御名に力のあることが証明されました。40歳以上の男がいました。生まれてこのかた一度も歩いたことがない人でした。しかし、ペテロは、「イエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言いました。すると、たちまちこの男は歩き始め、跳ねました。イエスの御名の力が示され、証明されたところでした。さて、ペテロは、「この足のきかない男が、何の力によって歩くようになったのか知りたいのですか。それは、人が救われるべき力と同じ力です。」と言っているのです。同じ名です。イエスの御名の力が、この足のきかない男を歩かせました。イエスの御名の力は、人に救いをもたらすことができます。「世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

イエスが地上で、ミニストリーをなさっているとき、肢体不自由になるような病気にかかっている人がいました。その人は寝たきりになっていました。その人の友人の何人かが、この男がいやされるようにと、イエスの所に連れてゆくことにしました。イエスが教えておられた家に来ると、余りにもたくさんの群衆がいたので中に入ることができませんでした。それで、新しいことを考えついた男たちは屋根に上り、瓦を何枚か動かして、この男をイエスの前に下ろしました。イエスがこの男が横たわっているのをごらんになると、「子よ。あなたの罪は赦されました。」と言われました。ところが、このことはパリサイ人を怒らせ、彼らは、「それは、神をけがしている。」と言いました。「神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。この人は、自分を誰だと思っているんだ。」と。すると、イエスは彼らに、「『あなたの罪は赦された。』』と言うのと、『起きて、寝床をたたんで歩け。』』と言うのと、どちらがやさしいか。」と言われました。さて、どちらが言うのがやさしいでしょうか。「あなたの罪は赦された。」と言う方がやさしいですね。誰がわかるのでしょうか。誰もわかりませんね。見えないのですから。しかし、「起きて、寝床をたたんで歩け。」と言うと、見ることができます。ですから、言葉に力があるかどうかが見えます。もし、男が起き上がり、寝床をたたみ、歩くのであれば、言葉に力があることがわかります。ですから、イエスは、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。」とおっしゃいました。そこに横たわっていた肢体不自由な男の方を向いて、イエスは、「寝床をたたんで歩け。」と言われると、その男は、起き上がり、床を取り上げて、家に帰りました。

さて、ここでもまた、イエスの御名の力が示されました。40年以上も足のきかない男が、生まれつき足のきかない男が、歩いたのです。イエスの御名の力が証明されました。ペテロは、イエスの御名は、救いをもたらす、罪の赦しをもたらす力もあると述べているのです。「世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」パウロは、ピリピ人への手紙の中でこう述べました。「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と

同じようになられたのです。キリストは、人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」イエスの御名、イエスの御名の力によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である。』と告白する日がいつか来ます。それは、すべての名にまさる名だからです。「世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

イエスという名は、ヘブル語の名ジェホシュアのギリシャ語訳です。ヘブル語でジェホシュアは、「エホバは救い」という意味です。ですから、名前がイエスと呼ばれるのは、非常に適切なのです。実際、そのように御使いはヨセフに言いました。「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ自分の民をその罪から救ってくださる方です。」と。その意味は、「エホバは救い」という意味です。「世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

来週次の5章に進んで行きますが、次の章で、ペテロは再び捕らわれます。同じ法廷に立つと、人々はペテロに、「あの名によって教えるはならないときびしく命じておいたのに、何ということだ。」と言うと、ペテロは、「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断して下さい。私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」そして、ペテロは続けて言いました。「私たちの先祖の神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスをよみがえらせたのです。そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。」神は、イエスを救い主として上げられました。「世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

そこで、重大な問題が出てきます。あなたは今日、自分の救いについて、イエス・キリストに信頼しているかどうかです。もし、イエス・キリストに信頼していないのであれば、なぜなのでしょう。もし、イエス・キリストに信頼していないのであれば、あなたは自分の救いについて、何に信頼しているのでしょうか。私たちはみな、死後の生活があると信じたいのです。特に、親しかった愛する者が亡くなると、その人がもはや存在しなくなったと考えることに耐えられません。私たちは、死を最後と考えることができません。死を最後と考えるたくないのです。別の次元で、別の領域で、死後の生活があると、生活が続くと信じたいのです。しかし、これが終りではない、これでおしまいになったのではないと信じたいのです。そして、聖書は私たちに死は終りではないことを保証しています。死後の生活があります。「人間には、一度死ぬことと死後に・・・が定まっています。」聖書は、死後があることを教えています。死は終りではありません。死は、存在が終わることではありません。死はただ、霊がこの体から別の体に移ることであって、存在が終わることではありません。しかし、どういうわけか私たちは死後の生活があると信じたいだけではなく、私たちはみな死後の生活は、心地好いパラダイスであると信じたいことは、興味深いことです。ハリウッドに光彩を与えた人の中でも、最も深い恨みを持ったひどい罪人が死んで、他のスターがインタビューを受けると、みな、「ああ、あの人たちはより良い所に行ったのだ。幸せになったのだ。」と言います。私たちはみんなそう信じたいのです。死が人をパラダイスへと案内してくれると信じたいのです。そして、多くの人にとって、実際にそのようになります。ナザレのイエス・キリストの御名に信仰と信頼を

置く者にとっては、そのようになります。救いがあります。罪の赦しときよめがあります。イエスに信頼を置く人には魂の救いがあります。

あなたを罪から救うことができるのは、イエス・キリストしかいません。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍ばれました。どのような「喜び」ですか。「あなたは赦された。」と言う喜びです。先にお話した、イエスの前に下ろしてもらった中風の男に対し、イエスは、「あなたの罪は赦された。」と言われました。イエスは、そうおっしゃるのが大好きです。「あなたの罪は赦された。」と言う喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍んで下さいました。イエスがパリサイ人のシモン家で食事をされている時に、売春婦の女が後ろからやってきて、泣き始め、とてつもなく聖なる方がいらっしゃることで砕かれ、そしておそらく恥ずかしくなったのでしょうか、自分の涙でイエスの足をぬらしてぬぐい始め、高価な香油を取って、イエスの足に注ぎかけ、イエスの足に口づけし始めました。自分の家で食事をしていたパリサイ人のシモンは、「ふん。この方がもし預言者なら、この女に自分を触らせないはずだ。この女は娼婦だ。この女は娼婦だ。」と言いました。イエスは、「シモン。あなたに言いたいことがあります。」と言われた。すると、「どうぞ。」とシモンは言いました。「ある人から二人の人が金を借りていました。一人は、5ドルを借りており、もう一人は、500万ドルを借りていました。この人は二人ともに借金を赦してやりました。ふたりのうちどちらがよけいにこの人を愛するようになるのでしょうか。」シモンは、「この人が500万ドルの借金を赦してやった方だと思います。」と言いました。イエスは、「あなたの判断は当たっています。」と言われました。イエスは、言われました。「わたしが夕食のためにあなたの家にはいつて来たとき、あなたは口づけして私を迎えてくれなかったし、頭に香油を塗ってくれなかった。」こういったことは、東方での礼儀でした。「あなたは、しもべに私の足を洗わせることをしませんでした。しかし、この女は自分の涙で私の足を洗い、高価な香油を私の足に塗ってくれました。この女は、わたしがいつて来たときから足に口づけしてやめませんでした。だから、わたしは言うのです。『この女の多くの罪は赦されています。』」そして、イエスは女の方を向いて、「あなたの罪は、」イエスはこう言うのが大好きです。「あなたの罪は、赦されています。」と言われました。「あなたの罪は赦された。」と言う喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍んで下さいました。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、・・・」とおっしゃいました。イエスは、あなたがイエスの所に来る時に、「あなたの罪は赦された。」と言う喜びのゆえに、十字架を忍んで下さいました。何と美しい、美しいことでしょう。「私の罪は赦された。」と知ることができるとは、何と安心なことでしょう。神は救いへの唯一、一つの道を備えられました。近道はありません。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

使徒行伝5章(1/14/96)

使徒行伝5章39節(Acts5:39)

「神に敵対する」#8603

交読文：詩篇40篇

私たちは聖書通読の学びを続けていますが、今週は使徒行伝5章です。今晚は使徒行伝5章の注釈をします。聖書を通読するようにお勧めします。聖書全体を通読したことがある人はとても少ないのです。しかし、聖書を知ること、神がご自分について何をおっしゃったかを知ること、神の真理を理解することは重要です。ですから、創世記から黙示録までの私たちの聖書通読の学びに、いっしょに参加して下さい。

今朝は、使徒行伝5章39節を見たいと思います。初代教会において、神は力強いわざをなさっておられました。神のわざをみよう、人々はいろいろな所からやって来ました。このことは、大祭司や宗教指導者たちの間にねたみを引き起こしたので、再び弟子たちを捕らえ、「あの名(訳者注：英語では「イエスの名」)によって教えるはならないときびしく命じておいたのに、何ということだ。」と言いました。弟子たちが、この時もまた大胆に答えたとき、彼らはとても怒り、中には弟子たちを殺そうと計る者までいました。しかし、エルサレムに人々からとても尊敬されているラビがいました。その人の名前はガマリエルと言いました。この人は立ち上がり、「みなさん、軽率なことをするのはやめ、この人たちをどう取り扱うか、考えましょう。というのは、自分がメシヤだと主張したのは、イエスが最初ではありません。これまでもたくさんの者ができました。そして、自分達の所に弟子たちを集めました。創始者あるいは指導者が死ぬと、すべてが散らされてゆきました。だから、あの人たちを、放っておきましょう。もし、これが神から出たものならば、私たちは神に敵対するという、ばつが悪い状況に立たされます。もし、これが神から出たものでないなら、自滅してしまうでしょう。」と言いました。それで、人々は、ガマリエルの助言に耳を傾けました。しかし、繰り返しこの助言を聞いてみますと、「しかし、もし神から出たものならば、あなたがたには彼らを滅ぼすことはできません。もしかすれば、あなたがたは神に敵対する者になってしまいます。」とあります。

さて、神に敵対するという考え自体、途方もないことでしょう。人間が、死を免れることのできない人間が、どうして神に敵対し、神に勝つ望みを持つことができましょうか。預言者イザヤは、「創造主を向こうに回して戦う者は、ひどい目に会います<リビング・バイブル>。」と言いました。しかし、神と戦う者がたくさんいることを認めざるを得ません。ここにいらっしゃる方の中にも、神にそむいている方がいらっしゃるかもしれません。ステパノは、これらのユダヤ人指導者たちに、「いつまで聖霊様にそむき続けるのですか<リビング・バイブル>。」と言いました。しかし、たくさんの方が、そのような神に敵対し、神があなたの心に言われていること、語っておられることに敵対する立場にいます。しかし、あなたはいったいどのような領域で神と戦うのでしょうか。知的な領域でしょうか。聖書は、「神の愚かさは人よりも賢い」と教えています。聖書は、「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」と教えています。ヨブとヨブの友人たちは互いに、神についてたくさんのお話を話していました。彼らは神について語っているときに、ずいぶん自信を持って確信して語ったのです。「そう、神についてすべてのことを知っている。」とか、「そう、神はこのようなことをなさる。」とか、「神は、このようになさるのだ。」とか、あたかもほんとうに神を完全に理解しているかのごとく言いました。とうとう神は、もう聞いていられなくなり、お語りになりました。「よし、みんな。君たちはよく知っているようだが、わたしが地の基を定めたとき、

あなたはどこにいたのか、言ってごらん。」と言われました。そして、神は彼らにいろいろな質問をなさいましたが、無論、彼らは答えることができず、自分たちがほんとうに知っていたことがいかに少なかったかに気づきました。ちょうど、シェークスピアが、「人よ、かわいそうな人よ、あなたは自分が最もよく知っていることについてでさえ、とても無知だ。」と言ったと同じなのです。自分が最も賢いと思っている領域の知識においても、理解や知識の分野において知り得ることができるすべてのことにおいても、たとえ非常に限られた自分の領域においても、私たちは何と無知なのでしょう。物理的に神と戦おうとすることは、もちろん一目瞭然でとんでもないことです。ですから、人が神と戦う領域は、霊の領域なのです。それは、霊の戦いです。そして、人は霊の領域において、神と敵対しようとしています。しかし、神がお許しになっているから、あなたは神と敵対することができるということを経験すべきです。もし、神がお望みになるなら、敵対するはずです。あなたの存在自体、全く神の御手にゆだねられているのです。

ネブカデネザルの孫のベルシャツアルが大宴会を催したとき、祖父のネブカデネザルがエルサレムの宮から取って来た金、銀の器をドンチャン騒ぎのために持ってくるように命じ、人々はこれらの金、銀の器からぶどう酒を飲み、金、銀の神々を賛美し始めました。しかし、壁に文字が書き出されたことで、突如としてみんなの酔いがさめました。人々は、その文字を理解することができませんでした。そこで、祖父のネブカデネザルに助言をしてきたダニエルを連れてきて、文字の説き明かしをさせました。ダニエルはこれを利用して、メッセージの説き明かしの前に、説教をし、「ベルシャツアルさま、あなたの祖父、ネブカデネザルは偉大な方でした。神は、ネブカデネザルに、偉大な国と、権威とをお与えになりました。こうして彼がプライドで高ぶり、神に敵対したので、神は、あなたの祖父が気がふれるようになる期間を体験することをお許しになりました。七つの時の期間、野るばとともに住み、からだは天の露にぬれて、牛のように草を食べました。彼の髪の毛が体を覆い、爪は鳥の爪のようになって、ついに、いと高き神が人間の国を支配し、みこころにかなう者をその上にお立てになることを知るようになりました。あなたは、これらのことをすべて知っていながら、金、銀の器を持ってこさせ、それから飲み、神に反抗しました。そして、金、銀の神々を賛美しましたが、あなたの息をその手に握っておられる神をほめたたえませんでした。」と言いました。つまり、ダニエルは、「ごらん、あなたの息をも神の御手の中にある。」と言っているのです。一瞬たりとも、神があなたのいのちを維持しておられないときはないのだと。

あなたの肺が、体の不随意筋の一つであることは、興味深いことです。体には、随意筋と不随意筋があります。随意筋は、骨格についており、脳によって制御されています。不随意筋は、骨格にはついておらず、脳によって制御されていません。不随意筋は、ただ機能しているのです。ここで、ダニエルは、神が不随意筋を支配しておられることを示唆しているのです。あなたの肺や、心臓、その他の不随意筋を支配しておられると。あなたのいのちが左右される筋肉について、神がその機能の存続をみなさんにゆだねておられないのは、興味深いことです。それらについては、神が支配しておられます。神は、あなたに腕を動かすことなどはお許しになりますが、重要な筋肉は、神の支配下にあります。「あなたの息をその手に握っておられる神」です。そして、ここに人間がいます。人間のいのちを支えて下さっている神に対し、敵対しています。「あなたの息をその手に握っておられる神」にです。ベルシャツアルの祖父、ネブカデネザルが神に敵対し、神には敵対できないという貴重な教訓を学んだことは興味深いことです。ですから、ネブカデネザルに理性が戻った時、「それで、私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた。その主権は永遠の主権。その国は代々限りなく続く。地に住むものはみな、無きものとみなされる。彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。御手を差し押さえる者もない。」と言いました。つまり、神と戦うことはできない、神

に、「あなたは何をされるのか。」と言うことはできない、と述べているのです。「今、私、ネブカデネザルは、天の王を賛美し、あがめ、ほめたたえる。そのみわざはことごとく真実であり、その道は正義である。また、高ぶって歩む者をへりくだった者とされる。」と。つまり、「神と戦うなどとはとんでもない。あなたは自分のことを偉いと思っているかもしれない。歩き回って、この大バビロンは、私が立てたものではないか、私は世界の権力者ではないか、と言ってあなたは自分のことを偉いと思うかもしれないが、高ぶって歩む者をへりくだった者とされる。」とネブカデネザルは述べています。

その朝、神に敵対することに反対することが、エルサレムにある宗教議会で言い渡されました。さて、使徒パウロは、その議会に入っていました。彼の名前は、サウロでした。彼は、タルソ出身でした。ガマリエルは、パウロの先生でした。パウロは、ガマリエルの教え子であることを誇りとしていました。「ガマリエルのもとで教育を受けた。」とパウロは言っています。当時、それはとても有利なことでした。というのも、ガマリエルはその当時エルサレムにおいて、最も尊敬されていたラビだったからです。そして、パウロは、「敵対してはいけない。」と言うガマリエルの言葉を聞きました。「しかし、もし神から出たものならば、あなたがたには彼らを滅ぼすことはできないでしょう。もしかすれば、あなたがたは神に敵対する者になってしまいます。」このようなガマリエル教授の言葉を聞きましたが、それなのに、パウロは、教会に敵対しようとしていたので、その言葉を聞きませんでした。パウロは、初代教会を滅ぼそうと決意していました。キリスト教という分派を踏みつぶそうと決意していました。ですから、パウロは、エルサレムにおいて、教会に対する迫害の指揮をとっていました。しかし、パウロはそれでは満足せず、大祭司から手紙をもらって、クリスチャンが逃げていったダマスコへ行ってイエスを信じている者を牢に入れようとしていました。パウロがダマスコへ行く途上で、パウロ自身の言葉を借りますと、「主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、」こうしてくれようとしていましたが、主が途上でこのパウロにお会いになったのです。主の力と栄光がものすごかったので、パウロは地に倒れてしまいました。そして、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声が、パウロに語りました。それで、パウロは、「主よ。あなたはどなたですか。私はあなたに仕えます。」と答えました。イエスは、言われました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。突き棒をけるのはつらいことだ。」（訳者注：この文は、New King James Versionの“it is hard for you to kick against the goads.”を翻訳したものです。おそらく原本の写本を異にするため、日本語訳の聖書には存在しません。（清））パウロ、あなたは私に敵対してきたが、辛かったであろう、あなたは突き棒を蹴ってきたのだ、と。

さて、すきを引かせるのに、よくラバが使われました。しかし、ラバについては、いろいろなことを聞いたことがあるでしょう。第一に、頑固です。「あいつは、ラバのような頑固なやつだ。（訳者注：英語では、頑固な人を描写するときに、このような言い方をするのでしょうか。）」事実、ラバはとても頑固な動物です。第二に、ラバについて聞くことは、強く蹴ることです。「あいつは、ラバのように蹴ることができる。」頑固なことと、その後ろに回ると蹴る習性があること、これらは、ラバの二つの特性です。特にあまりしてほしくないことをさせようとする、ラバは蹴ります。馬具をつけようとしたり、鋤を接続しようとしようものなら、鋤を接続しようラバの後ろに回ろうとするものなら、いやがって何度もバンバン蹴ってきます。それで、棒を鋭く削って、その棒をラバの脇腹の後ろにつけます。ラバが蹴ろうとすると、この突き棒が、小さい鋭い棒が、脇腹にささります。「ブス。」少したつと、ラバも学習します。しかし、頑固なので、学習するのに長い時間がかかります。ちょうど、そういう人が私たちのうちにもいます。しかし、これは痛いのです。突き棒を蹴ることは、痛いのです。パウロは、神に対して蹴っていたの

です。神に敵対していたのです。しかし、それは痛いことでした。あなたが神に敵対することも同じで、神に敵対することで、様々な困難や様々な痛い経験をします。

しかし、いったいなぜ神に敵対したいのか不思議でなりません。私が考えつくことができる理由として、まず、その人は誤った神の概念をもっているにちがいないのではないかと思います。その人の神に関する信条は、何か他の人が言ったことを聞いたことにちがいないのです。聖書や、神について、他の人が言うことを部分的に受け取ってしまうことがよくあるのですが、どういうふう元々の話を削ってしまったかをみるのは、面白いでしょう。聖書や神について、想像を絶する極めてとっぴなことを言うのを聞いたことがあります。「だって、聖書にそう書いてある。」と言って、とっぴなことを言うのを聞いたことがあります。「だって、聖書にそう書いてある。」と言うのです。しかし、「だって、聖書にそう書いてある。」と、とっぴなことを言う人に対して、「それは興味深いですね。聖書のどこにそう書いてあるのですか。」と尋ねると、「聖書に書いてあることはみんなが知っている。」とよく言います。「でも、私もみんなの一人ですが、私は聖書にそんなことが書いてあるなんて知りませんでした。私は聖書を何度か通読したことがあります。聖書のどこにそんなことが書いてあるのか、見せていただけませんか。」と言うと、「えっと、『天はみずからを助ける者を助く』と聖書に書いてあることはみんなが知っている。」とか言うのです。「私はそんなことは読んだことはありません。興味深いですね。」と私は言うのです。他の人が言ったことを聞いただけのことを、いろいろ神の概念としている人がいます。神がどのような方か、神が何をなさる方なのか、聖書を全部通読せずして、どうしてわかりえましょうか。聖書は、神がご自分を啓示することを意図されたものだとは私は信じています。確信しています。しかし、聖書の中で私が読んでいる神は、多くの人々が持っている神の概念とは、全くちがっています。聖書の中で私が読んでいる神は、ほんとうに愛の神髄であるお方です。よいもの、優しさ、親切、忍耐、あわれみの神髄であるお方です。神はとても賢い方であるのに、親切で、恵み深いお方です。そのような神に、なぜ敵対したいのでしょうか。聖書をほんとうには全部読んだことのない、あまりに多くの人々が、聖書や神に対して、激しい偏見を持っています。部分的に聖書を読むこともできるでしょう。しかし、そうではなく、聖書全体を読まなければなりません。通常多くの人々が聖書を読む時、私たちが読むのと同じで、よく聖書の最初から読み始めます。創世記から読み始めます。そして、神がアブラハムに、「あなたの子、ひとり子イサクを連れて、わたしがあなたに示す一つの山の上で、イサクをわたしにささげなさい。そして、アブラハムは、旅に出かけます。」というところまではどんどん読み進めません。しかし、そこで、「もうやめた。子供をあきらめると言う神なんか、絶対信じないぞ。」と言って、聖書を閉じ、それっきりになってしまうのです。しかし、話はそれだけではないのです。ほぼ聖書の最後の方まで読まなければ、ヘブル人への手紙まで読み進めなければならぬのです。そこでは、この話がとても明確に説明されています。アブラハムの心の中で何が起こっていたのかが示されています。神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」と約束されました。イサクはその時、まだ結婚もしておらず、子供はひとりもいませんでした。神のアブラハムへの言葉は、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」でした。アブラハムは、神の言葉を信じました。「わたしの子孫はイサクから出る。」神は、「イサクをわたしにささげなさい。」と言われました。「それでは、神様、問題がありますね。」とアブラハムは考えましたが、アブラハムは、必要ならば神はその子を死者からよみがえらせると信じていました。それは、神はご自分の約束を守られるはずだからです。アブラハムは、神の言葉にそこまでの確信を抱いていました。神はご自分の約束を守られるはずだから、と。「この天地は滅びます。しかし、わたしのことばば決して滅びることがありません。」神はご自分の約束を守られます。神はご自分の約束を成就するために、必要ならば息子を死者からよみがえら

せて下さる、というような確信をアブラハムは持っていました。そういう見方をするのであれば、わかりますね。それに、もちろん、ただ神は、いつの日かこの同じ山で世の罪のために、神がご自分の愛するひとり子をささげることを描いておられたのです。これで、すべてのもののつながりがわかり始めます。たくさんの人が神に敵対するのは、無知のゆえなのです。ほんとうに神を知らないからです。誤った神の概念を持っているからです。

けれども、人生で不幸な経験をしたために、神に敵対している人がいます。神のせいにし、神に対し苦みを持ってしまったのです。ひょっとしたら、牧師が嘘をついたのかもしれませんが。あるいは、牧師がごまかしたのかもしれませんが。その人たちは、牧師を神の代表としてみなしたのです。しかし、牧師はただの人間だとわかって落胆しているのです。悲しいことに、牧師を完璧だとみなす人が余りに多いのです。わたしが保証するまでもないでしょうが、（訳者注：ここで爆笑）私は自分が完璧ではないことを保証します。私は完璧とは程遠い者です。神は、実に、ご自分の恵みをみんなに示すために、私を救い、祝福して下さいました。ひょっとしたら、神に祈って何かお願いしたけれども、神はその人が望むようには、その祈りにお答えにならなかったのかもしれませんが。つまり、神はすべてのきまぐれや願いをかなえてくれるジニー（訳者注：魔法使いの名前。）ではないことがわかったわけです。テッド・ターナー・ブロードキャスティング・カンパニーのテッド・ターナー（訳者注：米国でテレビ会社王とみなされている人。）は自分の無神論と神に対する苦みを次のせいにしています。「私は神が嫌いだから、無神論者だ。」と言うのですが、途方もないことです。（訳者注：ここで爆笑。）しかし、テッド・ターナーは、自分がとても愛していた姉妹が死にそうになっていたとき、神にいやして下さいよう祈りましたが、彼女が死ぬと神を信じるのをやめ、自分の心に神に対する激しい苦みが出てきたと述べています。これは、何という悲劇でしょう。これは、神の子供の死に対する誤った理解から来ているのです。主を愛していた姉妹は、今日主とともにいるのです。彼女は、天の御国にいるのです。悲劇なのは、そんなにこの姉妹のことを愛していたのに、再びこの姉妹といっしょにいるチャンスが神に対する憎しみと苦みによって邪魔されていることです。ですから、とても悲しいことです。

天国については、面白いことがあります。私たちはみな天国に行きたいのですが、今はまだ行きたくないのです。昨日の朝のことだったと思いますが、4歳になる孫が、6歳のお姉さんといっしょに両親の寝室のドアの外に立っていて、二人は何をしたらいいか話していて、二人は両親がまだ寝ているものだと思っていましたが、両親は寝床の中にいましたが二人の話を聞いていました。片方が、祈るように提案し、4歳になる孫が祈りました。「しゅよ。てんごくへつれて行ってください。でも今すぐじゃなくて。」と。（訳者注：ここで爆笑。）それが、私たちみんなの祈りですね。私たちはいつの日か天国に行きたいのですが・・・しかし、聖書は天国についてどのように教えているのでしょうか。栄光、不思議、美しさについて教えています。私たちはみな、天国へ行きたいと、あこがれを持つはずですが。このような話が報告されています。長年バイオラ大学で教鞭をとっていたルイス・タルボットが神学校を設立すると、彼の名前をとって、タルボット神学校の名前をつけました。ルイス・タルボットは、神の人であり、偉大な聖書教師でしたが、彼が死の床にあったとき、彼の妻は彼のために、「主よ。どうかルイスのことをいやして下さい。彼を死なせないで下さい。」と祈りますと、彼は妻を制して、「あのな、私は、長年この瞬間を待ち焦がれて来たんだ。私の救い主をじかに見ることができて、愛の御腕に抱かれる瞬間を。どうか、この大いなる喜びをとどめないでくれ。」と言いました。これは、天国がどのような所であるか理解しての言葉です。私たちが、いのちをながらえさせて下さるようにと祈るのは、身勝手な目的のためなのです。「ああ、彼らのいのちの日をながらえさせて下さい。」と祈るのは、ほんとうは、死にそうになっている人の益、善の

ためではなく、私たちの益、善のためなのです。そして、神がその祈りに答えることは不都合であるとされ、今その人たちに祝福を享受してもらいたいと決断されて、その人がこの世のすべての苦痛やプレッシャーや不安を通らなくてもよくなると、私たちは苦みを持ち、怒って、神に敵対することを決意するとは、まことに奇妙ではありませんか。神が私たちが望んでいるようには、私たちの祈りに答えて下さらなかったというだけで、そうなるとは。

神に敵対する人は、自分の最良の安寧に逆らっているのだと認識すべきです。それは、神があなたのことを愛しておられるからです。神のあなたのための計画は、あなたに起こり得る最高のものなのです。人がささげうる最も賢明な祈りは、「わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」です。神の御心と神の目的に敵対するより、自分を明け渡して、「主よ。あなたがなさりたいことを何でもなさって下さい。私の人生において、私の人生をとおして、あなたの御心がなりますように。」と言う方が何と賢いことでしょうか。というのも、あなたが気がつくようになるより、知るようになるよりもさらに、神はあなたのことを愛していらっしゃるからです。詩篇の著者が、「神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょうか。その総計は、なんと多いことでしょうか。」と述べているようです。別の詩篇では（訳者注：同じ詩篇139篇17節と18節からとっていますが）、「それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。」と述べられています。海の砂は、10の25乗あると推定されています。それを数えようとする、まあ、なんと、（訳者注：ここでチャックは笑いながら少し考えて）それだけのたくさんの数の砂を数えようとするなら、毎秒500の割合で千900万年もかかります。「神よ。あなたの御思いを・・・。」しかし、神は、「わたしはあなたがたのために立てている計画（訳者注：欽定訳では「計画」は"thoughts"「思い」となっています。）をよく知っているからだ。」とおっしゃっています。しかし、誤った神の概念を持って、「そうさ、神は私のことを、懲らしめようと思っているのさ。云々。」とおっしゃるかもしれません。しかし、神は、「わたしはあなたがたのために立てている計画（思い）をよく知っているからだ。」とおっしゃっています。「それは、平安の計画（思い）である。戦いは望んでいない。あなたと敵対したくなんかない。それはわざわざではなくて、平安をあたえる計画（思い）である。あなたに栄光に満ちた将来をもたらしたいのだ。」と。詩篇の著者は、「まことに、神なる主は太陽です。盾です。主は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒まれませぬ。」と述べました。神は、「わたしの計画（思い）を知っている。それは平安である。あなたとの戦いは望んでいない。あなたと敵対したくなんかない。」とおっしゃっています。最良で、最も賢明なことは、ただ神に明け渡すことです。「主よ。私は明け渡します。」とすることです。私は神に敵対したくありません。私は神に明け渡したいのです。

今日、みなさんの中の多くが神と敵対しているかもしれません。あなたに人生の問題があって、神はあなたに語りかけておられるのですが、あなたは突き棒を蹴っているのです。なぜ、神はあなたを突き棒でつかれるのでしょうか。あなたは蹴って、「ああ、痛い。神よ。なぜ、私のことを傷つけるのですか。」と言うのです。神は、「ちがう。蹴ったのはおまえだよ。」とおっしゃっています。神は、「これが、あなたにとって良いことだ、健全なことだ。あなたのためになることだ。」とおっしゃっています。これが続くと、引き続き、あなたは痛い思いをします。痛みを招き、苦しみを招き、苦しむことになります。神は、そのようなことをみな避るように助けようとされていますが、あなたは突き棒を蹴っているのです。あなたは神に敵対しているのです。しかし、神に敵対することは、合点がいきません。ひよっとすると、あなたは何か悪いことにかかわっているのかもしれない。ひよっとすると、派手に失敗して、面目を失うかもしれません。それが、一

生あなたの障害になるかもしれません。しかし、神はあなたを助命しようとされているのです。神はあなたを助けようとなさっているのです。ああ、自分のやりたいことや自分のアジェンダがあって、これしかない、これが正しいのだと思い、ああ神よ、私のやり方でやって下さい、わからないんですか、と言うことが、何とよくあることでしょう。そして、神が私たちのやり方でなさらないと、私たちは気分を悪くし、怒り、苦みを持ち、神に敵対するようになります。今週末、ある人が私の所にやってきて、ああ、とってもがっかりしていました。その人がとても深く愛しているガールフレンドが、もうかかわりたくないと言ったと言うのです。高校生には、このようなことはよくあることです。「ああ、私、とっても恋しているの。ああ。なんてことだ。自殺したい。もう電話に出てくれなくなった。傷心だ。世も末だ。」と。私は土曜日の夜に私の所に来たこの人に、「あのね、私が高校生のとき、ある女の子に恋していると思っていました。そして、その人のことについてずいぶん祈りました。」と言いました。ずいぶん前に、またそのことを思い返して、「神よ。あなたは私にほんとはよくして下さいました。」と思ったと言いました。（訳者注：ここで大爆笑です。もし、その人とうまくいっていたとしたら、今の奥さんとは結婚できていなかったはずだからです。）将来がどうなるのか神は私たちよりずっとよく御存じです。ただ、明け渡す方が、賢明です。「オッケー、神様。あなたが御心を行って下さい。」と。神が私にして下さったことを見て下さい。ああ、神はよいお方です。神の計画は、最高です。神に敵対しないで下さい。ただ、神に明け渡して下さい。明け渡すと、壮快な気分になります。ただもう、壮快な気分になります。クッションの上に横たわって、「オッケー、神様。私は敵対していません。主よ、私はあなたの味方です。」と言うと、大いなる平安があります。大いなる安らぎがあります。そうイエスはおっしゃっているのです。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と。「オッケー、神様。もう格闘していません。敵対していません。もう自分のやり方を主張しません。あなたが私の人生の中であなたのわざをなさして下さい。あなたの御心を達成させて下さい。」と言って、ようやく明け渡すと、すばらしい平安があります。すばらしいことです。

ガマリエルが述べたように、「もし、神から出たものならば、あなたは勝てません。追いつくことはできません。」明らかに、神から出たものだったようです。ほぼ2千年後、依然として私たちはイエスを礼拝しています。教会は続いています。イエスさえもが言われたように、「ハデスの門もそれには打ち勝てません。」ですから、私たちイエス・キリストの教会があるのです。もし、彼らが神に敵対していたとしたら、神に敵対するそのようなあわれな立場にいたことになるのです。多くの人が、自分を傷つけ、その立場にいることに気がつきません。

使徒行伝 6－7章前半 (1 / 21 / 96)

使徒行伝 7章 34節 (Acts 7:34)

「見て、聞いてくださる神」 # 8604

交読文：詩篇 115篇

聖書通読を続けていますが、これから二週間は6章と7章を学んでいきます。この二つは複雑に絡み合っていますので一緒にして考えていきたいのですが、一週間で学ぶには量が多すぎるので、今夜は6章を終わらせて7章に入って、通読の学びは続けますが二週間とも6章と7章どちらも両方の日曜日に学んでいきます。

今朝は7章34節に注目していただきたいのです。6章と7章は基本的にステファノという名前の方が中心になっています。この人は、教会の福祉プログラムの配給を手伝うために選ばれた七人のうちのひとりですが、神がステファノのミニストリーを拡張され、主の力強い証人として用いてくださり、彼は教会で初めての殉教者となりました。ステファノがユダヤ人議会の前で証言していますが、彼の抗弁を読みますと、その論法と知恵に驚いてしまいます。夕拝ではそれを注意深く見ていきますが、ステファノは、彼らのために、その歴史を語りました。彼らの民族の歴史や父祖の歴史をです。彼らがエジプトにいたときのことを語っています。奴隷であったときのひどい経験や、エジプト人によって課せられた過酷な労働や、耐えがたい状態にいたこと、そして、ある日神がどのように燃える柴の中からモーセに語られたかを語っています。そして、34節で、神はこう言われました。「わたしは、確かにエジプトにいるわたしの民の苦難を見、そのうめき声を聞いたので、彼らを救い出すために下って来た。さあ、行きなさい。わたしはあなたをエジプトに遣わそう。」

神はユダヤ民族の父であるアブラハムに語られました。神はアブラハムに言われました。「あなたの子孫は、外国に移り住み、四百年間、虐待される。しかし、その後、彼らは多くの財産を持って、出て来るようになる。(訳者注：創世記13:13-14と使徒行伝7:6-7が組み合わさった引用です。)」こういうわけで、ヤコブの時に、ヨセフによってイスラエルの民はエジプトに下りました。ヤコブの子のひとりであるヨセフは、エジプト全土において二番目の支配者の立場に置かれました。彼の上にはパロしかいませんでした。神はヨセフを祝福されました。ヤコブが住んでいた地に飢饉があったので、ヨセフは父と兄弟と家族を招待して、彼らがエジプトに移って来てヨセフが養うようにしました。ですから、ヤコブと七十人の家族はエジプトに下って、そこで家畜を育てて農地を耕すために、ナイル川の三角州の肥沃な土地を与えられました。ヨセフの生存中、神は彼らを祝福されました。しかし、長い年月が経ち、聖書は「ヨセフのことを知らないパロが起こった」と言っています。そして、エジプト人は、次第にイスラエル人を奴隷にしていきました。エジプトにある巨大な記念碑は、イスラエルの奴隷によってつくられたと考えられています。そしてついに、イスラエル人が彼らよりもふえ広がったので、エジプト人は不安になってきました。エジプト人よりもイスラエル人のほうが多くなる時が来て、その時にイスラエル人がエジプト人に反抗して、イスラエル人の人口爆発によって国の安全保障が脅かされるかもしれないと感じ、恐れしました。それで、助産婦が分娩させるとき、もしも男の子なら、それを殺さなければならないとのパロによる命令が出されました。女の子なら、生かして奴隷にしたのですが、男子の赤ちゃんはすべて殺されなければなりません。この時に、モーセが生まれました。モーセの母は、モーセを殺すことができませんでした。自分で殺すことができませんでした。それで、彼女はモーセを隠しました。しかしもう隠しきれなくなったので、アシで小さいかごを作って、樹脂を塗って防水して、モーセをそれに入れて、ナイル川に浮かべました。パロの娘が水浴びをしようと降りて来

て、泣き声を聞いて、かごを取ってこさせました。男の子を見て、あわれに思い、その子が気に入って、自分の子供として養子にしました。実際モーセは、エジプトの宮廷の中で育ち、40年間、学問を教え込まれました。それから、事情があってモーセは逃げました。それから40年間は、彼は、メディアンの地で姑の羊を飼って、ただ羊飼いをしていました。ところが、ある日、モーセは柴が燃えているのを見ました。柴は燃え尽きていなかったので、そこにモーセは引き寄せられました。モーセが近寄ると、柴の中から、「あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなたの立っている所は聖なる地である。」という声がしました。それから、ステファノが34節で語っているように、神が柴の中から現われて、「わたしは、確かにエジプトにいるわたしの民の苦難を見、そのうめき声を聞いたので、彼らを救い出すために下って来た。」と言われました。

神は、わたしは見、わたしは聞き、わたしは救い出すために下って来た、と言われました。私たちの持っている神の概念のせいで、神がはるか遠くに離れている、隔たりがあり、人に思いやりのない方であると思ってしまうことがあります。詩篇の記者は、「あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。」と言いました。出て入って、砂漠の空を見上げてその星をすべて見て、望遠鏡をのぞくと宇宙に銀河が見えます。星の間と銀河の間に広大な距離があることに気づいて、それはとてつもなく広漠としており恐ろしいほどであり、神がこれらを創造されたことを考えますと、確かに神は朽ちていく人間を思っていない、興味がないと思うのです。「人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。」初代教会に、グノーシス主義として知られる異端がありました。グノーシス主義者は、物質的なものはすべて悪であり、したがって、神は悪を創造しえなかったはずであり、従って、神はこの物質の宇宙を創造されなかったと信じました。しかし、神が宇宙のどこかにおられて、エマナティオ（訳者注：英語ではemanation）が神から流出し、これがどんどん遠くに行き、神から余りに遠くにまで行きエマナティオが神を知ることがないほど遠くにまで行き、このエマナティオが物質の世界をつくったので、神は、物質の朽ちていく人間とは完全に関係がないと信じました。これは、聖書で確認されている概念ではなく、聖書は、実に、神があなたをとて思いやってくださっており、あなたのことをすべてご存じで、あなたに関する、あらゆる類いの小さなことも知っておられると教えています。けれども、長い間悲しみや痛みの経験が長く続くと、神がそこにおられないかのように感じます。神は、見てくださらない、聞いてくださらないようにみえてしまいます。けれども、そうした時に、もしあなたが注意深く聞くなら、あなたの心に語りかけて下さる神の御声を聞くでしょう。「わたしは見、わたしは聞き、わたしは知っている。」と。

イスラエルの民は、長い間、神に泣き叫んでいたことを覚えておくべきです。モーセが生まれてから80年間、依然として苦役のためにうめいていました。その間ずっと、神は、見ておられました。なぜ神はもっと早く私たちの必要に答えてくださらないのでしょうか。詩篇には、何回もダビデが「主よ、急いで下さい。わたしを助けてください。」と祈ったところがあります。「主よ、急いでわたしを助けてください。」これは、詩篇でよく繰り返されている文句です。「わが神よ。遅れないでください。」と。なぜだかわかりませんが、神はご自分の目的を達成するために決して急がれないようです。私は、何回も、ダビデのように、神を押し進ませようとしていました。急がせようと思いました。けれども、聖書には「信じる者は、あわてることがない。」と書いてあります。今朝歌った賛美歌の歌詞の2番に、「こころをゆるがす波、こころをわずらす影、あわてさせる風、たましいにふれることあらじ。主にとどまれば、こころはいとも幸いなり。主の約束に全き安けさとやすらぎを見いださん。（訳者注：原題は“Like a river glorious”。聖歌471番。訳

詞は翻訳者が訳したもの。) 」とあります。神は、わたしは見た、と言われました。神は、わたしは彼らのうめきを聞いた、と言われました。神はあなたの苦境を見ておられます。神はあなたの叫びを聞いておられます。詩篇の記者は「主を恐れる者の願いをかなえ、彼らの叫びを聞いて、救われる。」と述べています。ダビデは、自分を殺そうとしていたサウルから救い出されたときこう言いました。「ほめたたえられる方、この主を呼びもとめると、私は、敵から救われる。・・・私は苦しみの中に主を呼び求め、助けを求めてわが神に叫んだ。主はその宮で私の声を聞かれ、御前に助けを求めた私の叫びは、御耳に届いた。」

しかし、神が聞かれるとき、なぜ、私たちの祈りがかなえられないように見えることがここのも多いのでしょうか。ヨブは、「私はあなたに向かって叫びますが、あなたはお答えになりません。私が立っていても、あなたは私に目をとめてくださいません。」と言いました。預言者ハバククは、「主よ。私が助けを求めて叫んでいますのに、あなたはいつまで、聞いてくださらないのでしょうか。」と言いました。私たちは、時々、ハバクク、ヨブのように「あなたはお答えになりません。」と感じます。私たちの叫びに対してすぐに答えがかえってこないのです。神は、ハバククに、「わたしは働いているが、あなたは理解しないのだ。(訳者注：おそらくハバクク1:5後半に基づいています。)」と言いました。ただわたしを信じなさい、と神は言われましたが、それはとても難しいのです。「先が見えず、さらに悪いことに、神に助けを求めているときに、物事が悪化の道をたどっているように見えるのはなぜか理解することができないのです。」このこと、物事が好転するまで、事態はもっと悪化すると、神はハバククに言われましたが、ハバククにはそれが理解できませんでした。神は、「ただわたしを信じていなさい。正しい人はその信仰によって生きる。」と言われました。多くの場合、神がおくらせておられるのは、私たちの信仰を試しておられるからです。多くの場合、神は働かれていますのですが、私たちは、働きが完了するまで、それを見ることができず理解できないのです。「わあ、これは、すごいわあ。こうなってたんだ。」と言うのですが、働きが完成されてはじめて、背後にある神の論拠と目的を見ることができるのです。それは、完璧なタイミングであることがよくあるのです。私はいつも急いでしまいますが、神はそうではありません。神は、ご自分の目的とみこころを完璧なタイミングでなされます。

時に、私の願いに対する答えが遅れるのは、私が夢見たより、何かずっとすばらしいものを神が考えてくださっているからです。マリヤとマルタは、自分たちの兄弟の病気のことで心配しました。彼女たちはヨルダン川におられるイエスに使いを送って、言いました。「主よ、急いで来てください。あなたが愛しておられる者が病気です。」さて、イエスは、急いで行かれませんでした。ヨルダン川に、さらに数日とどまられたのです。ベタニヤにいる友から受けた緊急の要請に対し、応答されなかったのです。イエスがベタニヤへの二日かかる旅を始められた頃には、イエスがベタニヤに到着された頃には、友ラザロは既に死亡し、墓に葬られて四日たっていました。イエスがようやく村の近くまで来られたことを聞くと、マルタはエリコへ向かう道をイエスと弟子たちに追いつくまで走って、こう言いました。「主よ。もしここにいてくださったら、私の兄弟は死ななかつたでしょう。主よ、おそすぎます。助けようと思われればできましたのに。あなたがいやされる力があることを知っています。あなたが間に合っておられたら、死ななかつたでしょう。こんな不幸や悲しみや痛みや嘆きを経験せずに済みましたものを。主よ。なぜ聞いてくださらなかったのですか。なぜ来て下さらなかったのですか。なぜ、私たちが呼んだのに、答えてくださらなかったのですか。」主は言われました。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見ます。彼をどこに置きましたか。」「来てご覧ください。」そして、彼らはイエスをほら穴のところまで連れていきました。イエスは言われました。

「ほら穴から石を取りのけなさい。」「まあ、主よ。四日になりますから、もうずいぶん臭くなっておりましょう。」しかし、彼らは石を取りのけました。イエスは、「ラザロよ。出て来なさい。」と呼ばれました。そして、彼はピョンピョン跳ねながら出て来ました。まだ埋葬用の長い布で巻かれていたからです。イエスは言われました。「ほどいてやって、帰らせなさい。」さて、イエスは、緊急の要請を受けられた後に、わざとヨルダン川にとどめられたのです。なぜなら、さらにすぐれた神のわざと栄光を行ないたいと思われたからです。確かにすぐに来て、他の何百人の人たちになさったと同じようにラザロに手を置くことは、おできになったはずです。けれども、イエスは、神の力を証しするために、さらにすぐれたわざが成し遂げられるように願われたのです。たとえ人が主が働かれるのが遅すぎると思うことがあっても、決して主にとっては遅すぎることはないのです。私たちが遅れを経験するときには、神がさらにたくさんのことを行なおうとされていることがよくあるのです。

ところが、場合によっては、私たちの祈りがかなえられないのは、神が私たちの言うことを聞いて下さるような関係が、神との間にないことがあります。預言者イザヤはこう言いました。「主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。」神はつんぼではありません。「あなたがたの咎（罪）が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとな（ったのだ）。」問題は、神の側ではなくあなたがたの側にあって、あなたがたの罪が、あなたがたの神との仕切りとなったのです。エレミヤは、人々のことを書いて、こう言いました。「『彼らは、わたしのことばを聞こうとしなかった彼らの先祖たちの咎とくり返し、彼ら自身も、ほかの神々に従って、これに仕えた。イスラエルの家とユダの家は、わたしが彼らの先祖たちと結んだわたしの契約を破った。』それゆえ、主はこう仰せられる。『見よ。わたしは彼らにわざわいを下す。彼らはそれからのがれることはできない。彼らはわたしに叫ぶだろうが、わたしは彼らに聞かない。』」神は、「あなたがたは聞かないのですか。それでは、なぜわたしが聞きましょうか。」とされているわけです。事実、ある時、神はこう言われました。「彼らがわざわいに会ってわたしを呼ぶときにも、わたしは聞かないからだ。」しかし、神は言われました。「あなたがたが仕えている神々を呼べ。彼らに助けてもらえばよい。（訳者注：リビングバイブル日本語訳エレミヤ2:28に基づく。）」でも、これは私たちがしたくないことです。私たちは、どうしてもなく必要があるときに、見ることができ、聞くことができ、救い出すことができるわかっている神を呼びたいのです。詩篇の記者は、「主の目は正しい者に向き、その耳は彼らの叫びに傾けられる。」と述べました。神が、「あなたは、こんなときしかわたしのことを聞かない。というか、わたしが呼ぶとき、あなたは聞かないのか。それなら、あなたが呼ぶときに、わたしは聞かない。」とおっしゃっているようなものです。神は、何年も、あなたの問題について取り組もうとして下さるのですが、あなたは、「ちょっと待って下さい。いつか自分でなんとかします。」と言いつつ待ちます。しかし、私たちが神を呼ぶときは、「ねえ、早く、今ですよ。バシッと！」と言うのは、面白いとおもわれませんか。神にはすこぶる寛容であってほしいと願うのですが、私たちは神に対して忍耐のないことがよくあるのです。本当は逆であるべきです。神が語られるときは、私たちは即、行動すべきであり、私たちが呼ぶときは、神の時機におゆだねすべきなのです。神は、「わたしは見た。わたしは聞いた。わたしは救い出すために下って来た。」とされています。神は、冷淡に傍観されているわけではありません。わざをなす時宜を、待っておられるのです。

以前に、私が青年だったとき、ずっと昔の話ですが、救助員になるための赤十字の訓練コースを取りました。他の大勢の若者と同様、若いときは救助員をしました。当時の訓練のときに、人が溺れて水の中でもがいていたら、その人に近寄るときは十分注意しなければ

ばならないと教えられました。まだ体力が十分あって、もがいているときに、その人のところに来たら、その人はあなたをつかんで、死ぬまで離さないような感じになって、どちらも沈んでしまうと。ですから、その人のところまで泳いで、自分でへとへとにさせておくようにと教えられました。その人に話しかけて、安心させて、落ち着かせるのです。その人が疲れきって、もう沈んでしまいそうになってら、ようやくあなたは介入し、助けることができます。でも早すぎると、大変なことになるかもしれません。それで、溺れている人たちのところまで行って、潜って、膝をつかんで、一回転させて、彼らの背後に回って連れてくることを学びました。しかしこれは、面白いことです。神も、同じように、働かれることがよくあります。私たちがもがいているかぎり、戦っているかぎり、神は私たちが疲れるまで放っておかれます。ついに、私たちが本当に沈みはじめて、「ああ、かみさまあ！私はもう終りです！」と言ったときに、神は、「わかった。これで、わたしは助けられる。」とおっしゃるわけです。早まって助けていただくと、自慢につながりかねません。「いつも、自分でできるとわかってたんだ。ただ決断が必要だったわけで。」という感じに、私たちは賞賛や栄光を我がものとしようとしがちです。神は、私たちを自分で死ぬまでへとへとにさせておいて、私たちが絶望の中で「かみさまあ！助けて！溺れ死にます！」と叫んだときに、そのとき神は介入されます。神は言われます。「わたしは、彼らを救い出すために下って来た。」と。時宜を待っておられるのです。

「わたしは見、わたしは聞き、わたしは救い出すために来た。」これは、私たちが今朝読んだ詩篇 115 篇の神々と対照的です。物事がうまくいかないと、不信者はよく、「あなたの神は、いったいどこにいるのか。」と言いますが、詩篇の記者はこう言います。

「私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。目があっても見えない。・・・耳があっても聞こえず、・・・手があってもさわられ（ない）。」つまり、力がない、能力がないのです。イザヤは、人が自分の神々を造ることの愚かさを語りました。44 章でこう言いました。「偶像を造る者はみな、むなしい。」または、「頭がからっぽ」ということですが、「彼らの慕うものは何の役にも立たない。彼らの（証人たちは）、見ることもできず、知ることもできない。」イザヤは言いました。「何の役にも立たない神を造り、偶像を鑄たのだろうか。・・・それを細工した者が人間にすぎないのだ。・・・鉄で細工する者はなたを使い、炭火の上で細工し、金槌でこれを形造り、力ある腕でそれを造る。・・・木で細工する者は、測りなわで測り、朱で輪郭を取り、かんなどで削り、コンパスで線を引き、人の形に造り、人間の美しい姿に仕上げ、神殿に安置する。彼は杉の木を切り、あるいはうばめがしや樫の木を選んで、林の木の中で自分のために育てる。・・・それは人間のたきぎになり、人はそのいくらかを取って暖まり、また、これを燃やしてパンを焼く。また、これで神を造って拝み、これを偶像に仕立てて、これにひれ伏す。・・・その残りで神を造り、自分の偶像とし、それにひれ伏して拝み、それに祈って『私を救ってください。あなたは私の神だから。』と言う。彼らは知りもせず、悟りもしない。彼らの目は堅くふさがって見ることができず、彼らの心もふさがって悟ることもできない。彼らは考えてもみず、・・・『私は、その半分を火に燃やし、その炭火でパンを焼き、・・・その残りで忌みきらうべきものを造り、木の切れ端の前にひれ伏すのだろうか。』とさえ言わない。」と預言者イザヤは言いました。「分からないのか。木の切れ端を取って、半分を像を形造り、その半分を火に燃やし、その炭火でパンを焼いているが、これは木の切れ端にしかすぎないのだ。それにひれ伏して拝み、『あなたは私の神なのだから。』と言っているのだ。愚かなことだ。」と彼は言ったのです。

私たちは、今日もっと見識のある時代に生きています。つまり、私たちの神々を表すために像を造らないのです。しかし、像は造らないけれども、依然として多くの人と同じ神々を拝んでいます。したがって、私たちは、自分に正直ではなく、惑わされています。

私は像を造っていない。木の切れ端をたくさん乳のある女の形に削って、自分の家に据えて、それを通り過ぎるたびに敬礼などしていない。しかし、このようなことをやっているのは、私はセックスに傾倒しています、セックスを拝んでいます、セックスは私の神です、ということを示しています。セックスが自分の神であることを認めているのです。正直に認めているのです。現代の人は、依然としてセックスを自分の神として拝んでいます。しかし、像は造らないので、彼らは惑わされているのです。でも、本当に正直になるなら、あなたの生活を支配しているのは、それなのです。あなたを支配しているのは、あなたの性欲です。もし、私が木の切れ端をモレクのように見えるように削って、自分の家に据えたら、自分は快楽を拝んでいることを認めることになります。快楽が主な人生の目的だと信じていることになります。自分の感覚を興奮させてかき立てるものを、追い求めていることになるのです。もし、マモンに似た木の像を造ったら、自分は、物を持ちたい、力がほしい、というふうに金を拝んでいることを認めていることになります。あるいは、バアルに似た像を造るなら、自分が知性を拝んでいると言っていることなのです。知ることと理解すること、これこそ人生最大の目的だと信じることです。つまり、自分の精神的能力の限界までめいっぱい使って、すべてのものを理解し、知ろうとしているのです。そうすると、知性を拝んでいることを認めていることなのです。これらのものは、人々がいまだ拝んでいるものなのですが、ただ、もうその像を形造っていないだけです。しかし、詩篇の記者は、これらの神について、「見えず、聞こえず、知らず、あなたがわざわざいなくても助けることはできない。」と語っています。

では、このことを直視してみましょう。あなたは、他の神々を拝んでいるのかもしれないのです。けれども、せっぱ詰まって、あなたが本当に大変な事に陥ったら、助けてもらうためにどの神を呼びたいですか。助けてもらうために、どの神を呼びますか。もし、医者があなたの待っていた部屋に入ってきて、あなたの子供が隣の部屋で介護を受けているとします。医者が顔に非常に神妙な表情を浮かべて、次のように言います。「申し訳ありません。医学でできることはすべてしてみたのですが、もう何もできません。入って、お子さんにご対面になってください。もう間もなく、天に召されます。」この時点で、あなたはどの神に助けを求めますか。見ることのできる神が、聞くことのできる神が、救い出すことができる神がほしいのではないのでしょうか。その時には、これら無感覚な神々の中の神はほしくないでしょう。答えてくださる神がほしいでしょう。あなたが死に直面している時点にいるとします。命が過ぎ去ろうとしています。あなたが死ぬ時、どの神にそばにいてもらいたいですか。他のすべての神々はまだもう価値がありません。あなたが蓄えてきた繁栄と富はすべて、この時点であなたを助けることはできません。マモン神は、あなたの必要に答えることはできないのです。モレクもバアルもアシュタロテも答えることはできません。永遠の御国に連れていってくださる神がほしいでしょう。真の生ける神が、見ることができて、聞くことができて、救い出すことができる神がほしいでしょう。「わたしは見、わたしは聞いたので、わたしは救い出すために来た。」と神は言われました。

自分で抱えていかなければならない神はいりません。その神が移動しなければならないとき、隣の部屋に持っていくのに、私が持ち上げて持っていかなければならなくなります。私は、私を抱えて運んでくださる神がほしいです。人が造った神はいりません。私は、神が造られた人になりたいです。神がお造りになったときに意図された人になりたいです。

自分はどんな神を本当は拝んでいるのか、正直に自分の生活を吟味してみることが大切です。私の人生を支配している、コントロールしている強い欲求は何なのか。聖書は、「もし私たちが自分を（探り）さばくなら、さばかれることはありません。」と言っています。本当に自分に正直になって自分の生活を見たら、あなたがたのうちでぎよっとする人がいるでしょう。先週自分がいるいるなことに使った時間を吟味してみればよいでしょ

う。これにはどれだけ時間を費やしたか、あれはどうか、座ってあなたの時間に優先順位をつけてください。何に時間の大半をを費やしているのか見つけてください。通常、あなたが追い求めたものが、あなたの選んだ神です。第一の戒めは、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」です。イエスは、「神の国と神の義をまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」と言われました。神は他のすべての面倒を見てくださいますが、神を第一にするのです。神を第一にすると、神は、「わたしは見、わたしは聞き、わたしは知った。わたしは救い出すために来た。」と言われます。あなたは、緊急のときだけではなく、日々の歩みにおいて神の力と助けを知るようになるでしょう。神に頼り、より所とすれば、神が真実な方であることを見いだすでしょう。

使徒行伝 7 章 (1 / 28 / 96)

使徒行伝 7 章 37 節 (Acts 7:37)

「モーセのような預言者」 # 8605

交読文：詩篇 90 篇

私たちの聖書通読は今週使徒行伝 7 章ですが、今晚私たちは集まって使徒行伝 7 章を学びますので参加なさるようお勧めします。今朝は、7 章 37 節に注目していただきたいのです。6 章で、教会の福祉のプログラムの運営を助け、監督するために選ばれた男のうちのひとりであったステパノは、聖霊に満たされて、実に聖霊による知恵が与えられて、イエスのことを語ることで神に用いられました。彼が語っていた人々は、神が彼に与えられた知恵に対抗することができませんでした。そこで、彼らは、ステパノが捕えられて宗教会議に連れてこられるようにし、男たちを雇って偽りの証言をさせ、そこでステパノに対する告訴を提出しました。ステパノは、聖霊に満たされて、エルサレムの宗教会議の前で抗弁を始めました。彼は、まず、神がアブラハムを選んだところから始めて、彼らの歴史を語りました。歴史を語りつづけた際、イスラエルの歴史で最も重要な人物のひとりであるモーセのところまで来ました。モーセが生まれたとき、3ヶ月の間隠されていたが、母親がもう隠しきれないと知って、小さい籠にモーセを入れて樹脂を塗って水に浮かぶようにしたこと、彼がエジプトの大学で教え込まれたことを人々に語りました。彼らの歴史を語り、モーセのことを語りましたが、37 節で、「このモーセが、イスラエルの人々に、『神はあなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。(あなたがたは彼に聞き従わなければならない。)(訳者注：括弧の文は欽定訳の“him shall ye hear”の翻訳。申命記 18:15 を参照。)]』と言いました。そこで、ユダヤ人は、この「彼」がメシヤの預言であると理解していました。モーセは実に、来るべきメシヤを預言して、「私のようなひとりの預言者・・・あなたがたは彼に心を留めなければいけない。」と言ったのです。

現在に至るまで、依然としてユダヤ人はこれをメシヤの預言だと理解しています。実は、今日ユダヤ人は、これを使って、イエスはメシヤでありえなかったことを証明しようとしています。なぜなら、ユダヤ人によると、イエスは、神の子であると自称した。そして、モーセは「私のようなひとりの預言者」と言ったが、モーセは人間だったから、したがってメシヤは人間であると言っています。メシヤが人間であるなら、どのようにして彼をメシヤだと知るのですか、とユダヤ人に聞くとします。彼らの返答は、モーセはユダヤ人に神を礼拝する場所を与えた、神を礼拝する幕屋を与えたと言うのです。メシヤは、ユダヤ人に神を礼拝する場所を与える、あるいは、神殿を再建するように導くと言います。ですから、今のユダヤ人は、神を礼拝できる場所、神殿を建てるように、造るよう導く人を待っています。そして、彼らは歓呼してこの人を自分たちのメシヤとして迎える準備ができています。面白いことに、聖書は実際、このような人を預言しています。ダニエル書 9 章で、彼は、「来るべき民の君主(訳者注：聖書は「君主の民」となっています。)」と呼ばれています。ダニエルは、彼がイスラエルと契約を結ぶが、3年半後にその契約を破り、再建された神殿に来て、忌むべきことを引き起こし、これが大患難時代において神の怒りを招くと教えています。ヨハネの黙示録は、人々はこの人の像を造って、至聖所にそれを置き、人々に彼の像を拝むように命じると教えています。パウロはテサロニケ人への手紙第二の 2 章で、彼が実際に至聖所に立ち、自分が神であることを教え、自分を神として拝むように命令すると語っています。イエスは、「わたしはわたしの父の名によって来ました。あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。」と言われました。ですから、この

人、来るべき君主、獣、反キリストと呼ばれる人は、初めユダヤ人に受け入れられますが、神殿の至聖所に自分の像を据えて忌むべきことを行ない、自分を神として拝むように命令して、神聖を汚すことを引き起こします。すると、彼らの目が開かれます。彼らは、ヨルダン川を越えてヨルダンの地域に逃げて生き残ります。神は、そこで、神の最後の地上の裁きと怒りの時期の3年半の間、彼らを生きながらえさせます。

メシヤが神の子である、と言っているメシヤに関する預言があることに注意しなければなりません。したがって、ユダヤ人が今日言っていることは妥当性がありません。なぜなら、イザヤ書9章6節に、「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。」誰が、この子を与えたのでしょうか。神が、神の子をお与えになったのです。「主権がその肩にあり、その名は、『不思議な預言者、力ある神、永遠の父、平和の君。』と呼ばれる。」これは、明きらかにメシヤ預言で、力ある神、平和の君と呼ばれています。イザヤ書7章で、預言者はこう言いました。「主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして、男の子を産み、その名を、『インマヌエル』と名づける。(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)(訳者注：括弧書きは、マタイ1:23からの引用。)」詩篇2章に、いや実際は詩篇2篇ですが、「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」と神は言われました。そして、王が、メシヤがこれに応答されています。「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。』」(次は)歴代誌第一17章11節です。神がダビデに、ダビデの世継ぎの子からメシヤが起こる約束を与えられました。神が、ダビデに語っておられます。次のように言われました。「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちのもとに行くようになるなら、わたしは、あなたの息子の中から、あなたの世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしのために一つの家を建て、わたしはその王座をとこしえまでも堅く建てる。」これにはソロモンは不適合です。「わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。わたしはわたしの恵みをあなたの先にいたものから取り去ったが、わたしの恵みをそのように、彼から取り去ることはない。わたしは、彼をわたしの家とわたしの王国の中に、とこしえまでも立たせる。彼の王座は、とこしえまでも堅く立つ。」ヘブル人への手紙は、次のように指摘しています。「(御父は、)御子については、こう言われます。『神よ。あなたの御座は世々限りなく、あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。』」ですから、預言の観点から、イエスが神の子であることを主張されるのは完全に適切で、彼は事実そうでした。

さて、ステパノは、モーセの預言を指摘していますが、「神はあなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、・・・お立てになる。」というものです。ステパノが指摘するように、イエスとモーセには興味深い類似点があります。まず、ステパノは、彼らにモーセの話を語っているとき、モーセが初めに生まれたときに彼のいのちが奇跡的に守られたことを語っています。助産婦によって、すべての息子は殺されなければならない、というパロの命令がありました。ヘブル人の女が幼子を産んだときに、それが男の子ならば、殺さなければならないというものでした。けれども、神は、モーセを死から助け出されて、生かしておかれただけでなく、彼をエジプトにいる民の支配者にお立てになりました。そして、イエスは、もちろん私たちが知っていることですが、お生まれになったとき、ヘロデが、ベツレヘムにいる二歳以下の幼子をすべて殺されなければいけないという勅令を与えましたが、神は、ヨセフに、ヘロデのが勅令が出るから幼子をエジプトに連れていくようにと警告され、奇跡的にイエスを守られました。ステパノは、モーセが40年間、一流の教育をエジプト大学で受けたことについて語りました。ある日モーセが歩いていると、エジプト人がイスラエル人の奴隷を打っているのを見ました。それで、あたりを

見直し、ほかにだれもいないのを見届けると、彼はそのエジプト人を殺し、死体を埋めました。次の日、再びヘブル人の中を歩いていると、ふたりのヘブル人が争っていました。彼は行って介入し、「おい、よせ。あなたがたは兄弟なのだ。お互いに傷つけ合ってはいけない。」と言いました。そして、彼らは、「だれがあなたを、私たちの支配者にしたのか。きのうエジプト人を殺したように、私たちも殺す気か。」と言いました。ステパノは、「モーセは、神が彼を選んで、彼らを救いを与えようとしておられることを、彼らが理解してくれるものと思っていましたが」と言いました。神がわたしを解放者を選んでくださったことを彼らは知っていた、きっと知っている、と思いましたが、彼をそのようには理解しませんでした。彼をそのようには認めませんでした。けれども、40年後に、彼らの苦境がさらに絶望的になったとき、モーセが二回目に現れて、彼らは彼が神の解放者であることがわかりました。「モーセのようなひとりの預言者」です。一回目にイエスが来られたとき、彼らはイエスを解放者だと認めませんでした。イエスをメシヤ、救い主だと認めませんでした。けれども、イスラエルの民にとってあまりに状況が悪化し、彼らが「祝福あれ。主の御名によって来られる方に。」という日が来るでしょう。イエスは、「『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決して私を見ることはありません。」と言われました。ここに、「モーセのような預言者」という面白い対比があるのです。モーセが一回目に神の解放者として認められないで、二回目には理解されたように、モーセのようにイエスは、一回目にユダヤ人から、救いのために来られたことを認められませんでした。二回目に彼らを救い出されるために来られるとき、彼らに理解されるのです。

もう一つ、興味深い類似点があります。モーセが民に神のみことばを与えたように、メシヤが民に神のみことばを与えられた事実、それは見いだされます。神がシナイ山でモーセにお会いになったときに、恐ろしいばかりの神の臨在と力が示されました。山は密雲に覆われました。いなずま、雷がありました。ラッパのような突風の響きがあって、いよいよ高くなりました。全山が震えはじめました。火が山から出てきて、山の頂上から、かまど（訳者注：英語の直訳は「溶鉱炉」。）のような煙が立ち上りました。それで、モーセが20章にある戒律、十戒を持って山から降りて行き、民に十戒を与えたときに、人々はモーセに言いました。「あなたが上って行ってください。あなたが神に話してください。あなたが降りてきて、神があなたに仰せになったことを教えてください。私たちは山に近づきたくありません。さもないと、火になめ尽くされます。」「あなたが行って、あなたが神に聞いて、戻り、神があなたに仰せになったことを教えてください。私たちは、聞きます。」そこで、モーセは、彼らに神のみことばを与えました。さて、モーセは、「わたしのようなひとりの預言者が来る。あなたがたは彼に聞き従わなければならない。」と約束しました。申命記18章にこの預言が与えられていますが、神は、同じことを15節で述べておられます。神が仰せになっています。「あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。」そして、16節です。「これはあなたが、ホレブで集まりの日に、あなたの神、主に求めたそのことによるものである。」あなたが、これを求めたのである。「『私の神、主の声を二度と聞きたくありません。またこの大きな火をもう見たくありません。私は死にたくありません。』それで、主は私に言われた。『彼らの言ったことはもっともだ。』」それで、神は言われました。18節です。「わたしは彼らの同胞のうちから、彼らのためにわたしのようなひとりの預言者を起こそう。わたしは彼の口にわたしのことばを授けよう。彼は、わたしが命じることをみな、彼らに告げる。」バプテスマのヨハネは、イエスについて、こう証言しています。ヨハネの福音書3章34節から36節です。「神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである。父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しに

なった。御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。」次は、イエスがご自身のことを証しされたものです。ヨハネの福音書7章16節です。「イエスは彼らに答えて言われた。『わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです。』」ヨハネの福音書12章49節です。「わたしは、自分から話したのではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。」ヨハネの福音書14章10節です。ピリポが、「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」と言ったときに、イエスは、「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。私を見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。・・・わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。さもなければ、わざによって信じなさい。」イエスは言われました。「わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」イエスは、「これはわたしのことばではなく、父が言われたことを話しています。わたしは、神の命令をあなたがたに与えているのです。」と語られているのです。私たちに神の真理を話される、モーセのような預言者です。

面白いことに、イエスの時代に、人々は絶えずイエスをモーセに対抗させようとしてきました。彼らは、イエスの言われていることが、モーセの言ったことに反していることを示そうとしました。彼らはいつも、イエスにモーセの言ったことに矛盾することを言わせようと、罠にはめようとしてきました。それは、モーセが人々に神のみことばを話したことを、すべての者が理解していたからです。もし、イエスの言われたことがモーセの言ったことと矛盾するならば、イエスは、神のみことばを与えていないはずだと。神のみことばは変わらないからです。さて、イエスの言われたことで、モーセの言ったことに反するように人々が解釈したものが、多くあります。あたかもモーセとキリストが異なるメッセージをしているかのように、人々が「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」と引用するのをとてもよく聞きます。これは、実は、律法の誤解から来ているのです。神は人に、幸せな生活のために、律法を授けられました。神は、もしあなたがたが、この律法を守って生活するならば、この律法に従うならば、あなたは幸せな生活をする、とおっしゃっているのです。詩篇の記者は、これを理解していました。1篇にこうあります。「幸せなことよ。悪者のはかりごとには歩まず、罪人たちの道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。その人は、水路に植わった木のような。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は何をしても栄える。」律法は、幸せな生活、栄える生活の規準なのです。そして、神は、人が幸せな生活を持つことを願われました。それで、人にルールをお与えになったのです。しかし、時がたって、彼らはこのルールの解釈を始めました。まず初めに、彼らは、神が十戒を授けられたときに、神が本当に意味されたことは何だったのかの口伝を造り、そして十戒が本当は何を意味しているかの定義を与えようとしてきました。それで、彼らにはミシュナがありましたが、これは口伝でした。ミシュナから、60巻以上のタルムードと呼ばれるものが出来ました。それは、律法の意味を説明しているミシュナの意味を説明しています。突然として、十戒を説明する60巻ができたのです。私たちの憲法のようなものです。父祖がアメリカ合衆国憲法を設定した時に父祖が憲法について語っている意味を説明するために、とてつもない数の巻が書かれました。そのようなことを私たちはしたのです。ユダヤ人も、神の律法を同じように取り扱って、神の律法を煩わしいものにしました。人々が神の律法に反抗するようなものにしてしまいました。例えば、律法が、「安息日をおぼえ、これをきよく保て。

何の仕事もするな。安息日に荷物を運ぶな。（訳者注：エレミヤ17:21-22を参照。）」と
言っています。「荷物を運ぶな。」ということですが、何をもって、荷物を運ぶというこ
となのでしょうか。もし、あなたが入れ歯で、もしそれを安息日につければ、それは荷物
を運ぶことになるのか。それで、彼らは、長期間の大議論をして、安息日に入れ歯をつ
けるのが安息日の律法に違反するのかどうかの神学論争をしました。木製の義足はどの
なるのか。これを革ひもで足につければ、荷物を運ぶことになるのか、・・・面白いこと
に、安息日に入れ歯はしてもいいことになりましたが、木製の義足は付けていけないとい
うことになりました。では、つけまつげはどのなるのでしょうか。これらは、みな取るに
足りないことです。ところが、律法の主要な面、律法が本当に到達しようとしているこ
とは、人のこころの態度なのに、彼らは、これを完全に見過ごしてしまいました。こ
れは、イエスが彼らに、「あなたがたは、ぶよは、こして除くが、らくだはのみこんで
しまいます。」と言われたことです。イエスが何を言及しておられたかと言うと、もし
パリサイ人がジョギングをしているとして、息をハーハーさせていると、ぶよが口
に入ってきて、律法が「あなたは血のついたままで何も食べてはならない。」とい
っているから、このぶよには血があるはずだからというので、道端に寄って、指を
口に突っ込んで、一生懸命吐こうと、「ゲー」と、ぶよをこそうとしている様です。
（訳者注：チャックは、中指を口の中に突っ込む真似をしています。）でも、あなた
がたは、広義とか誠実とか正義とか最も重要なことを、おろそかにしているの
です、と言われていています。（訳者注：英語のstrain at a gnat and swallow a camel
は、大事を見過ごして小事にこだわるの意味のことわざになっています。）
ですから、イエスは、私たちに律法が与えられた本当の目的を教えられていた
だけでした。それは、人を正しくするために与えられたものではありません。人
がいかにか自分が邪悪であるかを悟り、神のところに来て、神のあわれみと恵
みと愛を受け入れざる得なくなるように与えられたのです。

また、彼らの律法の解釈のしかたは、ただ物質的、物理的なやりかただけだ
ったのです。律法が、「殺してはならない。」と言っていますが、あなたの隣人に、
あらゆる苦みと、あらゆる怒りと、内にこもった憎しみをもち、その人が外出
する度に、あなたはからだに怒りの体液を満たし、その人が通りかかると、
「機会がありさえすれば、あいつをこん棒でぶち殺してくれるわ！」と思
うこともできるのです。しかし、あなたはこん棒を取り上げて彼を打った
ことは一度もないので、あなたは正しいのです。イエスは、ちがいます、
あなたが兄弟を憎むなら、律法を違反したことになるのです、と言われた
のです。これは、ただ外面的な行動ではなく、神が抑制しようとしているの
は、悪い行ないをつくり出す私たちの内にある態度なのです。イエスが、
こう言われたとおりです。「『姦淫してはならない。』と言われたのを、
あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。
だれでも情欲をいだいて女を見るものは、すでに心の中で姦淫を犯した
のです。』」ですから、もしこのように律法を見るのであれば、人をこん
棒で打ち殺したことがなくても、実際の姦淫の行ないをしたことがな
くても、自分の思い、心の中では、「あなたは、罪を犯した。」とイエ
スは言われるのです。律法がわたしを独善的にしたりひとりよがり
にしたりするのではなくて、人を見下げて高慢にさせるのではなくて、
私が罪を犯したことを悟らせるのです。「神さま。この罪人をあわれんで
ください。」律法は、私を神の恵みとあわれみに導いてくれ、私がそれ
を受け入れることによって、神を愛するようにするのです。さて、こ
の例として、彼らがイエスに、姦淫の場で捕まえたとされている女を
引き連れてきて、「われらの律法は、この女を石打ちにするように命じ
ていますが、あなたは何と言われますか。」と言ったときに、イエ
スは、「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に女に石を投げなさいと
わたしは言います。」と言われました。イエスは、身をかがめて、地面
に書かれましたが、きっと、彼らの名前と、彼ら

が誰も知らないと思っていた彼らの罪を書かれていたにちがいないのですが、彼らはひとりひとり出て行き、ひとりとして残る者はいませんでした。それから、イエスは身を起こして、その女に言われました。「あなたの告発者たちはどうしましたか。あなたを罪に定める者はどこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか。」彼女は言いました。「だれもいません。」イエスは言われました。「わたしもあなたを罪に定めません。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」律法と対立しているところは微塵もありません。ただ真の理解がなされているだけなのです。伝統によって、律法が誤って説明されていました。それで、人々は、神が言われたことをきちんと理解していませんでした。イエスは、「あなたがたは、人の言い伝えを、神の教えのように教えている。」と言われました。神は、こんなことを言われていない、これらは、人の言い伝えなのだ、ということです。

ですから、モーセが、神のみことばを与える者として認められたように、メシヤは、モーセのような方であり、彼らに神のみことばを与えられるのです。神が、「彼は、私が命じることをみな、彼らに告げる。」と言われたとおりです。ですから、預言がイエス・キリストにおいて成就されたことがわかります。

ステパノがこのことを指摘して、メッセージが理解されました。人々がどのように反応したか見るのは興味深いです。普通、二つの反応があります。一つは、真理を受け入れません。もう一つは、真理に逆らうことです。真理を聞きたくない人が大勢います。ステパノが語っていたこれらの人々は、真理を聞きたくありませんでした。ステパノが話すと、彼らはいつも、ますます怒るようになりました。彼らは、「(心を)のこぎりで切り取られる。(訳者注：新改訳の脚注参照。)」と書かれています。ステパノに向かって歯ぎしりをしました。耳をおおいました。ステパノの言うことが聞こえないように、彼らは叫びました。そして、彼を虎の門から追い出して、石を投げました。ステパノは、死ぬ間際になって、「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。私の霊をあなたの御手にゆだねます。」と言いました。そして死にました。しかし、彼が与えたことば、真理は、付着して離れることがないのです。一時あなたがそれに逆らったとしても、いつか真理を認めるときが来ます。石を投げた人々の着物の番をしていた、サウロをいう名前の青年は、ステパノのメッセージを聞きました。サウロは、ステパノの死に他の人々と同意し、石を投げる者たちを助け、傾倒していました。しかし、ある日、そのことばが彼に戻ってきて、真理に直面しなければならなくなり、サウロは真理を受け入れられました。サウロは、かつて教会が見たことのない、最も偉大な伝道者、宣教者のひとりである、使徒パウロになりました。面白い、逆説です。真理に逆らおうとしても、メッセージが入り込んだのです。

神は、みなさんの多くの人に語りかけておられます。壁や障壁をつくっている人がいるかもしれません。イエスがメシヤであったことを、認めたくないかもしれません。自分の正義を打ち立てたいのかもしれません。残念なことに、教会は、ユダヤ人と同じようなことをしてきたのではないかと思うのです。神学論争などをとおして、神の単純な真理を複雑にしているのです。私たちは、針の頭に、どれだけの天使が踊れるのか、などという神学の議論をしているのです。だから、どういう違いがあると言うんですか！私は、若い牧師たちに、ただ単純に、神のみことばを単純に教えなさいいつも励ましています。教会を分裂させた、長年にわたるこうした神学論争にはまらないように。これらは、人間の性ですから、ずっと続きます。ただ単純に、神のみことばを単純に教えてください。そのとおり信じて、おおげさに、これはどういう意味か、みたいなことにはまらないように。神は、意図されていることをお話しになり、話されたことを意図されています。ただ、受け入れてください。それに聞いてください。メシヤは、とてもモーセに似ておられました。一回目は認められませんでした。再び来られるときは、「すべての目、彼を突き刺した

者たちが、彼を見る」のです。彼を見上げます。これは、すべて書かれていることです。二回目のときは、実は彼が神の真理を私たちに与えてくださったことを理解するようになります。それは、私たちがより頼んで生きる真理です。

使徒行伝 8 章 (2 / 4 / 96)
使徒行伝 8 章 35 節 (Acts 8:35)
「イエスを宣べ伝える」 # 8606
交読文：詩篇 22 篇

今週は使徒行伝 8 章です。今晚 8 章の注釈をしますので、そこを読み返してください。創世記からヨハネの黙示録までの聖書通読の学びに参加されることをおすすめします。今朝は、使徒行伝 8 章 35 節に注目していただきたいのです。そこには、「ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。」と書かれています。

ピリポは、食卓に仕えるために使徒が選んだ 7 人のうちの 1 人でした。ピリポは、教会の福祉プログラムの配給が公平に行なわれることを監督することになっていました。教会が大きな迫害を受け、信者が外国に散らされていったとき、ピリポはサマリアへ逃げていきました。そこで、ピリポはサマリア人にイエス・キリストを宣べ伝えはじめました。ピリポの生涯の中で神が働かれて、すばらしい奇跡、多くの癒しが行なわれ、何人もの人たちがイエス・キリストを信じるようになり、バプテスマを受けました。エルサレムの教会が、サマリアでのこのすばらしい神の働きを聞くと、人々に手を置いて聖霊でバプテスマを受けるようにと、彼らはベテロとヨハネを遣わしました。人々はこの時点では、まだ聖霊の力を受けていなかったからです。このすばらしい神の働きの最中に、主の使いがピリポに向かってこう言いました。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。(このガザは今、荒れ果てている。)」主の使いが言ったのは、これだけでした。何のためにピリポが行くのか、行ったら何が見つかるのか、言いませんでした。ただ、行きなさい、と言っただけでした。理屈では、訳が分かりません。人々の心の中ですばらしい神の働きが起こっている最中に、なぜ荒れ果てている所に行くようにと、神が呼び出されるのか分かりません。しかし、ピリポは、主に従いました。そして、エルサレムからガザに下る道に出ると、ピリポは、南へ向かっている馬車を見ました。すると、主は、「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われました。第二ステップです。しかし、第一ステップを踏むまで、ピリポは第二ステップを与えられなかったのです。私たちが信仰によって歩み、神を信じるように、神は、普通私たちを一步、一步導いて下さいます。私は、そういうのは嫌いです。主が、全体像を広げて見せて下さればと願ってしまいます。神が、「この荒れ果てている所に行きなさい。そこで、あなたはエチオピアに向かって馬車を見る。その馬車にのっている男は、エチオピアの政府高官の一人で、この人は、わたしのことを知りたいと渴望している。あなたは、その人を導くことができるから。」と言って下されば、と思ってしまうのです。そうすれば、私は、「はい。主よ。かしこまりました。」と言えるのですが、神はただ、信仰によって歩ませて下さるだけなのです。第一ステップを踏むまで、第二ステップを与えては下さりません。第一ステップを踏まないなら、第二ステップは何であろう、第三ステップは何であろう、第四ステップは何であろう、神が私を呼ばれたとき、何を意図されているのだろうと、いつも考えることとなります。神の御心が漸進的に示されるので、私たちは、ただ一歩ずつ従わなければならないのです。

それで、ピリポがそこに行くと、馬車を見ました。すると、主は、「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われました。それで、ピリポが馬車に近寄ると、この人が聖書を読んでいるのが見えました。するとピリポは、「あなたは、読んでいることが、わかりますか。」と言いました。すると、その人は、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう。」と言いました。この人は、神を見い出すために、ばるばるエチオピアからエルサレムまで来たのでした。そして、その時その人はエチオピアへ戻ろうとしてい

ました。しかし、残念なことに、来た時と同じく空しさ抱いて戻ろうとしていました。まだ神を見い出していなかったのです。この人は、エルサレムでの様々な宗教的活動の中にも、神を見い出すことができませんでした。時として、神が人の様々な宗教的活動によって隠されてしまうことがあります。宗教的活動の中で神を見い出すことは困難です。むしろ、エルサレムは、あまりに商業主義に走って腐敗していたので、神を見い出すことが困難であったはずですが、確か金曜日だったと思いますが、車のバンパーに貼ってあるシールに、「一つの宗教に閉じ込めるには、神は大きすぎる」と書かれているのを見ました。現実には、神を宗教の中に見つけることはできないのです。イエス・キリストによる個人的な関係を通してのみ、神を見つけることができます。イエス・キリストによってのみ可能なのです。今日、神を探し求めている人がたくさんいます。自分は神を見いだす必要があるという意識や認識があります。ですから、神を探し求めるときに、宗教の方を向いてしまうことがよくあります。しかし、このエチオピアから来た人のように、宗教的経験によっては心の奥深くにある必要は満たされず、依然として神を求めて渴いて離れて行くのです。人が教会に行くと、とてもしべらるな、儀式的なところへ入って行くことがよくあります。温かさも御霊のパワーもなく、その人は、神を探し求めて教会に行ったのに、ここでは神が見いだせなかったと、教会には解答がないと結論づけて、教会から去っていきます。この人もそうです。エチオピアへ戻ろうとしていましたが、依然として神を探し求めています。依然として聖書を読んでいたので。しかし、またしても、多くの人が、神を探し求めて聖書を読むのですが、意味が分からないことがよくあるのです。聖書を読もうとするのですが、聖書は、「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。」と教えています。聖書は、主がどのように神の言葉に対し、ルデヤの心を開かれたかを語っています。神の霊が、私たちの心を開いて下さらなければ、私たちの頭を柔軟にして下さらなければ、聖書を理解することができません。ですから、この人は、神を探し求めて、ばるばるエルサレムまで来て、宗教的経験に参加し、聖書の写本をもらい、帰途につきましたが、依然として空しさがありました。

この人は、イザヤ書の巻き物を読んでいました。そして、その箇所は、次の箇所だったのです。「ほぶり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかつた。彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことを、だれが話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」それで、エチオピア人はピリポに、「預言者は自分についてこう言っているのですか。それとも、誰かほかの人についてですか。」と尋ねました。ピリポは、同じ聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えました。ピリポはこの人に、聖書を理解する鍵を与えました。イエスこそが鍵なのです。イエスを見いだすことができないのであれば、真理を見いだすことはできません。というのも、そこにはイエスがおられるからです。興味深いのは、ピリポが同じ聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えたことです。その人が旧約聖書の中のどの聖句を読んでも関係ないのです。どの聖句から始めても、イエスのことを宣べ伝えることができます。イエスは、全体を通じておられるからです。直接的、間接的、雛形をとおして、影をとおして、イエスが、聖書のメッセージの核心なっています。イエスはパリサイ人らに、こう言われました。「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」預言の霊はイエスのあかしなのです（訳者注：黙示録19:10参照）。イエスは、「あなたがたは、いのちを見いだそうとして、聖書を調べています。しかし、聖書は、わたしのことを証言しているのです。あなたがたは、いのちを得るために

わたしのもとに来ようとはしません。」と言われました。イエスを発見するまでは、聖書は無意味な文章です。しかし、イエスを発見すると、聖書は生き生きとしてきます。あなたの心の中で、あなたの人生の中で、生きてくるのです。というのも、イエスが聖書を理解する鍵だからです。

イエスが死と復活の後、エマオへの途中で二人の弟子たちといっしょになられた記述を読むと、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされたとあります。その夜、エルサレムでほかの弟子たちとお会いになった時、イエスは、「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」と言われました。旧約聖書全部があります。詩篇と預言者とモーセの律法に分けられています。そこにあります。きょう読んだ詩篇は、イエスについての詩篇です。どのようにイエスの手足を引き裂いたか、彼らがイエスの着物を互いに分けあったが、一つの着物をくじ引きにしたか。彼らは、頭を振って、「彼（訳者注：英語では「神」）が助け出したらよい。彼に救い出させよ。」と言いました。これらはみな、イエスについて書かれたことです。聖書の中にイエスを見いだすことができないのであれば、あなたは鍵を見逃しているのです。

ピリポがナタナエルのところに来た時、ピリポはナタナエルに、「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレのイエスで（す）。」と言いました。モーセはイエスについて書きました。預言者たちもイエスについて書きました。詩篇もイエスについて書きました。イエスは、「巻き物の書に私のことが書いてあります。」と言われました。聖書がとても興味深い本であるのは、このゆえんです。イエスについて書かれているからです。イエスがお生まれになる何百年も前に、すべてのイエスについての話が書かれていたのです。無論、新約聖書は、事後についてです。旧約聖書の中で啓示された人を見ているのです。ですから、ピリポは、イエスを宣伝したのです。その人が読んでいた聖書の箇所には、こう書いてありました。「ほぶり場に連れて行かれる羊のように」と。旧約聖書で、人が罪を犯すと、自分の羊の群れから子羊を取り出して、祭司のところに持って行きました。聖書は、「罪を犯した者は、その者が死に」と教えています。死は、罪の罰でした。ですから、身代わりになるように子羊を持ってきました。祭司の前で、その人は子羊の頭に手を置き、自分の罪を告白しました。その考え方は、子羊の頭に手を置き、自分の罪を告白することにより、自分の罪意識と罪を子羊に移しているのです。罪が子羊に移されると、その子羊は自分の身代わりにほふられました。その子羊は、私のために、私の代わりに死ぬのです。その血が取られ、神への罪のためのいけにえとして、祭壇に捧げられました。さて、これは、ほふられた小羊としてのイエスのことが話されています。神の小羊、イエスは、私たちの罪のためにほふられました。聖書は、「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」と教えています。その聖書の箇所は、この人が読んでいた巻き物のもう少しいったところに書かれていました。あと数行のところに書かれていたのです。「彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ」は、その同じ巻き物のさらにもう少しいったところにありました。イエスは、ほふられた小羊として、私たちの罪のために死なれたのです。

ペテロは、「私たちが、むなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもないほふられた小羊のようなキリストの、尊い血によるのです。」言いました。ヨハネの黙示録4章で（訳者注:5章のことか）、ヨハネが神の御座と神の右の手に地の購入証書があるのを見ました。そこで、御使いが大声で、「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。」と言っているのを見ましたが、ふさわ

しい者がだれも見つかりませんでした。誰も、自分を贖うことができませんでした。誰も、自分の罪の罰を支払うことができませんでした。ヨハネは、「巻き物を開いて、地球を贖うのにふさわしい者がだれも見つからなかったので、私は激しくないでいた。」と言いました。しかし、長老がヨハネに言いました。「泣いてはいけません。見なさい。ユダ族から出たししが勝利を得たので、その巻き物を開いて、封印を解くことができます。」そして、ヨハネは、「振り向くと、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。」と言いました。小羊が右の手から巻き物を受け取ると、同時に天で歌が始まりました。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、言語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」ですから、イザヤは、イエスの誕生のほぼ7百年前に、これらの言葉を書いたのです。「ほふり場に連れて行かれる羊のように」と。

そして、イザヤはこう付け加えています。「また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった。」さて、イエスがピラトの前に立たれた時、ユダヤ人はイエスに対し様々な過激な誤った言いがかりをつけました。とんでもない言いがかりでした。根拠がないのは明白でした。ピラトは、「あなたについて彼らが言っていることが聞こえないのですか。あなたは自分について何も言うことがないのですか。」と言いました。イエスは、お答えになりませんでした。イエスが訴えに対して何もお答えにならうとされなかったのも、それにはピラトも驚きました。「それは、変だ。おかしい。わたしはやってない。」とおっしゃるのではなく、「また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった。」のです。

「彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。」イエスが経験された卑しめを想像できますか。神の子だったのです。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」後に、イエスは、「今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」と祈られることとなります。しかし、イエスは栄光のうちにその場を去られました。イエスは、使命をもってこの地上に来られました。父が、世のための罪のいけにえとするために、お遣わしになったのです。そして、イエスは、ひどい卑しめを経験されました。あざけられ、ばかにされ、十字架にかかるという卑しめでした。「イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍ばれました。」だれもそのような卑しめを受けたくありません。しかし、あなたと私のために、私たちの罪を赦す喜びのゆえに、イエスはそのような卑しめを忍んで下さいました。そして、聖書はこうした卑しめにおいて、「初めから神とともにあったもの、私たちが聞いたもの、目で見たもの、また手でさわったもの――この方は肉となられ、私たちはこの方とともにいた。（訳者注：1ヨハネ1:1の言い換え）」と述べているのです。また、聖書はイエスについて、「神とともにおられたのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を卑しくし、自分を無にして、人となって、仕える者ようになり、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。（訳者注：ペリピ2:6-8の言い換え）」、「彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。」イエスが罪に定められたことに、イエスの死に正義なんか全くありません。実にひどい正義のはきちがいでした。罪のない人が、殺されました。神は、あなたがイエスに罪がなかったことをきちんと知るようになるように、注意を払われます。ユダは、イエスに不利な状況になっているのを見て、イエスを裏切って受け取ったお金を祭司の所に持っていきました。そして、「さあ、返すので受け取りなさい。罪のない人の血を売ったりして。」と言いました。ユダは、イエスが罪のない人であることの証人です。ピ

ラトがイエスをむちで打ち、過酷な取り調べをした後、出てきて、「私はこの人を取り調べましたが、この人には何の罪も見つからない。」と言いました。これは、ピラトの証言です。ピラトの妻は、裁判の途中で、人をやって言わせました。「あの正しい人にはかわり合わないでください。」イエスが正しい人であると認めています。最後に十字架上で、強盗が、「だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」と言いました。イエスの証人です。しかしながら、「彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。」のです。正義はありませんでした。それは、世界がこれまでに見た最大の不正義の行為の一つでした。イエスには罪がありませんでした。聖書は、「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。」と教えています。さて聖書は、「罪を犯した者は、その者が死に」、「罪から来る報酬は死です。」と教えています。しかし、イエスは、罪を犯されませんでした。従って、イエスは、私たちのように、自分の罪のために死なれたのではないのです。イエスは、私たちの罪のために死んで下さったのです。神は、私たちのすべての咎を彼に負わせられました。聖書は、「彼のいのちは地上から取り去られたのである。」と述べています。パウロは、ガラテヤ人（訳者注：コリント人のことか）に、「キリストは、私たちの罪のために死なれました。（訳者注：コリント第一15:3に基づく）」と書きました。イエスは、「人の子が来たのも、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」と言われました。

さて、ピリポがこの人にイエスを宣べ伝えたことによって、すばらしい結果がありました。それはこの人の目が開かれたことです。馬車で道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、その人はピリポの方を向いて、「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」と言いました。ピリポは、「もしあなたが心底から信じるならば、よいのです。」と言いました。すると、彼は答えて言った。「私は、イエス・キリストが神の御子であると信じます。」聖書の中にイエス・キリストを見いだすことは、非常に重要です。私たちにイエス・キリストへの信仰をもたらしてくれるからです。そのことは、この人に、イエス・キリストへの信仰をもたらしました。聖書は、「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、・・・みことばによるのです。」と教えています。聖書の中でイエス・キリストを見いだすと、あなたの心の中にイエスについての信仰を起こさせます。この人は、「私は、イエス・キリストが神の御子であると信じます。」と言いました。ちょっと面白いことがあります。この人が、「私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」と言ったとき、ピリポは、「えっと、堅信志願者クラスに出席しないとイケませんね。それから申し込みをすれば、あなたが適任者かどうか決めさせていただきます・・・」などとは言いませんでした。「もしあなたが心底から信じるならば、よいのです。」と言ったのです。福音は、とても単純なのです。私たちは、福音をととても複雑にしているのは、とても悲しいことです。ピリポが、「もしあなたが信じるならば、よいのです。」と言ったようにではなく、私たちはたくさんの曲芸用の輪を置いて、人々にそれを飛んでくぐらせようとするのは、とても悲しいことです。真理は、それなのです。至極、単純です。あなたがイエス・キリストを信じることで、神はすべての罪からあなたを解放して下さいます。神はあなたを罪がないと見なして下さいます。イエス・キリストを信じる単純な信仰によって、神はあなたを罪がないと判断して下さいます。

神のみことばが教えられ、宣べ伝えられる時に、人はイエス・キリストを信じる救いの信仰にいれられます。パウロは、コリント人に、「私たちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝えます。私たち自身は、イエスのために、あなたがたに仕えるしもべなのです。」と言いました。パウロは言いました。「十字架のことは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」今

日、聖書から宣べ伝えがたくさんあります。人々は、自分の議論を証明するために聖書を使うことがよくあります。聖書の中にある知恵をたくさん取って、いかに賢明なことわざであるか、いかにすばらしい人生哲学であるかと言って、それらを驚くべき心理学、人と上手につきあう方法であるとか、積極的態を持つとか見なし、聖書からいろいろなものを取り出して宣べ伝えますが、真に宣べ伝えることは、イエスを宣べ伝える時です。ピリポは、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えました。ここに宣べ伝えることの真理があります。神のみことばをとって、そこから神が私たちに示して下さったことを示すのです。すなわち、神の愛を示し、その愛を明らかにするために御子イエスを遣わされて、私たちの罪のいけにえの小羊として来られたことを示し、私たちが、イエスを信じることにより、自分の罪のために死ぬのではなく、神のいのち、永遠のいのち、永続的ないのちを経験することができることを示すのです。あなたが聖書をお読みになる時、聖霊があなたにイエスを示して下さるように祈りましょう。

使徒行伝9章(2/11/96)

使徒行伝9章22節(Acts 9:22)

「イエスがメシヤ」#8607

交読文：詩篇8篇

聖書通読の学びをしていますが、今週はもちろん使徒行伝の9章まで来ましたね。パウロの改心です。パウロの改心が突然、根底を覆されたようにして起こったことに私たちは気づかされますが、一夜にして完全に転向しました。キリスト教を滅ぼすためにダマスコのところまで来ていたのですが、強靱なキリスト者になってダマスコを去りました。イエスの御名を呼ぶ人たちを牢に入れるために来ていたのですが、イエスの御名を呼びながら去りました。彼の体験したことは、聖霊の力による根底を覆される変化だったのです。突如として、聖書について受けた教育すべてに、光が与えられたのです。パウロは、ヘブライ大学で徹底的に聖書についての教育を受けました。彼は、当時最も著名な律法学者の一人であったガマリエルの指導、個人教授のもとで教育を受けました。ガマリエルは、パウロの唯一の問題は、彼が読む巻き物を十分に与えることだと語りました。信じられないほどの読書欲がある、すぐれた学生だと。パウロは聖書を学び、習得していました。いったん聖霊によって光を受けると、聖書はイエスを証言しており、イエスが実にメシヤであることがただちに分かりました。それで、20節を読みますと、改心してアナニヤによってバプテスマを受けた後、「ただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた。これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。『この人はエルサレムで、この御名を呼ぶ者たちを滅ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではないのですか。』しかし、サウロはますます力を増し、イエスがキリスト(メシヤ)であることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうるたえさせた。」パウロは、聖書によってイエスがメシヤであることを彼らに証明することができたのです。それから、パウロは世界中を歩き巡り、イエスがメシヤである事実をユダヤ人の諸会堂で宣べ伝えました。使徒行伝17章3節で、パウロが、テサロニケに来たとき、メシヤは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを断言し、彼らに宣べ伝えているこのイエスこそ、メシヤであることを言いました。パウロは彼らに聖書をメシヤの預言として見せました。メシヤが死んで、よみがえられることを見せて、イエスがメシヤであることを証明しました。使徒行伝18章5節で、コリントに来たとき、ユダヤ人たちにイエスがメシヤであることを証言しました。18章28節で、アカヤに来たとき、兄弟を助けて、聖書を見せて、ユダヤ人にイエスがメシヤであることを公然と証言しました。使徒行伝28章で、彼がローマに来たとき、そこにいるユダヤ人たちを呼び集めて、朝から晩まで神の国を説き明かして、モーセの律法と預言者たちの両方の書によってイエスのことについて説得しました。パウロは、イエスがメシヤであることを聖書から証明することに、自分の生涯を捧げました。

このことは、聖書から容易に証明できる事項です。旧約聖書の聖書を用いれば、そこからイエスがメシヤであることを証明することができます。イエスが初めて来られたときに成就された、メシヤについてあらゆる詳細を伝える300以上の預言があるからです。イエスの生誕、生涯、死、復活についての詳細です。イエスが成就されたメシヤについての300以上の預言の数々です。マタイがイエスの話を語った時、「預言者、イザヤ、エレミヤなどを通して、・・・と言われた事が成就するためであった。」という言い回しをよく使いました。イエスの話の初めから終わりまでを通して、イエスが預言を成就されていたことを示しました。マタイの福音書で、イエスが聖書を成就されているのをマタイが語っている箇所にするしをつけてみたいかもしれませんね。マタイの福音書1章22節です。

イエスの処女降誕を指して言っていますが、「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。『見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）」ですから、イエスの処女降誕は、イザヤの預言の成就でした。イエスがまだ幼子であったときに、エジプトに逃れたことについて、マタイはヨセフのことを書いています。「そこで、ヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、『わたしがエジプトから、わたしの子を呼び出した。』と言われた事が成就するためであった。」ヘロデが、ベツレヘムにいる二歳以下の幼子を殺すよう命じたとき、マタイは、2章17節で、こう言っています。「そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。『ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子のために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ。』ヘロデが死んで、彼らがナザレという町に引っ越したことについて、マタイは、「そして、ナザレという町に行き住んだ。これは預言者たちを通して、『この方はナザレ人と呼ばれる。』と言われた事が成就するためであった。」と書いています。今のは、2章23節です。マタイの福音書4章13節で、イエスが公生涯において、拠点をガリラヤ湖のほとりのカペナウムに移されたことについてマタイはこう語っています。「そしてナザレを去って、カペナウムに来て住まわれた。ゼブルンとナフタリとの境にある、湖のほとりの町である。これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、『ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。暗やみの中に座っていた民は偉大な光を見、死の地と死の影にすわっていた人々に、光が上った。』」マタイの福音書8章17節では、多くの人々がイエスのところに来て、イエスがみなをいやされていたことについて、マタイは、「これは、預言者イザヤを通して言われた事が成就するためであった。『彼が私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った。』」と書いています。パリサイ人が、イエスを滅ぼそうかと相談したとき、マタイは私たちにこう語っています。「イエスは・・・そこを立ち去られた。すると多くの人がついて来たので、彼らをみないやし、」そして、12章17節で、「これは、預言者イザヤを通して言われた事が成就するためであった。『これぞ、わたしの選んだわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしの愛する者。わたしは彼の上にわたしの霊を置き、彼は異邦人に公義を宣べる。争うこともなく、叫ぶこともせず、大路でその声を聞く者もない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない、公義を勝利に導くまでは。異邦人は彼の名に望みをかける。』」とあります。ですから、私たちも実はこの預言の一部になっています。私たち異邦人は、イエスにより頼む者になったのです。マタイの福音書13章で、イエスがたとえで教えはじめられたとき、マタイは、35節でこう言っています。「これは、預言者を通して言われた事が成就するためであった。『わたしはたとえ話をもって口を開き、世の初めから隠されていることどもを物語ろう。』」イエスがろばに乗ってエルサレムに入られるとき、マタイは21章4節で、こう言っています。「これは、預言者を通して言われた事が成就するために起こったのである。『シオンの娘に伝えなさい。「見よ、あなたの王が、あなたのところにお見えになる。柔和で、ろばの背に乗って、それも、荷物を運ぶろばの子に乗って。』」」イエスがゲッセマネの園で捕らえられたとき、イエスを捕らえている者たちに対してペテロが剣を抜いて振りましたが、マタイは、26章52節でこう言っています。「そのとき、イエスは彼に言われた。『剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとでも思うのですか。だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましょう。』」イエスは、ご自分の死について聖書が実現しなければなら

ないことを意識して来られました。イエスは、もしわたしが自分を守って、守ってくれるように御使いを呼んだら、どうして聖書が実現されましようか、とおっしゃているのです。27章35節で、兵士がイエスの着物を取ってくじを引きましたが、マタイは、27章35節で、次のように伝えています。「こうして、イエスを十字架につけてから、彼らはくじを引いて、イエスの着物を分け（た。これは、預言者を通して言われた事が成就するためであった。『彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。』）（訳者注：括弧内は日本語の聖書にはなく、欽定訳から訳者が翻訳したもの。詩篇22:18を参照しました。）」さて、マタイは、イエスがご自分の生誕、生涯、死、復活において実現された預言のいくつかを引用したにすぎません。イエスの行なわれたこと、イエスの言われたことのほとんどすべては、旧約聖書の預言の成就だったのです。300以上の予言がイエスによって成就されたのです。

神は、とても明確なメシヤの合成写真を展開されました。数百年間、一千年間の時期にわたって、神は、次から次へと預言者に語られて、メシヤの一瞥を、メシヤの、メシヤの働き、ミニストリーの側面を与えられたのです。旧約聖書が完成される頃までには、メシヤのかなりはっきりした完成した像が与えられました。それで、メシヤが来られたときは、この方がどのような方であるかを間違ふことはありえなかったのです。聖書をすべて合成して、これがメシヤである、と分かることができます。メシヤは、ベツレヘムで生まれなければなりません。ベツレヘムで生まれた人はたくさんいますが、このことは合成されたものの一つの側面でしかありません。メシヤがお生まれになったときは、幼子が殺されるはずでした。幼子が殺されることは他にもありましたが、これも別の側面です。しだいに狭められていって、一人の人だけが、その像に当てはまるどころまで来るのです。一人の人が300以上の予言を実現する確立は、まさに天文学的です。イエスがこれら300の予言を偶然によって実現されたなんていうことはできませんね。陰謀だったんだ、ということではできるかもしれません。数年前に、「過越の陰謀（訳者注:Passover Plot）」という本が出ました。その著者は、イエスが、その預言を知っておられたので、故意にその預言を実現された、と言っています。例えば、ろばに乗ってエルサレムに入られる預言を知っておられたので、ろばにのれるように、弟子たちにろばを持ってくるように言いつけた、と言うわけです。そうですね、その通りです。このことは、世の初めから神の陰謀によって企てられたことです。神が御子を世に遣わし、罪人をこよなく愛されていることを示すことを企てられていました。けれども、イエスがすべてのことについて陰謀を企てられたと言うのであれば、イエスが処女から生まれたことを説明しきるのは大変だと思います。マリヤの胎におられたとき、ミカ書の預言を成就するために、マリヤとヨセフをベツレヘムまで連れて行って、ベツレヘムで生まれさせるようにするのは、どう説明したらいいのでしょうか。まだイエスが幼子であったとき、「わたしがエジプトから、わたしの子を呼び出した。」と実現するために、どうやってヨセフをエジプトに連れていくことができたのでしょうか。まだ、おそらく5歳であられたとき、「この方はナザレ人と呼ばれる」ために、どうやって両親をナザレに戻るようにさせたのでしょうか。この企てという考えができたとしても、どこかでぼろが出てしまいます。イエスがどうやってご自分の着物を、兵士にくじ引きさせることがおできになったのでしょうか。ですから、そのうちぼろが出てしまうのです。そうです、これらは成就しなければならなくて、そうせず、時には、イエスは故意に実現されたのです。聖書が言っていることを知っておられて、聖書が成就するために、「わたしは渴く。」と言われたのです。これが預言の一部であることはご存じでした。そうです、故意に行なわれたのですが、多くの場合、幼子なので支配できないものを、実に成就されたのです。

ですから、パウロは、これらの預言をすべて使って、ユダヤ人に、「ほら、この方がメ

シヤでなければならないのだ。」と言って、証明したのです。それを証明するために預言と聖書を用いたのです。預言が証明しているものは、無論まず最初に、イエスが実に、約束された神の子メシヤであることです。二番目にパウロが証明したのは、神は、時間の連続体の外に実際に存在されていることです。神は、「わたしが神である。ほかにはいない。わたしは、終りの事を初めから知り、まだなされていな事を告げ（訳者注：イザヤ46:9,10を参照）」とされています。ですから、このことによって、聖書が、時間の連続体の外に存在されている永遠の神によって、靈感を受けていることを証明しています。時間の外におられるので、初めから終りの事をご存じなのです。これを証明するために、終りの事を告げられるのです。地で起こる出来事を、実際に起こる前に告げられて、実際に起こると、神が前もって知っておられたという証拠が出来るのです。イエスは弟子に次のように言われました。「わたしは、そのことの起こる前にあなたがたに話しました。それが起こったときに、あなたがたが信じるためです。」神も、同じことをされました。「わたしが神である。ほかにはいない。わたしは、終りの事をまだなされていないうちに告げた。」と。そして、聖書全体に渡って何回も行なわれ、私たちには、成就されたすばらしい聖書の預言があるのです。そのほとんどがイエス・キリストが中心で、300以上がイエスにあって100%正確に成就したのです。これによって、聖書が靈感を受けた神のみことばであることを証明しています。

ダビデは、死ぬ間際に、「主の霊は、私を通して語り、そのことばは、私の舌の上にある。」と言いました。ダビデは、ここで、私を通して語られたのは主の霊である、と告白しているのです。私ではなくて、神の靈感によるものであることを知っていました。イエスは、ダビデの言ったことを確認されました。マルコ12章36節です。「ダビデ自身、聖霊によって、こう言っています。『主は私の主に言われた。「わたしがあなたの敵をあなたの足の下に従わせるまでは、わたしの右の座に着いていなさい。』」イエスは、ダビデが聖霊によって言っていることを認められたのです。後にペテロは、使徒行伝でこのことを認めました。「聖霊がダビデの口を通して預言された」と言って、イエスについての詩篇を引用しています（訳者注：ユダについての詩篇のことか）。イエスは、聖書が神のみことばであることを認められました。マタイの福音書22章32-33節です（訳者注:31-32節のことか）。イエスは死人の復活について触れられてますが、「神があなたがたに語られた事を、あなたがたは読んだことがないのですか。『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』とあります。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。」と言われました。けれども、イエスは、聖書が神の靈感によるものであると理解されて、「神があなたがたに語られた事を」と言われたのです。パウロは、預言者イザヤが聖霊によって語ったことを告げました。使徒行伝28章25節で、次のように言いました。「こうして、彼らは、お互いの意見が一致せずに帰りかけたので、パウロは一言、次のように言った。『聖霊が預言者イザヤを通してあなたがたの先祖に語られたことは、まさにそのとおりでした。』」ペテロは、聖書の靈感を確認しています。ペテロの第二の手紙で、こう言っています。「私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになったとき、おごそかな、栄光の神から、こういう御声がかかりました。『これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。』私たちは聖なる山で主イエスとともにいたので、天からかかったこの御声を、自分自身で聞いたのです。」私は、目撃者です。私は見、聞いたのです。けれども、ペテロは言いました。「また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。」私たちには、聖書があります。私たちは目撃者で、見たし聞いたけれども、それより強力なものがあります。ペテロは言いまし

た。「私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。それには何よりも次のことを知っていなければなりません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意思によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったからです。」聖書は、神によって靈感を受けたのです。神は、人に聖書を通して語られます。神は、人に、神の御子について、御子を世に遣わされることを語られました。パウロは、聖書をもって、イエスがメシヤであることを証明したのです。

このことは、イエスの死が、歴史のきまぐれでなかったことを示しています。これは、神の大きな愛を人に現すための、予定された出来事だったのです。ペテロは、「あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。」と言いました。神は、死に渡すために御子を世に遣わされました。それは、神が私たちの罪を赦すことのできる義の基を備えられるためです。ユダヤ人たちが自身の聖書によって、パウロはイエスがメシヤであることを証明することができました。

さて、証明されてから、彼らのうちの多くの者が信じました。証拠を見て、それを受け入れて、イエスがメシヤであることを信じました。他の者たちは信じませんでした。証拠を見なかったからではありません。証拠があったにもかかわらず、信じないことを選んだのです。自分の知性に正直になれば、約1400年かけて書かれたイエスについての旧約聖書の予言を見て、1400年以上にも渡ってひとりの人のことがこんなにも多く書かれているのに、その人が来られて300のメシヤの要件を満たしてしまった、と言うことは不可能であることを知的には認めなければいけません。このことが偶然に起こる要素はありません。したがって、「私は、それには知的に問題を感じる。」というのは、内容が貧弱です。もし知的に困難なのであれば、そのことを勉強していないからです。旧約聖書から、イエスがメシヤであることを証明することは可能です。これを信じなかった人たちは、もし信じたら変わらなければいけなかったのに、信じないことを選んだのです。自分の生活スタイルを変えたくなかったのです。これは、イエスを信じることによって要求されるからです。罪のささげものとして動物を祭司に持っていくことをする必要はなくなりました。けれども、儀式に満足させる何かがあったので、変わりたくなかったのです。したがって、変化を伴うので、信じなかったのです。

今日、自分の生活を変えなければいけないからと言って、イエスを信じたくない人が多くいます。もしかしたら、今日、ここにいる人の中にもいるかもしれません。商売をしていて、完全にまっとうなものではないのですが、成功しています。お金をたくさん儲けていますが、現実には、詐欺をして、ごまかしているのです。イエスを信じるなら、それを止めなければいけないことが分かっています。でも、不誠実になって賄うことのできた贅沢に慣れてきたので、不誠実によって得ることのできたものを諦めたくないのです。知的に困難があるよ、と言うかもしれませんが、いいえ、困難はありません、罪の問題があるのです。それで、イエスのところに行きたくないのです。麻薬を売っている人がいるかもしれません。麻薬を売ってたくさんお金をたくさん儲けているかもしれません。イエスのところに来れば、その商売を止めなければいけないことが分かっています。他には商売がなく、何をすればいいかわからなくなります。失業をしたくないとか、あなたの生活スタイルを変えなければいけないので、イエスを信じたくないのです。そして、信じようとしません。不倫関係を持っている人がいるかもしれません。それを諦めたくないのです。イエスを信じれば、諦めなければいけないことが分かっています。したがって、その関係にとどまりたいのです。ですから、そうした生活の仕方を持続

ていたいで、イエスのところに行かないのです。イエスは、次のように言われました。「わたしが世に来たのは、神がわたしを世に遣わされたのは、世をさばくためではない。わたしによって世が救われるためである。わたしを信じればさばかれない。しかし、あなたがたはわたしを信じなかったので、すでにさばかれています。そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、あなたがたは光よりもやみを愛したので、光のほうに来ない。その行ないが悪かったからである。（訳者注：ヨハネ3:17-20の言い換え）」ですから、あなたに問題があるとイエスは言われているのです。あなたの心に悪があるから、イエスのところに行かないのです。

けれども、「罪は楽しみをもたらす」と承認して認めると、人々を虜にする論理の虚偽を頻繁に見るようになります。聖書は、モーセのことを、「はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。」と言っています。なぜなら、モーセは、この道の最後の結末を見ることができたからです。私たちがはかない罪の楽しみを認めると、「そうさ、罪は興奮をもたらさうるものだ。楽しみをもたらす。」と考えるのです。人は、ただちに論理の虚偽を作り上げて、「だから、正しいことなんてつまらないよ。陰気で、抑圧されるものだからな。医者が望みがないと言って、生命維持装置の電源切るまで、そんなのほしくないだろう。そうしたら、主の御名を呼べば、その時には、安全をきっしておきたいだろう。だけど、生きがいにするものじゃないぜ。」と言うのです。いえ、間違いですよ！虚偽です。イエス・キリストに仕える楽しみは、主とともに交わる楽しみは、自分の生涯の中で、また生涯を通して働かれる主を見ることは、この世には、こんな楽しいことはありません。罪の楽しみははかないのです。すぐに過ぎ去って、続かないのです。多くの場合、一時の楽しみが、生涯の悔やみと痛みにつながるのです。けれども、イエスとともに歩む楽しみは、日々ますます強烈になります。イエスとともに歩むことが長ければ長いほど、それだけ喜びと楽しみが増します。私自身告白しなければなりません、酔っ払って得る楽しみを理解することができません。金曜日には、飲みに行って、酔っ払うほど飲むぞと言うのですが、（回路の2電極間の）ギャップが働かなくなるほど（訳者注：「頭が働かなくなるほど」という意味だと思いますが、チャックは車をいじるのが趣味なので、自動車用語が使われているのではと思います。）頭と脳みそをアルコール漬けにして、愚かなことをしはじめるのですが、それが、なんで楽しみなのか私には不可解です。自分が笑い者となり、愚かなことを言いはじめ、声のボリュームも上がり、他の人はそれを見てクスクス笑い、「こいつかなり今晚は、出来上がっちゃってるぜ。」と言います。電柱と素手で殴りあいをすることに楽しみを見つけることはできません。友達がよくしてくれて家に連れて行ってくれますが、朝起きて、指関節がみな血だらけで、ひどくガンガン頭痛がするまで、何が起きたのかわからないのです。「やあ、昨夜はいい時を過ごしたなあ。ああ、とっても楽しかった。ああ、でも、頭が、ウー、やられちゃった。」面白いですか？楽しいですか？教えてください。私の持っている楽しみは、苦々しい後味を残すことはありません。この楽しみは減りません。これは、喜びで、残るものです。

イエスが実際メシヤであることの証拠、聖書が神が靈感されたことばである証拠は、十分あります。神は、あなたに、いのちの計画を立ててくださいました。豊かないのちの計画です。イエスは、取り去るために来られたのではなくて、与えるために来られたのです。こう言われました。「わたしが来たのは、あなたがいのちを得、それを豊かに持つためです。（訳者注：ヨハネ10:10の言い換え。）」単なるいのちだけではなく、豊かないのちなのです。これは、あなたの選択です。イエスがメシヤであることを信じることを、選択するのです。信じることによって、豊かないのち入ります。あるいは、信じないことを選んで、満足を得て充足をいつか得られるとあなたが希望しているけれども、結局はあな

たを滅ぼすことになるものを求め、追及するのです。証拠はあります。信じるか信じないかは、あなたにゆだねられています。けれども、あなたが悪にしがみつきたいので、証拠を拒否し、イエスを信じないのであれば、あなたが神の御前に立ってさばかれるときに、神がさばくさばきは、十分に正当性があります。神が、あなたの罪に刑を言い渡されるとき、そのさばきは完全に正当化されます。天からは、「あなたのさばきは、聖く、正しいのです。」という声があります。「これが正しいのだ」とあなたは告白せざるをえません。あなたは、神が与えられた罪の赦しを受け取りたくなかったのです。あなたは、あなたの罪のいけにえとしてイエスをあなたのメシヤであると受け入れたくなかったのです。神は、私たちの咎をイエスに置かれたのですが、あなたはそれを受け入れたくなかったのです。神の御前に立って、答えのない自分の罪の申し開きをしなければなりません。あなたは、罪あるものとされ、罪に定められます。しかし、キリスト・イエスにある者が、罪に定められることはありません。キリストが、罪の定めを負って下さったのです。キリストが、私の罪の罰を負って下さったのです。したがって、私が神の御前に立つときは、キリストによって、罪を免除され、義と認められるのです。なぜなら、私は、イエスがメシヤ、神の子、世の救い主と信じているからです。

使徒行伝10章(2/18/96)
使徒行伝10章34-36節(Acts10:34-36)
「キリストこそ私たちの平和」#8608
交読文：詩篇85篇

私たちは聖書通読を続けていますが、使徒行伝10章まで来ました。繰り返しますが、みなさんが私たちといっしょに聖書を通読なさるように切に願いますし、力づけますし、勧めますし、何でも必要なことならしましょう。私たちの読み進めているペースは、小学一年生でもついてこれるペースです。ですから、読む時間がないとは言わないで下さい。みんなそのくらいの読む時間はあります。続けていると、聖書全体を通読できます。ですから、いつでも始められます。それがこの学びのよい所です。何時でも始められ、私たちが毎週、直接聖書から神のみことばを学んでいますので、私たちといっしょに通読ができます。

使徒行伝10章に来ましたが、そこには、神が人種的偏見の壁を打ちこわされる話を見ることができます。異邦人が栄光に満ちた神の恵みとイエス・キリストの働きを受け入れるようにと、神は門戸を開かれておられます。ペテロがカイザリヤの町にあるローマの百人隊長のコルネリオの家に行くように言われた話です。コルネリオは信仰の厚い人で、祈り、神を求めていた人でした。彼が神を求めていた結果、神はご自分を現わされました。本当に神を求めている人に、神はご自分をその人に現わされると、私は信じます。それで、神は御使いを通してコルネリオに話され、ヨッパの町の皮なめしのシモンの家にしもべを遣わすように導かれました。次のように言われました。「ペテロとも呼ばれている、シモンという人がいて、その家に泊まっています。彼を招きなさい。彼は、いのちのことばを話すでしょう。(訳者注：使徒10:5、6参照)」それで、彼はしもべをヨッパに遣わしました。その間に、ヨッパにおいて、ペテロは皮なめしのシモンの海の家に泊まっていますが、お昼時で、婦人が食事をつくっていました。それで、食事が用意されている間に、ペテロは祈りをするために屋上に上りました。彼は、また、祈っている時に幻を見ました。天から大きな敷布のようなものが降りて来ました。その中には、あらゆる種類の動物がいました。多分、豚も一匹や二匹はいたことでしょう。主は、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい。」と言われましたが、「主よ。それはできません。私はまだ一度も、適法にしてないものを食べたことはありません。」とペテロは言いました。主は、「わたし(神)がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」と言われました。こんなことが三回ありました。ペテロは、これはいったいどういうことだろうと、思い惑っていました。主が言われました。「人たちが、門口であなたをたずねて来ています。ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。(訳者注：使徒10:19,20参照)」そこでペテロは、門口まで降りて行くと、コルネリオに遣わされた人たちがいました。彼らは、ペテロをコルネリオの家に来るように招きました。コルネリオの見た幻のことを話したのです。そこでペテロは、自分が持っていた人種的偏見の壁を打ちこわし始めたのです。

初代教会では、異邦人が救われることができるとは信じていませんでした。これが、最初に教会が直面しなければならなかった問題の一つでした。一番最初に教会会議が召集されたのは、異邦人が救われることができるのか、あるいは異邦人は救われるためにユダヤ人にならなければならないのか、という問題を取り扱うために召集されたのです。実際、異邦人は救われることはできない、救われたいならユダヤ人にならなければいけない、と教えている人たちがいました。その救いは、ユダヤ人のためだけのものでした。従って、割礼を受け、モーセの律法を守らないのであれば、救われることはできないと言う人がいました。それは、初代教会で分裂の原因になり、一番最初に教会会議が召集された原因で

した。異邦人が救われることができるのかどうかの問題を解決するためにエルサレムにおいて召集されました。さて、ユダヤ人としてのペテロの心の中に、主が働いておられました。ユダヤ人の中では、異邦人は汚れているという言い伝えがあったのです。もし、異邦人と食事をしたり、異邦人を自分の家に入れたり、異邦人の家に入ったりすると、その人は汚れた者とされていました。実際、パリサイ人らは、町を歩く時、長い衣が衣ずれしないようにそれををしっかり握りました。もし衣ずれして異邦人に触れでもしたら、水浴やその他の儀式をして自分をきよめなければならなかったからです。長い衣が異邦人に触れてしまったからです。それが、言い伝えによって人々が持っていた気持ちでした。このことは、聖書的ではありませんでした。彼らの聖書は、神はかたよったことをなさない、えこひいきをされない、と教えていました。しかし、聖書よりも言い伝えの方が力がありました。これは悲劇ですが、よくあることです。それで、ペテロがコルネリオの家に来て、コルネリオが、「さあ、お入り下さい。」と言った時、ペテロは、大きく固唾を飲んだに違いありません。「ハァー（訳者注：溜め息のような音）。ご承知のとおり、ユダヤ人が外国人を訪問したりするのは、律法にかなわないことです。ところが、神は私に、神がきよめた物を、きよくないと言ってはならないとおっしゃいました。（訳者注：使徒10:28参照）」と言いましたが、ペテロにとっては大変なことでした。

数年前、アリゾナ州のフィニックスのある若い男性がここに電話をかけてきたことがありました。その人は、私たちのラジオ放送を聞いていました。セブンス・デー・アドベント教会の牧師でした。しかし、ローマ人への手紙の学びを通し、神の恵みに対して、神がその人の目を開けて下さったのです。それで、その人は、教会の会衆に、もはや自分は安息日は守らない、自分は自由になった、日曜日に礼拝を始める、それをカルバリーチャーチと名付け、いっしょにやりたい人は、フィニックスで教会を始めますからと、発表しました。この人は私に電話をしてきて、「私は、ここで教会を始めました。あなたのラジオ放送がきっかけで、・・・。」と話をしてくれました。「あなたにお話があるのですが。」と。私は、「たまたま私は来週アリゾナに行く予定があります。アリゾナの牧師と数日ミーティングがあります。コットンウッドという地域の近くです。」と言いました。そして、その人をミーティングに招いて、そこでいっしょに会おうと言いました。その会議に行きました。それは、バーディー川の近くの、すてきなこじんまりした所に会議の場所があり、いつも炭焼きのステーキやらを食べるのですが、そこではよい食事を出してくれます。（爆笑）それで、昼食をとっていました。炭焼きのハンバーガーが焼かれたので、私は昼食のため、マークの横に座りました。マークは、自分もカルバリー・チャペルになりたい、関係をもちたい、主がもはや私たちは律法の下にはいないことを示して下さい、と話してくれました。私は、「あのね、マーク、面白いですね。かつて、数年前、フレスノにいう人が、あなたと似たような状況だったのです。セブンス・デー・アドベントの背景をもった人で、キリストにおいて、律法のおきてから私たちに自由の真理を見て、その人もカルバリー・チャペルになりたいと言いましたが、彼にはまだこだわりがあったのです。彼は依然として肉食主義者で、他にもこだわりがあったので大変でした。」と言いました。その時には、私は自分のサンドイッチ、というかハンバーガーをかじり始めていました。（爆笑）彼は、自分のハンバーガーを持ち上げ、そして、一口かじりました。後で彼は、「あれは、生まれて初めて食べた肉でした。」と言ってくれました。彼は、家に帰り、（奥さんに向かって）「おまえ、私たちは本当に自由になったんだよ。」と言いました。（大爆笑）彼がハンバーガーを一口かじる前に、大きく固唾を飲んだのではないかと私は想像するのです。大変です。自分の伝統に、背景に、しきたりに逆らうのですから。大変です。ペテロが異邦人の家に入るときに、「私は一度もしたことがない。」と言いましたが、神は、「わたしがきよめた物を、きよくないと言ってはならな

い。」とおっしゃいました。

それで、コルネリオが人を遣わすきっかけとなった幻を説明し始めると、ペテロは人々に言いました。34節ですが、「これで私は、はっきりわかりました。神はかたよったことをなさない。(訳者注：英語は、God is no respecter of persons.)」と。私にはわかる、と。神は、明らかにこの人に、敬虔な、祈る、神を求める人に語られたのです。神は、明らかにこの人に語られたのです。しかし、神は先にモーセにお語りになりました。申命記10章17節で、神は、「あなたがたの神、主は、神の神、主の主、偉大で、力あり、恐ろしい神。かたよって愛することなく(訳者注：英語は、regards not persons)・・・」とおっしゃいました。ヨシャパテ王は、国民が神に背き苦しんでいるために靈的改革を行ないましたが、その時に、自分が位に即くと、靈的改革を開始して新しい人を民のさばきつかさに任命し、さばきつかさに指示を与えました。歴代誌第二19章7節です。「今、主への恐れがあなたがたにあるように。忠実に行ないなさい。私たちの神、主には、不正も、えこひいきもないからです。(訳者注：英語は、nor respect of persons)」神は、えこひいきをなさるような方ではありません。ヨブ記の中に、年寄りがヨブの状況を議論して話しているのを聞いている若い人が出て来ます。ヨブの友人は、ヨブが前代未聞のひどい偽善者だと確信していました。神が何かひどい恐ろしい罪を犯しているのだから、ヨブが苦しんでいるように誰も苦しむはずがないと。その人たちは、罪が見えず、どのような罪が分かりませんでした。しかし、ヨブに罪があると確信していたので、ヨブが上手く隠しているのだからひどい偽善者にちがいないと思っていました。ヨブは、罪のないことを主張し続けました。「私は、何も悪いことはしていない。私の心は主の前にきよい。私は神を求めている。」と言いました。しかし、彼らは、「おかしい。そんなはずはない。自分の苦しみを見るがよい。神が何か恐ろしい罪を罰しておられるのだ。」と言いました。しかし、ヨブは、罪のないことを主張し続けました。それで、年寄りの話しているのを座って聞いていた若い人が自分の内で、怒りを燃やしました。年寄りがヨブに罪を認めさせることができなかつたので、怒りを燃やしていたのです。ヨブは罪のないことを主張し続けているが、もしこの人に罪がなければこのように苦しむはずがない、と感じたからです。従って、この人は、神を非難しています。ヨブが苦しんでいるのは、神のせいだと言っているのです。そして、神に不正があると言っているのです。そして、この人はとうとう、口を差し挟み、あなた方が議論するのを聞いたが、だれも知恵がない、と言い、自分がこれから話す言葉がどれほど知恵のある言葉を話し始めました。この人は、そこまで到達することはありませんでしたが、話し続け、ヨブに対し、「人が王に向かって、『よこしまな者。』と言い、高貴な人に向かって、『悪者。』と言えるだろうか。この方は首長たちをえこひいきせず、貧民よりも上流の人を重んじることはない。なぜなら、彼らはみな、神の御手のわざだから。」と述べました。つまり、神は、人の地位を重んじることはないし、人種的な素性を重んじないし、私たちが神の前に立つとき、私たちはみな同じ土俵に立っている(訳者注：英語は、We are on the same plane.)と、この人は言っているのです。つまり、あなたが、神にとっては、ビリー・グラハムやローマ法王と同じくらい重要だということです。神は、他の誰でもと同じように、あなたに関心を持っておられるのです。みなさんすべては、神にとってはとても重要なのです。神はかたよったことをさなりません。私たちが神の御前に出るとき、誰も他の人より高められたり、上になつたりすることはありません。私たちはみな同じ土俵に立っています。

昨日、私は、ガーデン・グローブで、中国人の牧師のグループに話をしました。私は、一日この人たちといっしょに過ごし、主の働きについて講義するよう招かれました。朝9時に始めたとき、賛美をもって始めましたが、そのとき3人の若い中国人の学生がいて、賛美リードをしていました。ギターを持っていて、カルバリー・チャペルの賛美を歌って

いました。ですから、私も、その賛美に加わりました。ガオさんが、私の通訳で、私の隣に立っていましたが、ガオさんは主に向かって元気に賛美しておられ、無論私も賛美の時は主に向かって元気に賛美するものですから、私たちは大きな声で賛美していました。神を賛美し、主に向かって歌っていました。私は、とても一体感を感じました。人種的には、とても違うのです。ガオさんは、私の通訳であり、言語が違います。しかし、私たちが、主の御前に立ち、主を賛美したとき、私たちは一致していました。一致がありました。隔たりはありませんでした。不一致はありませんでした。言語でも何でもによって、私たちが隔てるものはありませんでした。そこで、私たちは、同じ土俵で（訳者注：英語は、level ground.直訳すると、平らな地面。）創造主の前に立ち、賛美していました。驚くべきことは、私たちはみな神の御前に立つ時、みな同じ土俵に立っているのです。神はかたよったことをなさいません。もし、これまでに罪を犯した者があなたただけであったとしても、神はあなたのことをとても愛して下さり、神にとってあなたはとても大切なので、あなただけのためだけでも、御子を遣わして下さったはずなのです。神はかたよったことをなさいません。

ペテロは、このことを悟り始めていました。この人は、明らかに異邦人でした。しかし、神はこの人に明らかに語られました。神は、この人に指示を与えられました。それで、ペテロは、「これで私は、はっきりわかりました。神はかたよったことをなさらず、その国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行なう人なら、神に受け入れられるのです。」と言いました。つまり、その人の素性が何であれ、人種が、またどのような素性であれ、神はご自身をすべての人に啓示して下さるということです。もし、その人が神を捜し、求めているのであれば、神はその人にご自身を啓示して下さいます。それで、神はコルネリオにご自身を啓示して下さり、「さあ今、ヨッパに人をやって、シモンという人を招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれています。この人は皮なめしのシモンという人の家に泊まっています。（この人が来て、神の道を教えてください）。」それは、すべての誠実な神を求めている心を持つ人に、神はご自分と真理を啓示して下さるからです。

そして、ペテロは、続けて36節で、「神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。」と述べました。神が送られたみことばは、イエス・キリストによる平和のみことばでした。主が、イザヤにメシヤの来臨を告げられた時のことを覚えていらっしゃるでしょうか。「その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」と言われました。イエスは、平和のみことばをたずさえて、神からの使者として来られました。神は、あなたとの不和を望んではおられません。神はあなたとの平和を望んでおられます。そして、神との平和を可能にするために、イエスは来られました。というのも、人々は、神とずっと不和状態でした。人々は、神に背いていました。今日でさえ、人々は、神と不和な状態で、神に背いている状態が続いています。イエスが来られた時、イエスについて人々は、「私たちはこの人を私たちの支配者にはしない。（訳者注：英語は、“We will not have this man to rule over us.”ですが、どこの聖句だかわかりませんでした。）」と言いました。

そして、今日でも愚かにも同じことを言っている人たちがいるのです。「この人を私たちの支配者にはしない。この人の支配には従わない。自分で勝手にやりたいのだ。制限されたくない。好きなことをやりたいのだ。」と。そして、その人たちは神に背いているのです。その背きの結果、私たちの社会が完全に崩壊しているを目の当たりにしているのです。社会的混乱を見ます。リベラルの社会的な実験は全くの失敗でした。わが国をガタガタにしてしまい、私たちはジャングルの道徳ともの見方（訳者注：つまり、弱肉強食）に戻ってしまいました。原始的になりました。人の神との不和は、犠牲を伴いました。米国のみならず、世界中で社会秩序が崩壊状態にあります。崩れつつあります。私はもうす

ぐイスラエルへ向かって出発します。人々は、「イスラエルに行くのが怖くないのですか。」と言います。「いろいろあそこは問題があり、爆弾やらいろいろあるじゃないですか。」と。あなたは、高速道路を運転するのが怖くないのですか。(爆笑)もし、割り込みをしようものなら、ズドンとやられてしまうかもしれないことを、ご存じではないのですか。とんでもない人がたくさんいるのを、ご存じないのですね。サンタ・アナ(訳者注:カルバリーチャペル・コスタメサが存在する市の名前)の中を運転するのが怖くないのですか。今年、そこで自動車からの発砲事件で、何人銃で打ち殺されたかご存じないのですか。私たちはローマに行きます。(訳者注:チャックのイスラエル旅行の旅程には、ローマも入っています。)
「ああ、ローマについてのうわさは聞いています。そこでは、膝小僧を銃でぶち抜かれるんですって。それに、財布には、気をつけなさいよ。一平方マイル当たりのスリの人口は、他のどこよりもローマが多いのですから。気をつけなさいよ。それで、ローマの町を歩く時は、こんなにして歩くんです。(訳者注:チャックがスリを心配して、コチコチになって、周りを気にしながら歩くしぐさをしています。)(大爆笑)それから、私たちはイギリスに行きます。(訳者注:チャックのイスラエル旅行の旅程には、イギリスも入っています。)
「わあ、イギリスは、今、とても混乱状態です。ひどい所ですよ。イギリスでは、本当に気をつけていなければいけませんよ。私は数年前にイギリスに行きましたが、ヒースロー空港で、泥棒に会いまして、泥棒は私のスーツケースを物色して、貴重品を盗みました。イギリスは、ひどい所ですよ。社会崩壊が起っています。気をつけなさい。気をつけなさい。」どこへ行けば、気をつけなくてよいのでしょうか。世界中で、道徳が崩壊しています。そして、世界は危険な場所になりました。それは、人が神に背いてきているからです。崩壊しつつある社会に、その背きの結果と実を見ます。しかし、背きのために崩壊しつつある社会に対し、神は平和のことばをたくし、御子を遣わして下さいました。

今日、あなたの世界は崩壊しつつあるのでしょうか。あなたが神に背いているために、あなたの人生は混乱状態でしょうか。神は、平和のことばをたくし、御子を遣わして下さいました。神は、あなたと戦いたくありません。神は、あなたとの不和を望んではおられません。神は、平和を望んでおられます。従って、平和のことばは、まず第一に、神との平和です。まず神との平和を見出だすまで、自分自身との平和も、仲間の人間との平和も知ることはできません。パウロは、「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」と言いました。イエスは、あなたが神との平和を可能にするために来て下さいました。神は、イエス・キリストを通して、神に背いてきた人みんなに、恩赦をお与えになっているのです。神はイエス・キリストを通して、十全なる完全なる赦しを提供しておられます。不和を終えることはできるのです。それだけでなく、あなたの神との不和の悲劇的結果をすべて、神は打ち消して下さいます。神は、あなたを新しい人にして下さいます。神はあなたに新たな出発を与えて下さいます。長年いもむしやシャクトリムシが食い荒らしたものを、神は回復して下さいます。一旦神との平和を持つと、私は再び神の命令を守り、私は仲間の人間との平和を持っています。それは、神が私にすべての人と平和を保つように命じておられるからです。神は、私に互いに愛し合うように命じられました。それで、私は自分の回りにいる人と平和を持つようになりました。それは、私が神との平和を持っているからです。

パウロは、エペソ人への手紙の中で、かつてユダヤ人と異邦人の間にあった壁、人種的な障壁について書いています。イエスがサマリヤに行かれたとときのことを覚えていらっしゃるでしょうか。そこでイエスは、女に対して、「わたしに水を飲ませてください。」とおっしゃると、女は、「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤ人の私にお求めになるのですか。私たちは互いに話すべきではないのに。」と言いました。(訳者注:ヨハ

ネ4章7-10節参照。)壁がありました。しかし、イエスは、壁を打ちこわすために来られました。そして、パウロは、「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を破棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自分において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました。私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。」と述べました。ですから、パウロは、私たちが神の前に立つとき、私たちがみな同じ土俵にいることを言おうとしているのです。ユダヤ人であれ、異邦人であれ、何であれ。長い間人間を隔てていたものすべて、私たちが築いてきた壁は、イエス・キリストによって打ちこわされました。イエスが神の前に私たちを集めて下さるとき、私たちはみな一つの土俵に立つのです。

そして、最後に、自分自身との平和です。余りにたくさんの人が自分自身の内に戦いを展開しています。そのような人の人生は混乱で満ちあふれています。この人たちにとって世界は目茶苦茶のようにみえます。心配や不安、恐れがあります。そのような人たちに対し、イエスは、平和の慰めのことばをお与えになります。イエスは、弟子たちに対し、「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」と言われました。イエスは、「わたしは、あなたがたに平安(訳者注:英語では平和も平安も peace)を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」とおっしゃいました。詩篇の記者は、「主は、ご自身の民に力をお与えになる。主は、平安を持って、ご自身の民を祝福される。」と言いました。また、詩篇の記者は、「恐れのある日に、私は、あなたに信頼します。」と言いました。イザヤは、「志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。」と述べました。パウロは、「人のすべての考えにまさる、あなたがたの心を思いをキリストにあって守ってくれる、神の平安(訳者注:ピリピ4章7節を参照)」について語りました。それに対比して、また預言者イザヤは、「『悪者どもには平安がない。』と主は仰られる。」と言いました。また、イザヤは、「しかし悪者どもは、荒れ狂う海のような。静まることができず、水が海草と泥を吐き出すからである。」と言いました。しかし、神は、イエス・キリストを通して、あなたに平和のことばを与えるために来られました。あなたは自分の心に、イエス・キリストの平和を知ることができます。社会の全ての混迷の直中であっても、混乱の中であっても、完全な平和を持つことができます。

さて、あなたが戦いの中にあるとき、その戦いを終らせる方法は二つあります。一つは、降伏すること、もう一つは征服することです。神との戦いの場合には、平和への道は、神に降伏することです。もがくことを、戦いを止めることです。神を屈服させることはとてもできません。戦えば戦うほど、それだけあなたの状況は悪化するばかりです。しかし、神は無条件降伏を要求されます。わたしは小さかったですが、フランクリン・デラノー・ルーズベルトが、米国国民に対し米国が日本と戦争をすると発表した演説を思い出すことができます。ルーズベルトは、「我々の軍隊を日本に派兵する。敵から無条件降伏を取り付けるまで止めない。条約は結ばない。我々は、無条件降伏を要求する。」と述べました。これがまさに、神が要求されていることです。あなたに罪があるままでは、神は講和はなさいません。あなたに罪があるままでは、神は条約は結ばれません。神は、みなさんの側に無条件降伏を要求しておられます。しかし、すばらしいことは、あなたが神に

人生を無条件降伏するなら、あなたは、自分では信じられない平和を体験します。栄光に満ちた平和です。戦争は終わりました。もう、私は神に対して戦ってはいません。私は自分の人生を全て完全に神に明け渡しました。戦いが終わったということを知ることは、何たる喜びでしょうか、平安でしょうか、安心でしょうか。イエスは、「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と言われました。一旦あなたが人生を全てイエスに明け渡すと、イエスは栄光に満ちた平和を与えて下さいます。

しかし、肉においては、私たちの内に戦いがあります。「肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。（訳者注：ガラテヤ5章7節参照）」聖書は、「肉の思いは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。（訳者注：ローマ8章7節参照）」と教えています。ローマ人への手紙7章で説明しているパウロが経験しているのと同じことを、私たちも頻りに経験するのです。「私の内には、悪が住み着いていることがわかります。というのも、善を行ないたいと思うときには、いつも私には悪があります。

（訳者注：ローマ7章17-22参照）」ダイエットをしようとする、いつも誰かがチョコレート・ケーキを持ってきてくれるのはなぜなのでしょう。ジャーマン・チョコレート・ケーキ（訳者注：チョコレート・ケーキの種類の名前です。かなりリッチ。）を。悪です！（爆笑）パウロは、「私の内には、悪が住み着いています。善を行なおうとすると、いつも悪が宿っているのです。自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。わたしは、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、肉のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。（訳者注：ローマ7章17-24参照）」と述べています。私たちはみな、肉の願いが御霊に逆らうこと、善であると分かっているに行なうべきであると分かっていることに逆らうので、もがく経験をしたことがあります。この肉の願うことは御霊に逆らう中で、私たちみなは、イエスがペテロに言われたことを経験したことがあります。「ああ、ペテロ、心は燃えていても、肉体は弱いのです。（訳者注：マタイ26章41節参照）」私たちはみな、肉の弱さを経験したことがあります。パウロについては、私たちもこの叫びをしたことがあります。自分ではできる限りのことをして、戦っているのですが、敗北していることに気づき、「わたしは、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と叫ぶまで至るのです。そのような叫びの中でさえ、勝利の鍵があります。私はもはや自分で自分を救おうとはしなくなるのです。自分で自分を救うことをあきらめるのです。助けを呼ぶのです。だれが私を救い出してくれるのでしょうかと。自分ではできないと気付いて助けを呼ぶときに、主が介入して、私に打ち勝つ力を与えて下さいます。御霊の力によって、肉を克服することができます。ですから、私は肉に対する勝利を知っています。勝利のゆえに平和があるのです。勝利からもたらされる平和です。勝利は、主に明け渡すことによってもたらされます。

ですから、ペテロは、「神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です。」言いました。イエスは、宇宙の主です。イエスは、ユダヤ人、異邦人の主です。そして、あなたの主になることを望んでおられます。イエスがあなたの人生の主になられた瞬間に、あなたは平和を、素晴らしい平和を、完全な平和を知るようになります。

使徒行伝 11 章 (2 / 25 / 96)

使徒行伝 11 章 17 節 (Acts 11:17)

「神を妨げる」 # 8609

交読文：詩篇 95 篇

私たちの聖書通読の学びは、使徒行伝 11 章まで来ました。11 章を読む時間が結構あります。先に進んで読んでも罰金はかかりません。楽しんで（読んで）下さい。今週、私自身、先に進んで読んでしまいました。話にとっても興味を持ち、2、3 章先まで読み進めました。みなさんも、同じようにしてみてくださいをお勧めします。

今朝は、11 章 17 節に注目して下さい。ペテロはエルサレムの教会に説明をしていました。「こう言うわけですから、神が私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが神のなさることを妨げることができましょう。」ペテロは、直接イエス・キリストから命令を受けて、異邦人の家に入っていっしょに食事をしたことで、ユダヤ人の言い伝えを破っていました。しかし、イエスがペテロに、ためらわずにその人たちといっしょに行くようにお命じになっていたのです。それで、ペテロは、カイザリヤの町にあるローマの百人隊長コルネリオの家に行きました。彼は、着いたとき、戸に立ってためらっていました。「私がユダヤ人として異邦人の家に入るのには律法にかなわないことです。（訳者注:10:28参照）」と言いました。このことは、真の律法ではなく、律法の伝統的な解釈でした。異邦人の家に入ってはいけない、異邦人といっしょに食事をしてはいけないとは、神は言われませんでした。これは、ユダヤ人がしきたりによって造りあげたものでした。けれども、しきたりを乗り越えることは難しいものです。ですから、ペテロは戸口でためらっていたのです。「入ることは律法にかなわないことです。ところが、主が私に、神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない、と示してくださいました。（訳者注:10:28、11:9参照）」と言いました。ペテロは、主が私にこのことを行なうように言われたのです、と言っています。つまり、ユダヤ人のしきたりによる信仰を破るように主が導かれた、ということです。ペテロが福音をコルネリオと家に集まってきた者たちに話していると、突然これらの人たちは聖霊によってバプテスマを受け、異言を話し始め、神を賛美しました。そこで、神がこの人たちの間で働きをなさった限り、もはや水をさし止めて、この人たちにバプテスマを受けさせないようにすることはできないと判断されました。それで、主がすでにコルネリオ家の者たちに聖霊によってバプテスマを授けられたのを見て、ペテロたちはコルネリオ家の者たちに水でバプテスマを受けさせました。

主がこの幻をお与えになり、「門の所に人がいるので、その人といっしょに行くように。神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」と言われて、おそらくペテロは自分でははっきりとは分からないけれども、何か起きているなと感じはじめ、証人にいっしょにいて欲しいと思いました。そこで、万一通常とは違う何かが起こったときに、少なくとも自分の側の証人がいるようにと、ペテロはヨッパにいる 6 人のユダヤ人をコルネリオの家まで連れて行きました。ペテロにためらいがあったことは、全く根拠がないことではなかったのです。それは、ペテロがエルサレムに戻るやいなや、「割礼を受けた者たちは、彼を非難して、『あなたは割礼のない人々のところに行って、彼らといっしょに食事をした。』』とあるからです。この人たちは、ペテロを呼び出して、とっちめてやるうとしていました。それは、割礼を受けた者たちでした。異邦人たちは救われないと言っていたのは、この人たちでした。この人たちの前提は、救われるためにはユダヤ人にならなければならないというものでした。割礼の儀式とバプテスマを受け、律法を守ることによってユダヤ人になる、というものでした。この人たちの主張は、異邦人たち

は救われることはできない、ユダヤ人だけが救われるのだというものでした。初代教会には、このような過激な意見の人たちがいました。初代教会において、これは絶えず問題を起こさせる点だったのです。使徒パウロが自分のミニストリーにおいて、取り組まなければならない困難な点でした。パウロが異邦人のところに行き、すばらしい神の恵みを宣べ伝えるたびに、パウロが去った後、割礼を受けた者、いわゆるユダヤ教徒化主義者(Judaizer)が、パウロのすぐ後をつけて行って、新しく信じた人、改宗したばかりの人たちを混乱させました。彼らは、「パウロは真の福音を、あるいは福音全部を伝えていない。真に救われるためには、割礼を受けなくては行けない。律法を守らなければ行けない。」と言い、教会の中で混乱や分裂を起こしました。パウロはあきれかえって、ガラテヤ人への手紙の中で、「あなたがたをかき乱す者たちは、いっそのこと自ら去勢してしまえばよい。〈新共同訳5：12〉」と書いています。パウロは、彼らに腹を立てていました。イエスを信じている小さい者たちを混乱させるようなことを、イエスはよく思っておられませんでした。混乱をきたす、疑いを起こさせるような者。「わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、むしろ大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。(訳者注：マルコ9:42参照。)」とおっしゃいました。どうも、聖書に関して、議論をし、分裂を起こし、混乱させたい人たちが常にいるようです。ですから、ペテロはこういう人たちに直面していたのです。このような人たちは議論好きでした。「あなたは割礼のない人々のところに行き、彼らといっしょに食事をした。」と言いました。それで、それに対して、ペテロはヨッパで皮なめしのシモンの家に滞在しているときに見た幻を詳細に語りました。そして、ペテロは、「御霊は私に、行くようにと言われました(訳者注：使徒11:12参照。)」と述べました。「私は聖霊に行くように命じられた。」と。ペテロは、「私が話し始めていると、聖霊が、あの最初のとき私たちにお下りになったと同じように、彼らの上にもお下りになったのです。」と言いました。つまり、ペテロは、「ほら、わたしの責任ではない。神がなさったのだ。私は彼らに触らなかつた。手を置かなかつた。私がただ話し始めていると、神が彼らに聖霊をお与えになったのだ。」と言っているのです。「どうして私などが神のなさることを妨げることができましょう。」あるいは、「神に対抗することができましょう。」と。

ヨブ記9章で、ヨブは神について質問をし、「だれがそれを引き止めることができようか。だれが神に向かって、『何をされるのか。』と言いえよう。」と言いました。だれが神の働きを引き止めることができましょう。だれが神の働きをためすことができましょう。32章で、エリフが語ったとき、エリフはヨブに対して、「なぜ、あなたは神と言い争うのか。」と聞きました。これはもっともな質問です。なぜ、あなたは神と言い争うのか。神と言い争って、人は何をできることができましょうか。イザヤは、「おのれを造った者と争う者はわざわいだ。〈口語訳〉」と言いました。もし、神が無慈悲であったとしたら、もし神が絶えず人をしつこく悩ませているだけだとしたなら、人が神と言い争うのは想像することができます。しかし、神はすばらしい方であり、愛の方です。神は、「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。それはすばらしいもので、わざわいではない。あなたがたに栄光に満ちた将来を与えたいのだ。(訳者注：エレミヤ29:11の言い換え)」と言われました。それなら、あなたの人生にすばらしい計画を立てて下さっている神となぜ言い争うのでしょうか。「どうして私などが神のなさることを妨げることができましょう。」とペテロは言いました。

聖書が、神を妨げようとした多くの人について語っていることは、興味深いです。エジプトのパロにさかのぼりますと、モーセがパロの所にきて、「イスラエルの神、主(エホバ)がこう仰せられます。『わたしの民を行かせ、荒野でわたしのために祭りをさせよ。』」と言うと、パロは答えました。「主(エホバ)とはいったい何者か。私とその声

を聞いてイスラエルを行かせなければならないというのは。私は主（エホバ）を知らない。イスラエルを行かせはしない。」神を妨げようとする、神の命令を妨げようとする、神を妨げようとする過程で、パロは、エホバがどのような方であるかを学び、その過程で、ひどい惨めさ、苦しみを通りました。神は、まずナイル川の水を血に変えられました。それから、神は地をかえるで覆われました。寝台にもこね鉢にも、至る所かえるだらけになりました。そして、神は人と獣をぶよで覆われました。また、神は地をあぶで満たされ、家畜に大打撃を与えられました。そして、残った動物と人を疫病で打たれました。そして、地に激しい雷を降らせ、野にいた家畜を殺し、木を打ち砕き、作物を破壊しました。そして、神はいなごの大群を送られ、それが残された作物を破壊しました。それから、神は地を闇で覆われ、最後に、神は地の初子を殺されパロの軍隊を紅海に沈められました。主（エホバ）とはいったい何者か。パロはわかりました。しかし、悲惨さと苦しみを通ってわかるようになったのです。今、みなさんの中で、ひどい痛み、苦難、惨めさを通しておられる方が、ひょっとしたら、神を妨げようとしている可能性はありますか。南部の古いスタンス・バックスター賛美歌の一つで、歌の題名を読んで覚えているのがあります。「神はあなたの意思に反して無理には行かせない。ただ、あなたに喜んで行かせるだけだ。」神を妨げる。神は、忍耐深い方です。神はあなたの意思に反して無理には行かせない。ただ、あなたに喜んで行かせるだけです。その歌の一節は、ヨナについてです。神がヨナをニネベに行くように呼び出され、ヨナがタルシシュに逃げようとしたので、神が嵐を送られ、ヨナを船から海に投げ出され、ヨナが魚の腹の中にいたとき、ヨナの心が変わられ、神はヨナの意思に反して無理には行かせませんでした。ヨナを喜んで行かせるようにされました。カナン地の人々についての節があります。ヨシュアが入ってこようとしたとき、神はヨシュアの前にくまばちを送ったので、人々はくまばちに悩まされました。くまばちが人々をさし、人々は家から、地から逃げ出しました。神は人々の意思に反して無理には行かせませんでした。人々を喜んで行かせるようにされました。基本的に、私たちが神を妨げようすると、痛み、苦難、困難を自分の人生に招きます。

しかし、今日たくさんの方が神のなさることを妨げようとしているのは、興味深いことです。そのような人たちは、神がなさりたいことを何度も拒否します。前提としてもっている立場があるため、聖霊の働きを教会史のある特定の期間にだけ当てはめてしまっていたけれど、今日ペテロの例に倣った人たちがいます。それは、ある集会で何かが起こり、聖霊が心の中で働いて下さっているので、ここで何をやっているのだということになったりします。神のみこころによる働きを見て、そのせいで叱責を受けるため呼び出される人たちが今日います。私が読んだところによると、ある教会は、特定の御霊の現われ、御霊の賜物の働きを許したために、とある教団から締め出されてしまいました。今日でさえ、依然として神のなさることに抵抗しよう、あるいは妨げようとする人たちがいるのです。ダビデ王の曾孫のアビヤは、このアビヤの父はソロモンの息子のレハブアムでしたが、彼が王位についたとき、ヤロブアムは依然として北イスラエル部族の王でした。ヤロブアムはレハブアムの治世の時に謀反を起こし、北の10の部族を集め、10の部族はヤロブアムに忠誠を誓い、レハブアムと南にあった2の部族を見捨てました。それで、アビヤがヤロブアムの所に来て、主の王国に敵対しようとしたと言ってヤロブアムを非難しました。それは、ダビデとその子孫に王座を約束されたからです。アビヤはヤロブアムに、「あなたは主に敵対しようとしている。そして、金の子牛を設けて、人々にそれが神であると言った。誰でも祭司になることを許した。レビ族でなくてもよくした。（訳者注：歴代誌第二13:8参照）」と言いました。そして、アビヤは言いました。「見よ。神は私たちとともにいて、かしらとなっておられる。また、神の祭司たちも私たちの側におり、合図のラッパを手にして、あなたがたに対し進撃の合図を吹き鳴らそうとしている。イスラエル人

よ。あなたがたの父祖の神、主と戦ってはならない。とうてい勝ち目はないからである。」良いアドバイスです。主と戦ってはならない。主と戦って努力しても、とうてい勝ち目はないからである。しかし、ヤロブアムの軍隊は80万で、アビヤの軍隊はわずか40万でした。2対1でした。それで、ヤロブアムは、何でこんな奴の言うことを聞かなければならないのかと思いました。そして、軍勢の半分をアビヤの軍隊の背後に回し、後から待ち伏せできるようにし、エルサレムへの退却の道を断とうとしました。それで、戦いが始まると、すぐにユダの人たちは囲まれていることが分かりました。ヤロブアムの軍隊が前にも後ろにもいました。そして、このように書かれています。「そして、ユダの人々はときの声をあげた。ユダの人々がときの声をあげたとき、神はヤロブアムと全イスラエルを、アビヤとユダの前に打ち破られた。こうして、イスラエル人は、ユダの前から逃げ去り、神はこの人々を彼らの手に渡された。アビヤとその民は彼らをおびたたく打ち殺した。その結果、イスラエルのうち、精鋭五十万が殺されて倒れた。イスラエル人は、このとき征服され、ユダ人は、勝利を得た。彼らとその父祖の神、主（エホバ）に拠り頼んだからである。」ここに神を妨げようとした人がいました。数の上では優勢でしたが、その人もその軍勢も打ち負かされました。それは、神に敵対しようとしたからです。

モアブの王たち、アモン人とセイル山の人々が軍隊を集め、ユダの王ヨシャパテと戦おうとして攻めて来ました。歴代誌第二20章を読むと、「ヨシャパテは恐れて、ただひたすら主に求め、ユダ全国に断食を布告した。」とあります。「ユダの人々は集まって来て、主（エホバ）の助けを求めた。すなわち、ユダのすべての町々から人々が出て来て、主（エホバ）を求めた。ヨシャパテは、主の宮にある新しい庭の前で、ユダとエルサレムの集団の中に立って、言った。『私たちの、父祖の神、主よ。あなたは天におられる神であり、また、あなたはすべての異邦の王国を支配なさる方ではありませんか。あなたの御手には力があり、勢いがあります。だれも、あなたと対抗してもちこたえうる者はありません。』」ここで、ヨシャパテは自分の仕えている神の力を認めています。「『だれも、あなたと対抗してもちこたえうる者はありません。私たちの神よ。あなたはこの地の住民をあなたの民イスラエルの前から追い払い、これをとこしえにあなたの友アブラハムのすえに賜ったではありませんか。』・・・ときに、主の霊が預言者ヤハジエルの上に臨んだ。彼は言った。『ユダのすべての人々とエルサレムの住民およびヨシャパテ王よ。よく聞きなさい。主はあなたがたにこう仰せられます。「あなたがたはこのおびたしい大軍のゆえに恐れてはならない。気落ちしてはならない。この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いであるから。あす、彼らのところに攻め下れ。見よ。彼らはツイツの上り道から上って来る。あなたがたはエルエルの荒野の前の谷のはずれで、彼らに会う。この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。ユダおよびエルサレムよ。恐れてはならない。気落ちしてはならない。あす、彼らに向かって出陣せよ。主（エホバ）はあなたがたとともにいる。』」それで、ヨシャパテは地にひれ伏した。ユダのすべての人々とエルサレムの住民も主の前にひれ伏して主（エホバ）を礼拝した。」そして、翌朝彼らは神に齒向かう王たちの戦いを見に出かけました。神は、「あなたがたは、見物していなさい。特別観覧席にいればよい。これを見ていなさい。」と言われました。神を妨げようとしていたからです。それで、彼らは翌朝早く起きてテコアの荒野に入って行きましたが、そのとき、「ヨシャパテは立ち上がって言った。『ユダおよびエルサレムの住民よ。私の言うことを聞きなさい。あなたがたの神、主（エホバ）を信じ、忠誠を示しなさい。その預言者を信じ、勝利を得なさい。それから、彼は、民と相談し、主に向かって歌う者たち、聖なる飾り物を着けて賛美する者たちを任命した。彼らが武装した者の前に行き、こう歌うためであった。『主に感謝せよ（あるいは、「ハレルヤ」）。その恵みはとこしえまで。』彼らが喜びの声、賛美の声をあげ始めたとき、主（エホバ）は伏兵を設けて、ユダに攻めて来たアモン

人モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、彼らは打ち負かされた。」神は、彼らを滅ぼされました。

神を妨げようとした者は、そのためにいつも苦しみを受けたことを指摘しておくべきでしょう。神は、みなさんの人生の中で働きをしたいと考えておられますが、みなさんの多くは、神がみなさんの人生の中でなさろうとしていることを妨げているのです。それで、神は、あなたが神を妨げるのをお許しになっています。しかし、それをすると、苦しみや、災いを招きます。

神がペテロに対し異邦人のところに行くように命じられた話、幻は、興味深いです。ペテロは、最初は神を妨げようとしていました。幻の中でペテロがみた動物について、主は、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい。」言われました。しかし、ペテロは、「主よ。それはできません。私はまだ一度も適法にしていなものを食べたことはありません。（訳者注：使徒11:8参照）」と言いました。このようなことが三回あり、その度にペテロは、「それはできません。」と言って、神のなさることを妨げようとしていましたが、とうとうペテロは神のメッセージを受け取りました。「戸口にいる人といっしょに行きなさい。ためらってはならない。彼らを遣わしたのはわたしです。（訳者注：使徒10:20参照）」神に完全に明け渡すことは何と幸いなことでしょうか。神にあなたの人生の中でご自由に働いていただくことは、あなたが、しきたりによって、先入観によって、自分の頭の中に築いたかもしれない障壁を取り除いていただくように神にお願いすることにより、神があなたの中でなさりたいと思っておられることをしていただくために、あなたが完全に心を開くことができます。そうすると、神があなたを通して達成されようとしておられる働きを見ることができるようになります。

神は、ご自分の働きをする器を常に準備なさいます。パウロは、エペソ人への手紙の中で言いました。「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」神は今あなたの中で働いて下さっています。あなたが神の栄光のために達成すべき行ないのために、神がすでにそれをあらかじめ備えてくださったのです。神は、陶器師です。私たちは、粘土の塊のようなものです。神は、ご自分の目的のために用いることができるように、器になるようかたどり形造って下さいます。エレミヤは、「陶器師の家に下れ。そこで、あなたに、わたしのことばを聞かせよう。」と主から命じられました。それで、エレミヤが陶器師の家に下って行くと、陶器師はろくろで仕事をしているところでした。粘土の塊があり、器をつくりはじめました。

「粘土は、陶器師の手でこわされた。（訳者注：エレミヤ18:4参照）」とエレミヤは言いました。陶器師は、製作中の器を取って、再びただの粘土の塊にして、こねて、塊の中の堅い部分をほぐし、ろくろに戻して、陶器師自身の気に入った器に作り替えはじめました。それから、エレミヤに次のような主のことばがありました。「イスラエルは、わたしの手の中にある粘土のようではないか。それをわたしの気に入る器にする力がないのだろうか。イスラエルは、陶器師の手の中でこわされた。－主の御告げ－ それでもわたしはそこから取って器を造るのだ。（訳者注：エレミヤ18:6、7の言い換え）」しかし、神が私たちの人生を形作って下さるとき、私たちは粘土の塊が堅くなることを望み、陶器師の手で器がこわされることがあります。神を妨げ始めるのです。神がなさっていることが理解できないので、抵抗し始めるです。それで、神がなさろうとされている働きがこわされてしまいます。神は、恵みと愛によって、私たちがただの塊に戻して下さいます。白紙状態に戻して下さいます。ああ、いく度白紙状態に戻ったことでしょうか。そして、神は、作業を始められます。粘土をこね、神が塊に働きかけて下さると、私たちは圧力を受け、粉碎過程を通ります。神が気に入る器を再びお造りになります。神が不完全な私たちを取

り扱って下さるとき、神は何と忍耐と愛を持って下さっているのでしょうか。神の目的を達成するために、ご自身が愛しておられる失われた者に手を差し延べて下さるために、神は用いることのできる器を造ろうとされます。

ダビデは、「目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう。」と述べました。神があなたの人生の中で働かれ、あなたをこねて形造られるとき、神がなさろうとしているのは、あなたの人生をイエス・キリストの似姿にすることです。神は、私たち一人一人をこねて形造り、御子の似姿にされます。パウロが述べているように、「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」という通りです。「どうして私などが神のなさることを妨げることができましょう。」神を妨げようとするのは、私にとって理解できません。そうではなく、自分の人生を全く完全に主にゆだね、神が私に望んでおられること、私を通してなされたいと望んでおられることを発見することです。

使徒行伝 11 章 (3 / 17 / 96)

使徒行伝 11 章 23 節 (Acts 11:23)

「主にとどまる」 # 8610

交読文：詩篇 73 篇

テリーが言ったように、もうこの章を暗記してしまってもよい頃ですね。11章に入ってから、ずいぶんになります。ほぼ1ヶ月経っています。今晚再び聖書通読の学びを続けますが、今晚は、夕方の聖書の学びで11章を取り上げますので、読み返してきて下さい。主を礼拝し、聖書通読の学びをしますので、今晚7時にいっしょに参加して下さい。

今朝は、使徒行伝 11 章 23 節に注目していただきたいのです。エルサレムの教会が、神の御霊が現に、実は異邦人の町であるアンテオケの町で動かれているのを聞いたとき、喜びがわき上がり、たくさんの人が主を受け入れて教会が成長していることを聞きました。その人たちに仕え、またアンテオケで主がその人たちに下さっていることを報告させるためにバルナバを遣わしました。それで、バルナバは、アンティオケに来て神の恵みがその教会に降り注がれているのを見て、喜びました。バルナバは、喜び、みんなが心を堅く保って、常に主にとどまっているように励ましました。

クリスチャン生活を送ることは、容易ではありません。実は、不可能なことです。聖霊の力なくして、クリスチャン生活を送ることはできません。神が望んでおられるように生きるためには、私たちは神の助けが必要です。多くの方は、次のような間違いを犯しています。クリスチャンの宣言書やクリスチャンの理想を見て、ええ、これに同意します、これは良い生き方だ。もっと人を愛するべきだということに同意します。もっと親切になって思いやりを持って、人々の必要に敏感になる必要があることに同意します。もっと人を赦せるようにならなければいけないことに同意します。クリスチャンの特徴を読んで、これは良い、きよい生活、誠実な生活、健全な生活をしなければいけないことに同意します、と言うのです。それで、多くの場合、私はクリスチャンとして生きる、と決めます。思いやりを持ち、親切になり、赦し、愛するようにします、と。クリスチャンとして生きる努力の中で、自分が実際どれだけ罪深いかを知るようになります。正しいこと、公正なことをするのに対して、肉がどれだけ反発力を持っているか知るようになります。そしてとにかく自分にはできない、と結論をつけることが多いのです。それで、クリスチャンの生活を諦めてしまいます。なぜなら、自分の肉の能力によって、霊に関することに従って生きようとしたけれども、ぜんぜん上手くいかなかったからです。彼らが出す間違った結論は、自分は最善を尽くしたのに出来なかったから不可能だというものです。これは、不可能であることを意味するものではありません。あなたの最善が十分でなかったことを意味するのです。あなたの最善以上が必要なのです。神が望んでおられるように生きるためには、聖霊の助けと力が必要なのです。自分自身ではこれは出来ません。神の御霊の力をいただくことが必要なのです。

クリスチャン生活を送ることは、容易ではありません。これは、不可能なことです。自分が、世と自分の肉と悪魔に対抗していることを知ります。クリスチャンの考え方は世のそれとは逆です。世が言っていることと正反対にあります。世は、「うまく得ることができるうちに、得ておきなさい。」と言います。クリスチャンの考え方は、「与えなさい。」です。受けるよりも、与えるほうが幸いです。生活から何を得ることができのかを強調するのではなく、むしろ、生活に何を与えることができるのかを強調しています。世の考え方は、「さあ、飲み食いしようではないか。あすは死ぬのだ。(訳者注：第一コリント 15:32参照)」と表現されています。クリスチャンの考え方は、「自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてイエスについて来なさい。そうすれば、朽ちないいのちの冠

を受けます。（訳者注：マルコ9:34、ヤコブ1:12参照）」です。世は、「楽しめ。自分が思っているより遅いのだ。（訳者注: Enjoy yourself.It's later than you think.）」と言いますが、クリスチャンの考えは、「真剣になれ。自分が思っているより遅いのだ。（訳者注: You better get serious.It's later than you think.）」です。神に関することに真剣になることです。快樂や肉に関するに従って生きるのではなく、イエスについて行くよう、自己中心の生活を捨てるのです。

肉、あなたの肉は、クリスチャン生活に対抗します。自然に行なうものではありません。超自然的に、行なわれるものです。あなたの肉は、「仕返しをしろ。」と言います。あなたの霊は、「忘れなさい。ほっときなさい。」と言います。肉は、「そうなるのは当然だ。ざまあみろ。」と言いますが、霊は、「彼らを赦しなさい。」と言います。肉は、「行って、あなたの権利を主張しろ。」と言います。霊は、「忘れて、もっと高尚なものに移りなさい。」と言います。肉は、「あの可愛い女の子の気をひけ。」と言いますが、霊は、「あなたの妻と子供をおぼえなさい。彼らに、あなたの愛をすべて与えなさい。」と言います。肉は、「あいつらがしたことに応じて、憎め。」と言いますが、霊は、「愛しなさい。赦しなさい。あわれみをかけなさい。」と言います。クリスチャン生活を送ることは、容易ではありません。私たちの肉は、対抗します。パウロは、「肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」と言いました。ペテロのように、「霊はしたいと願っても、肉体は弱いのです。（訳者注：マタイ26:41参照）」私たちは、日々自分の肉と戦っているのです。一つ一つの経験に、そう言えます。この対立があり、霊と肉の対立があるのがわかると、がっかりです。霊が勝利する時はいつも、甲斐があったと思います。爆発して、人をしかり、事を荒立てるのではなくて、「まあ、いいよ。」と言って、ほほ笑んで、親切をもって応える、反応する時のことです。「うん、そうだ、上手くやった。ぼくって、すごいでしょ。」と思います。たしかに、自分をいい気分させます。一日中、この勝利のことが頭にあって、特別優秀な日だ、あらゆる状況で金星を得ることができた思っているのですが、何かが起こって、駄目になってしまうのです。それから、自分が肉に従って反応したことに気付く前から、惨めな、いやな気持ちになり、「また、やってしまった。」と思うのです。

子供たちが成長期にあり、まだみな家にいた時のことですが（爆笑）、彼らが互いに礼に欠く言葉を交わしていました。互いに、相手に対する呼び方がありました。よくありませんでした。「ばか野郎！」とか、「あほう！」とかいう呼び方で呼び合っていました。それで私は、家族会議を開きました。私は、「もう十分だ。礼に欠く言葉で呼び合うのはよくない。もう止めてほしい。」と言いました。家の中で一番いやな仕事は、階段に掃除機をかけることでした。これは、やりたくないものです。自分の後ろの掃除機をひっぱって、階段を掃除しなければなりません。ですから私は、「次に悪い言葉で家族の一員を呼ぶ者は、階段に掃除機をかけなければいけない。」と言いました。男にとって工具は（爆笑）、自分にとって特別な所有物です。工具が必要な時は、探し回りたくありません。保管している引き出しにあってほしいものです。何かを修理しなければならなくて、私は工具箱のところに行きましたが、必要だった工具が私がいつも保管していた場所ではありませんでした。息子の一人が自分の自転車を修理するためにそれを借りて戻し忘れたのです。自分でも気付かないうちに、「ばか野郎！お前らのうちで、誰が俺の工具を持っているんだ！」と言いました（大爆笑）。私が、階段を掃除することになりました（爆笑と拍手）。クリスチャン生活を送るのは、容易ではありません。自分の肉に戦わなければいけないのです。

それに、悪魔に対する戦いもあります。悪魔は、歪曲した状況と生活の見方をあなたに

与えます。今朝私たちが読みました詩篇の中で、悪魔が詩篇の記者の思いをもて遊んで、物事の歪曲した見方を与えているのを見ることができます。敵が詩篇の記者の思いに対し働いているので、この記者は、もう少しですべりそうになりました。敵は、彼を落とし込めるばかりでした。この人は、悪者を見なければなりません。悪者が栄えるのをねたみました。彼らは、持ちたいもの、持てるものをすべて持っているかのようでした。けれども、彼らは、実にひどい冒瀆的な生活を送っていました。神を侮辱した言い方をしました。けれども、彼らは望む以上に富を増しているように見えました。彼らは、私のように悩んでいない。私のように、問題を持っていない。悪魔は、真実を歪めていたのです。彼らは、もちろん悩みはあるし、問題はありました。けれども、悪魔がその真実を歪めて、詩篇の記者に誤った結論をもたらしました。正しいことをするのは、得しない。正しく生きるのは、得しない。「確かに私は、手を洗って、きよくしたのだ。むなしく心をきよめたのだ。(訳者注：詩篇73:13参照)」得をしないのです。そして次のように言いました。「私は、これを知ろうと思いついたが、それは、私の目には、苦役であった。私は、神の聖所にはいり、ついに、幅広い見解を得た(訳者注：英語では、「彼らの最後を知った。」の部分言い換えられています)。」悪の生活の最後を見たのです。そして、私の生活の最後はとてすばらしいことを悟りました。「天では、あなたのほかに、だれを持つことができますよ。」主よ、あなたが私の力です。けれども、悪魔は、この事実を歪めて誤った結論を導いていたのです。悪魔は、頻りに私たちにやってきます。私たちに戦いを挑みます。もし、神があなたを愛しているなら、あなたの身になぜこんなことが起こるのか。神が本当にあなたに心に留めているのなら、なぜあなたは苦しみを通らなければならないのか。確かに、神はあなたに心を留めていない。神は、あなたに気を留めていないのだ。そして、混乱をもたらして、あなたの歩みにつまずきの石を置きます。クリスチャン生活を送るのは、容易ではありません。私たちは、世に肉に悪魔に対抗しています。

従って、クリスチャンになるのに単なるクリスチャンになるぞという決意以上のことをしなければなりません。物事が上手くいかなかったら、思いを変えるのは簡単だからです。クリスチャン生活を車と同じように、「車で1区画走って、操縦性がどうか見てみる。気に入るかどうかが見てみる」という人がいます。あるいは、「新しい靴を2、3日履いて履き心地がいいか見てみる。」という人たちがいます。クリスチャンの生活は、上手くいくか試してみると類いのものではありません。クリスチャンになると決意する以上のものがが必要です。「心を堅く保つ(purpose in your heart)」ことが必要なのです。それで、バルナバは、アンテオケにいる新しく信じた人たちに、心を堅く保ちなさい、と言ったのです。詩篇17篇で、詩篇の記者は、「私は、口のあやまちをしまいと心がけました(purposed)」と言いました。ダニエルについてですが、彼はバビロンに捕囚で連れてこられて、王の宮廷に入れられて、ユダヤ人に関することの王の助言者として仕立てられました。王の宮廷にいたので、ダニエルはそこにいる特権を利用できました。王の宮廷のすべての贅沢を利用できました。家から遠く離れた10代の少年にとって魅力的なあらゆる誘惑、引かれるものがありました。しかし、ダニエルは、王の食べるごちそうで身を汚すまいと、心に決めました(purposed in his heart)。誘惑は強かったのです。機会はそこにありました。他の人といっしょに、型通りの生活にすべりこむのはたやすいことでした。しかし、彼は、王の食べるごちそうで身を汚すまいと心に決めました。その結果、彼は、神に対し真実に、従順にすることができました。なぜなら、これは、彼が心に決めただけからです。パウロは、救いの信仰について話しているとき、次のように言いました。「もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で、・・・信じるなら。」あなたの頭で信じるものではありません。そうではなくて、「あなたの心で神はイエスを死者の中からよ

みがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。」イエスの復活は、日毎に疑問を持つものではありません。イエスは本当によみがえられたのか、よみがえられたと私は思う、よみがえられたと信じよう、というものではありません。これは、自分の心に関することなのです。確かにイエスはよみがえられた。確かにイエスが復活された、というもので、これは、疑問ではありません。疑問や疑いを持つものではありません。そういう問題ではないのです。これは、心で信じることなのです。これは、私の存在の一部なのです。多くの人は、頭から心に来ないので、ひっかかってしまうのです。従って、彼らの歩みに不安定さがあります。私はもうこのことを決してしない、というのと、私は生きている限りしないと心に定めた、というのは違います。

バルナバは、「心を堅く保って、常に主にとどまっているように。」と言いました。主にとどまって、心を堅く保ちなさい。陥れるための誘惑が来るだろう。迫害が来るだろう。世はあなたを襲うだろう。でも、主にとどまっているように、心を堅く保ちなさい。多くの場合、始めは上手くいくのですが、途中どこかで、押し流されてしまいます。これは、岩地に落ちた種みたいなもので、すぐに芽を出すのですが、土が深くないので、日が上って暑くなるとすぐに枯れてしまいます。土が深くないからです。このような人が多くいます。キリスト教をすぐに受け入れるのですが、深さがありません。私は前に出てキリストを受け入れた、という以上に行くことがないのです。決意し心を定めることがないのです。パウロはガラテヤ人に手紙を書いて、「あなたの始まりは良かったのに、どうしたのか。なぜそんなにすぐに真理から離れてしまう妨げは何だったのか。（訳者注：ガラテヤ3:1-3の言い換え）」と言いました。へブル人への手紙に、ただ主の事がらに向かうことができなかったことが語られています。警告は、「私たちは聞いたことを、ますますしっかり心に留めて、押し流されないようにしなければいけません。」です。多くの人が、押し流されてしまいました。イエスは、エペソの教会に手紙を書かれて、「あなたに非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」と言われました。あなたは押し流されてしまったのです。なぜなら、主にしがみついて、心を堅く保つことに欠けていたからです。イエスに関して、その宣教のある時点で、彼に従っていた多くの弟子が離れ去りました。まだそこにいる他の者たちに、「まさか、あなたがたも離れたと思うのではないでしょう。」と言われました。ペテロは言いました。「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」しかし、これは本当です。本当に心を堅く保っていなければ、人が離れ去ることはあり得るのです。「心を堅く保って、常に主にとどまっているようにしなさい。」

モーセは、その生涯の終りに、イスラエルの民を約束の地まで導きましたが、その中に導くことはできませんでした。もうヨシュアに統治と指導権を引き継がなければなりません。それで、最後に、彼らに命令を与えるために、イスラエルの民を集合させました。モーセは、イスラエルの民への命令の中で、申命記30章16節からですが、次のように言いました。「私が、きょう、あなたに、あなたの神、主を愛し、主の道に歩み、主の命令とおきてと定めとを守るように命じるからである。確かに、あなたは生きて、その数は増える。あなたの神、主は、あなたが、はいつて行って、所有しようとしている地で、あなたを祝福される。しかし、もし、あなたが心をそむけて、聞き従わず、誘惑されて、ほかの神々に拝み、これに仕えるなら、きょう、私は、あなたがたに宣言する。あなたがたは、必ず滅びうせる。あなたがたは、あなたが、ヨルダンを渡り、はいつて行って、所有しようとしている地で、長く生きることはできない。私は、きょう、あなたがたに対して天と地を、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。あなたもあなたの子孫も生き、あなたの神、主を愛し、御声に聞き従い、主にすがりなさい(cleave unto Him)。」ですから、モーセがイスラエ

ルの民に言った全く同じことをバルナバは、アンテオケの人たちに言ったのです（訳者注：「常に主にとどまっているように」は、“c leave unto the Lord”であり、モーセが「すぎるためだ」と言った部分の英語と同じになっている）。主にとどまっていなさい。主にすぎりなさい。モーセは言いました。「確かに主はあなたのいのちであり、あなたは主が、あなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた地で、長く生きて住む。」

ヨシュアが、生涯の終りに来たとき、「年を重ねて老人になっていた。」とありますが、イスラエルの民を呼んで、彼も、主にとどまっていなさい、と勧めました。なぜでしょう？なぜなら、誘惑があって、他のものに引かれてしまうからです。興味深い逆説があります。心を尽くして主を求めるとき、神を尋ね求めているのですが、神は、あなたを祝福されます。神は、あなたが主を求めると、あなたに祝福を注ぎ始められます。問題は、人が祝福されているとよく、「新しいボートを今度の日曜日に試し乗りしてみよう。教会は行かないことにしよう。」と言って、他のものを見はじめるのです。あなたが主と求めたので、神はあなたを祝福されたので、繁栄を与えられたので、あなたは調子が良くなって、それで、この繁栄そのものが、完全に主に明け渡すことを妨げるのです。イスラエルの民が主を求めている限り、神は、彼らを繁栄させられました。けれども、繁栄したら、離れ始めたのです。まさに悪魔的です。人々は、神の祝福を十分に喜ぶことをしないで、むしろ、祝福のゆえに気が散り、他のものに向かってしまうのです。主にすぎりなさい。主にとどまっていなさい。

アンテオケにおいて、バルナバは、新しく信じた人々に、「心を堅く保って、主にとどまっていなさい。」と言っているのです。心を堅く保って、主にとどまっているのは大切です。なぜなら、主のみが、私たちをお救いになることができるからです。さて、このような発言をすると、すぐさま世は、宗教で凝り固まった人の分類に入れてしまいます。イエスのみがお救いになることができる、とすることが、あなたを宗教に凝り固まった人にしてしまうのです。イエスもその一人でした。なぜなら、こう言われたからです。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはできません。」こうも言われました。「わたしは羊の門です。わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。」イエスが唯一の救いと永遠のいのちの道であることを信じることによって、政府に関して言うならば、過激派の範疇に入れられます。宗教狂信者、社会の危険分子なのです。なぜなら、過激主義者だからです。これが、私たちに与えられる分類なのです。過激主義者、過激右派、狂信者です。ハマスや他の過激派と同じ分類に入れられます。あなたが、社会の危険分子、脅威になります。なぜなら、あなたが偏狭で、イエスのみによって、人が永遠のいのちを知ることができることと信じているからです。しかし、ペテロは、こう言いました。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間には与えられていないからです。」パウロは言いました。「神は唯一です。また、神と人との仲介者も唯一であって、それは人としてのキリストです。」イエスにとどまるのです。主にとどまるのです。イエスのみがお救いになることができるのです。この方以外には、だれによっても救いはありません。

バルナバによるこの勧めは、必要でした。なぜなら、クリスチャン生活を始めても、後に離れる人が多いからです。岩地に蒔かれる種のように、一旦熱くなると耐えられなくなるのです。興味深いことですが、伝道集会のフォローアップの働きの中で、多くの人が招きに応じて前に出て来たのですが、その集会の場所で霊的成長が止まってしまうのです。前に出て来たことだけで、それ以上何も前進しませんでした。霊的な歩みが全く進みませんでした。おそらくは、何かの音楽が彼らの心に触れたのかもしれませんが。感情的に動かされたのかもしれませんが。メッセージの中で言ったことだったのかもしれませんが。

たら、何百人の人が、前を出て、競技場に立っているのに興奮を覚えたのかもしれませんが。その群衆と共に前に出るよう動かされたのでしょうか。けれども、主と自分の体験においては、前には出なかったのです。主にすがらなかったのです。

それゆえ、アンテオケの信者に対するバルナバの勧めは大切でした。心を堅く保って、常に主にとどまっているのです。これは、容易ではありません。世はあなたをはずかしめ、あなたの肉が反抗して、悪魔があなたの道につまずきの石を置きます。けれども、主にすぎることへの報いは、とてもすばらしいのです。詩篇の記者が言ったように、「あなたはこの世で豊かにいのちを与えて下さいました。しかし、とこしえのいのちの希望も与えて下さった（訳者注：“You've given me so much here in life but then the hope of eternal life.”ですが、適当な箇所が見つかりません。詩篇133:3参照。）」のです。主にすぎるので、悪魔があなたを妨げないようにして下さい。主にすがって下さい。世があなたを誘惑し、離れさせるようなことがないように。主にすぎることです。決して悔いることはありません。

使徒行伝 12 章 (3 / 24 / 96)

使徒行伝 12 章 1 - 2 節 (Acts 12:1-2)

「なぜ神はそのようなことをお許しになるのか」 # 8611

交読文：詩篇 31 篇

私たちは聖書通読の学びを続け、現在使徒行伝 12 章に入っています。その箇所を今日の午後読み返し、今晚 7 時に集まり主を礼拝し聖書通読の学びをしますので、参加なさるようお勧めします。今晚は、使徒行伝 12 章を学びます。

今朝は、最初の 2 節に注目していただきたいのです。「そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。」と書かれているところです。この「ヘロデ王」とは、実は、ヘロデ・アグリッパ一世でした。彼は、ヘロデ大王の孫で、ヘロデ・アンティパスの息子でした。ヘロデ・アンティパスの父は、バプテスマのヨハネを殺させた人でした。ヘロデ・アグリッパ一世は、なまけ者の、はしにも棒にもかからないような人物でした。若い頃ローマへ行き、かなり無謀な生活をし、ギャンブルに興じ、金を浪費し、大きな借金を抱えて、ローマを去り、たくさんの人々の怒りをかいました。それから、ヘロデ・アグリッパ一世は、家族のところへ行っ、しばしそこに滞在し、金をせしめると、ローマへ戻り、そこで実は、ある期間牢につながれていましたが、カリグラ (Caligula) と友達になり、カリグラが皇帝になったとき、カリグラはヘロデ・アグリッパ一世に、かつて彼が牢に入れられていたとき繋がれていた鉄の鎖と同じ重さの金の鎖を与え、さらにパレスチナの地に来てそこを支配するように、王の肩書きを受けました。ヘロデ・アグリッパ一世の支配はあまり長くありませんでしたが、何せ政治家なものですから、ユダヤ人の機嫌をとろうとしました。ユダヤ人にとって教会が目の上のたんこぶの存在 (訳者注：英語を直訳すると、「肉体のとげ」) であることを知っていましたから、1 節に書かれているように、「教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した」のです。さて、それがユダヤ人の気に入ったのを見て、ヘロデは教会への迫害を続けることにし、ペテロを捕らえ牢に入れ、ペテロも殺そうとしていました。しかし、教会はペテロのために祈り、四人一組の兵士四組の監視の下にいるペテロのところの主の御使いが来ました。ペテロはふたりの兵士の間で寝ており、戸口にも兵士たちがいました。御使いは、ペテロを起こし、「くつをはいて、ついて来なさい。(訳者注：使徒行伝 12:8 参照)」と言いました。鎖が落ちて、彼は御使いについて行きました。二つの衛所を通り、外に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりで開きました。御使いは、ある通りまで導くといなくなりました。御使いが行ってしまうと、ペテロは牢の外にいることに気がきました。ペテロは自分が夢を見ているのだと思っていました。幻だと思っていましたが、ペテロは実際自分が牢の外にいることに気がきました。ですから、今晚どのようにペテロが教会に行ったかを読んで学びますが、教会では祈りがなされていました。しかし、ペテロを救ったのは、あまり信仰のある祈りではありませんでした。少女の口ダが来て、ペテロが門のところにいると伝えると、人々は、「あなたは気が狂っているのだ。」と言ったからです。それについては、今晚見ますが、争点はこれです。これが問題です。なぜ神はこのよこしまなヘロデ・アグリッパ一世がヤコブを殺すのを許されたか。そして、なぜ神はペテロをヘロデの手から救い出されたか。つまり、もし神が奇跡によってペテロを救い出されたのなら、なぜ神はヤコブを救い出されなかったのか。なぜ、ヤコブが殺されるのを許されたか。

神は預言者イザヤに語られたとき、「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」と言われ

ました。神が言わんとしておられることは、「わたしたちは同じように考えないのだ。」ということ。神は全知です。つまり、神はすべてをご存知だと言うことです。聖書は、「神は初めから終わりまでをみきわめておられる（訳者注：適当な箇所が見つかりませんでした。伝道者の書3:11を参照。）」と述べています。神には、予知という強みがあります。ですから、神が何かなさるときには、成り行き全てをご存知なので、神がなさることは正しいのです。さて、多くの場合私がなす決断は仮の決断です。というのは、正しい決断を行ないたいのですが、私には何が正しい決断なのか分からないからです。しかし、自分が受け取った情報に基づいて決断をします。場合によっては私が受け取った情報は、部分的でしかないことがあります。問題の全容を聞かされていないのです。場合によっては誤った情報が与えていることがあります。部分的な情報、あるいは、誤った情報に基づいて決断をしたために、自分の決断を後悔したことがあります。「なぜそんなことをしたのだろう。明らかに間違いだった。」と思ったことがあります。自分が常に自分のやっていることが分かっているわけではないことを、正直に告白します。自分のやっていることが正しいことを望み、信じているのです。もし、私がこれまでに下したすべての決断や、とったすべての行為が正しいものであったのであれば、素晴らしいことです。神については、その通りなのです。神は、「しまった。」と言う必要が全くないのです。（爆笑）神は全てをご存知なのです。ですから、「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」とおっしゃっているのです。ローマ人への手紙11章で、パウロは、「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りたいたいことでしょう。」と言いました。神は、「わたしの道は、あなたには測り知れない」とおっしゃっており、パウロは、「神の道は、私たちには測り知れない」と言っているのです。しかし、測り知ろうと私たちがどれほど時間をかけるかは、興味深いことです。私は理解しようとするのです。「なぜ神は、そのようなことを許されたのか。なぜ神は、私がこのような痛みを経験するのをお許しになったのか。なぜ神は、いま抱えている問題が起こるのをお許しになったのか。なぜ神は、私の人生に苦しみをお許しになるのか。私が抱えている悲しみについて、神はどのような目的をお持ちなのか。」と私は言います。そして、私は神の考え、思い、道を測り知ろうとします。

これまでに、なぜ自分にそのような事が起きたのだろうかと思い巡らした理由があったという人がいたとするなら、それはヨブだったでしょう。神のヨブに対する評価は次のとおりでした。神はヨブについて、「完全で、潔白であり、善を愛し、悪から遠ざかっている（訳者注：ヨブ2:3参照）」と言われました。それが、神が、ヨブについておっしゃったことでした。しかしそれでも、ヨブの人生にあらゆる災難がふりかかることを神はお許しになりました。ヨブが全ての持ち物を失うことをお許しになりました。不運な事故でヨブが10人の子供を失うことをお許しになりました。ヨブが自分の健康をそこなってしまうことをお許しになりました。そして、ヨブは、なぜなのかと尋ねました。「なぜ、私は、胎から出たとき、死ななかったのか。なぜ、私は、生まれ出たとき、息絶えなかったのか。なぜ悪者どもが生きながらえ、年をとっても、なお力を増すのか。」そして、ヨブは、「神の道は、測り知れない（訳者注：ヨブ9:10を参照）」と言いました。ヨブは、とても混乱し、自分の置かれている状況や惨めさ、痛みが理解できませんでしたが、ヨブは「神が私を殺しても、私は神に仕える（訳者注：ヨブ13:15の言い換え）」とだけしか言いませんでした。

私たちの聖書の箇所には、「ヘロデ王は、教会を苦しめようとして、その手を伸ばし、ヤコブを剣で殺した。（訳者注：使徒12:1の言い換え）」と書かれています。処刑人がヤ

コブを殺すために首を切りに来たとき、ヤコブを訴えた人が死に直面したヤコブが並外れた勇敢さと勇気を見て、ヤコブの前に平伏し赦しを請い、イエス・キリストは自分の主でもあると告白し、ヤコブは一人で殉教すべきではないと考え、その人もヤコブの側に立ち、ともに首を切られたのです。しかし、なぜ神はそのようなことをお許しになったのでしょうか。なぜ神は、ヘロデの手からヤコブを救い出されなかったのでしょうか。ヤコブは、ヨハネの兄弟で、イエスの弟子の一人で使徒と呼ばれるようになった人でした。ヤコブは、主から特別な特権を与えられたペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人のうちの一人でした。彼らは、いわゆるイエスの側近グループの中の一人でした。彼らの間で、イエスが御国を設立されたときに誰が一番偉くなるかをめぐり競争がありました。いろいろの機会にこれについて議論がありました。そして、ヤコブとヨハネは自分の母親まで巻き込みました（訳者注：以下マタイ20:20-23参照）。というのも、彼らの母親がある日イエスのところに来たとき、「あなたが御国に入られるときお願いがあります。」と言ったからです。するとイエスは、「どんな願いですか。」と言われると、母親は、「私のこのふたりの息子が、ひとりあなたの右に、一人は左にすわっていただきたいのです。」と言いました。イエスは、「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」と言われました。さて、息子たちはそばに立っていました。彼らは話を聞いていて、「はい主よ。私たちはできます。だいじょうぶ。」と言っていました。しかし、イエスは、「あなたがたはわたしの杯を飲みはしません。」と言われました。イエス・キリストのためにヤコブが殉教し、ヤコブがイエスの杯を飲み、ここにイエスの預言の成就を見ることができます。しかし、なぜ神はこのようなことをお許しになったのでしょうか。なぜ神はペテロを救い出し、ヤコブが殺されるのをお許しになったのでしょうか。なぜ神は、ご自分がなされることをお許しになるのでしょうか。なぜ神は、悪者が繁栄し、義人が苦しむのをお許しになるのでしょうか。様々な試練を通り、人生の中で痛みや苦しみを受けるとき、義人がみな持つ疑問です。

ヘブル人への手紙は、旧約聖書の信仰の人たちについて、信仰によって行なったすばらしいことについて、語っています。33節から（訳者注：ヘブル11章33節）、「彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、— この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。— 荒野と山とほら穴とをさまよいました。」敬虔な人たち、義人たち、信仰の人たち、信仰をとおして火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者を強くした人たちでしたが、しかし、これらの人たちの多くが残酷な拷問の死をとげました。多くの人たちが、牢に入れられ、なぐられ、あざけられ、むちで打たれました。もし、この人たちが信仰の人であったなら、なぜ神は彼らがこのようなことを経験するのをお許しになったのでしょうか。

神は決して義人たちが贅沢な楽な暮らしを約束なさらなかったことに注目すべきです。神は私たちに安楽な暮らしは約束なさいませんでした。イエスは、私たちが義のために迫害を受けるとおっしゃいました。ヨハネの福音書の中で、イエスは、「もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがた

に言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。(ヨハネ15:19-20)」と言われました。それから、イエスは、言われました。「人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。事実、あなたがたを殺す者がみな、そうすることで自分は神に奉仕しているのだと思う時が来ます。(ヨハネ16:2) わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。(ヨハネ16:33)」パウロがルステラで人々とわかる時、人々を励まし、「私たちが神の国にはいるには、多くの苦しみを経なければなりません。(使徒14:22)」と言いました。パウロはテモテへの手紙の中で、「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。(2テモテ3:12)」と書いています。ペテロは、「愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光があらわれるときにも、喜びおどる者となるためです。もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。(1ペテロ4:12-14) 彼らの側では、キリストの悪口が語られますが、あなたがたの側ではキリストは栄光をお受けになります。(訳者注: on their part he is evil spoken of, but on your part he is glorifiedの部分が日本語にはありませんので訳者がその部分を追加翻訳しています。)」と書きました。ですから、義なる生活を送ろうとすると、神に仕えようとすると、世が私たちを憎み、迫害し、世は私たちを歓迎したり敬意を持って受け入れないことがわかると聖書は教えています。

しかし、なぜ神はそのようなことをお許しになるのでしょうか。もし、私が神に仕え神のために生きることを求めているのなら、なぜ神は私が迫害されることを、中傷されることを、嘘をつかれることをお許しになるのですか。なぜ神は私が苦痛や悲痛や深い悲しみを経験するのをお許しになるのですか。その答えは、「私たちにはわからない」です。神は、なぜ神が苦しみや苦痛を経験するのをお許しになるのかの理由を私たちに説明しない選択をされました。アブラハムが3日間筆舌に尽くせないほどの悲痛や深い悲しみを経験することを神が許されたことを私たちは知っています。神はアブラハムに、「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、わたしがなたに示す一つの山の上でいけにえとしてわたしにささげなさい(訳者注: 創世記22:2参照)」と仰せられました。3日間アブラハムは、イサクとしもべといっしょに、ヘbronからモリヤの山へ向けて旅をしました。その3日間、イサクがアブラハムに語りかけるたびに、アブラハムがイサクに語りかけるたびに、アブラハムがイサクを見るたびに、アブラハムの心は裂けんばかりでした。それは、話すべきではないと感じた秘密を持っていたからです。それは、自分の息子が死ぬというものでした。自分の愛する子が自らの手で死ぬことになるというものでした。アブラハムは、なぜ神がそのようなことを自分にお求めになるのか理解できませんでした。しかし、アブラハムは神を信じました。アブラハムはイサクから出る者が自分の子孫と呼ばれる、子孫が出る、メシヤが出るとの神が約束されたことを知っていました。イサクにはまだ子供がいませんでしたから、アブラハムは、神のことばは真実に違いないのだから、神は約束をお守りになるのだから、イサクから出る者が自分の子孫と呼ばれるのだから、神が約束をお守りになるためなら、必要なら神はイサクを死からよみがえらせなければならないと考えていました。神は約束を守るためなら、イサクを死からよみがえらせられると。イサクが祭壇に横たわっているところを、アブラハムが刀を取って手をふりあげたとき、主は、「わかったアブラハム。もうそれで十分だ。やめなさい。見よ、角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいる。その雄羊を取り、ささげよ。今、わたしはあなたの忠実さ、わたしの言葉に対する信頼をみた、わかった。あなたはわたしに対して何も

惜しまないことがわかった。（訳者注：創世記22:12-13参照）」と言われました。そして、神は、私やみなさんも含んだ栄光に満ちた約束をアブラハムにお与えになりました。アブラハムをとおして世界全体に神が祝福をお与えになるとの約束です。アブラハムをとおしてメシヤが来られ、メシヤをとおして、すべての人が祝福を受けるとの約束です。しかし、神はその3日間にわたる心痛や、深い悲しみ、悲痛をお許しになりました。なぜ神はそのようなことをお許しになるのでしょうか。私にはわかりません。

しかし、神はすばらしい、ということは私にわかります。神が私のことをこの上なく愛して下さっていることは私にわかります。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」イエスは、「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」と言われました。ですから、神はすばらしいことが私にはわかります。神が私のことを愛して下さっていることが私にはわかります。神は主権を持たれていることが私にはわかります。神は、みこころによりご計画のままをみな実現されることが私にはわかります。ですから、「なぜそのようなことをなさったのですか。」と私は言えないのです。私は、挑戦したり、疑念をはさんだりすることができません。神は全てのことについて、よい目的を実現されていることが私にはわかります。ですから、「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知って（ローマ8:28）」いるのです。

私のような年齢になりますと、それがとても有利になります。私のような年齢になりますと、先を見るよりもずっと昔を振り返ることができるようになります。人生を逆転させるような出来事の余りに多くがすでに閉ざされ、私は人生の一循環をしました。若かった頃、苦痛、困難、大変なこと、様々なプレッシャーを経験をしました。苦痛や苦しみを通っているときに、なぜ神はこのようなことが私に起こることを許されたのだろうと思いました。「私はあなたを愛しています。あなたにお仕えしようとしていますのに。神よ、なぜこのようなことを許されたのですか。」と。しかし、今は、人生を逆転させるような出来事が閉ざされた利点があるので、神が何をなさっていたのかがわかるようになりました。困難で大変な状況の中で、神の御手を理解することができます。今振り返って見ると、「ああ主よ。あなたは何と賢明だったのでしょうか。今、あなたの目的がわかります。あなたの御計画がわかります。あなたが私を何のために準備して下さっていたのかわかります。私を練り清めるために、かどの出っ張りを落として下さっていたのかわかります。人生で苦痛であったときに、あなたが何をとお考えになっていたのか、今はわかります。」と言うのです。「主よ、もし、教えて下さってさえいけば、あなたはいらいらせずに済みましたものを。もし、あなたがそのようなお考えでしたのなら、これがあなたの御計画であったのなら、それを知ってさえすれば・・・」とよく言います。自分の言ったことに対して、主に対して思ったことについて、主に謝らなければならなかったことがよくあります。それは、人生が一循環してわかるからです。神は私たちの内で、永遠の目的を行なって下さっています。難しいのは、神のお考えは永遠ですが、私の考えは一時的であることです。ですから、神の思いは、私の思いと異なり、神の道は、私の道と異なるのです。神は常に永遠の観点から、働いておられます。私は常に今、現在自分への影響の観点から物事を判断します。今の痛みやジレンマといった観点から。しかし一方、永遠の目的をお持ちである神は、私の人生の中で神の永遠の目的を達成するために、私が痛みや困難を通ることを今はお許しになるかもしれません。自分では理解できない人生の中での苦痛な困難な経験をとおして、それらが神へと追い詰めたために、どれ程多くの人が神の所に連れてこられたことでしょうか。それで、それらの人たちは今日救われ、永遠に主のものとなっているのです。それは、困難によって神を信じるように追い詰められたからです。

ですから、私たちには理解できない状況に直面するときに、神がすばらしい方である、神は自分のことを愛して下さっている、神は主権を持っておられる、神がよい御計画を実行して下さっているとわかることができる、信頼できる、しっかりとした基を持っていることが重要です。神は、「わたしはあなたがたのために立てている計画（訳者注：英語では「計画」ではなく「思い」）をよく知っているからだ。」と言われます。私には神の計画（訳者注：英語では「計画」ではなく「思い」）はわかりません。しかし、神は、「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。－ それはわざわざいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたに栄光に満ちた将来を備えている。（訳者注：エレミヤ29:11参照）」とおっしゃいます。従って、答えは理解することにあるものではありません。答えは、任せることと信頼することです。ソロモンは、「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。（箴言3:5-6）」と言いました。死ぬことなくエノクが天に移される前に、エノクには神を喜ばせたという証しがありました。ヘブル人への手紙の記者は、「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。」と述べています。神の道を理解することができないかもしれませんが、あなたが神に信頼することを望んでおられます。理解することができないかもしれませんが、あなたが神に任せることを望んでおられます。それが、信仰です。神に栄光をお返しするのは、このような信頼と信仰です。信頼と完全に任せることによってのみ、平安を経験します。状況はあなたを常に動揺させます。「ああ、神よ。あなたが何をなさっているかわかりませんが、あなたが私を愛して下さっていること、あなたがすばらしい方であること、このような状況であっても、あなたはよい計画を立てて下さっていることはわかります。私は、ただ主よ、あなたにお任せします。あなたが、最良であると思っていられしやることをなさって下さい。」と言うまで、常にあなたの内側はおだやかでない状態が続きます。そして、私はただ任せるのです。私ができるように任せるところに至らなければ、頻りに夜に寝返りを打ち、目が覚めると、頭の中を考えがぐるぐる巡り、なぜかしらと思い始め、眠れず、悩みます。そのように任せるところに至らなければそうです。神の御手の中にあります。神は全てをご存知です。神はなぜなのかご存知です。神は計画を実行なさっています。神は、これについて計画をお持ちです。よい計画をお持ちです。どのような形であろうと、私の永遠の望ましいこと、益のためです。神の御手の中にあります。そして、私はイザヤが、「志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。」述べたことを経験するのです。そのような平安を経験するようになるのです。「だいじょうぶだ。神が御計画をこの中で実行して下さるのだ。そして、これを通れば、改善が期待される。」ヨブは、様々な試練の最中に、「神は私を調べられる。私は純金のように、出てくる。（訳者注：ヨブ23:10参照）」と言いました。ペテロは、「信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって(1ペテロ1:7)」と述べました。パウロは、「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ8:18）今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。(2コリント4:17)」と言いました。私がかここにいるのはほんの短い期間です。神は、私たち一人一人に地上での一定の短い期間を許しておられます。この地上での短い期間において、神は永遠のために私たちを準備して下さっているのです。神にとって、永遠の福利の方が一時的な福利よりずっと重要です。もし神が試練や苦しみ苦痛を通して私のために永遠の益を生み出して下さることができるのであれば、神は永遠を考えて下さっているのですから、完璧な永遠の御計画を遂行するために、神は一時的に嫌なことをお許しになります。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているから

だ。－ それはわざわざではなくて、よいものだ。わたしは、予期される栄光に満ちた将来にあなたを入れるために、あなたの将来のための計画を考えている。」と神は言われます。

私たちが理解していないことへの解決は、私たちの道を主に信頼し、任せることです。ペテロは、「ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は・・・」と言いました。そうです、苦しみは神のみこころであり得るのです。「ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい。」それが鍵となる言葉です。「お任せする (commit) 。」主よ、あなたの御手の中にあります。あなたにお任せします。主は真実であられる創造者です。

今日の午後みなさんに繰り返し詩篇31篇を読むことをお勧めします。この詩篇は今朝交読文で読んだ詩篇です。この背景をもとに、また読んでみて下さい。詩篇の記者は、自分の持っている問題やトラブルについて不満を述べていますが、解決が、任せることと信頼にあるとの結論に至ったことがわかります。私はあなたに信頼します(31:14)、私の道をあなたにゆだねます(31:5)。今日そこにあなたの解決があるのです。

使徒行伝 13 章 (3 / 31 / 96)
使徒行伝 13 章 38 - 39 節 (Acts 13:38-39)
「罪の赦し」 # 8612
交読文：詩篇 32 篇

私たちは、創世記から黙示録までの聖書通読の学びを続けていますが、使徒行伝 13 章までできました。今朝は、38 - 39 節に注目していただきたいのです。今晚、13 章全体を勉強しますが、今朝は 38 節と 39 節を見てください。

ピシデヤのアンテオケにおける安息日のことです。このアンテオケは、今日のトルコにあります。パウロとバルナバは、第一次伝道旅行をしていました。地中海東部の小さな島々で宣教をした後、本土にたどり着きました。本土からトルコへ、そして、彼らが遣わされたシリアのアンテオケとはまた別のピシデヤのアンテオケまで来ました。安息日に会堂に来て、聖書が朗読された後、パウロがラビの認証を受けていたので、彼ら（会堂の人たち）は、パウロが聖書を分かち合うように招きました。そこで、パウロは、彼ら（イスラエルの人々）の歴史の話を始めました。神が、彼らを民として呼び出されたこと、王を与えられたことをです。けれども、それから、神のみ心になつた二番目の王ダビデを神が立てられたことを話しました。神がダビデに約束されたこと、すなわち、ダビデの子孫のうちのひとりが神の御座にとこしえに座すことを話しました。ダビデはこのことをメシヤ、永遠の王がダビデの王座に着くことであると正しく解釈しました。パウロは、それから、このダビデの王座に着座される方メシヤが救い主となることを、神がこの約束を守られてメシヤが来られたことを示しました。エルサレムに住む人々とその指導者たちが、ピラトがメシヤを殺すことを望んでこの方を死罪に定めたことで、メシヤについての預言を成就させてしまったことを語りました。パウロは、十字架における死もまた預言の成就であることを主張しています。イエスは墓に納められたが、神がこの方を死者の中からよみがえらせたことを、パウロは彼らに伝えました。復活の後、イエスが生きておられることを多くの弟子たちが目撃し、彼らはこの真実の証人であることを伝えました。それから、神が父祖たちに約束されたこと、すなわち「この体を朽ち果てるままにはしておかれない（訳者注:13:35参照）」ことを、神はイエスを死者の中からよみがえらせたことで成就された、と伝えています。聖書の背景を十分に提示し、イエスのすべてのことが聖書の成就であったこと、この方が行なわれたことがすべて彼らの聖書に前もって書かれていることを示して、このことを確認した後、「あなたがたに罪の赦しが宣べられているのはこの方による」と言いました。

詩篇の記者は、「幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。」と言いました。ダビデは、罪を告白する前に自分が通ったみじめな思いを語りました（訳者注：交読文の詩篇 32 篇は、ダビデが姦淫の罪を犯してナタンに罪を指摘され、罪を告白した後、罪の赦しの宣言を受けた時の詩篇であると個人的に思う、とチャックは言いました。）彼は、自分の罪によって起こった罪責感（訳者注：正確には、「罪責複合 (guilt complex)」) をまだ持っていたときに、「御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり」と言いました。昼も夜も安心することなく、罪の責めを感じていました。内側は、「夏のひでりでかわききった」と言いました。罪の意識は、文字通り人をおかしくさせることができます。このことがわかっているので、現代の教育者、社会学者、心理学者は、罪意識を人から取り除こうとしました。哲学者も（この試みに）参加しました。彼らは、次のように言います。「本当の善や悪は存在しない。これが正しいか、間違っているかどうして分かるだろうか。個人の意見でしかない。すべては、状況に左右され、文化が持つ道徳観に左右される。ある文化で完全に許容されていることが、別の文化では禁じられている。しか

し、その文化の中で完全に許容されているものについては、罪責感や罪意識がない。これは、普遍的な善悪が存在しないことを証明している。すべては、文化にかかわることであり、個人に左右される。」さて、増えているX世代（訳者注:1980年代中頃から後半の繁栄にとり残され、失業と不況に苦しめられた世代、米国では共和党、英国ではサッチャー政権の時代の若者世代）を見ますと、こうした哲学や教育は、今日の社会で逆効果をもたらしています。こうした子供たちが、強力なライフルを持って車に乗り、運転し、路上で無差別に誰に対しても発砲しているのは、一体どうしたことかと思えます。捕まえられても、後悔の念を全く見せることがないのです。彼らには悪いことをしている意識が全くないようです。こうした傾向を研究した社会学者たちは、最近のことについて多くの書物を書き、私たちが今突入しつつある新しいパラダイムに関して、私たち牧師や伝道者は説教の内容を変えなければいけないことを教えています。なぜなら、過去においては、罪責感をもてあそび、イエスが罪を赦すことができ実際に赦して下さるので、罪意識から解放される、と私たちは教えていたが、新世代は罪意識がない、と社会学者らは言うのです。新世代の人たちは、後悔の念もなく何も感じないで、こうした恐ろしいことをすることができる、と。従って、文化的背景の全パラダイムが変化したことを認識して、私たちは福音に訴える方法を別に探さなくてはならない。なぜなら、罪の意識を持たない若者に対し、罪があると言うことはできないからだ、と言います。実際このことから、私たちは、なぜこのようなおぞましい犯罪が今日行なわれるのかがわかりますし、人間がなぜこのようなことをできるのか、と考えてしまいます。それは、彼らの頭には、善悪が存在していないからです。良いこと悪いことなどは存在しないで、自分が状況をどう感じるか、どう理解するか、すべては相対的だからです。けれども、私たちはみな、善悪の意識がなくては、どんな社会秩序をも保つことはできないことを理解しています。つまり、何かをした時に、これをするのは間違っていたという意識です。

国々の歴史を見て下さい。国は、道徳の基盤、基礎を失った時にいつも滅びました。必ずしも外側からではないのです。外側の勢力に征服されるのではなく、多くは道徳基盤があまりに腐敗した時に内側から滅んだのです。自ら没落したのです。今日のロシアには、大きな問題があります。共産主義から民主主義へ、厳格な統制経済から自由経済に移行しようとの試みがなされています。移行することがこんなにも難しくなっている主な理由の一つは、まさに共産主義下での無神論的な境遇です。善悪を排除しているので、神が存在せず、普遍的な善悪がないのです。こうした人々は、民主主義社会に与えられている自由への心構えができていません。従って、彼らは、汚職と腐敗に悩まされていて、移行できないでいるのです。このため、多くの、実は大多数のロシア人は、共産主義の下に戻りたいと望んでいます。なぜ自由になれるのに、全体主義的な統制下にいたいのか、私たちに理解できません。しかし、理由は、なにも指針がなければ、パラメーターがなければ、この自由を使って、この自由を乱用して、完全に腐敗するからです。自分の行なっている腐敗に対する良心がないからです。従って、指針がなければ、これは良いことでこれは悪いことだという意識がなければ、社会が存在しえないことがわかります。無論、ロシア人は大きな間違いをしたのですが、それは私たちアメリカ合衆国がこの国の歴史を書き直して犯している間違いと同じものなのです。私たちはアメリカの偉大さを自由企業制のおかげだと思ったり、アメリカが民主主義の社会であるからと思っています。これは、間違いです。自由企業制のために偉大なのではありません。自由企業制のために繁栄しているのではありません。民主主義社会だから偉大なのではありません。アメリカの偉大さは、神の下に一つの国家を設立しようとした建国の父たちに直接起因しているのです。このことは建国の父によって認められ、ここ2、3年前まで最高裁判所によって認められていたのです。最高裁判所で判決が下るとき、アメリカ合衆国はキリスト教国であるという宣言がな

されていたのです。最高裁判所でそのような宣言が行なわれていたのです。けれども、歴史を再解釈し書き直して私たちは神を排除しようとしたが、（その結果）、この新しい社会の中に腐敗、道徳の破壊、政府の衰退が見られるようになったのです。もう政府を信用できなくなるところまで衰退しました。なぜなら、人民の、人民による、人民のための政府と捉えられなくなったからです。そこには、役職に執着しようとする個人の利得を見ることができます。ですから、あらゆる種類の気違いめいた予算を出費することは、いや削減することはできなくなっています。その余りにも多くが単に政治的な道具だということで、そのままにされているのです。政治的駆け引きがかかわっているので、資金が出され、そのままにされているのです。今でも必要だというのではないのです。ずっと前に必要がなくなったのです。もう必要ないものを残しているのです。取引がおこなわれ、特定の法律が通過したため、残っているのです。（訳者注：米国でも多くの政治家は特定利益団体から政治献金を受け、自分の利益を守るため、必ずしも必要ではない歳出項目を確保する法律を制定する傾向にある。）

興味深いことは、どんなに道徳の相対性を語っても、とても冷酷で非情な外見を身に着けることができるかもしれませんが、感情を持たずに、後悔の念もないかのごとく無情に冷たい視線で見つめることができるかもしれませんが、内側は違っているのです。夜、自分独り、仲間から離れて、独りでいて、光が消えて、枕を下にして寝ていると、自分は間違ったことをしたという感覚があるのです。自分は、間違いを犯した、と。パウロは、私たちの心に書かれている神の律法について語っています。「彼らの良心もいっしょになってあかかし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしていません。」と言っています。自分の良心や思いで責められるか、正当化して自分のしたことを弁明するかのどちらかをしますが、間違っていたということは気付いているのです。

人間の最大の必要は、罪の赦しです。赦されない罪は、詩篇の記者を苦しめたように、あなたを苦しめます。赦されない罪は、あなたに死をもたらします。神は、すでに罪人に死罪の判決を下されました。神は、「罪を犯した魂は、必ず死ぬ。〈口語訳〉」と言われました。「罪から来る報酬は死です。」と言われました。これは、肉体の死以上のものです。これは、霊的な死です。肉体から意識が離れることが肉体の死ですが、神から意識が離れることは霊的な死です。罪の中に生きる者は、肉体の死を体験しますが、それで終わりではありません。聖書は、「人間には、一度死ぬことと死後に」、死が終わりではないのです。「死後にさばきを受けることが定まっているように」と言っています。聖書は、ヨハネが書いていますが、彼は、「大きな白い御座を見た。死んだ人々が、大きな者も、小さい者も、御座の前に立ち、これらの書物に書きしされていることに従ってさばかれた。」「小羊のいのちの書にしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」「これが第二の死である。」（訳者注：黙示録20:11-15参照）と言いました。後にヨハネは、「この第一の復活にあずかる者は幸いな者である。この人々に対しては、第二の死は、何の力も持っていない。（訳者注：黙示録20:6参照）」と書きました。つまり、彼は、人が二回死ぬことを話しているのです。一回目は肉体の死で、二回目は霊的な死で、永遠に神から離れるのです。霊的な死、第二の死です。あなたは、いや、この火の池は比喩的な表現だ、と言うかもしれませんが。神学者は火の池を否定して、これは比喩的表現で文字通りではない、と言います。人間の意見に永遠の定めを賭けたいですか。それとも神のみことばに賭けたいですか。得るべき天国と避けるべき地獄がなかったら、神はご自分の御子に、十字架上の拷問の死を許されなかったでしょう。しかし、すばらしい福音のメッセージは、イエス・キリストによって罪の赦しを持つことができる、ということです。ですから、パウロは基盤を提示し、イエスの生涯が神の約束の成就であること、成就した預言があることを示し、このイエスによって神が私たちに罪の赦しがあることを宣べ

伝えているのです。

けれども、それだけではありません。パウロは続けて、「モーセの律法によっては義と認められることのできなかつたすべての点について、信じる者がみな、この方によって、義と認められるのです。（訳者注:13:39の新改訳の引照部分を参照）」と言いました。罪の赦し以上のものとは、義と認められることであり、これらは別々であり、性質が異なるものです。法に違反する罪を犯した時、法はあなたを正しいと認めることはできません。法は、ただあなたを罪に定めることしかできません。あなたは裁判官の前に連れてこられて、告訴文が読まれて、この法規に違反した、刑法典に違反した、ということが宣言されます。刑法典の中に、あなたがしたことを正しいと認めるものはありません。あなたは有罪なのです。あなたが罪を犯したこと、罪の事実を変更するものは何もありません。私たちが罪悪感を感じる時、多くの場合私たちが傷つけたかもしれない人の所に行き、告白します。「なんでこんな事してしまったかわかりません。魔が差したのでしょうか。申し訳ありません。どうぞ、お願いします、赦していただけますでしょうか。お赦し下さい、申し訳ございません。もう二度といたしません。なぜこんなことをしたのか自分でも分からないのです。」その人が、恵み深い人なら、「わかりました、赦しましょう。」と言います。人は赦してくれるかもしれませんが、あなたは依然として自分を赦せないのです。あなたは精神的に自分を痛め付けて、自分を苦しめることがよくあります。「なんで、こんなことをしてしまったのか。こんな代償を支払わきゃいけないんだ。なんで、こんなことをしてしまったのか。」彼らが、赦しましょうと言っているのに、「しまった。悪いことをした。こんなことをして人を傷つけた。」という感覚が、苦悩が、ずっとぶら下がっているのです。

それで、私は赦し以上のものが必要になるのです。私は、義と認められることが必要なのです。義と認められるとは、罪から解放されることです。無罪を宣言される事です。イエス・キリストによって、すべての告発に対し、神は私たちをすべての告発から解放し、無罪を宣言して下さいました。あなたは言うでしょう。「ちょっと待ってよ！義なる神がどうやって正しくすべての告発を払い去ることができるのか。正しい神がどうやって、罪があるのに罪がないとすることができるのか。」そこで、聖書は説明しています。神が私たちの罪を取って、ご自分の御子にそれを負わせたことを。つまり、イエスが私たちの罪を負って、私たちの罪のために死なれたのです。この方が私たちの罪の報いと罰を負われたのです。ですから、神が私たちのすべての咎をこの方に負わせて、私たちの罪がすでにさばかれました。イザヤが53章で「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」と言った通りです。53章のもう少し先の所に、この預言者は、「彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ」と叫びました。それから、また、「わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし」と言いました。イエス・キリストによる義認の約束は、旧約聖書の中で与えられていました。モーセの律法によってできなかつたこと、旧約では知ることのなかつたことは、この義認ですが、これは新約の働きです。これは、イエスが私の責めを負われたこと、私の罪を負われたこと、私の罪の罰を負われた事実によって可能なのです。それで、私がこの方を信じて、私は義と認められ、私のしたことすべてが無罪であると神に宣言されるのです。このことを通して、私は、自分がしたことによる罪の責め、罪責感から解放されるのです。

聖書は、「神は、東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離れさせる。（訳者注：詩篇103:12参照）」と教えています。どれだけ遠いのでしょうか。長い距離ですね。神が、北が南から遠く離れているように、と言われなくて、よかつたと思われませんか。なぜなら、これはわずか1万2400マイル（訳者注：約

1995.1.6キ口) しかないからです。これはちょっと近すぎます。ここには、「東が西から遠く離れているように」と書いてあります。北に行けば、北極点に到達した瞬間から南に行ってしまう。南に行けば、南極点に到達した瞬間から北に行ってしまう。けれども、今日の午後、東の方向に行き始めたら、一生ずっと東の方向に行っていて、それでも東の方向に行っているのです(笑)。西の方向に行き始めたら、一生ずっと西の方向に行っていて、それでも西の方向に行っているのです。それで、神は、「東が西から遠く離れているように」と言われているのです。ああ、主よ、ありがとうございます。私たちの罪をそこまで私たちから遠く離して下さいました。

その安息日に、パウロは、アンテオケの会堂にいる人々に、神が守られたすばらしい約束を、神が救い主イエス・キリストを遣わされ、この方が聖書の預言を成就されたことを伝えていました。しかし、彼は警告を与えました。聖書にもう一つの預言があって、この預言の成就によってあなたがたが滅びないように気をつけなさい、というものでした。彼はハバククの預言を与えています。この預言者を通して、神は、「わたしはおまえたちの時代に一つのことをする。それは、おまえたちに、どんなに説明しても、とうてい信じられないほどのことである。」と言われました。つまり、神は、わたしは事を行なうが、あなたがたは教えられているのに信じない、と言われているのです。パウロは、「神が行なわれることを私は伝えていますが、あなたがたのうちの一部は、滅びるのです。そして、このことはハバククの預言の成就なのです。」と言ったのです。神が一つのことを行なわれたのに、彼らは信じられないので、伝えられたのにもかかわらず滅びる、ということなのです。神の贖いのわざが、イエスを信じれば、すべての点について義と認められる、という福音のメッセージが、あなたがたに伝えられています。

このメッセージを拒否することは、自分を大きな危険にさらすこととなります。なぜなら、あなたはいつか神のさばきに服すことになるからです。いのちの書にあなたの名は書かれていません。従って、聖書は、次のように告げています。「ただ、さばきと、逆らう人たちは焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかないのです。だれでもモーセの律法を無視する者は、二、三の証人のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死刑に処せられます。」筆者は続けて次のように言いました。「まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい。」あなたはイエス・キリストに背いたので、この方の血、つまり死を何とも考えないのなら、あなたがそれによって心を動かされ、感動することがなければ、神の御霊が語られたことを拒否するのであれば、「見なさい。これが正しい道です。これが正しい生き方です。これが神が望まれている生き方です。」という神の御霊の声を拒否するのであれば、どんなに重い処罰に値するのでしょうか。筆者は、「私たちは、『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする。』、また、『主がその民をさばかれる。』と言われる方を知っています。」と言いました。結論として、次のように言っています。「生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。」聖書は、イエスのことを岩として語っています。こう語られました。「この石(岩)の上に落ちれば、だれでも粉々に砕け、またこの石(岩)が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛び散らしてしまうのです。」神は、あなたの罪の赦しを与えられました。あなたの行なったことに対して何でも義と認めるようにされたのです。罪に定められることから完全に解放されることも。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」神の重い御手を経験されている方は、あらゆる罪意識を感じている方は、とてもいやな気持ちになっている人は、なぜ解放されたいと思わないのですか。あなたのそむきが赦されて、あなたの罪がおおわれる喜びと祝福と幸福が持てるのに、なぜみじめな状態に続けたいのか私は理解できません。今日、神

が与えようとされているのは、これです。これを拒否することは、神が備えて下さっている永遠のいのちの唯一の望みを拒否することです。

使徒行伝15章(4/14/96)

使徒行伝15章1-11節

「恵みによって救われた」#8613

交読文：詩篇139篇

私たちの聖書通読の学びは、今週使徒行伝15章に来ました。使徒行伝15章の前半のテーマは、救いです。人は救われるために何をしなければならないか。救われる意味は何か。この用語はクリスチャンの間で頻繁に使われるので、私たちは結構よく知っていますが、クリスチャン用語を良く知らない人に話す時に、私たちが「救われた」と言っても、彼らは私たちが何を言っているのかわからないのです。「新生」とか「義認」とか話しても、私たちが何を言っているのか何の概念も考えもないのです。

私たちは何から救われたのでしょうか。過去の罪の奴隷状態から救われたのです。私たちは、いったん罪の触手に捉えられ、握られて、この力で抑えられると、自分では脱出できなくなります。私が小学校6年生のとき、引き潮の時にリンカーンに遠足に行きました。そこで、海洋生物をいくつか見ました。いかを見つけたので、捕まえました。すると、いかは触手(訳者注：足のように見える部分)を私たちの手にかからせてきました。その部分にはすべて吸盤があります。小さい男の子たちにとっては、わくわくする瞬間です。みんな走りよってきて、触手ははずそうとするのですが、一本とったと思ったらすぐに、またもう一本がからまってくるといった風でした。いかをはずすのはとても面白かったです。いかには何本も触手があって、それぞれが吸盤で覆われていたからです。罪もこれとよく似ています。罪も触手を伸ばし、からまってきます。自由になろうとするのですが、一つの問題、あるいは局面、習癖から自由になろうとすると、すぐに別のものにまわりつかれて、奴隷状態になってしまいます。聖書は、「滅びへの隷属(新共同訳ローマ8:21)」と述べています。罪の力にしっかり捕まえられていることです。ですから、私たちは、かつて私たちを奴隷状態にしていた罪の力から救われたのです。

そして、罪の結果から救われたのです。さて、罪はその性質が破壊的です。罪はあらゆる面において、破壊したり、傷つけたり、害を及ぼす能力があります。しかし、私たちは、自分の罪の結果から救われたのです。聖書は、「罪から来る報酬は死です。(ローマ6:23)」と教えています。罪の究極の結末は、神から離されることです。それは、永遠に神から離されること、霊的な死です。罪を犯すと、神の怒りとさばきを受けます。パウロは、「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。(ローマ1:18)」と述べています。救われたと言う時は、もはや自分の罪の結果を、神が罪人に宣告されたさばきを受けることはないことを言っています。このさばきから救われたのです。

救われたと言う時は、その人はかつて失われていたと仮定するのが自然です。かつて失われていたのではないなら、どうして救われることができましょう。イエスは言われました。「わたしは、失われた人を捜して救うために来たのです。(ルカ19:10)」しかし、失われたとはどういう意味でしょうか。それは、この世にあって、望みもなく、神もなく生きていくことです。つまり、生きることの本当の意味を知らないことです。知っていると思っていらっしゃるかもしれません。しかし、本当のいのちは、キリストにあります。パウロは、「私たちのいのちであるキリストが現れると(コロサイ3:4)」と言いました。また、「私にとっては、生きることはキリスト(ピリピ2:21)」と言いました。聖書は、「御子を信じる者が、・・・永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ3:16) 御子を信じない者は、いのちを見ることなく(ヨハネ3:36参照)」と教えています。新しく生まれるまで、いのちがどのようなものであるのかすら、わかっていないのです。新しく生まれると、御

霊による神のいのちがわかります。失われるとは、望みもなく、神もないことです。ということは、永遠に地獄で過ごす運命にあるということです。

これらは、救いの消極的な面ですが、救いにはとても積極的な面があるのです。積極的な面は、神との交わりの中に生きて、宇宙の創造主と、意味ある個人的な関係に入ることが何かを知ることです。神を知ることが可能です。あなたが神を知るようにご自分を示して、あなたが神と親密な関係に入るようにして下さいました。ギリシャ語の言葉はコイノニアですが、これは近しい親密な交わりという意味です。従って、救われるということは、創造主である神と近しい親密な交わりに入るということです。神と歩むこと、神と話すこと、意味ある関係の生活をするということです。神との交わりは、完全な満足感、充足感をもたらします。それは、自分の存在のまさに根本的な目的を発見したからです。神との交わりは、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びをもたらします。さて、罪に束縛されている限り、この神との交わりは可能ではありません。「もし私たちが、神と交わりがあると断言しながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって真理を行なってはいません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。(1ヨハネ1:6-7)」とヨハネは述べています。救われるということは、神の御国の栄光、不思議、すばらしさの中で、私たちが永遠に天国で過ごすように定められていることです。聖書は、「あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。(詩篇16:11)」と述べています。ユダは、イエスが私たちに、「傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせて(ユダ24)」下されると述べています。イエスは、弟子たちに永遠のいのちを約束されました。次のように記されています。「神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。・・・御子を持つ者はいのちを持っており(1ヨハネ5:11-12)」

使徒行伝15章で起こったことは次の通りです。アンテオケにある異邦人の教会に、エルサレムから来たあるユダヤ人の人々で、もとパリサイ人であった人たちがいました。アンテオケは喜びのある教会でした。人々はただ主を愛し、主を礼拝していました。しかし、こうした人たちが来て、「割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。(15:1)」と言いました。この教えによって分裂をもたらしました。それでパウロが来て、この問題について大きな議論、論争になりました。激しく衝突したのです。それで、エルサレムに上って行って、この問題を解決しようということになりました。それで、これらの人々の何人かをエルサレムに連れて行きました。それは、エルサレムの教会の指導者の前で、救われるためには何が必要か、人はどのようにして救われることができるのか、決着をつけるためでした。さて、基本的に、ユダヤ人は、ユダヤ人でなければ救われることはできないと考えていました。救いはユダヤ人のためだけであると考えていました。ですから、救われる唯一の道は、ユダヤ人になることでした。ユダヤ人になるためには、割礼を受け、バプテスマを受け、モーセの律法に同意しなければなりません。これらの人々は、基本的にはこのような立場でした。一方パウロは、ただイエスを信じ依り頼むだけで救われ、神の恵みのゆえに、イエス・キリストを信じる信仰によって救われると宣教していました。それで、彼らは、どのようにすれば救われるのかの問題を解決するためにエルサレムに戻ってきました。

基本的に、ユダヤ教徒主義者、パリサイ人たちは、イエスを信じさらにモーセの律法を守らないと救われないと言いました。つまり、救われるためには、信仰と行ないが必要であると述べていたのです。今日、多くの集団があり、そのほとんどは異端ですが、彼らはイエス・キリストへの信じる信仰と行ないによって救われると言います。常に行ないを付

け加えるのです。救われるために行ないが必要なのでしょうか。自分の救いを働いて得ることができるのでしょうか。たくさん祈って、たくさん聖書を読んで、多くの人に証して、すなわち働いて救いを得ることができるのでしょうか。それとも、自分の救いは、イエス・キリストを信じる信仰だけによるものなのでしょうか。ずいぶん前に、ある青年が私のところに来たことがありました。この人はずっと前、高校生の時に、私の日曜学校のクラスに来ていた人でした。互いに挨拶をすると、この人は、「もう私はクリスチャンではありません。私はモルモン教徒です。」と言いました。この人がモルモン教の教えを全て知っているわけではないと察しがつきました。モルモン教徒は、自分たちのことをクリスチャンだと感じているのですが、この人は、自分はクリスチャンでなくモルモン教徒だと言ったからです。私は、「それは面白いですね。では、あなたの救いと永遠のいのちの望みは、何を基にしているのか教えてください。あなたの望みの基は何ですか。救われて永遠のいのちを得たいと望んでいるなら、その望みの基は何ですか。」と言いました。その人は、「イエス・キリストを信じる信仰と、継続してモルモン教会の会員であることです。」と言いました。この人に言えることは、たくさんの人に言えることなのです。イエス・キリストを信じる信仰に加えて他のものに依り頼んでいるのです。「継続してカトリック教会の会員であること。」だったり、「継続してモルモン教会の会員であること。」だったり、街角で、「めざめよ！」の雑誌を販売することだったり、いつもイエス・キリストを信じる信仰だけではなく、何か他のものがついてくるのです。この人たちの永遠のいのちの望みの基に、信仰と行ないが混じっているのです。多くの人が、救いのために行ないをしなければならぬと教えられて導かれています。そして、「聖書は、『行ないのない信仰は、死んでいるのです。(ヤコブ2:26)』と教えています」と言うのです。たしかに、聖書はそれを教えています。真の信仰は救い、真の信仰は行ないをします。けれども、行ないは私を救うことをせず、ただ私の信仰が本物であるというしるしでしかないのです。行ないによって救われることはできません。もしそうなら、神があなたに何か借りがあることになってしまいます。神には私たちに何の借りもありません。従って、救いは、信仰のみによるものなのです。しかし、真の信仰は、私の行ないに現されません。行ないは私を救いません。行ないは、ただ私の信仰が本物であることを現しているにすぎないのです。もし、私が行ないによって義と認められるのであれば、キリストが私のために死ぬ必要はなかったのです。

それで、彼らは、この救いの問題に決着をつけるために、エルサレムに戻ってきました。律法を行ないによるのか、それともイエスを信じる信仰によるのか。ペテロは、最初に証したうちの一人でした。異邦人が信じるように、異邦人に福音を伝えるようにと神がお選びになったのは、ペテロでした。異邦人が信じた時に、彼らが救われたのは明白でした。それは、神が彼らに聖霊の賜物をお与えになったからです。しかし、神が彼らに聖霊の賜物をお与えになったときに、誰もバプテスマを受けてはいませんでしたし、誰もモーセの律法を守ってはいませんでした。神はユダヤ人と異邦人の間に何の差別もつけられませんでした。それは神が彼らの心を信仰によってきよめてくださったからです。パウロは、この真理をローマ人への手紙の中で詳細に述べています。3章9節から始まっています。「では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまざっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシャ人も（訳者注：英語では「ギリシャ人」のところ「異邦人」になっています。）、すべての人が罪の下にあると責めたのです。それは、次のように書いてあるとおりです。『義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。』『彼らののどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。』『彼らのくちびるの舌には、まむしの毒があり、』『彼ら

の口は、のろいと苦さで満ちている。』『彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲惨がある。また、彼らは平和の道を知らない。さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。(ローマ3:9-19)』つまり、パウロは、律法の目的は、私たちが神の前に罪があることを知るようになるためのものだと言っているのです。「なぜなら、律法を行なうことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、(訳者注：英語では「ユダヤ人と異邦人の間には」が入っています。)何の差別もありません。(ローマ3:20-22)』つまり、ユダヤ人でさえも同じ方法でなければいけないとされているのです。律法ではなく、律法による行ないではなく、イエス・キリストを信じる信仰によらなければならないのです。「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。(ローマ3:23-24)」「それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。(ローマ3:27)」「私はこのような者だ」とか、「私はこのようなことをした」とかどのようにして言えるのでしょうか。パウロは、「それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行ないの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。(ローマ3:27)」と述べています。なぜなら、私は自分の救いのために行ないをすることはできないのです。救いのために私がしたことを誇ることがないためです。ただできることは、神に私への恵みを感謝することだけです。そして、パウロは結論として、「人が義と認められるのは、律法を行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。(ローマ3:28)」と述べました。

そして、ペテロは最後に、「私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。(使徒15:11)」と言いました。ですから、ペテロは、神が異邦人に福音をお伝えになったことを語っているのです。「あの人たちは、信じました。私たちがイエス・キリストを信じる信仰によって救われたのと同じように、信仰によって救われたのです。」パウロは、エペソ人への手紙の中でこう言いました。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることはないためです。私たちは神の作品であって(エペソ2:8-10)」つまり、神が私にして下さったのは、私が神にしたことのゆえではないということです。神が私にして下さったこと、それが重要なのです。私たちはとかく、自分が神のためにどのようなことをしたかを吹聴して回りますが、それは全く価値がないのです。神が私にして下さったこと、それに価値があるのです。本当に重要なのはそれです。そして、パウロは、続けて述べています。「ですから、思い出して下さい。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々とよばれる者であって、」これは軽蔑的な言い方です。「そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」失われていたのです。「しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。キリストこそ私たちの平和であり、ふたつのものを、私たちユダヤ人と異邦人を一つにし、隔ての壁を、ユダヤ人と異邦人の間にかつて存在していた仕切りを打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものを、ユダヤ人と異

邦人をご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり。また、両者を一つのからだとして、十字架によって和解させるためなのです。それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました。私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができます。(エペソ2:11-18)」第一回教会会議は、神が、恵みのゆえに、イエス・キリストを信じる信仰によって、行ないによらないで、私たち異邦人に救いを与えられた、という判断でした。救いは、神の御子イエス・キリストを信頼し、信じる者に無神が無償で与えて下さる賜物です。かつて失われ、神のさばきを受けるように定められていた私たちが、イエス・キリストを信じる信仰によって救われ、神とのすばらしい交わりを持てるようになったのです。これが、福音です。このようにして、問題が解決されました。

さて、先にも言いましたように、真の信仰は、行ないに現れます。信仰が真の信仰であるなら、本当に信じるのであれば、人生が変わります。あなたはもはや、苦みをもって歩き回って、何でもかんでも憎むことはありません。愛、優しさ、あわれみを経験します。変化はあります。しかし、変化はあなたを救いません。あなたが救われたことを証明するだけです。イエスを信じる信仰が真の信仰であるかどうか試すだけでしかないのです。ですから、私は自分の救いについて、行ないには信頼してません。イエスに完全に完璧に信頼しています。

使徒行伝 16 章 (4 / 21 / 96)

使徒行伝 16 章 25 節 (Acts 16:25)

「夜中の歌」 # 8614

交読文：詩篇 42 篇

私たちの聖書通読の学びは、今週使徒行伝 16 章に入りました。みなさん既にお読みになったと信じますが、午後を利用してまたお読みになれば、今晚の学びに万全の準備で臨むことができます。今晚 7 時に集まり、神を礼拝し、聖書通読の学びを続けます。聖書全体を網羅するまで、「戒めに戒め、規則に規則」です。(訳者注：イザヤ 28:10、13 “line upon line; precept upon precept” リビングバイブルは、「同じことをくどくどと、何度にも分けて少しずつ」。)パウロは、エペソの人に、「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。(使徒 20:27)」と言いました。神のご計画の全体を余すところなくあなたがたに知らせることが私たちの目的です。みなさんが神のご計画の全体を知るようになるために、創世記から黙示録までを学んでいるのです。さて、今朝は使徒行伝 16 章 25 節に注目して下さい。パウロとシラスは、ピリポの牢の奥の牢に、足かせをかけられて入れられていました。「真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。」

パウロは、トロアスにいてアジアへの旅行を色々計画しました。しかし、その度に聖霊が禁じられました。パウロがマケドニア人の幻を見たのは、その時でした。そのマケドニア人は、パウロに来て助けてくれるように頼みました。パウロは、これが神からのしるしであり、アジアではなくヨーロッパに福音を宣べ伝えるように、ということだと思ってマケドニアに行くことを考えました。それで、彼らは下って行って船に乗り、ピリポに行きました。そして、安息日に、川に行き祈りのために集まった女たちに話をしました。ここからわかることは、ピリポには余り多くユダヤ人がいないことです。もし、大人のユダヤ人が 10 人いたとしたら、会堂をつくり、そこで毎安息日に集まらなければならないことになっていました。もし、大人の男性のユダヤ人が 10 人未満なら、通常、町の中あるいは近くの場所で集まることになっていましたが、それはだいたい川のそばでした。川のそばに女たちが安息日に集まったという事から、ピリポには、余り多くユダヤ人がいないことがわかります。パウロは彼らに教え始めました。ある女性有力者ルデヤがいました。テアテラ市で商売をしている女性で、神のことばに耳を傾けました。みことばがシククリきて、彼女は主を受け入れ、パウロたちに自分の家に来て泊まるように頼み、強いてそうさせました。

さて、パウロたちがピリポに滞在しているときに、占いの霊と呼ばれているものにつかれた、ある若い女性がいました。彼女には、悪霊がとりついていたので、占いをする能力がありました。彼女は霊媒者でした。この霊が彼女を通して語ったのです。この女を手に入れて操っていた男たちがいました。この男たちは、人々と将来について語る事ができるこの女の能力を使って金儲けをしていました。彼女は、パウロとその一行の後に付いてきて、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです。」と叫び始めました。彼女がパウロとシラスについて言ったことは間違っていないのです。彼らは確かにいと高き神のしもべたちで、救いの道を宣べ伝えていました。けれども、パウロは、この女がつきまとうのに困り果てました。ひょっとすると、それは彼女の言い方のせいだったかもしれません。もしかしたら、それは嘲るような言い方だったかもしれません。皮肉っぽかったかもしれません。とにかく、パウロは、ついに振り返って、悪霊にこの女から出て行くように命じ、悪霊は出て行きました。しかし、この女は、同時に占いの力、能力を失いました。それで、この女を操っていた男たち

は、もうこの女が悪霊につかれなくなったため、もはやこの女を利用して金儲けができないことが分かり、腹を立ててパウロとシラスを裁判官の前に引き出して、パウロとシラスについて次のように言いました。「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し・・・」ひよっとすると、この地域では、反ユダヤ人感情が随分あったのかもしれませんが。このために、大人のユダヤ人が10人もいなかったのでしょう。これらの男たちの訴えが、「この者たちはユダヤ人でありまして」と強調してから「私たちの町をかき乱し」と言っているような感じがするからです。それから、「ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。」と言いました。つまり、パウロとシラスが、ローマとローマ政府に反逆する教えをしていると、遠回しに言っていたのです。確かに、彼らが人々に教えていたのが、イエスが主であり、救われるためにイエスが主であると告白しなければならないと言うことは疑いの余地がありません。ローマ政府は、皇帝を神格化していました。それで、カイザルが主であると言いました。このことが、当時衝突の元になっていたのです。クリスチャンは、カイザルが主であると認めるのを拒否したからです。イエスが主であると宣言しました。ですから、もしある人がクリスチャンである疑いが持たれると、役人はよく、「カイザルが主である」と言うように命じました。当時のクリスチャンは、クリスチャンとしてそのようなことは言えなかったのです。それでクリスチャンであることが分かったので、処刑されました。カイザルが主であると認めるのを拒否したために、何百、何千人もの人が処刑されました。ですから、彼らは、「イエスが主であると言う風習を教えていた」のです。ローマ人にとっては、そのようなことを言うのは本当は合法ではなかったのです。

しかし、ここで注目したいことは、パウロとシラスを訴えるときに、この人たちが本当の理由を言わなかったことです。彼らが腹を立てていた本当の理由は、パウロとシラスが宣べ伝えていたことではありませんでしたし、必ずしもパウロとシラスがユダヤ人であったということでもなかったのです。彼らが腹を立てていた理由は、占いの霊につかれていた女が解放され、もはや占いをすることができなくなり、彼女が彼らのために稼いでいた大金を受け取ることができなくなったからでした。これが本当の理由でした。不思議なことに、人は、他人を攻撃するときに、よく、その人が困っている本当の理由を言わないで攻撃をします。何かうわつらなことをでっち上げます。「本当に腹立たしいのは、あなたが、これこれしかじか言ったからです。」と言うのですが、そうではないのです。理由は他にあるのです。しかし、余りに陳腐で意味がないので、認めたくないのです。それで、訴えるためには、もっともらしいことを見つけなければならなかったのです。この場合がそのケースです。本当は彼らが聞きたくない教えをしていた、というのではなく、彼らが資金源を失ったからです。

長官たちは、パウロとシラスの着物をはいでむちを打つように命じました。ふたりは何度もむちで激しく打たれました。そして、牢の看守のところに連れてこられて、看守は厳重に番をするように命じられました。それで、「看守は、ふたりを奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。」とあります。手かせと足かせと、首かせも掛けられていたでしょう。後でわかることですが、看守はふたりの背中に付いている固まった血を洗うこともしませんでした。かせを掛け、奥の牢に入れただけでした。彼は冷淡でかたくなな心を持ち、パウロとシラスのかわいそうな状況に心を動かされることもありませんでした。ただ、かせをかけて牢に入れただけでした。これ以上惨めな苦境を想像できるでしょうか。この人たちに福音を宣べ伝えるために来たのに、罪をでっちあげられ、訴えられ、しかも、異国の地です。メキシコの刑務所についてずいぶん話を聞いたことがあります。ですから、丁度、ひよっとするとメキシコの刑務所に入れられたような状況だったのでしょうか。惨めな状況だったのです。そのような状況で、あなたならどうしますか。もし、あなたがそのような立場なら、あなたの反応はどのようなものなのでしょうか。あなたならどう考えるでしょう

か。神に仕え、神がマケドニヤに福音を伝えるようにとお召しになったと感じたのに、今自分の背中には、痛みでズキズキしています。手にも足にも、ひよっとしたら首にもかせが掛けられていたでしょうが、実に惨めな状態です。これからどうなるかわかりません。どの程度厳しく咎められるのかわかりません。どのくらい長く牢に繋がれたままになるのかもわかりません。サタンは、よくこのような状況を利用して、私たちが霊的に攻撃してきます。「もし、神が本当にあなたのことを愛していて、あなたが神に仕えようとして、できるだけ従順であろうとしているのに、どうして神はこんなことがあなたに起きるのをお許しになったのか。」と。シラスは、「パウロ、ほんとに神は私たちがここに召されたのか。」と言ったのではないかと感じてしまうのです。サタンの攻撃が、疑問という形で襲ってくる人が多いことに気がつきませんか。エバにサタンは、「神が言われたのですか。」と、神のみことばに疑念を挟んでいます。多くの場合、神の愛に疑念を挟みます。「もし、神があなたのことを愛しているのなら、なぜあなたはこのような痛みをと通らなければならないのか。」と。詩篇42篇を読みましたが、お気付きになったでしょうか。「人が一日中、『おまえの神はどこにいるのか。』と私に言う間。(詩篇42:3)」厳しく辛い試練を通っている時、私たちがよく疑問に思ってしまうことなのです。「このとき、神はどこにおられるのでしょうか。」と。場合によっては、神の公正さに疑問を持ちます。「こんなことが起きるのを神がお許しになるのは、神は公正なのか。」と。

このようにとても不快な状況にいたのに、パウロとシラスがしたのは、神に祈りつつ、賛美の歌を歌ったことでした。「真夜中ごろ、神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。」とあります。刑務所は、世界で一番友好的な場所ではないことはよく知られています。そこにいる人はだいたいあまり礼儀正しくありません。消灯になり暗くなると、刑務所の部屋にいる受刑者同士で、ひやかしや、甘言でだますことが横行します。ののしったり、侮辱したりします。そこにはパウロとシラスが足かせを掛けられ、真夜中に歌を歌っていたのです。他の受刑者が、「お前ら、静かにしろ。寝ようと思っているのに。」と叫ぶのが聞こえませんか。これからわかるのは、彼らの体は束縛されていたが、霊は自由だったことです。たとえ体は束縛されていても霊が自由な人は、体は自由でも霊が束縛されている人より、ずっと何光年も先を進んでいます。彼らは、賛美の歌を歌っていました。

さて、歌を歌うことは、感情を強く表現する方法の一つです。自分の愛を宣言するより、それを歌った方がよりロマンチックだと感じるのは、なぜなのでしょう。「ああ、君のことを愛しているよ。」と言うことはできます。「ああ、愛しているよ。」と。しかし、こう言ったらどうでしょう。「君のことを愛しているよ。(訳者注：先と同じ言葉ですがチャックは歌っています。)」(笑)「ああ、愛しているよ。ああ、愛しているよ。(訳者注：引き続きチャックは歌っています。)」そうすると、「わあ。すごい。」と思います。面白いですね。(爆笑と拍手が続いています)悲しみの感情さえが、揺り動かされます。ちょうど、カントリー・ウエスタンのようです。「本気じゃないなら、優しくしないでくれ。好きじゃないなら、甘い言葉はいらない。(訳者注：カントリー・ウエスタン風にチャックは歌っています。)」あるいは、「もう待てない、もう十分待ったよ。(訳者注：カントリー・ウエスタン風にチャックは歌っています。)」言葉自体悲しいですけども、歌うともっと悲しくなります。(笑)しかし、どういうわけか、歌うことで、感情が解放され、表現されます。ですから、神に賛美の歌を歌うことは、主に対する私たちの感情を表現するものすごい方法なのです。私たちの愛の感情、喜びの感情、感謝の感情、私たちがどのように感じているかを神に表現するのに、これはなんとすばらしい方法なのでしょう。

また、歌うことは、感情が動かされるのに良い方法なので、賛美の重要な部分を占めて

います。私たちが愛する方に向かって歌い、また私たちが愛する方のことを歌うと、私たちの霊が高く上げられます。暗い地下牢を礼拝の家に変えることができます。歌うことで、自分に関心を向けるのをやめ、主に焦点を当てることができるようになります。私は、自分の問題に焦点を当てれば当てるほど、問題が大きくなることを発見しました。主に焦点を当てれば当てるほど問題がだんだん消え去り、主の栄光と力、その力強さを見ると、これは何ともなくなります。私が小さかった頃、私の兄弟は喘息でした。夜によく、喘息の発作を起こしてゼーゼー言い始め、家族みんなを起こしました。母が来て、兄弟をベッドから抱き起こし、別の部屋に連れて行きました。そこには、古い木製のロッキングチェアがあって、母がそれに乗って揺らすと、ギーギーと音を立てました。兄弟がゼーゼー言うのが聞こえ、ロッキングチェアがギーギーと音を立てるのが聞こえましたが、母が小さな声で、「イエスはかならず約束を守って下さる。イエスはかならず約束を守って下さる。天と地は過ぎ去るが、イエスはかならず約束を守って下さる。」と歌うのが聞こえました。何度も夜、母が、私の兄弟をあやしなから、そう歌うのを聞きました。慰めでした。母にとって、それは慰めであったに違いありません。母がそう歌うと、「イエスはかならず約束を守って下さる。イエスの約束はその通りであり、イエスは、おっしやっただことを必ずして下さる。」という事に彼女は慰められました。イエスは、実にその通りして下さいました。イエスは、私の兄弟を喘息から癒して下さいました。イエスは約束を守って下さいました。歌うことは、全体の雰囲気を変えます。環境を変えます。主に向かって賛美の歌を歌うことは、真夜中の闇を取り去り、輝かせ、希望で満たします。ですから、実に、パウロとシラスはとても有益なことをしていたのです。そういった状況で、嘆きや苦悶を続けて不平を言ったり、「神様。なぜですか。」と語っていたかもしれませんが、その代わりに歌っていたのです。歌うといつも引き上げられるのですが、歌うことが、彼らを引き上げました。

何年か前にペンシルバニアに行って、そこで会議で教えていました。その晩、まぐろのシーチキンのグラタンが出ましたが、どうもマグロが悪かったらしく、食中毒になってしまいました。私は、具合が悪くなりました。ものすごく具合が悪くなりました。その夜、寝ようとしたのですが、悲惨でした。体が衰弱していて、余りに衰弱していて立ち上がるのも大変なくらいでした。しかし、吐くために、時折トイレに立たなければなりません。とにかく、悲惨な夜でした。家から遠く離れた場所で私は主に仕えようとしていたのですが、ひどく惨めでした。その時、主が歌を私に下さったのです。歌です。賛美です。こんなに美しい賛美の歌は聞いたことがありませんでした。それで、私は歌い始めました。なんとなく与えられたのです。メロディーが流れてきたのです。美しい歌でした。私は、忘れるかもしれないから、起きて歌詞を書き留めておかないと思いました。けれども、書き留めておくべきだと思っても、衰弱していて体に力が残っていませんでした。下へ行って、ピアノのところへ行って、楽譜に書き留めておかなきゃと思ったのですが、余りに体力がありませんでした。それに、なぜ真夜中にピアノを弾くのか、と思われるかもしれないと思いました。それで、私はそのまま歌い続け、とうとう主への賛美の歌を歌いながら眠ってしまいました。起きたら真っ先に歌を書き留めるぞと思っていたのですが、忘れてしまいました。思い出せませんでした。その夜の特別な歌でした。ヨブの友人のエリフが、神は、「夜には、ほめ歌を与え（ヨブ35:10）」る方であると話しました。詩篇42篇で、ダビデは、夜の歌について語っています。時に、神はあなたのために、場合によっては特別な場合に歌を与えて下さいます。教会の人みんなのためではなく、あなただけのために神に愛と賛美と尊厳を表現するために与えて下さるのです。ああ、何と美しいのでしょうか。何という特別な体験なのでしょう。

歌うことは、信仰を建て上げます。主と主の力、能力に目を留めると、私たちの信仰は

成長します。苦悩の中で書かれた詩篇がどれだけあるか注意してみてください。ダビデの詩篇の前書きの多くには、「ダビデがサウルからのがれたときの詩篇」とか、「アブシャロムが反逆した時のダビデの詩篇」とか書かれています。ダビデが書いた詩篇の多くが、苦悩の状況で書かれたものです。そして、詩篇の中に、「主は私の力、わがやぐら、わが救い。私は恐れず、おののくこともない。主はわがとりで、わが盾。」とあります。このような困難な状況において、歌うことで、ダビデは引き上げられ奮い立ちました。「ダビデは、主によって奮い立った。（サムエル第一30:1参照）」とありますが、どのようにでしょうか。それは、歌うことによってでした。主に向かって歌うことによってでした。次に心配するようなことがあったら、混乱するようなことがあったら、不安になるようなことがあったら、歌ってみてください。主に向かって歌ってみてください。歌う時に、全体の雰囲気が変わるのに気付かれるでしょう。真夜中の暗い牢が、賛美の家になりうるのです。

この話の先をもう少し見てみますと、パウロとシラスが歌っていると、大地震が起こって獄舎が崩れ始めたと書かれています。とびらがみな揺れで開かれ、地震の力で足かせがみな外れてしまいました。壁に取り付けられていた鎖が解けてしまい、囚人は自由になりました。看守は、地震で目を覚まして、とびらが開かれ囚人が自由になっているのを見ると、剣を抜いて自殺しようと思いました。ローマの法律では、看守に囚人が任せられ、その囚人が逃げれば、その看守が死刑になることになっていたので、それで、この看守は、ローマ政府の手を患わず自殺しようと思いました。そこでパウロは、「自害してはいけません。私たちはみなここにいる。」と叫びました。すると、看守は震えながら駆け込んで来て、パウロとシラスに、「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言いました。パウロは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と答えました。その看守が、パウロとシラスを自分の家に連れて行き、その時にふたり（の背中傷）を洗い、彼とその家の者全部がバプテスマを受けたと書かれています。ここでようやく、なぜこのようにでっあげの告発がされたのか、なぜパウロがシラスと牢に入れられたのか少しははっきりしてきます。神は、全てのことをご存じで、すべての人を愛されてました。この看守の心が柔らかくても外側がかたくなになっているのをご覧になりました。この看守と彼の家族が神を必要としているのをご覧になって、パウロが逮捕されるようにし、牢に入れられるようにされました。パウロを看守のところに置いて証しをさせるためです。神は、永遠の計画を実行しておられたのです。そのときはパウロに苦悩がもたらされましたが、神のご計画が実行されていました。パウロは、後で、「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ8:18）」と書いています。「今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。（2コリント4:17）」神が永遠の計画を実行されることは、今の時には私たちにとって痛みを伴うものかもしれませんが、それは飽くまでも一時的です。神が永遠の計画を行われるために通らなければならないものです。彼らは自分達の困難を、神の永遠の計画が成就しているものとして見ることができました。

神にとって、この看守と彼の家族が主イエス・キリストの知識に達し、永遠のいのちを受け入れることの方が、パウロとシラスが単に、ピリピのヒルトン・ホテルのスイートルーム（訳者注：「高級ホテルの高級な部屋」の意。）に滞在してそこを去ってしまうより重要だったのです。神はこの看守に手を伸べたいと思われました。このため、神は彼らに少しの痛みと苦しみをお許しになったのです。けれども、神の御手が働かれているのを見た時、神に大いなる賛美と栄光が帰されました。時に、神が苦悩を起こされることがあります。私たちの人生において神の永遠の計画を実行できるようにと、痛みをお許しになることがあります。ですから、私たちは、患難を通る時、「それをこの上もない喜びと思

なさい。(ヤコブ1:2)」と教えられているのです。神は、私たちや他の人のために、患難を通して、患難によって、永遠の計画を実行して下さっているからです。ですから、そのような痛みを伴う体験をする時には、歌いましょう。あの牢での雰囲気を変えることができたように、全体の雰囲気を変えることができます。歌いましょう。

使徒行伝 17 章 (4 / 28 / 96)
使徒行伝 17 章 1 - 3 節 (Acts 17:1-3)
「イエスはメシヤ」 # 8615
交読文：詩篇 22 篇

聖書通読の学びは、いま使徒行伝 17 章に入りました。今朝は、使徒行伝 17 章の最初の 3 節を開いてください。今晚 7 時に主を礼拝して、聖書全体から神のみことばを学ぶために集まりますが、その時は使徒行伝 17 章全体を学びます。ただ、今朝は、使徒行伝 17 章の最初の 3 節を見たいと思います。

パウロは、テサロニケの町に来ていました。「パウロはいつもしているように、会堂には行って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた(reasoned)。そして、キリスト(メシヤ)は苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、『私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリスト(メシヤ)なのです。』と言った。」と書かれています。パウロは、聖書に基づいて彼らと論じた、とあります。人がイエス・キリストを受け入れると、その人は理性を失うかのように言う人が今日多いのですが、全くでたらめです。人がイエス・キリストを自分の主、救い主として受け入れると、ようやくその人に理性が戻ったのです。イエスをメシヤと信じることは、とても理にかなっていません。神は、人に、実に筋の通った事を申し出てくださいています。実は、神は、「『さあ、来たれ。論じ合おう(reason)。』と主は仰せられる。『たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても雪のように白くなる。』(イザヤ 1:18)」と言われました。神が私たちに用意されている救いは、全然無理がありません。神が世に救い主を遣わして下さることは、本当に理にかなっていません。確かに、世は救い主を必要としていましたし、必要としています。実は、あまりにも道理に合っているので、受け入れない理由(reason)を捜さなければならないほどです。イエスがメシヤである事を拒否する人は、サタンに欺かれているので、拒否しているのです。聖書は、「この世の神が思いをくらませて、見えないようにしている。(2コリント 4:4 参照)」と教えています。イエスを拒否する事は、全く理性に従わない姿勢です。預言者イザヤは、このジレンマを次のように語っています。「見る目があるのに見ず、聞く耳があるのに聞こうとしない。自分の目で見、自分の耳で聞き、救われることのないために。(訳者注：エゼキエル 12:2 とイザヤ 6:10 参照。英語は、"Having eyes to see, they see not, and ears to hear, they hear not, lest at any time they would see with their eyes and hear with their ears and be saved.")」パウロは、「彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、・・・また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、(ローマ 1:22,28)」と言っています。パウロは、まもなく世界に現れる罪の人、反キリストのことを話しているときに、この反キリストは人々をだますと言っています。「なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ神は、彼らが(真理ではなくて)偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。(テサロニケ第二 2:10、11)」人々は、立ち止まって考えることをしません。神は、「もしも、知恵があったなら、彼らはこれを悟ったろうに。自分の終りもわきまえたろうに。(申命 32:29)」と言われました。けれども、これを人々はしないのです。罪を行ない始めると、自分の立っている道がどこに通じているのか考えることをしません。麻薬を始めると、これが自分に何をするのか考えることをしないのです。あなたを捕らえて、ついにあなたを滅ぼすことをわきまえないのです。酒におぼれ始めると、立ち止まって、いかにアル中が破滅的であるか、どのようにあなたを滅ぼすか見ようとしません。同性愛の行為、姦淫の行為についても同じことが言えます。将来を見越して、その結末を見ることをしないのです。聖書は、「人の目には

まっすぐに見える道がある。その道の終りは死の道である。(箴言14:12)」と教えています。性質、特質からして破壊的なものに、人は盲目的に入っていくてしまいます。「もしも、知恵があったなら、彼らはこれを悟ったろうに。このような道を歩み続けたら、このような行為を続ければどうなるのか、わきまえただろうに(consider)。(申命32:29参照)」二度、預言者ハバククを通して、神は人々対し、「お前たちは自分の歩む道に心を留めよ(consider)。(新共同訳) (訳者注：ハガイ1:5、7のことか。)」と呼ばれています。ヘブル人への手紙の記者は、「イエス・キリストのことを考えなさい(consider)。(訳者注：ヘブル12:3参照)」と述べています。これを私は今日あなたにお願いしましょう。「イエス・キリストのことを考え」てください。

使徒パウロは、聖書を手にして、聖書に基づいて彼らと論じました。そして、聖書に従って、メシヤが苦しみを受け、死に、よみがえらなければならないことを説明し、また論証して、自分が彼らに伝えているこのイエスこそメシヤであると言いました。聖書は、「自分では知者であると言いながら、愚かな者となり(ローマ1:22)」、「それは、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。(ローマ1:25)」と述べています。「また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡されたのです(ローマ1:28)。」人がいったん真理を拒否すると、どうして、とんでもない愚かな物を信じるようになるのかと、私はいつもびっくりして驚いてしまいます。あらゆる奇妙な信念に自分をさらけ出して、その餌食になっています。こんなに多くのインテリが、こんなに多くの大学の教授が、インドに行ってサイババの足元に座った事にはあきれ果てます。サイババは、自分が肉体をとった神であり、人間の限界を超越し神に至る経験をしたと言明していますが、彼らは、そこへ行って、暑さ、臭さ、困難、汚れを我慢するのは、この人が本当に神だと信じ、神への道を探そうとしてこの人の足元に座るからです。

人が進化論を信じるのには、びっくりしてしまいます。悪者の心の中で考え出されたものの中で、これほど非論理的な理論はありません。人体の驚異を見ると、臓器とその機能、脳とその決断力、理解力、記憶力、合理的判断の力、視覚や音声の解釈をする力を見ると、また、体の消化器系を見ると、心臓が血液を送り出し、体の細胞に酸素や栄養分を運搬するのを見ると、また血液細胞の形さえそれを見ることも・・・摩擦を最小にして、最大の量を運搬しなければなりません。また、逆流もできません。同じ方向に流れ続けなければなりません。血液が逆流するなら、大変です。ですから、同じ方向に流れ続けなければなりません。血液細胞が流れるように静脈が弛緩収縮しなければなりません。血液細胞のデザインを見てみますと、犬の骨のような格好をしています。両端が大きく、中央部が狭くなっており、摩擦を最小にして、最大の量の血液を運搬できるようになっています。面白いのは、コンピューターに摩擦を最小にして、最大の量を運搬するモデルのために色々な係数を入力し、そのためにはどのような形が必要かをグラフィックスで印刷して出すと、まさに血液細胞の形になるのです。このような驚異がたくさんある人体を見ると、合理的な人ならどうして、これらがすべて、ただ偶然に、偶然の出来事が重なって起こったのだと言うことができるのでしょうか。これは、ただ一連の偶然の出来事でできて、このようになったのだと言うことができるのでしょうか。進化論は、物質が物質に働きかけ、十分な時間が経過すると、何でも存在することができるようにすると主張します。それで、彼らは、物質が物質に働きかけ十分な時間が経過すると、みなさんができて造られた、ということでみなさんの存在もその他の生命体についても説明できる、と言うのです。

私は新しい時計をしています、これはだいぶ前にもらったものですが、これがすごいのです。この時計は、衛星とつながっているからです。衛星が私の時計に情報を提供し、

15分ごとに原子時計との時間を補正し、時間を更新しています。ですから、遅刻したらどんな言い訳もできませんが、この時計は、原子時計と秒の位までいっしょなのです。異なる時間帯に入ると、新しい時間帯の時間に自動的に時間が変わります。時計を見ると、今日の最高温度は華氏83度(摂氏28.3度)、最低気温は華氏64度(摂氏17.8度)だとわかります。あらら、ドジャーズが昨晚4対3で負けました。ということは、勝敗記録は12勝13敗になりました。ドジャーズは、500よりやや下(訳者注:勝ち負け五分五分の時が500)ということです。でも、パドレーズは、これも6対0で負けました。しかし、16勝8敗なのでパドレーズの方が今シーズン幸先良いスタートです。明日の予報は、最高温度は華氏83度、最低気温は華氏64度と、今日とかわらずです。おや、エンジェルズは、昨晚1対2で負けました。カリフォルニアのチームにしては、調子がよくありません。しかし、12勝10敗ですから、依然として500よりちょっと上です。ダウ平均株価は、金曜日、99ポイント高の5689でひけました。出来高は4億3700万株でした。妻は、全米のどこからでも私のことを呼び出すことができます(訳者注:この時計には、ポケベルの機能も付いている。)。これが、呼び出し音を出し、見ると、「電話せよ」と表示されています。ものすごい時計です。さて、もし私がみなさんに、次のように言ったとします。いや、実はこの時計は買ってもらったのではなくて、先日私がハイキングに行ったら、鉄が露出している所にたどり着きまして、何十億年も前に、稲妻があつた鉄の露出面に当たり、一部が鉄鋼に融合されたものでした。そして、次第に何年間もの間に、雨風浸食などにより楕円形の形になり、その隣で牛が死んでしまい、どういうわけかまた雨風で皮がなめされ、どういうわけかこの小さい鉄鋼に付着しました。それから別の稲妻が、近くにあった珪酸の砂に当たり結晶が形成され、これが(この鉄鋼に)くっついたのですが、ハリケーンで吹き飛ばされて、ここにはまったのです。そして、ある日、毎秒ごとにこれが変化し始めました。そして、こはいかに!エンジェルズは、1対2で負けました。わあ、すごい!もし、私が事の成り行きをこのように言って、みなさんを説得しようとしたら、「君は、ちょっとイカしてるんじゃないかい。君は、変だよ。」とおっしゃるでしょう。なぜ、そう考えるだけでも笑うのでしょうか。それは、非現実的だからです。それでも、この時計は進化過程のかなり初期段階で発達してできたものでなければいけないのです。人体と比べればずっと単純にできているからです。人体とは比較になりません。もし、物質が物質に働きかけ、十分な時間が経過すると、何でも存在することができるようになるのであれば、新車を買う必要はないということになります。砂漠にでも行って、車が一台出現するのをさがせばよいからです。そこでは、何年も物質が物質に働きかけているからです。その車に、オールズ・モビル(訳者注:GM社の車)の記事がついて、インパネがデジタル化されて、ボーズ(訳者注:スピーカーのメーカー-Boze)のサウンド・システムが搭載されるのを想像できますか。そして、その車を運転できるように、鍵も進化してきていてくれればいいのですが。では、車が自然に修理できてしまうのを想像するのはどうでしょうか。奥さんが、フェンダーをぶつけても大丈夫。車庫に何日か入れて休ませれば、まっすぐになります。自然修理です。砂漠を走っていて、ガソリンのタンクに穴が開いてしまっても、ご心配なく。すぐに、ガソリンの中の血小板が、固まり、穴をふさぎ、自然修理します。すごい車ですから。もし、新しい小さいスポーツカーが欲しいのであれば、車庫の中の奥さんのキャデラック車の横に駐車しておけば、9ヶ月で(訳者注:アメリカでは、妊娠期間を9ヶ月と考える。)オールズ・モビルとキャデラックの組み合わせのすてきな車ができます。私たちは、笑います。当然です。ばかげているからです。理にかなっていないからです。それなのに、人体の驚くべき、洗練されたデザインを見て、自然治癒の力、考える力、分析し、判断し、選択する力を見て、それを偶然の出来事が重なってできたというのです。違います。ですが、人が神の真理を拒否すると、パウ

口が述べているように、自分が惑わされるような状況に置くのです。それは、彼らが真理への愛を受け入れなかったため、だまされやすくなったのです。それゆえ神は、彼らが、真理ではなくて偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます（テサロニケ第二2:10、11参照）。神は、「さあ、来たれ。論じ合おう。」と言われ、パウロは、「聖書に基づいてメシヤについて彼らと論じた」のです。

パウロは、「そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証し」たのです。パウロは、きっとイザヤの巻を示していたでしょう。それは、イザヤ書53章に相当する部分です。イザヤが来たるべきメシヤについて語っているところで、次のように明言している部分を、パウロはおそらく人々に示したでしょう。「彼がさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのこの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほぶり場に引かれて行く小羊のように、彼は口を開かない。彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行なわず、その口に欺きはなかったが。しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。（イザヤ53:3-7、9-10、12）」パウロはおそらく、これを指し示したのでしょう。これが、預言者イザヤが、あなたがたのメシヤがどのような方であるかを語っているのだと。彼は、苦しみ、拒否され、殺されると。おそらくパウロは、私たちが今朝読んだ詩篇22篇も指し示したことでしょう。これも、メシヤについて語っているところで、「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。（詩篇22:1）」とあります。そして、その答えは、彼が見捨てられたのは、私たちの罪と咎が彼に負わせられたからです。どのように彼の手と足が刺し通されるか、彼の着物を互いに分け合うが、一つの着物はくじ引きにするかを。それで、パウロは聖書を開き聖書から論証して、イエスがメシヤであると証明しました。そして、きっと詩篇16篇が指し示したに違いありません。つまり、「まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に、メシヤに、墓の穴をお見せにはなりません。（詩篇16:10参照）」の神の約束を示したに違いありません。これは、メシヤの復活の預言です。そして、パウロは、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、メシヤなのです。」と言いました。パウロは、彼らに、メシヤについて神がこれらのことを語られたことを示しました。「彼は、苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならない。私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、メシヤなのです。」と。そして、イエスは、メシヤに関する旧約聖書の預言者の300以上の預言を成就されました。一人の人が、300以上の預言すべてを成就するのは、数学的には不可能です。それなのに、イエスは成就なされたのです。

不信仰の矛盾と非合理性を示すものを再びあげますと、現在かなり多くのユダヤ人が、イエスがメシヤであることを否定し続けていることがあります。これは、非合理的です。たった数年前のことですが、シュニアセンという名前のラビがいました。何千人ものユダ

ヤ人が、この人がメシヤだと信じました。実際、イスラエル中に横断幕が付けられて、プラカードや小さいシールが作られ、人々に、「準備せよ。メシヤが来られる。」ことが知らされました。彼らは、シュニアセンがメシヤだと信じました。シュニアセンが死んだ後も、多くの人が、彼が死者の中からよみがえってメシヤであってくれる希望を抱いていました。さて、不思議なことがあります、もしみなさんがユダヤ人の家系で、アレヤ（訳者注：イスラエル政府が提供している援助。alleyaはヘブル語。）を望み、イスラエルに戻ってイスラエル市民になり、そこで生活基盤を築くため政府から援助や住宅を提供してもらいたいとします。もし、ラビのシュニアセンがメシヤであると信じるのであれば、帰国が歓迎されます。アレヤをもらって、ユダヤ人として市民になります。実際、もしイスラム教を信じイスラム教の信仰に基づく行動をしても、アレヤをもらってユダヤ人として市民になることができます。もし、無神論者であったとしても、アレヤをもらってユダヤ人として市民になることができます。しかし、もしイエスがメシヤであると信じるなら、アレヤをもらうことはできず、ユダヤ人として市民になることもできません。不思議ですね。道理に合っていない。しかし、私がみなさんに伝えようとしているのは、このことなのです。罪は理にかなったことではありません。罪の中に生きることは、理性に従っていません。罪は、その性質からしてとても破壊的だからです。神は、「彼らは少しも意に介さない。（訳者注：新共同訳ホセア7:2。英語はThey don't consider.）」と言われました。

聖書は、それ自体、靈感による神のみことばであることを主張し、証明しています。批判者によって、これほど詳しく吟味された本は他にはありません。批判者の目的は、誤り、致命的な間違いを見つけ、それによって、「聖書は、これこれしかじか言っているから、聖書が靈感による神のみことばではあり得ない。」と決定的に明言することでした。聖書の中の何らかの発言、あるいは預言、矛盾を見つけ、それによって、聖書が靈感による神のみことばではあり得ないと決定的な証明をすることでした。人は、長年に渡って、何世紀にも渡って、聖書を綿密に調べあげ、反証を挙げようとしてきました。致命的な間違いを探そうとこのようにたくさんの方が聖書を調べてきたのですから、もし、そのような間違いがあったのであれば、きっとずっと昔にそれが見つかったはずで、むろん面白いのは、もしあなたが未信者なら、間違いを見つけようとするのは危険なことです。たくさん未信者が間違いを見つけようとして、信者になっているからです。心から聖書を調べた結果、真理を確信したからです。聖書の内在的証拠や靈感には圧倒されます。聖書の他に、時の試練に絶えることができた本はありません。聖書の他に、将来の出来事を正確に予言することができる事について、信憑性を明確にできた本はありません。さて、あなたが将来を予言する領域に入り込むなら、50%正確だというのでは有効ではありません。80%の正確だというのでは有効ではありません。99%の正確だというのでは有効ではありません。有効であるためには、100%正確でなければいけません。ある事が起こると言ったことが起こらなかったら、他の正しい予言をすべて無効にしてしまいます。現在のこの瞬間まで、聖書の打率は依然として1000%です。みことばの一言たりとも、成就しなかったものはありません。さて、まだこれから成就するものもありますが、これは実に興味を引きます。一番大きな一番新しい事は何かと世界を見回してみますと、地球共同体 (global community)です。私たちはその方向に向かって進んでいます。私たちは、地球共同体に向かって進んでいます。アメリカの軍事的立場が弱体化しているので、アメリカは、国連、世界政府、地球共同体、地球社会に参加することを強いられています。どこにでもこの考えがあって、促進され、喧伝されています。新聞も、タイム誌、ニュース・ウィーク誌にも、みな地球共同体の記事が載っています。彼らは、ニュース（新しいこと）だ、と言うのですが、いや違いますよ。聖書は2000年以上前にこのこ

とを伝えていました。古臭いものです。私たちはただ、遅れを取り戻しているだけです。聖書のすごいところは、将来の出来事を正確に予言できることです。実に、神は、「わたしは神である。ほかにはいない。私は、終りの事を初めから告げ、将来の事、まだなされていない事を昔から告げ（イザヤ46:9,10参照）」と言われました。それで、聖書全体の預言をすべてを腰を下ろして見て、「こう言っている。このように言った。今、これを見ているのだ。」ということがわかると、「神による靈感がないのであればこのようなことはあり得ない。頭にあることをただ書いたということはありません。」と合理的に言うことができます。これは神のみことばです。合理的に考えるなら、真面目に調べるなら、「これは神のみことばであり、来たるべきメシヤのことが語られている。彼は苦しみを受けるが、死者の中からよみがえる。そして、イエスがメシヤである。」との結論に達します。

人は、知的な根拠で、イエスがメシヤであることを拒否するのではないのです。他に根拠があるのです。わかりたくないのです。古い諺に、「見る気がない人ほど、見えない人はいない。」というのがあります。中には、もう心を決め、信じないぞと決心した人がいます。そういう人は、証拠を否定しますし、証拠を見ることを拒否します。もう決心ができているのだから、事実で僕を混乱しないでくれという、古い格言のようです。しかし、それは非合理的です。イエスがメシヤであると信じたくない人がいる理由が私にはわかりません。それは、その人が選んだ生活様式のためです。イエスをメシヤであると受け入れれば、自分の生活の仕方を変えなければならないことを知っているのです。人を騙すのが好きです。盗むのが好きです。不正な、不誠実な取引をしたいのです。イエスをメシヤであると受け入れれば、ごまかすのを止めなければなりませんし、不誠実な取引はみな止めなければなりません。それで、イエスを拒否するのです。そして、私たちは進化したと信じる、と言うのです。みだらなセックスをしたい人、姦淫、不品行をしたい人はどうでしょう。そういう人がなぜ信じたくないのかわかります。ホモとレズが、なぜ信じたくないのかわかります。自分達の生活様式を変えなければならないことを意味するからです。自分が献身しているものに対し、真実を尽くさなければならないからです。子供を育てる、すばらしい、美しい家族関係でなければならないからです。しかし、この人たちは、パーティーがしたいのです。複数の性交渉相手が欲しいのです。ですから、なぜこの人たちがなぜ拒否したいのかわかります。売春で大金を稼いでいる人がなぜイエスがメシヤであるということを拒否したいのかわかります。贅沢な暮らしに慣れてしまったからです。麻薬の売人も同じです。しかし、拒否することは不合理です。このため、言い訳をしなければなりません。理由なんてありません。筋が通っていないからです。しかし、弁解をします。例えば、教会にたくさんの偽善者がいるので信じたくないとか。これは、意味をなしません。偽善者が嫌いですか。それなら地獄に行ったら、永遠に偽善者といなければならぬことに気付かないのでしょうか。クリスチャンにならないというには、とてもお粗末な言い訳です。弁解はするのですが、理由(reason)がないのです。理にかなっていないからです。パウロは、「聖書に基づいて彼らと論じた(reasoned)。」とあります。神は、「さあ、来たれ。論じ合おう(reason)。」と言われました。それは、イエスはメシヤだからです。人はイエスを信じることによって、自分の罪を赦してもらうことができ、造り主と交わりを回復することができるかと神がお定めになったからです。

私がまだサーフィンをしていた頃、もう何年も前になりますが、でも6月にはハワイに行くので、できたらまたサーフィンに行ってみようかと思っているのですが、どうなるかわかりません。今は日焼け止めローションをつけなくてはいけないとか、色々あって、たのしみに水がさされてしまいます。昔は、よかった。かつて、でも、サーフィンをしていた頃、ハンティントンの埠頭にいた若い人たちに話したものです。気に入った波が来るのを待つ間、いろいろと話のやり取りをしました。若い人たちは、人生の意味を探していま

した。学校をサボってそこにいたのです。それで、私は、「おい、君たち。」と言うと、「おっさんは、何してるんだ。」と言います。「君たちより、僕の方が、楽しんでいるよ。」「うっそー!」「いや、楽しんでるよ。君たちより僕の方が楽しめるのは、僕が波を造られた方を知っているからだ。ここにいる時は、その方との交わりを楽しんで、神の被造物に驚いて、最高な時を過ごしているよ。君たちがここにいるのは、人生の意味を探しているからだろう。僕はもう見つけたよ。サーフィンは、おまけみたいなもんだよ。自分を満たしてくれるものを探しているんじゃないんだ。わかるかい。君らは、何かに、誰かに支配されるんだ。そんな風に造られたんだよ。もし、イエスが君らの主、人生の中心でなかったら、何かに支配されるんだ。ひょっとしたら、快樂かもしれない。人生の意味をもっと理解したいという願望かもしれない。権力や所有欲かもしれない。君を支配している何かがあるはずだ。」そう言うと、すぐこういう答えが返ってきました。「イエスを受け入れたら、楽しみがなくなるだろう。」いや、違うのです。もっと楽しいのです。人生の空虚さを満たすために楽しみを探しているのではなくて、もう満たされているからです。ですから、他の物はみなでっかいおまけです。「知的探求はなくなるんだろう。」いえ、そうではありません。もっと知的探求がふえます。造り主の知恵をもっと知りたくなるからです。生物のいろいろな部分を勉強し、分析すると、わくわくします。顕微鏡を覗いて脳細胞を見ると、どう機能しているかがわかると、「わあ、こりゃあ、すごい。すげえー！何てデザインなんだ！何てすごい知恵なんだ。」神のすばらしさに対する畏敬の念で立ち尽くしてしまうのです。これなら、理にかないます。「パウロは彼らと論じた」のですが、これは理にかないます。イエスを拒否するのは理にかないません。これは妥当でない考えです。言い訳をしてそれを支持しなければなりません、ナンセンスな結果しか出ません。「『さあ、来たれ。論じ合おう。』と主は仰せられる。『たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても雪のように白くなる。』」神は、赦し、きよめられます。私たちにいのちを与えるため、メシヤが死なれ、よみがえられたからです。

使徒行伝18章(5/5/96)
使徒行伝18章9-10節(Acts18:9-10)
「恐れ为解决」#8616
交読文：詩篇56篇

今朝は、使徒行伝18章9節と10節を学びますが、今晚は、使徒行伝18章全体を一節ずつ、注解形式で学びます。ですから、使徒行伝18章をもう一度読んで、7時に共に礼拝し神のみことばを学ぶので、参加してください。

使徒行伝18章で、パウロがギリシャの都市コリントに来たことがわかります。さて、コリントは、エーゲ海がほとんどアドリア海とつながっているような狭い地峡に位置していました。地図を見ると、ギリシャがほぼ二つに分かれていることがわかります。とても狭い5マイル(8キロ)以下の長さの土地がアドリア海とエーゲ海の間にあります。この狭い地峡があるために、海上輸送の際は、貨物を東からローマへ輸送するとき、あるいはその逆の場合、エーゲ海を横断して貨物をエペソからコリントへ輸送し、そこで貨物を下ろし、5マイルをアドリア海まで陸上輸送し、そこで貨物を船に乗せ、ローマへ輸送されました。これによって、述べ何百時間もの仕事量を省くことができ、さらに、ギリシャの南端にあるケープ・オブ・マリアと知られていた、ケープホーン(訳者注：南米最南端の岬で、強風と荒波で航行の難所)と同じくらいの航行の難所を回らなくても済んだのです。このため、コリントで貨物を下ろし、地峡を運搬して、アドリア海を横断する船に積み直すと、大幅に無駄を省くことができました。ネロは、この地峡に運河を建設しようとしたが、岩が堅かったのであきらめました。しかし、スエズ運河を設計し造った人がコリントに行き、その5マイルの地峡を横断する水路を築いたので、現在では近代的な船舶や貨物船などは、ギリシャをぐるりと回る、ケープ・オブ・マリアを回るのではなく、コリント運河を通ります。ですから、今行きますと、コリント運河を次々と船が航行しているのが見えます。ギリシャの南端をぐるりと回るのに比べ、何百マイルも何日も海上を航行するのを省くことができるからです。船隊の町であったため、たくさんの商船がありました。その人たちは、家から遠く離れて、家族や他人への責任感から解放されたと感じている男達につきものの荒々しさをもたらしました。このため、コリントでの道徳観は、世界でも最低でした。実際、ギリシャ劇では、コリント人をいつも飲んだくれと描写していました。コリントでの生活には、酔っ払いがつきものだったからです。飲酒と放蕩の生活でした。あまりにそのような状態だったので、みだらな、好色な生活をおくっている人、酒におぼれた生活をしている人は、「コリント人のような生活をしている。」と言われました。諺のようになっていました。この名前は、腐敗したライフスタイルと同義語だったからです。

アクロポリスの町の上には、アプロディーテーの巨大な神殿がありました。アプロディーテーは、性的快樂の女神でした。毎晩千人もの女祭司がアプロディーテーの神殿からコリントの町に下ってきました。彼女たちは売春婦でした。彼女たちの稼ぎで、神殿が維持されていました。ですから、コリントはおおびらに売春が行なわれている町で、酒浸りの町で、そこの人々は不道徳に身をまかせていました。この町に、パウロは、イエス・キリストの福音を携えて来ました。この福音は、人々に対し、より高尚な生き方を求めました。この福音は、人々に対し、道徳的純潔を求めました。この邪悪な町の真ん中で、パウロは、イエス・キリストの真理を宣べ伝えていたのでした。ここは、伝道ができるような場所ではありませんでした。ですが、パウロは、安息日ごとに、会堂に行き、聖書からイエスがメシヤであると示しました。しかし、他のすべての所でもそうでしたが、コリントでも、パウロが福音を宣べ伝えると、信じる人もいましたが、ものすごい敵対心を呼び覚

ましました。コリントも例外ではありませんでした。ユダヤ人はとても敵対して、議論し、パウロの言っていることを罵り、イエス・キリストを冒瀆しました。とても扇動的になって、問題をかかえるコリントに騒ぎを起こさせ、パウロに反対するにしむけました。ヨーロッパでは、パウロはあまり歓迎されなかったのです。最初に説教をしたピリピでは、パウロは殴られ、牢屋に入れられ、さらに町から出て行くように言われました。次の場所のテサロニケでは、夜にその町から逃れなければなりませんでした。ベレヤでも、パウロは町から逃れなければなりませんでした。そして、パウロは、コリントに来たのですが、またしてもパウロに反対する暴動が起こされようとしていました。人々、ユダヤ人は、パウロに対してとても陰悪になってきました。ピリピ、テサロニケ、ベレヤは、どちらかといえば文化的な町でしたが、コリントの場合は違いました。乱暴な、洗練されていない町でした。パウロは、ひょっとすると自分の命の心配をしていたのかも知れません。そして、神の自分への召しは何なのかと考えていたのかも知れません。神は本当に私をここに、ヨーロッパへ来るようにと召されたのかと。神の御心を見分けるのを誤ったのかも知れないと。それで、落胆し、確信が持てないこの使徒に対して、主が夜にパウロの所に来て幻によってお語りになりました。

パウロが落胆しているときに、主は何度もパウロの所に来られ幻で直接お語りになりましたが、これはその一つです。パウロがマケドニヤに召されたときも、夜、幻によるものでした。パウロは、アジアへ、ビテニヤのほうに福音を伝えたいと思っていました。しかし、御霊がそれをお許しになりませんでした。それで、おそらくパウロは、それではどこへ行けばよいのかと考えていたことでしょう。主が夜、パウロの所に来られ、幻によってマケドニヤに行くようにとお命じになりました。後で読みますが、パウロがエルサレムの牢屋につながれていたとき、しょげて落胆していたに違いありません。というのも、パウロの終生の志は、福音をエルサレムのユダヤ人に伝えることだったからです。パウロは自分自身かつてパリサイ人であったので、パリサイ人に伝えなかったのです。パウロは、パリサイ人の考え方がわかっていました。自分がイエス・キリストについて知っていることをパリサイ人に、かつての同級生に伝えることさえできれば、イエスがメシヤであることをきっと説得することができると感じていました。エルサレムのユダヤ人に福音を伝えることができるからと、その瞬間のために生きていたのです。どこへ行っても、御霊がエルサレムに行くことに警告を発していたのにもかかわらず、パウロはエルサレムに向かっていたのでした。しかし、パウロは、腹を決めていました。「できるにちがいない。それは、わかっている。」パウロが望んでいた機会とは必ずしも同じではありませんでしたが、機会が与えられました。パウロは、聖日を祝うことができるように、きよめの儀式をするためにエルサレムにいました。何人かのユダヤ人がパウロが宮にいるのを見かけ、他の人たちを扇動しようとし、パウロに殴りかかりました。実際、この人たちはパウロを殺そうとしていました。アントニヤの要塞にいたローマの守衛が宮での騒ぎを見て、一体何が起きているのかと慌ててやってくる、小柄なユダヤ人が殴られていました。それで、ローマの守衛は、群衆からパウロを助け出しました。アントニヤの要塞に戻ると、パウロは、守衛隊長に対して、「この人たちに一言お話してもよろしいでしょうか。（使徒20:37参照）」と言いました。守衛隊長は、「はい、よろしい。」と答えました。それで、パウロは、人々にヘブル語で、話し始めました。パウロは、人々に自分がヘブル人の学者であり、人々の状況をわかっていて、どのように感じているかもわかっていることを示したかったからです。パウロは、次のように述べました。「兄弟たち、イスラエルの方々、私の言うことを聞いて下さい。みなさんがどう考えていらっしゃるか、どう感じているか私にはわかります。私もそうでした。私もあなたたちのひとりでした。私はこの分派をつぶそうとしていました。あなたたちの気持ちは理解できます。大祭司が命令を出

してくれ、この道に従っている人たちを牢に投じようと私はダマスコへ向かいました。その途上で、主イエスが私のことを捕らえて下さいました。」パウロは、人々に対し、どのように主が自分を押しとどめ、どのように主がパウロに福音を異邦人に伝えるようにと召して下さいたかを話しました。パウロが異邦人という言葉に言及するやいなや、群衆は手がつけれない状態になりました。ちりを空中に撒き散らし始め、パウロのいた回廊のある要塞に向かって走り始め、「殺してしまえ。殺してしまえ。生かしておくべきではない。」と叫び始めました。それで、また隊長は、パウロを救い出し、要塞の中に引き入れるように命じました。それで、パウロを中に引き入れ、門を閉めました。パウロは、ヘブル語で話していたので、パウロが何を話していたのかわからなかったのに、守衛に対し、パウロをむち打って、殴って、人々をあんなに怒らせるとは、どのようなことを言ったのか調べるように命じました。むちを当てるための準備がなされているときに、パウロは、「ローマ市民である者を、裁判もかけずに、むちで打ってよいのですか。」と言いました。守衛は、「あなたはローマ市民なのか。」と尋ねると、パウロは、「そうです。」と答えました。それで、守衛は、隊長のところに行って、「あの人がローマ市民なのを知っていましたか。」と尋ねると、隊長は、「えっ、知らなかった。」と言い、隊長はパウロの所に来てローマ市民かどうか尋ねると、パウロは、「そうです。」と答えました。それで、パウロは、殴られるのは免れましたが感情的にパウロは打ちのめされました。落胆させられました。彼らに話すことさえできれば、説得することができると思われるのに、とパウロは考えていました。説得されるどころか、彼らはパウロを殺そうとしていました。外で、「殺せ。殺せ。」と叫んでいたのです。パウロにとって、非常にがっかりさせられることだったに違いありません。失敗してしまいました。なぜ、異邦人なんて言ってしまったのだろうと。夜に、このことについて全体を思い巡らしていたに違いありません。とても、がっくりして、落胆していたに違いありません。主が、パウロの所に来られ、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならぬ。（使徒23:11）」と言われました。つまり、お終いではなかったのです。パウロは、「ああ。お終いさ。もうだめだ・・・」と思っていました。しかし、主は、「いや。パウロ、まだやらなければならないことがあるのだよ。」とおっしゃいました。「できなかったね。君にはチャンスがあったのに。君はやりたかったんだ。わたしは、君にやらないように仕向けていたのに。でも君は無理にやろうとした。君はやった。しかし、まだ終わったのではないよ。君は、わたしのためにローマでもあかしをしなければならぬ。」と。パウロがローマへ向かう途中のキプロスで、時節は冬に近付いていました。船長は、出帆するかどうか思案していました。パウロは、「出帆するのはよい考えではないと思います。時期がよくありません。この時期には、どのような事が起こるかかわからないので、公海にでるより、この快適な安全な避難所で冬を過ごした方がよいと考えます。（使徒27:10参照）」と言いました。しかし、翌朝起きると、美しいうららかな日で、穏やかなそよ風が吹きました。それで、船長は、出帆しようと言いました。パウロは、百人隊長に、「私なら行かない。」と言いましたが、船長は、「私はずっと海に出ていてよくわかっている。君にはわからない。」と言いました。それで、出発しましたが、数日立つと、ひどい嵐になりました。十四日間、太陽を見ることができませんでした。船は揺れ、貨物はすべて海に投げ捨てられました。みんなは、とうとう絶望し、もう生きて脱出できないと思いました。夜に主がパウロの所に来て、「恐れてはいけません。あなたも同船している人々もみな救われます。（使徒27:24参照）」と言われました。それで、翌朝、パウロは、「みなさん。聞いて下さい。あなたがたは、キプロスにいるときに私の忠告を聞き入れていればよかったのに。」つまり、「言った通りになったでしょう。」というやつです。しかし、パウロは、「昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使

いが、私の前に立って、こう言いました。『恐れてはいけない、船は失われますが、あなたがたはみな助かり、いのちを失う者はひとりもありません。』』と語りました。ここでも再び主は、暗闇のときに、パウロの傍らに立ち、勇気づけました。

さて、ここコリントでも、暗闇のときに、おそらくパウロは神の御心を疑っていたでしょう。主は、夜、パウロの傍らに立たれました。そして、パウロへの言葉は、「恐れないで」でした。もし、その人が恐れていないのであれば、「恐れないで」とは言いません。私たちは、パウロが何か超人的だと考えてしまいます。私たちのような普通の人とは考えません。パウロは、特別な部類に入り、私たちより2ランクも上だと考えがちです。パウロは偉大な聖人で、私は単なる普通の人だ、と。そうではありません。パウロは、みなさんと同じでした。神は、みなさんのような普通の人をお用いになります。私たちの問題の一つは、神が自分のことを用いることができない理由を百も考えつくことができることです。そして、神が用いていらっしゃる人を見て、どういうわけか、そういう人たちをあがめて、あの人はああだ、この人はこうだと言うのです。人が私のことをどのような人だと考えているかをみってみるとびっくりさせられますが、そうではないのです。私も他の人と同じです。私は普通の人です。ただ、神が望んでおられるように、自分の人生を明け渡しているだけです。私は、神がすばらしいことをしてくださるのを見る祝福にあずかりました。パウロは、ただの普通の人でした。みなさんが持っていると同じ恐れを持っていました。みなさんが持っていると同じ不安を持っていました。みなさんと同じように疑いを抱いていました。神は、神に自分を喜んでゆだねて、神が望まれていることなら何でも自分を用いていただきたいと考えている、ただの普通の人をお用いになります。

主は、パウロに言われました。「恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。」パウロはおそらく、彼らは聞いていない、と思ったでしょう。ユダヤ人との対立はとても感情的で劇的なものでした。彼らが暴言を吐き始めると、パウロは自分の着物を振り払って、「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ、私には責任がない。私はあなたがたに宣言した。今から私は異邦人のほうに行く。」と言いました。かなり激しいものでした。ですから、パウロは、この価値があるのだろうか、と考えていたかもしれません。イエス・キリストの話をするたびに、人々は騒ぎを起こすみたいだが、こんなことをする甲斐があるのだろうか。天幕を作っていた方がよいのではないのか、と。こんな大変な思いをする甲斐があるのだろうか、と。しかし、主は、「語り続けなさい。黙ってはいけない。」とおっしゃいました。パウロは、コリントを去ることを、この邪悪な町を去ることを考えていたという可能性はないでしょうか。この時点で、パウロが、ややびくついていていたとしても、気持ちがわかります。ルステラで石打にされ、ピリピでは、殴られて、牢に入れられ、命からがらテサロニケから逃れました。神が本当に自分を宣教に召されたのかどうか、疑問に思っていたとしても、パウロの気持ちがわかります。旧約聖書の預言者エレミヤのことを少し思い起こさせてくれます。主は、エレミヤに対して「わたしの民にわたしのことばを語るように。」とおっしゃったので、エレミヤが主のことばを人々に語ると、人々はひどく怒り、エレミヤを地下牢に入れました。エレミヤは、寒い、水浸しの地下牢の中に座り、エレミヤは、「もうたくさんだ。もうやめた。もう主の御名によって語るのもうやめた。」と言いました。「人々に神のメッセージを語ると、こうなるんだ。もうこりごりだ。」と。しかし、エレミヤは、「主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて燃えさかる火のようになり、私はうちにしまっておくのに疲れて耐えられません。(エレミヤ20:9)」と言いました。パウロは、後にコリント人に手紙を書いたときに、「なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。

(新共同訳2コリント5:14)」と述べました。「これが私を後押ししているのです。これによって、私はやり続けることができるのです。それは、キリストの愛です。私はこう考え

ました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、つまりすべての人が罪過と罪に死んだのです。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々がもはや、自分のためにではなく、神のために生きることのすばらしさを知るようになるためです。(2コリント 5:14-15 参照) イエス・キリストのない人は失われているという真理。自分のために生きている人、肉に従って生きている人は失われている、この世で希望もなく生きている。この真理がパウロが福音を宣べ伝えることを後押しし、パウロを駆り立てました。ですから、パウロは、真理を分析しているときに、神の御霊が駆り立てることについて語っているのです。

主はパウロに言われました。「恐れてはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。」これがあって、いつも恐れから救われるのです。主が私とともにいて下さると気付くことです。私が試みにあっているときに主が私とともに立っていて下さることを知ることは、何という慰めでしょう。私が、水の深みを進んでいるときに主がともにいて下さる。私が火の中を歩いているとき、主がともにいて下さる。パウロは、コリントからローマ人に対して書いたとき、「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。(ローマ8:31)」と言いました。私たちが読んだ詩篇の中で、ダビデは、「私は恐れませんが、神が私の味方だからです。(詩篇56篇参照)」と言いました。暗闇の時に神の臨在を知ることは、何とすばらしいことでしょうか。神はそこに私と共におられます。イエス・キリスト、神の御子、この宇宙の創造主、私たちの罪のために死んで下さるためにこの地上に来て下さった方が、私と共に立っていて下さるのです。ですから、パウロは勇気づけられたのです。「パウロ、恐れてはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。」と。パウロは一人ではありませんでした。主がパウロと共に立っておられました。預言者イザヤを通して、神は、「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。(イザヤ41:10)」と言われました。同じことです。恐れてはいけません、わたしはここにいます、と。「たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。(イザヤ41:10)」あなたは、不安な時を過ごしていますか。恐れがあなたの心を捉えてしまいませんか。主を求め、自分を主にゆだねると、主が、「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。」とおっしゃるのが聞こえます。ダビデが述べたように、「主は私の味方。私は恐れず。人は、私に何ができよう。(詩篇118:6)」なのです。今この時、私自身、水の深みを進んでいます。神の御心を疑ってしまう時です。私の心がとてもたじろいでいるのがわかります。どうなのかと思い、悩みます。しかし、自分が圧倒されてしまうように思う時がありますが、聖霊が来て下さり、私の心に平安を教えて下さいます。私は慰められ、強められます。すると、「主よ。何でもあなたの御心のとおりに・・・、でもこれがあなたの御心なのではないでしょうか。」と言います。私は今問題と格闘しています。ケイと私は、問題と格闘しています。私たちは共に同じ経験をしているからです。私たちが受け取った知らせに私たちの心は引き裂かれんばかりだからです。しかし、共に私たちは主を求め、慰めを受け、強められています。主が私たちに教えて下さいます。しかし、また自分の思いが戻ってきてしまいます。それで、また同じことを通ります。主がまた教えて下さり、主よ、わかりました、と言うのです。「でも、はい、主よ、大丈夫です。」と。少しは、落ち着くのですが、また何かあって、思い起こしてしまい、どっと圧倒されてしまいます。「ああ、どうしよう。だめだ。」「はい、主よ。大丈夫です。あなたにとって、正しいことなら何でもかまいません。あなたが何とかして下さいます。あなたの御心がなされることは、わかっています。私はそれに同意します。私がはっきりそうだとわかるのでしたらね。」と言うのです。主はパウロに、だれもあなたを襲って、危害を加える者はないと安心させました。主は、パウロに約束されました。「コリン

トではわたしがあなたを守る。あなたはルステラでは石打にされ、ピリピでは殴られたが、わたしはあなたとともにいる。私はあなたを守る。誰も襲う者はない。」と。ひょっとすると、パウロは、また殴られることを恐れていたのかもしれませんが。パウロは、ルステラで石打になったことで、身体的に苦しんでいました。もはや、体力がある体ではありませんでした。その後は、体力が弱まっていた。ですから、パウロは、また殴られること、また石打になることを少し懸念していたのかもしれませんが。だから、主は、「だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。」とおっしゃったのです。

そして、主はパウロに、「この町には、わたしの民がたくさんいるから。」と言われました。これには、いつもどうかしらと思わされます。コリント、この邪悪な場所で、あなたはたくさん民がいるとおっしゃるのですかと。もし、私たちが教団に入っていて、今年新しく50の教会を設立することにしていたとします。まず、委員会を設置して、座って、どこに教団の教会があって、どこにないのかを調べ、どの地域が開拓伝道に一番向いているかを考えるでしょう。ひょっとすると、開拓伝道に一番向いている地域はどこかと、様々な地域の人口動態調査を依頼するかもしれません。もし、あの当時にそのような調査をしたとして、誰かがコリントで開拓伝道をしようと提案していたなら、人々は、「君は、どうかしているよ。」と言ったことでしょうか。「コリントは教会をつくる場所ではない。あの邪悪な所に。冗談でしょう。」と。コリントで開拓伝道するなどは、理にならなっていました。しかし、主は最もありえそうなところで収穫をなさることがよくあるのです。全然ふさわしくないサマリヤで、イエスは、「畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。(ヨハネ4:35)」とおっしゃいました。60年代の終わりに、この地域にヒッピーがなだれ込んで来ました。古いフォルクス・ワーゲンの窓にはカーテンが閉められたバンでやってきました。ピース(平和)・サインやラブ(愛)・サインや、バンパーのシールがあちこちに貼られていました。長い、もつれて、汚い髪の毛で、金属フレームの眼鏡、薄汚いジーンズ、汚れた足でした。私は、汚いヒッピーめ、普通の人のように仕事をしたらどうだと考えていました。仕事に行くと。ケイは、彼らを見ると、涙を流しました。「彼らはどうしようもなく主が必要なよ。」と。私は、「いや、彼らに必要なのは、風呂に入ることだ。」と言いました。このサブ・カルチャーの集団の人たちの中に、主がたくさん民を用意しておられたなどと、私たちには全然わかりませんでした。収穫など考えられそうにもない畑でした。しかし、主は私たちに収穫を見つけさせて下さいました。実際彼らは、至る所に宣伝していました。平和が欲しい。愛が欲しいと。イエスを見出すまで、平和や愛を見つけることはできません。彼らは実に、「我々は求めています。」と宣伝していたのです。「助けが必要です。平和が欲しい。愛が欲しい。」と。しかし、彼らが本当に必要だったのは、イエスでした。コリントでは、酒に浸り、性欲にふけていましたが、人々は自分の空虚さを埋めようとしていたのです。しかし、こういった空虚さは、イエスのみが埋めることができるものでした。ですから、私たちは、汚れた、腐敗した町であると考えて、ごらん、放蕩や罪がはびこっていると思います。しかし、主は、「この町には、わたしの民がたくさんいるから。パウロ、語り続けなさい。黙ってはいけません。ここには、たくさん私の民がいるから。」と言われます。それで、パウロはコリントに滞在しました。テサロニケ、ピリピ、ペレヤの時のような、2週間とか3週間とかいった滞在ではなく、パウロは18ヶ月滞在し、神の民に宣教しました。コリントで、すばらしい強い教会が確立されました。それは、パウロが神の御声に喜んで耳を傾けたからでした。

後で、パウロはコリント人に手紙を書き、コリント人に手紙を書いた時に、「すべての慰めの神があなたを慰めて下さいますように。私たちが苦しみの中にいて、慰められました。もしわたしたちがくるしみに会うなら、それはあなたがたの慰めのためであると知り

なさい。苦しみの中で、私たちがあなたがたに仕えることができるように、神が私たちに仕えて下さるためです。(2コリント1:3-6参照)」と書きました。今私が体験していることは、みなさんの益のためであると気付かされます。神のすばらしい愛と御霊の働きを体験し、嘆きや悲しみ、恐れを感じている時に、神の御霊が私に仕えて下さり、暗闇を通り、神の御心がわからず、このような状態の中で神が何をして下さっているのか求め探している人のことがもっとよく理解できるようになりました。ですから、宣教を広げるため、よりよく理解することができるために、犠牲を払うように召された人がいるのです。神が今なさっていることを私は今受け入れます。そして、私は神の御霊に慰めていただくこと、神が私の心に教えて下さることによって助けていただくことを学んでいます。そうです、暗闇の時に、主が共に立っていて下さるのがわかります。主は、あなたを見捨てることはありません。主は、「恐れてはいけない。わたしはここにいる。わたしはあなたと共にいる。わたしに信頼しなさい。わたしがあなたを導く。わたしが助けよう。わたしがあなたを強めよう。あなたを見守ろう。だいじょうぶだ。結末はすばらしい。ただわたしに信頼しなさい。」とおっしゃいます。神が私たちが信頼できるように助けて下さいますように。

使徒行伝19章(5/12/96)
使徒行伝19章1-6節(Acts19:1-6)
「聖霊を受けましたか」#8617
交読文：詩篇51篇

私たちは聖書通読の学びを続けていますが、今週は使徒行伝19章です。今朝は使徒行伝19章を開いていただきたいのです。今晚19章全体を学びますが、今朝は最初の何節かを見たいと思います。

お読みします。「アポロがコリントにいた間に、アポロは奥地を通過してエペソに来た。そして幾人かの弟子に会って、『信じたとき、聖霊を受けましたか。』と尋ねると、彼らは、『いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした。』と答えた。『では、どんなバプテスマを受けたのですか。』と言うと、『ヨハネのバプテスマです。』と答えた。そこで、パウロは、『ヨハネは、自分のあとに来られる(メシア・)イエスを信じるように人々に告げて、悔い改めのバプテスマを授けたのです。』と言った。これを聞いたその人々は、主イエスの御名によってバプテスマを受けた。パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに臨まれ、彼らは異言を語ったり、預言をしたりした。』

今朝、最初の賛美歌で、「三つにいまして一つなる、神の大御名ほめ奉らん(訳者注：賛美歌66番、英語では、God in three persons blessed trinity)」と歌いましたが、私たちはみな、御父のことはよく知っています。御子である私たちの主イエス・キリストのこともよく知っています。けれども、三位格である聖霊に多くの方が気付いていないのでびっくりします。実に多くの方が、エペソにいた人たちのように、ご聖霊の務めと働きをよく知らないのです。その理由の一つは、聖霊がご自分のことをあかしされないからです。イエスは、「御霊がわたしについてあかしします。(ヨハネ15:26)」と言われました。イエスは、「御霊はわたしの栄光を現わします。(ヨハネ16:14)」とおっしゃいました。従って、人間の栄光を現したり人間に注目を集めさせるような、聖霊の現われや聖霊の働きと言われているものに、私はすぐに疑いを持ってしまいます。それは、御霊はご自身や人間に注目を集めるために来られたのではなく、私たちにイエス・キリストに注目を集めさせるために、イエス・キリストの栄光を現わすために来られたからです。エペソにいた人たちに対するパウロの質問は、「信じてから、聖霊を受けたことがありますか。(Have you received the Holy Spirit since you believed?)」でした。この翻訳を、「信じたとき、聖霊を受けましたか。(Did you receive the Holy Spirit when you believed?)」としたい人たちがいます。ギリシャ語に関して言うと、どちらの翻訳も間違っていないです。どちらにも翻訳できますし、原語のギリシャ語によればどちらも正しいです。「信じてから、聖霊を受けたことがありますか。」と訳すか、「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と訳すかは、さほど重要なことではありません。両方とも、聖霊の賜物は、回心とは別のもの、回心の後のものだという事実を示しているからです。

イエスは、ヨハネの14章で弟子たちに対し、聖霊が来られることについてお話しになっているときに次のように言われました。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」そこで、その時までの弟子たちと聖霊との関係を説明するために、ギリシャ語の前置詞パラ(para)とエン(en)の二つをお使いになっています。聖霊はあなたがたとともにおられる。そして、聖霊は、あなたがたのうちにお入りになる。回心の前、御霊

による新生の前は、罪を認めさせるため、イエス・キリストが罪の唯一の解決である事をあかしをするために、聖霊はその人とともにおられます。赦される望みは、イエス・キリストにしかありません。聖霊は、あなたをイエスに近づけるためにおられるのです。それは、あなたがイエスを自分の主と受け入れ、罪の赦しを見出すためです。あなたに対する聖霊にあかしに従い、イエス・キリストを受け入れるために心を開いた瞬間、聖霊が入って来てくださって、あなたのうちに住んで下さいます。パウロがコリント人に言ったように、「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。(1コリント3:16)」エペソの教会に対してパウロは、「酒に酔ってははいけません。御霊に満たされなさい。(エペソ5:18)」と書きました。

イエスは、死者の中からよみがえられた後、昇天される直前、弟子たちに仕えられた最後に、「彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』(ヨハネ20:22)」そして、昇天の直前に、イエスは弟子たちに、「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。(使徒1:4、8)」と約束されました。さて、ここでイエスは、三つ目の前置詞を使われています。これはエピ(epi)という前置詞で、上に(upon)あるいは、おおって(over)という意味です。イエスは、聖霊があなたがたの上に(upon)来られるとき、あるいは臨まれる(over)とき、あなたがたはダイナミック(訳者注:この英語はギリシャ語のデュナミス(力)に由来している。直訳は、「原動力」。)を受けます、あるいは力(power)を受けますとおっしゃっているのです。世界中であなたがたがわたしの証人となる力です。

さて、聖書は、イエスのことについて、真実な忠実な証人だと教えています。イエスは、御父の忠実で真実な証人でした(黙示3:14参照)。もし、神がどのような方か知りたいたいのであれば、イエスを見ればよいのです。イエスを見ると、御父がどのような方であるかははっきりとわかります。実際、イエスは、「わたしを見た者は、父を見たのです。(ヨハネ14:9)」と言われました。それは、イエスが、御父の忠実で真実な証人であったからです。さて、イエスは、私たちにイエスの忠実な証人になってもらいたいのです。イエスは、誰かが、イエスはどのような方なのかと尋ねるのであれば、私たちが、「わたしを見た者は、私の主を見たのです。」と言えるほど、私たちがイエスに似るようになってもらいたいのです。すぐに、私たちはそれに困難を覚えます。私たちは、理想を見て、理想を認め、理想にあこがれるのですが、私たちはみなその理想どおりの生活ができていないことを痛切に認識するのです。あきらめて、「私は、とにかくできない。そのようには生活できない。クリスチャンとして生活するのは難しすぎる。」と言って、クリスチャンの歩みがかかりしている人がたくさんいます。いいですか。難しいのではなくて、不可能なのです。聖霊の力とこの聖霊の賜物を離れては、クリスチャンとして生活することはできないのです。イエスが弟子たちに、「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受け、世界中でわたしの証人になります。」と言われたのは、まさにこのことなのです。

さて、ギリシャ語の前置詞から、救いとは同意語でない、救いの後にある聖霊の体験があることがわかります。確かに、イエス・キリストを受け入れると、聖霊があなたのところに入ってきて下さり、あなたのうちで栄光に満ちた働きを始めて下さいます。あなたを罪から洗いよめて、神の道へ案内し導いて下さいます。聖書は、「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。(ローマ8:14)」と語っています。そして聖霊は、あなたのうちで働きを始められます。でも聖霊にはもう一つの働きがあり、それはあなたから流

れ出て下さること、あなたの人生からあかしをして下さることです。これは神の賜物です。賜物ですから、すべてのイエス・キリストの信者に与えられています。神が教会に聖霊を与えて下さった五旬節の日に、この現象を見るために集まった大勢の群衆にペテロが語ったとき、ペテロが説教をして彼らが心を刺され、「私たちはどうしたらようでしょうか。」と言うと、ペテロは答えました。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子供たち、ならびにすべての遠くにいる人々（使徒行伝2:37-39参照）」すなわち、この1996年5月12日の母の日に、カルバリー・チャペルで主を礼拝している人々に与えられているからです。遠くにいる人々であるあなたがたに、この賜物が与えられています。この聖霊の賜物は、「私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。」

使徒行伝を読むと、ピリポがサマリヤに行って彼らにキリストを宣べ伝えると（使徒8参照）、多くの人が信じてバプテスマを受けました。エルサレムの教会は、サマリヤが福音を受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣わしました。ふたりが到着すると、人々が聖霊を受けるように祈りました。彼らは、回心してバプテスマを受けており、聖霊は彼らのうちにおられました。彼らにはイエス・キリストの証人となるための力のダイナミックがまだありませんでした。パウロがダマスコ途上で回心してから数日後、ダマスコにおいて弟子のアナニヤがパウロの所に来て、「兄弟パウロ。主が私にお語りになり、私を祈るために遣わされました。それはあなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです（訳者注：英語の直訳だと、「受けるためです」）。（使徒9:17）」と言いました。救いの後の御業として、パウロをイエス・キリストの証人とするための力を与える神の賜物がありました。（訳者注：5月12日の夕拝における19章の講解で、パウロは9章5節でイエスを「主よ」と呼んでいる時点で改心している、とチャックは言っていました。）

さて、なぜパウロは、「信じたとき、聖霊を受けましたか。」という質問をしたのでしょうか。パウロは、彼らのクリスチャンの歩みに、何か欠けているものを見たのに違いありません。愛が欠如していたのかもしれませんが。私の生活における神の御霊の主な特徴が、私から出てくる神の愛であることは確かなことです。もしこの愛がないのであれば、私の持っている他の賜物は何の値打ちもありません。愛が中心です。実際、愛は御霊の実と呼ばれています。この愛は、私たちに喜びと平安をもたらし、私たちを寛容にし忍耐があるようにさせ、親切、善意、誠実、柔和、自制として現われるものとして説明、定義されています。もしかすると、彼らにはあまり自制がなかったのかもしれませんが。互いにどなりあって、腹が立っていたのかもしれませんが。それで、パウロは、「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と言ったのかもしれませんが。ひょっとすると、喜びが欠如していたのかもしれませんが。ひょっとすると、神に属することへの熱心さが足りなかったのかもしれませんが。神に属することに対して死んだようになっていて、本当に生き生きしていなかったのかもしれませんが。それで、パウロは、「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と言ったのかもしれませんが。ダイナミックは、力はどうしたのか、と。すると、「聖霊があることすら知りませんでした。聞いたこともありません。」と彼らは言ったのです。パウロが何を見ていたのかはわかりませんが、聖霊の賜物が欠如しているからではないかと疑って、「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と質問をしたのです。

聖霊に満たされることと、聖霊があふれ出ていることとは全く別です。もしここに大きなサイズの水差しとコップがあって、水をコップに注ぎ始めたとして、コップのへりぎりぎりまで水を注ぐことができますが、そうするとコップは水でいっぱいになります。けれども、続けて水を注げばすぐに水があふれてしまいます。聖霊があなたのうちに満た

して下さっていることと、聖霊があなたから流れ出てくださっているのは全く別なのです。ヨハネの福音書7章32節でイエスが説明されたように、「さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。『だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。』」のです。ヨハネは、「これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。」と述べていますが、ヨハネは何のことを言っているのでしょうか。それは、生ける水が滝のようにあなたの生活から沸き上がってくる、あなたの人生からどっと出てくると言うことです。質問は、「聖霊に満たされていますか」ではなくて、「聖霊があふれ流れていますか」でした。神の愛が生ける水の川のようにあなたから流れ、注ぎ出していますか。言葉にできないほど、栄光に満ちた喜びを持っていますか。人知を超えた平安がありますか。あなたがイエスのようになるのを助けるダイナミック、力がありますか。

理想を見て、それに感心し、「そうです、これが正しい方法です、生活の正しい方法で、反応するときの正しい方法です。」と告白することは、いらだたしいことです。聖書は、「主のみおしえは完全（詩篇19:7）」だと教えています。主のみおしえを見て、主の要求されていることを見ると、私は、「そうです、その通りです、私はそのように生活すべきです、そのように生活したいのです。」と言うのです。私がイエスのこと、イエスの愛、あわれみ、すばらしさ、人々の必要に敏感なことを読むと、「そうです、私はそれが欲しい、そういうふうに住みたい、他の人に自分がしてほしいことを他の人にもしたいのです。私は愛のある人でありたいし、親切にしたいし、与える人になりたいのです。」と、そのおしえがよいことに同意するのです。しかし、理想を見て、それに感心し、その理想に従って生きる決断をするけれども、そんなことはできないとわかることは、いらだたしいことです。自分の肉の弱さがわかることは。それで、イライラしてしまいます。使徒パウロは、自分の人生で体験したこのイライラを、ローマ人への手紙7章で説明しています。パウロは、「私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分がしたいと思うことはしていないのです。自分の行なっていることをが憎んでいます。律法は良いものであることを認めているわけです。（ローマ7:15-16参照）」私は、主のみおしえを見て、「良い」と言うのです。「しかし、善を行なうことができない」のです。「善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているのです。私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心に対して戦いをいどみ、私を肉のとりこにしているのを見出だすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。（ローマ7:21-24参照）」挫折感です。わかっているのです。望んでいるのです。でも、できないのです。私は願います。「はい。その通りです。」と言います。けれども、私には能力がないのです。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」しかし、パウロは、すぐ8章に進み、「だれが、私を救い出してくれるのでしょうか。」という自分の質問に答えています。というのは、8章でパウロは、次のように述べているからです。「なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、私を解放したからです。肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を肉の形でお遣わしになりました。それは律法の義が私の中に全うされるためなのです。（ローマ8:2、3参照）」それは、イエス・キリストと御霊のわざを通してです。ですから、「肉にある者は神を喜ばせることができません。けれども私たちは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。そうであるなら、神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるのです。（ローマ8:8-9参照）」神は私に理想を見せて下さいます。そして、神の聖霊によってその理想の生活をおくる力を与えて下さいます。

もし、使徒パウロが今朝教会を訪ねて来たとして、教会の後あなたといっしょに昼食を食べに行ったら、食事の途中で、「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と尋ねるかもしれません。キリストにあるすばらしい喜び、あふれるばかりの豊かさをパウロは見るのでしょうか、それともあなたと神との関係に何か欠けているものを見て、それを指摘しようとするのでしょうか。御霊のダイナミックが欠けている。御霊の力が欠けている。従って、自分の肉でやろうとし、もがいているのですが、できないのです。だめなのです。でも、神は私たちが御霊によって神が私たちに望んでおられる人になれるように、イエス・キリストの忠実な証人になれるように、必要なものすべてをきちんと備えて下さっています。10段階評価で、あなたは自分のイエスへの熱心さをどう評価しますか。あなたの生活から御霊が生ける水が滝のように流れ出ているのでしょうか。自分のクリスチャンの歩みに、新しいダイナミックを望んでおられますか。神があなたに望んでおられる人になりたいですか。愛のある人、親切で、慈悲深く、温和で、忍耐があり、善意があり、忠実で、純粋になりたいですか。神は、備えをして下さっています。聖霊の賜物によって神はあなたに備えられています。

父に霊の賜物を求めればいいだけです。イエスは、言われました。「あなたの地上の父があなたに良い物を与えることを知っているなら、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありますでしょう（ルカ11:13参照）」ただ求めることによって、今日みなさんは内側で全く新しいダイナミックが働くようになって家に帰ることができます。聖書は、「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。（ヤコブ4:8）」と教えています。聖書は、「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださる、私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになえられたと知るので。（1ヨハネ5:14-15）」と教えています。イエスは、「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。（ルカ11:9）」と言われました。これは、あなたへの神の賜物です。あなたに能力を与える神の賜物です。神が望んでおられる人にあなたがなることができる賜物です。そして、この賜物はあなたのもので、それを今、手に入れることができます。心を開いて、「主よ。あなたの御霊で満たして、御霊があふれ流れるようにして下さい。私が住むこの世で、あなたの証人になれるようにして下さい。」と神に求めれば良いのです。今、そのように主にお願いしましょう。

使徒行伝 20 章 (5 / 19 / 96)

使徒行伝 20 章 24 節 (Acts 20:24)

「恵みの福音」 # 8618

交読文：詩篇 91 篇

使徒行伝 20 章です。聖書通読の学びを続けていますけれども、今朝は 24 節を見ます。今晚は使徒行伝 20 章全体を学びますが、今朝は 24 節に集中してみましょ。パウロはエルサレムに行く途中でした。急いでいました。それは、パウロが五旬節の祭りにエルサレムにいたいと思っていたからでした。そのためパウロがエペソの近くに来ると、海岸沿いのミレトで落ち合うために、エペソの教会の長老たちを呼び出しました。それで長老たちが来て、パウロは彼らに会いました。パウロの知る限りでは、彼らに会えるのはこれで最後でした。パウロは彼らに、「私はエルサレムに行く途中であるが、エルサレムに行けばどうなるかわからない。ただわかっている事はどこへ行っても聖霊は投獄と苦しみを私が受けると警告されていることだ。」ということをお話しました。それで、24 節でパウロはこうお話ししました。「けれども、これらによって私は動じません。(訳者注：欽定訳は "none of these things moved me" がある。)」つまり、私の決心を翻すことはないということです。「私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」

パウロの強い願いは、エルサレムで特に祭司職の者やパリサイ派の人に対してイエス・キリストの証をすることでした。パウロは自分自身かつてパリサイ人だったので、イエスがメシヤであることを論破できると思っていました。興味深いことがあります、神が私たちの心の中や人生の内に御業を始められると、いわば明りがついたようになります。神の御霊が私たちを神の真理について目覚めさせると、私たちは真理を見ることができない人がいることが理解できなくなるのです。私たちにとっては、真理が余りにも明らかで、はっきりしていて、すばらしいので、誰でも見ることはできるはずだと思うのです。パウロは、パリサイ人で律法を守るために苦闘したことがあったので、イエス・キリストを知って、メシヤとしてイエスを受け入れ、恵みの福音を見たとき、機会が与えられさえすれば、パリサイ人らに、イエスがメシヤであることを論破できると思いました。ですから、エルサレムでキリストを宣べ伝えることは、パウロがずっと心に抱いていた願いだったのです。

パウロが回心して以来、パウロにとってエルサレムは友好的な場所ではなくなっていました。エルサレムの教会でさえ、パウロを完全に歓迎していませんでした。いつもパウロを疑いの目で見ていました。最初にパウロが行った時には、パウロの回心を疑う者さえいました。ひょっとするとパウロは、何かの回し者ではないかと思っていました。それで、あまりパウロには友好的ではありませんでした。それに、パウロがエルサレムにいるたびに、対立が起きました。教会の兄弟についてでさえそうでした。前回パウロがエルサレムにいたときも対立があり、それは、パウロが異邦人に宣べ伝えた恵みの福音に関する対立でした。エルサレムの教会にいた人の中で、ユダヤ人にならなければ救われないと言う人がいました。救われる唯一の道は、イエス・キリストへの信仰と割礼を受けモーセの律法を守ることであり、パウロが宣べ伝えていた恵みの福音は難癖をつけられました。このためエルサレムでは、救いの要件として異邦人にも割礼を受けさせモーセの律法を守らせるかどうかを決める対立がありました。パウロには、エルサレムの教会に受け入れてもらいたい、一人前の兄弟として受け入れられたいという強い願いがあったようです。今もエルサレムに行く途中で、パウロは異邦人の教会を巡り、エルサレムの教会のための献

金を集めていました。それは、エルサレムの教会が大変な財政難に陥っていたからでした。パウロは、異邦人の教会からかなりの額の献金を持って行くことで、自分の愛を示し、エルサレムの教会との不和を改善をしようと望んでいたことは疑いありません。

エルサレムに行く途中でパウロが立ち止まったどの場所でも、聖霊はパウロに対し、今回エルサレムは友好的な場所にはならない、なわめと苦しみがエルサレムで待っていると警告されていました。パウロがエルサレムに行くことが本当に神の御心だったのかどうかという疑問があります。聖霊の警告は、神がパウロをエルサレムに行かせないためのものだったのでしょうか。それとも、神は真実な方で、ただ、「パウロ、お前が行くと、そこではこうなるよ。」と言われてパウロに選択肢をお与えになったのでしょうか。面白いのは、21章4節において、パウロはツロの教会まで来た時、聖霊にエルサレムに上らないようにと命ぜられたことです。パウロがカイザリヤに上陸した時、預言者アガボがエルサレムから下ってきて、パウロの帯を取り、自分を縛り、「この帯の持ち主は、エルサレムに行くと、こんなふうに縛られる。(21:11)」と言いました。兄弟たちが泣き始め、「パウロ。エルサレムに行かないで下さい。」と言うと、パウロは、「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしていますのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています。(21:13)」と言ったと書かれています。嘆願しているにもかかわらずパウロが行く決意を固めているのを見ると、彼らは、「主のみこころのままに。」と言って、黙ってしまいました(ceased,saying)。さて、これはどういう意味でしょうか。「主のみこころのままに。」と言うのをやめてしまったのでしょうか(訳者注:cease～ingで「～するのをやめる」という意味がある)。それとも、黙ってしまい、「主のみこころのままに。」と言ったのでしょうか。つまり、「神のみこころのままに。」と言うのをやめて、神のみこころに逆行していること示したのでしょうか。それとも、「神のみこころのままに。」と言って、その時点で神のみこころにゆだねたという事だったのでしょうか。でも、どうだったかははっきりわかりません。

パウロはものすごく意思の強い人でした。面白いのは、もしパウロがこのように強い意欲や強い意思がなかったのであれば、パウロがしたようなキリストのための働きを達成することは到底できなかったことです。パウロはとにかく決意を固めているので、何もパウロのことを思いとどまらせたり、やめさせたりすることはできませんでした。これは、すごく強みになったのです。けれども面白いのは、強みにしている生来の習性がまた、主の働きの妨げになることもよくあるのです。余りにも強くなって決意を固めてしまうと、神が思いとどまらせることもできなくなってしまうことがあります。そして、その強い意思のために、いろいろ問題をかかえてしまうこともあり得るのです。ずっと警告があったにもかかわらず、エルサレムに行くパウロの計画を思いとどまらせることも、向きを変えさせることもできませんでした。

人々はなぜパウロの意思を変えることができなかったのでしょうか。パウロは自分でそのことを告げました。「私は心配していません。私のいのちは惜しいとは思いません。この体の内で生きることは、私にとってはさほど重要なことではありません。私はキリストのために死んでもいいと思っています。自分のいのちは惜しいとは思いません。」パウロは、「生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。(ピリピ1:21)」と考えました。パウロは少しの間天国に行ったことがありました。余りにすばらしかったので、ぜひ戻ってずっといたいと思っていました。パウロは、その体験についてこのように語っています。

「私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に — 肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。その人は、第三の天にまで引き上げられました。そこで、人間には語ることを許されていない、口に

出すことのできないことばを聞いたことを知っています。(2コリント12:2-4参照) 」ですから、この体験の後、パウロは生きることも死ぬことも気になりませんでした。生きることはキリストだったのです。つまり、生きることはキリストの計画を達成することであり、キリストの働きをし御心を行なうことです。死ぬこと、それはただ益であったのです。それは、目標でした。「この地上でのいのちを惜しいとは思いません。主とともにいることを切望しています。」そこで、パウロは世を去ってキリストとともにいる願いについて話しました。教会がもはやパウロを必要としていないのであれば、世を去ってキリストのもとに行くことがパウロの選択でした。パウロは、そのほうが、はるかにまさっていると述べています(ピリピ1:23参照)。天国がどれほど栄光に満ちた場所かがわかりさえすれば、決して二度と私たちの愛する者がこの罪に呪われた世に戻ってきてくれたらなどと思ったりしないでしょう。もし本当に愛していたら話ですが、自分がかわいいから、愛する者がこの世にいてくれたらと思ってしまうのです。いてくれたら、この世で私を支えてくれるのと思うからです。しかし、本当に愛しているなら、主の永遠の御国の栄光の中に彼らが主とともにいることを喜ぶはずで、福音の働きを阻んでいることの一つは、私たちが自分のいのちが惜しくなってしまうことが良くあることだと思います。自分が損をするような犠牲を払いたくないのです。主のため、主のこのために、あまり自分の楽しみや望みをあきらめたくないのです。自分がイエス・キリストを信じているということで、人が自分をどのように考えているかを心配しすぎています。というか、ちょっとしたひやかしも受けたくないのです。このため、おじけづいて黙ってしまいます。それは、自分のいのちが惜しいからです。

パウロは、「喜んで(訳者注:欽定訳にはwith joyが入っている)自分の走るべき行程を走り尽く(20:24)」すことを熱望していると述べました。パウロは人生を競技だと見ていました。それで、クリスチャンの生活に関して、競技を走るたとえをよく用いました。パウロは、「競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。(1コリント9:24)」と言いました。つまり、パウロは、全力を尽くしなさい、最善を尽くしなさい、最大限の努力をしなさい、勝つために走りなさい、と言っているのです。パウロはこのように語っています。「私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。(ヘブル12:1-2)」私たちの走っている競走のゴールは天国で、賞は「イエス・キリストにおいて上に召してくださる神の栄冠(ピリピ3:14)」であり、神の御国に永遠に住む喜びです。死刑の宣告が出され、ほどなく自分がネロに処刑されると知ったパウロがテモテに書いた手紙の中で、「私は勇敢に戦い、走るべき道りを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。(2テモテ4:7-8)」と言いました。パウロは人々に、「御覧なさい。自分のいのちは惜しいとは思いません。死ぬことは心配していません。喜んで自分の走るべき行程を走り尽くそうとしているのです。道の最後まで来て、最後の一息まで来て自分が主の臨在の中に入るのは、何たる喜びだろうか。」と言ったのです。

パウロは自分の任務が完了されることを願い、主イエスによって与えられたこの任務を終わらせたいと願っていることについて語っています。依然としてイエスを主であるとパウロが認めていることに注目して下さい。イエスは実にパウロの人生の主でした。問題は、イエスがあなたの人生の主であるかどうかです。イエスはあなたの主人でしょうか。自分の人生における主な願いや目標は、主を喜ばせ、主に従順であり、主に仕えることでしょうか。キリストが主であるということは、ただ日曜日の朝一時間だけ体験するもので

はありません。それは、24時間、毎日、現実であるべきものです。イエス・キリストの支配にゆだねることです。面白いことに、パウロが最初にイエスに出会い紹介されたとき、「主よ。あなたはどなたですか。あなたにお仕えしたいのですが。（訳者注：「あなたにお仕えしたいのですが」の部分は聖書にはない。使徒9:5参照）」と言いました。するとイエスは、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。(9:5)」とおっしゃいました。するとパウロは、「主よ。私はどうしたらよいのでしょうか。（訳者注：これは、欽定訳には使徒9:6の前半に書かれていて新改訳では欠落しているが、使徒22:8には記載されている。）」と尋ねました。パウロは、イエス・キリストが主であることを即座に認めました。そして、それは決して変わることがありませんでした。ここでは、随分後になって、まだイエスが主であると認めています。さて、イエスは、「なぜ、わたしを『主よ。主よ。』と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか。（ルカ6:46）」と言われました。これが実に矛盾していることだと考えたことはありませんか。たくさんの方が、「ああ、主よ。主よ。」と言います。しかし、イエスは、「あなたはわたしを『主よ。主よ。』と呼びながら、それなのに、わたしの言うことを行なわないのです。まだ自分のことをしているのです。」と言われました。つまり、矛盾しているのです。ですからイエスは、「わたしに向かって、『主よ。主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者が入るのです。（マタイ8:21）」とおっしゃいました。言うことではなく実際に神の御心を行なうことが、自分の人生において主であることを意味しているのです。正しい話(talk)をすることができますが、本当に大切なのは歩み(walk)なのです（訳者注:"talk"と"walk"で韻を踏んでいる）。あなたがこのような分類に入っている可能性はあるでしょうか。パウロは、自分を吟味しなさい、「もし私たちが自分をさばくなら、（神に）さばかれることはありません。(1コリント11:31)」と言いました。この方が本当に自分の生活の中で主であるならば、私は日々この方の御心を行なっているのでしょうか。

パウロが回心した時、主は、「彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。（使徒9:16）」と言われました。パウロは、イエス・キリストを信じたことによって犠牲を払いました。パリサイ人としての立場を失う犠牲を払いました。彼は、イエス・キリストに捧げる決心をした時、多くの苦しみを経験しました。実際、ピリピ人に手紙を書いた時、「私にとって得であったこのようなものをみな、イエス・キリストを知っていることのすばらしさのゆえに、損と思うようになりました。私はキリストのゆえにすべてのものを捨てました。(3:7、8参照)」と言いました。多くの方は、パウロが、イエス・キリストに献身したために結婚までも犠牲にしたと信じています。彼は、サンヘドリン（ユダヤ人の議会）の一員になるために結婚しなければなりませんでした。彼の妻のことは聞いたことがないので、イエス・キリストに従うために結婚を犠牲にしたと推測する人たちがいます。おそらく家族を犠牲にしたのかもしれない。昔の言い伝えによると、彼には二人の息子がいました。けれども、パウロはキリストのゆえに得たものの方が、損したものよりも優れていると信じていました。そして、パウロは損したものを決して振り返る事はありませんでした。イエスに従うことによって、パウロが失ったものについてはあまり聞きませんが、彼が得たものについてたくさん聞きます。ペテロが、「私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。（マルコ10:28）」と言ったとき、イエスは言われました。「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、・・・」ちゃんとこの「神の国のために」を入れておきましょう。「・・・この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。（ルカ18:29-30）」みなさんは、神が下さらないものを繰り返し繰り返しお返しすることなど決してあ

りません。ですから、イエス・キリストのためにすべてをあきらめたと言う人に対して、あなたは自分の得たものが何かわかっていませんねと考えてしまうのです。イエス・キリストにある自分の豊かさに気付くなら、これまでにあきらめたり、犠牲にしたかもしれないどんなものよりも、どんなものよりも、それがはるかに優れたものであるかがわかるからです。ですから、自分が今持っているものを得るために失ったものについては心配にならないのです。

イエスは、「天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。

(マタイ13:44)」と言われました。文脈を無視して、このたとえから別のたとえを作ってみます。イエスは、すべてを捨てて世界を贖われた御自身のことを言及しておられたのですが、別の角度からみてみましょう。私たちがこちらにある空き地を通っていたとします。すると、何かにつまづいたので振り返って何だろうと見ると、金属がすこし地面から出ているので土をのけると、箱の蓋のようでした。それでスコップを持ってきて掘り始めると、箱には様々な金や銀の塊や宝石がぎっしりつまっていました。海賊か何かが何年も前に残したものでした。では、私たちはどうするでしょうか。まず、登記事務所に行って誰がその畑を所有しているか調べます。そしてその所有者の所に行って、「あそこのあなたの畑を買いたいのですが、いくらならよろしいでしょう。」とはったりをかけます。そしてその人に値段を言わせ、それから車を飛ばして、その畑を手に入れるための金を工面するため、家を抵当に入れ全ての持ち物を売ります。畑を買う金ができるに戻って、「ここにお金があります。」と言って証書を手に入れ、畑に行つてあの箱を掘り出し、メルセデスの販売店に行つて一番よい車を手に入れます。そして、不動産屋へ行つて入り江に面した新しい家を買います。入り江に面した新しい家に住んで、車庫には3台車があり召使に囲まれて暮らしていると、誰かが、「まあ、すばらしいですね。」と言うとします。すると、「でもね、これを得るために私があきらめなければならなかったものを、あなたはご存知ではない。」と言うのです。「あの私の古いフォード車はしっかり走り続けてくれたのに、売り飛ばさなければならなかったし、私が住んでいたあのぼろい掘っ建て小屋も売らなければならなかった。」これを手に入れるためにあきらめなければならなかったがらくたのことなど、くどくどと話したくありませんね。自分が持っているものにとてもワクワクして、ありがたく思います。ですから、キリスト・イエスにある豊かさを本当に理解するなら、得るためにあきらめたものは取るに足らないものだったのです。パウロは、「キリストを知り、キリストの中にある者と認められるために、それらをちりあくたと思っています。(ピリピ3:8-9参照)」と述べました。

パウロが完了することを願った任務は、異邦人に神の恵みの福音を宣べ伝えることでした。エペソの教会に対しパウロは、「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。(エペソ2:8)」と書きました。ローマの教会に対しパウロは、「もし恵みによるのであれば、もはや行ないによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。(ローマ11:6)しかし、もし行ないによるのであれば、もはや恵みではないのです。(訳者注：この部分は欽定訳にはあるが、新改訳にはない。)」と書きました。つまり、行ないか恵みかのどちらかによって救われるのであって、両方によって救われるのではないということです。この二つは相入れないものです。テモテに対しパウロは、「神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召していただきましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、・・・(2テモテ1:9)」と書きました。福音は、救いが神の恵みによる私たちへの神の賜物であると伝えていきます。あなたが自分で自分を救うことのできるような行ないも、行ないの組み合わせもあり

ません。しかし、救われて、あなたに対する神の恵みの豊かさを知るようになると、神があなたにしてくださったことに対し自分の愛と感謝を神に示す事ができるなら何でもしたくなります。パウロは、ユダヤ人として律法の行ないによって救いを得ようとしていました。けれども、いくら努力してもやはり自分の内に悪があることを意識していました。いくら良くなろうと一生懸命頑張っても、悪が存在していたのです。律法の下に神の御前に義となるうともがいている時、パウロの思いには安らぎがありませんでした。でも、イエス・キリストを自分の主として見出だして、イエスが律法の正しい要求を守られたことを発見しました。また、イエスを信じる信仰と信頼によって、イエス・キリストの義が自分の義とみなされることを発見しました。もはや神を喜ばせようとする自分の行ない(work)が問題ではなく、自分を贖ってくださる神の御業(work)と恵みによる神の賜物が彼にとって関心事だったのです。ですから、ようやくキリストにおける経験を発見した時、パウロは、イエス・キリストを得て、イエス・キリストによって義とされるために、自分がこれまでに律法の下でパリサイ人として獲得した得点を喜んで捨てたのです。そして、御父を喜ばせる生活をおくるために、自分を変える聖霊の力を経験するようになりました。パウロが行っていた、たゆみない良いわざは、パウロを救いませんでしたし、彼自身それを救われるためのものと見ていませんでした。パウロがこのようなわざをしたのは、キリストへの愛がパウロを動かし、押し迫ったからでした。それで、パウロは、神の御国のためにすばらしいわざをなしたのでした。あなたがたは、恵みによって救われたのです。もし、本当に救われたのなら、それは、神の愛と恵みに対するあなたの応答に、神の御国のためにあなたが達成するわざに現われます。

使徒行伝 21 章 (5 / 26 / 96)

使徒行伝 21 章 14 節 (Acts 21:14)

「ゆだねる」 # 8619

交読文：詩篇 56 篇

聖書通読の学びをしていますが、今週は使徒行伝 21 章まで来ました。ここを今日の午後を読むことをお勧めします。私たちは創世記から黙示録までの聖書通読をしていますが、今晩は使徒行伝 21 章を勉強します。今朝はこの章の 14 節を見てください。使徒行伝 21 章 14 節です。

使徒パウロはエルサレムに上る途中でした。エルサレムに着いたら大きな困難に遭うと、彼が立ち止まる所ではどこでも聖霊によって警告を受けていました。牢に入れられて、縛られて、苦しみに遭い、異邦人の手に渡される、という警告でした。それでもこうした警告にもかかわらず、パウロはエルサレムに行く決心をしていました。今やパウロの旅も終盤を向かえ、船でカイザリヤに着きました。カイザリヤからエルサレムまでは陸続きです。けれども、カイザリヤの伝道者ピリポのところに滞在していたとき、アガボという名の預言者がエルサレムから来ました。パウロの帯を取って自分を縛りました。そして、「この帯の持ち主は、エルサレムに着いたとき、こんなふうには縛られて、異邦人の手に渡される。(21:11参照)」と預言しました。パウロと共に旅をしていた人たちと、カイザリヤにいたクリスチャンの兄弟たちは、この預言を聞いてエルサレムには上らないように頼んで泣き始めました。パウロは振り返って、「泣いたりして、いったい何をしているのですか。私が縛られるのを恐れているとでも思っているのですか。私はキリストのためにエルサレムで死ぬことさえも覚悟しています。(21:13参照)」と言いました。それで彼らは、思いとどまらせることができないと知ったので、説得をやめて涙をふき、「わかりました。主のみこころのままに。(21:14参照)」と言いました。状況や困難や理解できない問題をゆだねて、「主のみこころのままに。」と言うことは、実に大切に、すばらしいことです。

主のみこころは、自分の身に苦しみを伴うことがよくあります。私たちがしなければいけないことは、キリストの生涯を見ることだけです。この方が御父のみこころに従うことは、十字架の苦しみを必然的に伴っていました。イエスが園におられて祈っておられると、汗が地のしずくのように地に落ちたことを私たちは思い出します。苦しみにもだえて、「父よ。できますならば、死にたくありません。この杯をわたしから取りのけてください。十字架はいやです。」と言われました。けれども、「しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」と言い加えられました。(ルカ 22:42、44 参照) イエスは、この園で、祈りの中で神にゆだねる決意をされました。「わかりました、あなたのみこころとご計画が達成されるのに苦しみを伴うのでしたら、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」というところまで来られたのです。そのようにゆだねるところまで来られると、兵士たちが園にイエスを捕らえに来て、ペテロが剣を抜いて振りかざして大祭司のしもべの耳を切り落として、イエスを守る覚悟ができていたのに、イエスは、「ペテロ、剣をもとに納めなさい。わたしが願えば、わたしを救い出すために十二軍団もの御使いを今呼ぶことができないとでも思うのですか。父がわたしに下さった杯をどうして飲まずにいられよう。(マタイ 26:53、ヨハネ 18:11参照)」と言われたのです。ここにおいてイエスは、神のみこころにゆだねられていたのです。けれども、苦しみは伴っていたのです。そこでペテロは、「あなたがたが召されたのは、実はそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。(ペテロ第一 2:21)」と書きました。クリスチャンの生活

が、安楽なものでバラの花びらの上を歩くものだと考えることは間違っています！おそらく、バラの花びらよりも、バラの棘の上を歩くでしょう。主は、私たちに楽な生活を今送れるとは約束されていません。むしろ、聖書になればいいのにとする聖書の約束に、「キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。（テモテ第二3:12）」があります。神は、楽な道だとはおっしゃっていないのです。神が言われているのは、将来にある報いがとてもすばらしく素敵なもので、永遠の神の御国にいることの喜びと祝福で、そこにたどり着くまでにあった問題をみなすぐに忘れることができるというものです。

使徒パウロは、自分がキリストのゆえに苦しみを受けたことについて語っています。面白いことに、主は、パウロが初めにキリスト教に回心したときに、「彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならぬかを、わたしは彼に示すつもりです。（使徒9:16）」と言われました。主は彼にすべてを見せたのではないかと思います。なぜなら、パウロの手紙がその一部を分かち合いはじめているからです。「パウロは、本当の使徒ではない。自己推薦しているにすぎない。」と言う人たちがいましたが、パウロは、この人たちが言っていることに反駁しています。「彼らはキリストのしもべですか。・・・私は彼ら以上にそうなのです。・・・牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠れぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物がなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。（コリント第一11:23-28）」パウロは、キリストのゆえに受けなければならなかった心労と肉体の苦しみを語っているのです。けれどもそれから、さらに大きい苦しみを、死に至るかもしれない苦しみを受けようとしていました。なぜなら、彼らは、「異邦人の手に渡される」という言葉を、パウロが異邦人によって死刑を受けると解釈したからです。イエスは、ご自分のことを預言して、裏切られて異邦人の手に引き渡されると言われたとき（マタイ20:19参照）、ご自分が十字架につけられることを指しておられました。なぜなら、ユダヤ人は、死刑を宣告する権威が与えられていなかったからです。死刑の判決を下したいのであれば、ローマ政府のところに行って、ローマ政府の法廷に提訴しなければなりません。ユダヤ人には死刑を宣告する権威がなかったのです。ですから、イエスは、「異邦人の手に引き渡されます。」と言われたとき、それは、ご自分が、ローマ政府の法廷の命令で十字架につけられることを指しておられたのです。ですから、預言者が、「パウロが異邦人の手に渡される。」と言ったとき、彼らは、パウロも殺されると思って、涙を流して、泣いて、パウロがエルサレムに行くのをやめさせようとしていました。

聖書は、「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでください。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍びました（ヘブル12:2）」、と言っています。神は、苦しみの中で、永遠のご計画を実行されているのです。神は、あなたが一時的な慰めを受けるよりも、永遠に益になることを受けることに関心をお持ちです。私たちはその逆です。私たちは、多くの場合、永遠に益になることよりも一時的な慰めを得ることに気を使います。そのために、人間は大きな間違いを犯すのです。ヘブル書は、「あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。（12:4）」と言っています。イエス・キリストを信じた人が耐えなければならなかった事を読むと、パウロや他の使徒たちが受けた苦しみがわかります。歴史を見

ると、人々がイエス・キリストのために拷問や虐待を耐え忍ばなければならなかった事がわかります。現代の中国のクリスチャンのことを読むと、家の教会の人たちは、イエス・キリストを信じる信仰のために、牢に入れられ打たれて、この投獄によって多くの人が死んだことがわかります。イランやルワンダや、その他イエス・キリストの教会やイエス・キリストを代表する人たちに激しく敵対しているところで殉教したクリスチャンのことを読んだことがあります。私たちは、まだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことがないことを知ります。私たちの最大の問題といったら、エアコンが適切な温度で設定されていないことかもしれません（訳者注：会堂ではすでに、エアコンがついています。）あるいは、音響装置がきちんと機能していないことかもしれません。しかし、記者は、「傷跡を見せてくれよ。そう思うなら、お前の傷跡を見せるよ。」と言っているようなものです。私たちは楽をしています。パウロとバルナバは、「主イエス・キリストの御名のために、いのちを投げ出した人」と言われました。（使徒15:26参照）パウロは、苦しみに会ったり投獄されたりすると言われても、思いとどまるような人ではありませんでした。人の脅しや友人の涙で、思いとどまったりしませんでした。

さて、パウロの友人たちがパウロにエルサレムに行くのを思いとどませようとしたのは、良い動機からでした。彼らはパウロのことを愛していました。この勇士が既に、随分ひどい目に合わされてきたことを知っていました。パウロがまた投獄され、苦しめられるのを見たくありませんでした。パウロへの愛のゆえに、パウロに行ってほしくないことを懇願するように促されたのです。私たちの友人はよく、犠牲や苦しみが伴うかもしれないということで、私たちが神の御心に従わないようにさせます。私たちも、純粋な動機から人を思いとどませようとするのがよくあります。いのちの危険を冒すのを見たくないからです。不快な目に会わせたくないのです。パウロの友人たちは、パウロの投獄が予想されていたのでとても心を騒がせました。けれども、パウロの思いを変えさせることができないことがわかると、泣いたり説得するのをやめ、ただ、「主のみこころのままに。」と言いました。本当に平安を見出だすことができる唯一の場所はそこしかありません。「わかった、主のみこころのままに。」と言うことができるところに来ることです。

数週間前に、みなさんに、私の思いの中にある個人的な問題を話しました。大きな困難があって、この問題をなんとかしようとしていたことを話しました。その時には、それが何かお話しすることができませんでした。今はできます。実際はそのことをお話ししたいのです。というのは、みなさんの中には、私が末期癌にかかっているのだと思った人がいたり、ケイが私を捨てて、出ていってしまうのかと思った人がいらっしやるからです。私の義理の息子で、ビスタの教会の牧師をしているブライアン・ブローダーソンが、家族を連れてイギリスに移り、ロンドンで働きを始めることが神からの召しであり、もしかすると、ロンドンから欧州全体に福音を宣べ伝えることではないかと感じています。私は、義理の息子は行かせる心構えができました。でも、私の娘と孫はまた別問題です。神はなぜ家族のいない誰か他の人を召し出せないのかと思ってしまいます。孫たちはおそらくカルチャーショックに会うでしょう。孫の一人は、サーフィンやスポーツがとても気に入っています。それなのに、ロンドンに住むなんて・・・毎火曜日、私たちは彼らに会いに行くようにしています。私は下の孫二人をチャッキー・チーズ（訳者注：ピザを中心としたファースト・フードのお店）とトイザらスに連れて行きます。そうすることが、私たちの生活の一部となっています。彼らがそんなに遠くに行ってしまうことを考えると、火曜日ごとに車でロンドンに会いに行くことは無理です。彼らは私たちの生活の大きな部分を占めています。丁度、昨日（会った）あるお父さんのような気持ちがします。昨日レッドランズで結婚式がありました。若い女性が、私たちの教会の青年でハンガリーで宣教師をしている人と結婚しました。来週、二人はハンガリーへ出発します。結婚式の司式の部分

で、私が、「花嫁のジェニファーをグレッグにやるのは誰か。」と質問をするところまで来て、彼女の父は、「彼女の母です。」と言いました。（訳者注：父親が、「彼女の母と私です。」と答えるのが普通です。）彼は、まだ自分の娘を嫁にやる覚悟ができていなかったのです。私は彼の気持ちが分かります。本当に分かります。「主のみこころのままに。」というのは、いつも簡単なわけではありません。今苦労していますが、何とかできるでしょう。でも、あの義理の息子には、これが確かに神のみこころなのかははっきりさせてもらいたいです。彼にたくさん羊の毛を置いてもらいたいです。（訳者注：士師6：36-40ギデオンの羊の毛）でも、もし彼らの行くことが神のみこころならば、その時が来れば、私が涙を流したとしても「主のみこころのままに。」と言って、そのことに平安を得るでしょう。これが神のみこころでご計画ならば、それに立ちはだかりたくありません。なぜなら、私は神の道のほうが私の道よりはるかに知恵があることを知っているからです。神の道が最善であることを知っています。もし彼らがここにとどまっていたなら、激しい断腸の思いをもたらすような事があるのかもしれませんが。それで、神が何か将来起こるはずの悲劇を起こらないようにして下さっているのかもしれませんが。つまり、神の道が最善である事を知っているのです。

こういうわけで、多くの人が、よく「主のみこころのままに」と言うことができないでいます。なぜなら、神と神のみこころについて誤った概念があるからです。私が子供の時、人々が、「絶対にやらないと言ってはいけない。まさにそのやらないと言ったことを神があなたにやらせるからだ。」と言うのをよく聞きました。ちょっとこれには理解できかねました。もし、神が天で、私が絶対にやらないと言うのを待ち構えていて、それを私にやらせるなんて。神が私に無理にカリフラワーを食べるようにさせられるんだ。私は、カリフラワーが大嫌いだと言ったから。（訳者注：カリフラワーは、子供が嫌いな典型的な野菜の一つ。）神がすべて悲惨な酷いことを、あなたが絶対やらないといったからやらせるのだ、と。ですから、あなたが虫や蛇がとても怖くて、「主のみこころのままに。」と言うなら、神はあなたをアフリカに、アフリカ大陸の最も悲惨なところに、蚊帳の中で寝て、回りは蚊や虫がうじょうじょいて、屋根には蛇がいるようなところに遣わされることが、「神よ、みこころのままに。」になります。もし、あなたがとても悲惨な状態で、「こんなのひどい。我慢できない。」と言えば、「私はまさに神のみこころの渦中にいるに違いない。私は、とても惨めだから。」ということになります。神のみこころの概念をこのように考えている人がいるのです。けれども、現実には、神のみこころほど祝福された事は起こらないのです。私は今日カリフラワーを食べたとします。もう、鼻をしかめてゲロを吐いたりしません。カリフラワーがおいしいと思います。神は私の嗜好を変えて下さいました。私はカリフラワーが大好きです。神は実はそのように働いて下さるのです。神は内側から外側に働いて下さるのです。神はあなたの心を変えて下さるのです。あなたの態度を、感情を変えて下さるのです。ですから、神のみこころを行なうことは喜ばしい、楽しいことなのです。神は、「その日には、わたしは、律法をもはや石の板にではなく、彼らの心の板にこれを書きしるす。（エレミヤ31:33とコリント第二3:3参照）」と言われました。神がここで言われているのは、神があなたの心に願いを置かれることです。そうして、神のみこころを行なうことがあなたの生活の喜びとなり、イエスが、「主よ、私はみこころを行なうことを喜びとします。（訳者注：詩篇40:8参照。メシヤ預言か?）」と言うことがおできになったように、私も、「主よ、私はみこころを行なうことを喜びとします。」と言うことができるのです。それは、神の道が最良だとわかっているからであり、神の方が私よりずっと知恵がお持ちだからです。

旧約聖書の中に、主のみこころのままにゆだねるところまで、「主よ、みこころのままに。」というところまで到達した人たちのことが書かれています。ヤコブには12人の息

子がいました。ヤコブは、下の2人の息子のヨセフとベニヤミンを可愛がりました。この2人は、ヤコブの最愛のラケルから生まれた子供だからです。他の兄弟たちは、父が弟のヨセフをより愛していることをねたみ、ヨセフを殺す陰謀を企てました。その後計画を変えて、エジプトへ下って行く奴隷商人にヨセフを売り飛ばしました。彼らはヨセフが車に乗せられ出発する時、「兄弟、やめて下さい。こんなことはしないで下さい。」と泣いて叫ぶのを見ていましたが、ヨセフの涙を無視し、ヨセフの長服に血を付け、家にいる父のところへ持って行って、「この血の付いた長服を見つけましたが、これが誰のものか分かりますか。」と言い、父はヨセフが野獣に殺されたとだまされました。このため父は、死んだとされた息子の死を嘆き悲しみました。一方エジプトでは、ついにヨセフは、パロに次ぐ高い地位につきました。その土地全体を支配し、大いに恐れられて尊敬されていました。ある時、ひどい飢饉、かんばつになり、7年間かんばつが続きました。彼らの穀物は尽きてしまいました。その時、エジプトには十分な穀物があるという知らせが入ってきました。これはヨセフによるもの、ヨセフの知恵によるものでした。ヤコブは息子たちに、エジプトへ下って行って穀物を買ってくるようにと命じました。それで、彼らはヨセフの所へ行きました。その時、ヨセフはあれから17歳も年をとっていましたが、エジプトの服を着て、エジプトでの言語を話し通訳を介して話していたので、彼らはヨセフだと気付きませんでした。ヨセフは気付いていました。ヨセフはこのことを少し利用し、彼らを苦しめました。彼らはかつてヨセフを苦しめたのですから少しおあいこです。それで、ヨセフは、「あなたがたは誰だ。どこから来たのか。」と尋ねました。彼らは、「私どもは兄弟です。パレスチナから参りました。」と答えました。「いや、本当は間者だろう。」「いえ、いえ、私どもの父は一人だけです。私どもは兄弟です。ひとりはいなくなりましたが、もう一人は家に父といっしょにいます。」「もっともらしい話をしているだけだ。あなたがたは間者だ。」「とんでもない。私どもは、間者ではありません。」ヨセフは、彼らを苦しめました。それで、ヨセフは、「よし、では穀物をやろう。しかし、あなたがたは間者に違いないので、あなたがたのうち一人を人質として監禁しておく。牢に入れ、人質としておく。残りの者は、戻るときに証拠として弟を連れてくるまで、二度と私の顔を見ることはない。」と言いました。彼らは家に戻り、「お父さん。あのエジプトにいる人物がどれほどひどい人かご存じないのです。本当に厳しい人です。次回行く時、私たちが弟のベニヤミンを連れて行かなければあの人の顔を見ることはないと言いました。」ヤコブは、「なぜ、あなた方は弟がいるなどと言ったのか。」と言いました。「連れて来いと言われるなどと思っても見ませんでした。」それで、ヤコブは、「絶対ベニヤミンを行かせたりしない。もしもあの子に何かあったら、私は死んでしまう。あの子は行かせない。」と言いました。しかし、時がたち、また穀物がなくなりもっと必要になりました。それでヤコブは、「息子たち、エジプトへ下って行って、穀物を買ってきておくれ。」と言うと、息子たちは、「とんでもない。ベニヤミンが一緒に行かないのであれば、あの人には会えません。」「いや、それはだめだ。」「じゃあ、行かない。」どうしようもなくなり、ヤコブは、「行きなさい。」と言わざるを得ませんでした。それで、ヤコブは、言いました。「全能の神がその方に、あなたがたをあわれませてくださるように。そしてもうひとりの兄弟とベニヤミンとをあなたがたに返してくださるように。私も、失うときには、失うのだ。(創世43:14)」もしあわれみ(恵み)がないなら、もしベニヤミンを失うようなことがあるなら、私は失うのだと。ヤコブはゆだねました。私は何もすることができない。そのままにしておくしかない。ゆだねなければならない。

サムエルが小さかった頃、この話は日曜学校で聞かれたことがあるでしょう・・・彼の母は、祭司エリの所に連れてきました。それは、彼女が神に、「このはしために男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主にやささげします。(1サムエル1:11)」と

約束したからです。それで、彼女は息子を祭司のところに連れてきて、その子は祭司エリの家で育ちました。まだ、その子が小さかった頃、ある夜、この子は「サムエル。サムエル。」と自分の名前を呼ぶ声を聞きました。それで、サムエルは、エリのところに走って行って、「私をお呼びになったので。」と言いました。すると、「私は呼ばない。帰って、おやすみ。」と言いました。サムエルが戻って寝ていると再び、「サムエル。サムエル。」と自分の名前が呼ばれました。それでまた、エリのところに走って行って、「私をお呼びになったので。」と言いました。すると、「私は呼ばない。帰って、おやすみ。」と言いました。三度目に、サムエルが声を聞いて、エリのところに走って行くと、エリは、「何か起きていますぞ。」と悟るようになり、「今度呼ばれたら、『主よ。お話しください。しもべは聞いております。』と申し上げなさい。」と言いました。サムエルが戻って寝ていると、また「サムエル。サムエル。」と自分の名前が呼ばれるのを聞きました。それで、サムエルは、「お話しください。しもべは聞いております。」と申しあげました。すると神は、この少年サムエルに、神のさばきがエリの家の下されることについて話し始められました。エリの息子たちは悪を行ないました。彼らは人々を神にそむかせました。彼らは宗教の権威と権力のある立場にありましたが、その立場を利用して人々を神にそむかせていました。それで神はサムエルに、自分がエリとエリの息子をさばくので彼らが滅びると話しました。朝になって、朝食の時エリは、「サムエル。どうなったのだ。」と尋ねました。サムエルが、「えー、そのー、」と言っていると、エリは、「話してくれ。」と言いました。サムエルは、年老いたエリに、神がエリとエリの息子を滅ぼされることを話すのを躊躇していました。エリは、「話してくれ。私に隠さないでくれ。もし、おまえにお告げになったことばの一つでも私に隠すなら、神がおまえを幾重にも罰せられるように。」と言いました。それで、サムエルは、エリが息子たちの驕を怠り、彼らが神のことを冒涇したため、神のさばきが来ることを告げました。エリは答えました。「その方は主だ。主がみこころにかなうことをなさいますように。(1サムエル3:18)」主のみこころがなされますように。エリはゆだねました。

アブシャロムが軍隊を引き連れて迫っていたため、ダビデがエルサレムから逃げる時、ある人が契約の箱を担いでいましたが、ダビデがそれを見ると、「エルサレムに戻しなさい。」と命じました。そして、言いました。「もし、私が主の恵みをいただくことができれば、主は、私を連れ戻し、神の住まいを見せてくださる。もし主が、『あなたはわたしの心にかかわらない。』と言われるなら、どうか、この私に主が良いと思われることをしてくださる。』(2サムエル15:25-26参照)」主のみこころがなされますように。神が、正しいと思われることをなさって下さい。人によっては、主のみこころを恐れる人がいます。それは、その人が神のことを本当によく知らないからです。神がどれほど愛の方であるか知らないのです。神があなたに永遠に最良のことだけに関心を持っておられることに気づかないのです。

さて、神は永遠のご計画を実行するために、現在に多少の不便が起こることをためらいもなく許されます。神は言われました。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたに良い将来を計画している。(エレミヤ29:11参照)」神のご計画は、神が私たちに実に完全に愛して下さっているから、私たちに起こり得るもので最良なのです。神は、いつも最後の結末を見ておられます。私たちの人生からゴミを取り除き、私たちがさらに神に信頼を置くようになるために、試練をお許しになります。神は私たちに辛い経験をお許しになります。そして、神には、結末が良ければ手段が正当化されます。永遠のご計画を実行するために、もし神がある程度の苦しみを使わなければならないのであれば、主のみこころのままになりますように。もし、私の生活で求めているものに霊的に健全でないものがあれ

ば、神がそれを取り除いて、主のみこころのままになりますように。主は永遠のご計画を実行しておられます。それは、私が永遠に主とともに過ごすことに関心を持っておられるからです。主は、私がこの惑星に、ある定まった時間しかないことをご存じです。短い時間です。神は、この世の人生と呼ばれている短い時間に関心はなく、私の永遠の安寧に心を留めておられます。百年間だけではなく、何百、何千億年も時間を、永遠を心に留めておられます。

神は、なぜある事が起こるようにされるのか、お許しになるのか必ずしも知らせて下しません。よく私は神に、「なぜですか。」と尋ねます。私は知りたいのです。こんな混乱から、こんな状況からどのような良いものが生まれるのかとよく考えてしまいます。神は必ずしもすぐには示して下しません。そのうち上手くいって、「これは、すごい！ほら、神はすばらしいでしょう。」と言うのですが、今の時点では、世も終わってしまうかのよう、災難が降りかかかったように見えます。神が必ずしも、「チャック。こういう理由からこれを許しているのです。こうなったら、次にあぁなって、こうなって・・・」と言われて、「ああそうですか。わかりました。」というふうにはなりません。いや、神はそのようなことはされません。なぜなら、神は、私の内に信仰と信頼を建て上げたいと考えておられるからです。私が、「神よ。なぜですか。」と言うと、「子よ。私を信頼しなさい。ただ信頼しなさい。」とおっしゃいます。神は、信仰と信頼を建て上げたいと考えておられます。それは、信仰と信頼がさらに増せば、平安もさらに大きいからです。船に水が入ってきて沈みそうになって船が傾き始め、あなたは船が沈んでしまうと思います。

「主よ。助けて下さい。」と言うと、「私に信頼しなさい。」と言われます。嵐の直中であっても、平安でいることができます。それは、あなたがその中を通るのを見守っていて下さることがわかるからです。神はご計画を実行されています。神はご目的を実行されています。神は、あなたがその中を通るのを見守っていて下さいます。ですから、「大丈夫だ。主のみこころのままになるのだから。」という、平安があって、ゆだねることができる所に来るです。ひょっとすると、これは苦しむことかもしれません。困難かもしれません。でも、「主のみこころのままに。」なのです。それは、長期的な効果がすばらしく、良い(good)ものだからです。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、すべてのことが働いて益(good)となることを、私たちは知っています。

(ローマ8:28)」私は神のことを愛しています。神はご計画に従って、私を召して下さったことを知っています。その計画を私はいま理解できないかもしれませんが。けれども、私は神を知っており、神の愛を知っており、神のご性質を知っています。ですから、「主のみこころのままに。」と言うことができるのです。これが最も大切なことです。「主のみこころのままに。」ということが最も大切なのです。ペテロは、「ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい(1ペテロ4:19)」と言いました。私は今、神のご計画に従って困難な状況の中にいます。私の解決は主におゆだねすることです。神は、真実であられる創造者です。神を愛する者のために、すべてのことを働かせて益としてくださるからです。

使徒行伝 22 章 (6 / 2 / 96)
使徒行伝 22 章 14 節 (Acts 22:14)
「みこころを知る」 # 8620
交読文：詩篇 25 篇

今朝は使徒行伝 22 章 14 節を見たいと思います。使徒行伝 22 章 14 節です。使徒パウロは教会に献金を持って来るため、そして五旬節の祭りを祝うためにエルサレムに来ていました。パウロは平穩に宮で神を礼拝していましたが、その時にアジアから来たあるユダヤ人たちがいて、その者が異邦人に福音を伝えている人物であることに気づきました。それで彼らは叫び始め騒ぎを起こしました。ユダヤ人たちは、パウロを捕まえ殺そうとしました。アントニヤの要塞にいたローマの護衛隊が宮での騒ぎを見た時、急いでやってきてパウロをユダヤ人たちの手から救い出しました。そして、パウロをアントニヤの要塞まで連れてきて、ローマ政府の保護監察下に置きました。パウロは階段の上に来ると、千人隊長に、「一言お話ししてもよいでしょうか。」と尋ねました。許可が出されたので、パウロはユダヤ人たちに自分がキリスト教に回心したことについて話を始めました。パウロは言いました。「みなさんのお気持ちはわかります。みなさんのことを理解できます。かつては私もみなさんの一人でした。私は、この一派を分派だと思って滅ぼそうとしていました。私が大祭司から許可を得てダマスコに行き、イエスの御名を呼び求めている者たちを逮捕しようとしていたことは、大祭司が証言してくれます。しかしダマスコに行く途上で、真昼ごろ突然、真昼の太陽よりもまばゆい光が私の回りを照らし、私は地に倒れました。私は、『なぜわたしを迫害するのか。』という声を聞きました。そこで私が答えて、『主よ。あなたはどなたですか。私はあなたにお仕えしたいのです。』と言うと、その方は、『わたしは、あなたが迫害しているイエスだ。』と言われました。」それで、パウロは、自分がこの光があまりにまばゆかったために目が見えなくなったことについて話しました。それで、いっしょにいた者たちがパウロの手を引いてダマスコに入らなければなりませんでした。そこに滞在している時に、アナニヤという名の方がパウロの所に来ました。この人はイエスの弟子で、ユダヤの律法を重んじるとても敬虔な人でした。この人がこう言いました。「パウロ。私たちの先祖の神は、あなたをお選びになった。」これは 14 節です。「あなたにみこころを知らせ、義なる方を見させ、その方の口から御声を聞かせようとお定めになったのです。あなたはその方のために、すべての人に対して、あなたの見たこと、聞いたことの証人とされるのですから。」(訳者注：「あなたをお選びになった。」という訳は新改訳に存在しないが、欽定訳には“has chosen thee”とある。口語訳や新共同訳を参照。)

「わたしたちの先祖の神は、あなたをお選びになった。」とアナニヤは言いましたが、彼が「わたしたちの先祖の神」と言ったのは、パウロに話している神を明らかにするためでした。モーセが荒野にいて火で燃えていた柴に引き寄せられた時、主は柴の中から語られて、パウロのもとに行きエジプトの束縛からイスラエルの民を解放するように要求しなさいとモーセに言われました。モーセが、「あなたが私を遣わされたことを信じないでしょう。」と言ったら、主は、「わたしはあなたとともにいる。」と言われました。モーセは、「けれども、『あなたを遣わしたのは誰ですか。』と聞いてきたら、私は何と答えたらよいのでしょうか。」と申し上げました。神は、「民に言え。『あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた。』と。(出エジプト 3:14、15 参照)」と仰せられました。ですから、神はご自分が誰なのかモーセに明らかにされて、モーセがイスラエルの民に誰が彼を遣わされたのか明らかにすることができるようにされました。その答えは、「あなたが

たの父祖の神」でした。つまりアブラハムが信じた神です。神はアブラハムとイサクとヤコブにご自分を明らかにされました。聖書を通してご自分を示された神が、私たちの話している神なのです。

その当時の人たちは、現代の人たちよりもずっと現実的でした。現代の人たちは、空想の世界に住んでいるようなものです。多くの人は、霊に属することの概念をほとんど持っていません。世の神であるサタンは、この人たちをくらまして真理を見えなくしています。真理は、人々が拝み仕えている数多くの神々がいることです。当時の人たちはこのことを理解していました。セックスのために生きているなら、アシュタロテの神を拝んでいることを知っていました。快樂のために生きているなら、モレクを拝んでいました。彼らは、すべての人が神を持っていることを理解していました。現代の私たちは現実から乖離してしまっています。人は、自分が不可知論者だと言います。または、自分が無神論者だと言います。でも、自分は無神論者だ、と言う人は馬鹿です。これは聖書が語っていることです。「愚か者は心の中で、『神はいない。』と言っている。(詩篇14:1)」この人は現実から遊離しているのです。なぜなら、事実この人には神(a god)があって神を拝んでいるからです。確かにこの神は、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神ではありません。天と地を創造された生ける神ではありません。人が自分は無神論者だと言っているとき、実際には、聖書に啓示されている神を私は信じない、と言っているのです。でも、この人には神がいるのです。なぜなら、神は名前ではなく、人生の主情(master passion)を表す肩書きだからです。あなたの人生の主情がなんであれ、あなたの存在の本質、中心、核となっているものが何であれ、あなたの人生を導き支配しているものが何であれ、それがあなたの神なのです。ですから、自分は神を信じないというのは馬鹿げています。あなたは神を持っていて、神(a god)を拝み仕えているからです。おそらく真の生ける神(God)ではないでしょうが、少なくとも神(agod)を持っているのです。

アナニヤはパウロに、「私たちの先祖の神は、あなたをお選びになった。」と言いました。イエスは弟子たちに、「あなたがたがわたしを選んだものではありません。わたしがあなたがたを選び、わたしの弟子となるように任命したのです。それは、あなたがたが実を結び、そのあなたがたの実が残るためです。(ヨハネ15:16 参照)」と言われました。もし、自尊心の問題がある人がいたのであれば、これですべてが解決されたはずです。イエスが、「わたしがあなたがたを選び、わたしの弟子となるように任命したのです。」と言われたのを聞けば、解決されたはずです。自尊心の問題があれば、出て行って何千ドルも注ぎ込んで自信をつける必要はないのです。ただイエスの弟子になればよいのです。あなたがイエスの弟子になったら、そのとたんにイエスは、「実はあなたがわたしを選んだものではありません。わたしがあなたを選び、わたしの弟子となるように任命したのです。それは、あなたが実を結び、そのあなたの実が残るためです。」と言われるのです。神が私たちが弟子になるようにお選びになったことを知るのとは、とてもすばらしいことです。

神が選ばれる、ということに困難を覚える人たちがいます。この人たちは、神が彼らに選択をする能力を与えられたことには困難を覚えまいでしょう。私自身は、神が私に下さった選択の能力を本当にありがたく思っています。生涯を誰かと共に過ごすことになるときに、「この女をもらいなさい。」という人がいないことを、私はありがたく思います。このことに関して、私に選択が与えられていたことを嬉しく思います。私がケイを見たとき、「わあ、この女はきれいだ。」と思いました。彼女のことを知るようになって、「この女の人と生涯過ごすことになればなあ。」と思って、私は結婚してくれるように頼みました。彼女にも選択があったのです。愚かな選択だったかどうかわかりませんが、その頼みを受け入れる選択をしてくれました。それでも、生涯を共に過ごす人を自分で選べるということはすばらしいことではありませんか。これはかなり重要な選択です。

ただ現れた人と結婚するというものではなくて、これに関してあなたは選べるのです。さて、もしあなたが誰と永遠を過ごすかを選べるとすればどうでしょうか。神は、ご自分が誰といっしょに過ごしたいかをお選びになります。そのすばらしいところは、神が私たちを選んで下さったことです。神は、「あなたがたを愛している。あなたがたと永遠をいっしょに過ごしたい。」とおっしゃいます。それで、今度は私たちの選ぶ番です。神の選びに応答して、「はい。あなたと永遠をいっしょに過ごしたい。」と言うのでしょうか。その選択が与えられているのはすばらしいことです。神は私たちに選択をする能力を与えて下さいました。

使徒パウロがキリスト・イエスにあって神が私たちに与えて下さったすべての霊的祝福を列挙した時に、列挙した中でまさきにパウロが言ったのは、「神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選んで下さったことでした。(エペソ1:4)これが、列挙した中で一番手にありました。神が私を選んで下さり愛して下さり、私のことをこんなに高く尊ばれて、永遠をいっしょに過ごしたいと考えてらっしゃることを知ることは、私にとってものすごく喜ばしいことです。神が私たちを選んで下さった根拠は何でしょうか。神は、預言者エレミヤに言われました。「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。(エレミヤ1:5)」神は、エレミヤが母の胎内に形造られる前から、選択をなさっていました。神はエレミヤを聖別されました。ですから、神の選択は神の予知に基づきます。私たちに予知ができればすごいと思いませんか。もう、「しまった、誤った選択をしてしまった。」と言うことはありません。神は決して、「しまった！」とおっしゃることはありません。その必要がないからです。神は予知ができますから、予知に基づき神は選択をなさいます。ですから、「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り」と神はおっしゃったのです。私はあなたを知っていたよ、と。「あなたが腹から出る前から、あなたを国々への預言者と定めていた。」神のエレミヤに対する御心とご目的は、エレミヤが生まれる前から決められていました。それは、私たちそれぞれに言えることだと信じています。神は、私たちが生まれる前から、私たち一人一人の人生へのご計画と目的を持っておられました。使徒パウロは、「生まれたときから私を選び分け(ガラテヤ1:15)」と言いました。パウロは、神の御手が最初から自分の上にあり、自分を通して神がなさろうとしていた働きのために準備しようと、教え導いて下さっていることを認めています。そのように神の御手が私たちの人生の上にもあります。私たちが心を開き敏感であれば、神は私たちを神の道へと、私たちが神の御国のために達成するように神があらかじめ定めて下さった働きへと私たちを導き、準備し、教えて下さいます。

神はイスラエルの民に、「あなたがたを恋い慕って、あなたがたを選んだ」と言われました。(申命7:7)神はただあなたを愛しているから、あなたを選んで下さったのです。神は、パウロが神のみこころを知るようにとパウロをお選びになりました。あなたは自分の人生に対する神のみこころを知っていますか。なぜ神があなたを創造されたか知っていますか。なぜ神があなたを召されたか知っていますか。このことは、私たち一人一人が考慮すべき点だと思うのです。自分の人生に対する神のみこころを知ることです。神のみこころを離れて私たちが達成することはみな、無駄で空虚で結局は無益です。聖書は、神が終わりの日に私たちの働きを火で試されると教えています。(1コリント3:13-15参照)人のすることのほとんどは焼けてしまいます。それに対してその人は何の報いも受けません。全生涯を自分の目標達成のために捧げ、人生の終りになって永遠については全く何も見せるものがないと気付くことがよくありますが、これは悲劇です。はかなく無駄になってしまったのです。自分が地上に存在したことで、永遠なものは何も生まれなかったのです。余りにも多くの人々が現在の生活のためだけに生きています。私たちが何かを考える時に犯

す大きな間違いの一つは、永遠を考慮しないことです。これからもたらされる永遠の便益は何だろうか、というふうには永遠の観点からすべてを測ることがとても重要なのです。余りに多くの人々が現在のためだけに生きる選択をしています。快樂のために、その瞬間のためだけに生きています。世の中に生き、世のために生きています。しかし世は過ぎ去ります。ヨハネは、「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。(1ヨハネ2:15-17)」と言いました。世のことを求めて一時的なものを求めて生きている人がいますが、そのようなものはみな滅び去ります。神のために生きています。永遠のために生きています。神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。自分の人生を振り返ってみて下さい。自分の人生で達成してきたことを振り返ってみて下さい。あなたが達成したもの全ての中で、どれくらいのもが永遠の便益があるものでしょうか。あなたに永遠の配当を与えてくれるものがどのくらいあるでしょうか。人生は一つしかありません。それもすぐに過ぎ去ります。イエス・キリストのためにあなたがすることのみが残ります。その他のものは焼けてしまいます。木やわら、切り株などは焼けてしまいます。ある人がある金持ちの息子に、その息子のお父さんが亡くなった後に、「お父さんはあなたに何を残しましたか。」と聞いてみました。その息子は、「すべて。」と答えました。その通りです。持って行けませんね。死んだら、すべてを残して行きます。しかし、前もってなにがしかを送ることはできます。イエスが示されたように、賢い人は天に宝を積みます。事前に送るのです。持っては行けません。事前に送らなければなりません。大切なもののために生きるのです。永遠のために生きるのです。神のみこころに従って生きるのです。

人によっては、自分の人生に対する神のみこころは何かと考えてみもしない人がいます。神への思いがないのです。神への意識がないのです。神を考えることがないのです。ただ生きているだけです。衝動に従って生きています。よいと感じるもの、よいと見えるもの、正しいと思えるものに従って生きています。衝動に従って生き、神を全く考慮しない人がいます。あたかも神は関係ないかのように生きています。神が与えて下さっている才能や能力を埋もれたままにしています。神はあなたの人生に投資をなさいました。神はその投資の配当を得たいと思っておられます。イエスは、自分の人生に神が投資して下さった人の話をなさいました。(マタイ25:14-30参照) その人はそれを地の中に埋めてしまいました。そして、精算の日が来ると、その人はそれを掘りおこして持って行きました。「主よ。さあここにあなたが下さったタラントがあります。お返しします。安全で手堅くしておきました。」でも主は、「悪いなまけ者のしもべだ。」と言われ、近くに立っていた天使に外の暗やみに追い出しなさいと命じられました。そこで泣いて歯ぎしりするとおっしゃいました。

多くの人々が犯す間違いは、死んだら終わりだと考えてしまうことです。いいえ、死は永遠の始まりです。あなたの体が地中に埋められるとき、それでおしまいになるのではないのです。聖書は、「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている(ヘブル9:27)」と教えています。私たち一人一人誰もが、さばきの前に立つこととなります。さて、信者がさばきの前に立つのと未信者がさばきの前に立つのとは大きな違いがあります。信者の私たちは、キリストのさばきの御座の前に立つときは、オリンピックで審判が座っている前にいるようなものです。あなたは競走を走り抜き、競技に勝ちました。そして、あなたは審判の前に来て、あなたが勝ち得た金メダルを受け取ります。ですから、私たちがイエスのところに来るときは、永遠の価値や内容のあるものを私

たちがしたことの報いを受けるためです。けれども、未信者が神の前に立つときは、書物が開かれ、そこに書かれていることに従って未信者の人たちはさばかれます。もし、名前が小羊のいのちの書に書かれていないのであれば、第二の死であるゲヘナに投げ込まれます。（黙示20:12-15参照）ヘブル人への手紙が教えているように、「生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。（ヘブル10:31）」でも人はそれを考慮に入れません。死んだらそれで終わりだと思ふのです。そうではありません、欺かれてはなりません、馬鹿をみてはいけません。あなたがどう生きたか、自分のために生きたのかそれとも神のために生きたのか、あなたの生存中のことについて神はあなたに責任を問われます。そして、それに従ってあなたは報いを受けます。

神はパウロにみこころを啓示するためにパウロをお選びになりました。パウロにとっての神のみこころは何だったのでしょ。それはパウロが異邦人のための使徒となることでした。神の真理に対し異邦人の目を開き、やみから光に立ち返らせ、サタンの力から救い出して神の御国の栄光を知るようにすることでした。（使徒26:17-18参照）あなたにとっての神のみこころは何でしょうか。もし、あなたがまだイエスを信じていないのであれば、まずそこから始めたらどうでしょうか。あなたがイエスを自分の主、救い主だと信じることは神のみこころです。なぜなら、神はひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるからです。（2ペテロ3:9参照）あなたが自分の罪を悔い改め、自分の人生をイエス・キリストに支配してもらうように明け渡すことが神のみこころです。それをしたら、主に人生をゆだねたら、すべてのことに感謝することが神のみこころです。聖書は、「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。（訳者注:1テロニケ5:18。欽定訳では、will of God とあるので、「これが、・・・神のみこころです。」となる。）」と教えています。つまり、私が自分の人生を主に明け渡し、主が支配しておられ、主が私の人生で起きる全ての事を支配しておられるということです。もし何かが起こるなら、主が許されたから起こっているのですが、もし主が許されて起こっているのなら、それは私の益のために主が許されたのです。神が私のことを愛して下さっているからです。神は言われました。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、（エレミヤ29:11）」私はあなたにすばらしい計画をしていると。ですから、神はよいご計画を実行されているのです。それは、現時点ではひよっとすると不快なものかもしれませんが。でも神は計画を持っておられ、その計画を実行なさっているのです。ですから、神は私に全てのことに感謝するように望まれているのです。神がご自分のみこころを私の人生の中で働かせておられるからです。

またパウロはこのように書いています。「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。」つまり正しい生活をするということです。「あなたがたが肉の罪を避けることです。（1テサロニケ4:3参照）」ペテロは、「愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。異邦人の中であって、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、また、悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるように王から遣わされた総督であっても、そうしなさい。というのは、善を行なって、愚かな人々の無知の口を封じることは、神のみこころだからです。（1ペテロ2:11-15）」と書いています。正しい生活をしなさい。掟を守る人になりなさい。世に対して証し人になりなさい。でもこれでは一般論です。

どのようにすれば、あなたの人生についての神のみこころが具体的にわかるのでしょうか

か。パウロは、ローマ人への手紙12章でこのように書いています。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。(ローマ12:1-2)」ですから、神の具体的なみこころを発見するには、ただあなたのからだを神にささげて、神が働かれる器になることです。自分のいのちを差し出して、自分のからだをささげることによって、「主よ、ここに私がおります。あなたのご計画を成し遂げるために、私をどのようにでもお使いください。」と仰うことです。このことを私は毎日、毎朝やります。朝目覚めると、「主よ。私のいのちはあなたのもです。あなたが私の生活に望んでおられることを今日行なってくださいますように。あなたが望んでおられることを私の生活を通して行なってくださいますように。私はあなたのもです。私は用意ができております。あなたが考えておられることは何でも受け入れます。私のいのちをお使いください。これをあなたのために聖別してください。」と言います。そして、残りの一日を主が導いてくださることを信頼します。神のみこころに従うと、突然宣教に行くことになると考えるのは間違っています。神はすべての人を宣教に召しておられるわけではありません。「ああ、僕はボルネオに行くんだ。いかめしい顔をしている人をたくさん見るんだ。害虫や虫やどぶねずみが棲んでいる蚊帳引きの屋根の小屋の中にいて、・・・」と思うかもしれません。私たちはこのように間違った考えを持っています。あなたが人生を神に明け渡すと、あなたのおられるその場所で神はご自分の働きを始められます。神は、あなたのおられる所で、あなたの人生を支配されます。あなたは、今自分がしていることをするのですが、違った態度でそれをするようになります。「主よ、私はあなたに仕えるためにここにおります。『あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主の栄光のためにしなさい。(コロサイ3:17参照)』とあります。主よ、私はあなたの栄光のために生きます。あなたの栄光のためにこれをします。私はできる限りのことをします。これをあなたのためにしているからです。私の嫌いなひどい上司のためにしているのではなく、主よ、あなたのためにしているのです。私はできる限り最高の仕事をします。」あなたが自分のいる所で忠実であるなら、神は変えることがおできになります。他のものも与えられます。あなたが計画していたことを「いや、ここではない。」と言われて、その戸を閉ざされるかもしれません。神はあなたの生活を一步一步教え導かれますが、神が支配しておられ、私を率いて導いて下さっているとはすばらしいことです。

あなたは、この世と調子を合わせてはいけません。(ローマ12:2参照) この世は勝手な生活です。自己中心でわがままな生活です。ですがイエスは、キリスト中心の生活をしなさいと言われました。他人のことを考え、他人に与えるのです。「受けるよりも与えるほうが幸いである。(使徒20:35)」これは世の格言ではありません。世の格言は、「機会があるときに、得られるものは手に入れておけ。」です。イエスは、いいえ、与えなさいと言われました。そして、心の一新によって自分を変えます。(ローマ12:2参照) この世を調子を合わせるのではなく、世的なやり方から変わりなさい。パウロは、「それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。(訳者注：欽定訳ではreasonable serviceで「理にかなった礼拝です。」という意味。)」と言いました。言い換えますと、これは道理にかなっているということです。神のみこころを行なうことは理に合っているということです。永遠の価値のために生きることは理にかなっています。自分がしていることが永遠にどのような結果があるのか考えることは理に道理に合っています。また、神のみこころが何であるか積極的に求めることによって、神のみこころを発見します。あなた自身を神が働いてくださる器と

してささげ、神があなたの生活の中で、あなたの生活を通して望んでおられることを行なわれると、あなたの生活は神のみこころが次第に現れたものとなります。神は日々みこころを現して下さいます。私の人生は日々神のみこころが現れたもの、神のみこころが表現されたものとなりました。それは私が神のみこころと業をするために自分を明け渡しているからです。

神はあなたの決意を試されるかもしれません。「わかりました神さま。私はあなたのみこころが行ないたいです。」と言うかもしれませんが、神はあなたの心を見て、「いや、あなたは感情か何かで動かされただけだ。」とおっしゃるかもしれません。それで神はあなたの真意を確かめるために途中で試されます。パウロは、「主よ。私はどうしたらよいのでしょうか。」と言いました。「パウロ。ほんとうにそう言っているのか。あなたにはこれをしてもらう。あなたを異邦人に遣わす。あなたは彼らを滅ぼそうとしていたが、今度は彼らに対し宣べ伝えてもらう。パウロ、それには犠牲を払わなければいけない。厳しい試練を通らなければならない。何度か殴られ、石で打たれ、難破し、一度ならず町から追い出される。パウロ、それでもやりたいですか。それはあなたの本当の決意ですか。」

哲学者のディオゲネスは、アレクサンドロス大王と同じ時に生きていました。このように対照的な二人は他にいないでしょう。ディオゲネスは、ストア哲学的なところがあり、桶の中で安んじて暮らし満ち足りていました。ディオゲネスは毎日桶の中に座り、人が来て彼の哲学に耳を傾けていました。彼は自分には桶があったので幸福で満足していました。一方、アレクサンドロス大王は、世界を征服したとき、「世界は十分に大きくない。もう征服する所がない。」と言って、へたり込んで泣きました。そんな不満を持っていたアレクサンドロス大王は、ディオゲネスの書いたものを手に入れました。アレクサンドロス大王はそれを読んで、「これだ！この人はわかっている。」と思いました。それで、アレクサンドロス大王はディオゲネスの桶にやって来て、ディオゲネスに、「私はあなたの弟子になりたい。あなたに従いたい。あなたのことを愛している。あなたは人生の解決を持っている。私はあなたの弟子になりたい！」と言いました。ディオゲネスはアレクサンドロス大王に二匹の魚を、死んだ魚を与え、「これをあなたのポケットに二週間入れて歩きなさい。そうすれば、弟子にしてあげよう。」と言いました。アレクサンドロス大王はうんざりして、臭い魚のことをブツブツ言いながら出て行きました。ディオゲネスは、「二匹の臭い魚で、あのように強い献身が消え失せてしまった。」と言いました。時に私たちは、神の所に来て、「ああ、神さま。あなたを愛しています。あなたにお仕えしたいのです。何でもします。あなたにお仕えします！」と言いますが、神は、「隣の人の所に行って、犬に石を投げて申し訳ありませんでしたと言いなさい。」と言われます。「いや。それは。主よ。それはどういうことですか。」とあなたは言って、離れて去ってしまいます。すると神は、「自分がした悪いことを謝りたくないということで、あのように強い献身が消え失せてしまったのか。」とおっしゃいます。ですから、神は私たちを調べるために試される時があります。それは、ご自分ために調べられるのではありません。神は既に、あなたの心にあるものを知っておられます。それが問題なのではなく、自分の心のうちにあるものを自分がわからないことが問題なのです。それで神は幾度か試されて、私が心の中に何があるのか、主に真に献身しているか見るようにして下さいます。

主はパウロに、行く末は厳しく、これから多くの困難に会うことを教えられましたが、永遠の栄光もお見せになりました。パウロは、「私は天にまで引き上げられました。口に出すことのできないことばを聞きました。どのような言葉でも説明することができません。言葉で説明しようとするなら、犯罪になってしまいます。啓示された栄光に比べればとるに足らないからです。(2コリント12:2-4参照) 」と言いました。一時的な困難と苦しみ

本当に永遠を見はじめると、自分がもうすぐでこの地上から出ていくことがわかります。あなたはどのくらい生きるでしょうか。ここにいる人の中で120歳まで生きると思う人はいますか。それは長い時間だと言われるかもしれませんが、いいえ、永遠と比べると120年は短い時間です。人生は蒸気のようなものです。あってもすぐ消えますが、その向こうには永遠があります。それで、私たちは永遠の価値を、永遠を考えはじめる必要があります。どこで、どのように永遠を過ごすか、これが最も重要です。この世での人生はわずかな短かい試しの時です。その期間に神は、私が神と永遠に過ごすための準備をして下さいます。余りにたくさんの方が、永遠の価値が全くないものに対して人生を無駄に費やしています。ですから、今日みなさんに神のみこころを求めることをお勧めします。神のみこころを知ることが求めています。神のみこころに従うことを求めています。そうすれば、あなたはそう求めたことに対し、永遠に感謝することでしょう。

使徒行伝 23 章 (6 / 9 / 96)

使徒行伝 23 章 11 節 (Acts 23:11)

「主がそばに立たれた」 # 8621

交読文：詩篇 27 篇

今夜は使徒行伝 23 章を学びます。今朝は 11 節を見てください。使徒行伝 23 章 11 節です。次のようにあります。「その夜、主がパウロのそばに立って、『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない。』と言われた。」

「その夜」とあります。これは、パウロの生涯で最も非運な日の夜でした。彼は長い間、エルサレムでユダヤ人に福音を伝えるという燃えるような願いと大望がありました。自分は彼らの仲間であったから彼らの気持ちを理解していて、イエスがメシヤであることを必ずや信じさせることができると感じていました。何年間も待って、宣べ伝える機会がついにやって来ましたが、結果は悲惨でした。議会で彼らに会う機会がありましたが、これも悲惨な結果に終わりました。それでパウロは、この時点で牢に戻されていたのです。挫折を味わった日でした。必ずやユダヤ人を論破して信者にさせることができると思っていたのに、できませんでした。実際は、彼らを非常に怒らせてしまって、彼らはパウロを殺したいと願ったのです。そしてまさにこの時に、40人もの者が共に陰謀を企てて、パウロを殺してしまうまでは飲み食いをしていないと誓い合っていました。ローマの千人隊長は二日間に二度も、パウロを殺そうとするユダヤ人の手から救い出さなければなりません。この時点で将来は、非常に不確実なように見えました。パウロは、アントニヤの要塞で獄につながれ、二日目の夜を迎えました。この時点でパウロは、生きて出られるのかどうか分からない状態でした。これが人生の旅路の終点なのかどうか分かりませんでした。パウロは、ただ混乱し、がっかりし、落胆していました。おそらく、心の中でこの二日間の出来事を振り返っていたのでしょう。そして、「なぜ」という疑問で自分を責めていたのでしょう。そういう疑問が襲いかかってきて離れない経験をしたことがありますか。間違いを犯して、自分でも愚かな間違いだとわかっているのに、やってしまったとき、「なぜ、あんなことをやってしまったのだろう。なぜ、あんなことをしてしまったのだろう。」と言い続けて、「なぜ」という疑問で自分を苦しめてしまいます。パウロは、なかなかうまくやっていたのです。ユダヤ人たちはパウロの証しを聞いていたのです。パウロの言っていることにユダヤ人たちはとても注意深く耳を傾けていたのです。自分の回心を語り、ユダヤ人の心を捉えていました。でも、パウロは主が彼を異邦人に遣わすと言われたことに言及しました。異邦人と言った途端に、その言葉は感情をかきたてる言葉だったので、「パウロを殺せ」と、その場は叫び声でどよめきました。おそらくパウロは、「なぜ、異邦人などと言ってしまったのだろう。彼らの感情がわかっているのに。ああ、愚かだった。なぜ、なぜ・・・」と言い、自分の犯したつまらない間違いに苦しんでいたことでしょう。おそらくパウロは自分の宣教がもうお終いだと感じていたでしょう。もう駄目だ。もうお終いのようだ。このような華々しい宣教を終えるには、何という終わりかただろうと。神はパウロにすばらしい祝福を与えて下さっていました。アジアやローマなど、異邦人の世界でパウロは教会を建てたり、始めたりし、福音の言葉が広められたのに、今、パウロはローマ帝国の警備の下でエルサレムの牢の中にいて、ユダヤ人はみな気分を害していたのです。パウロは、ユダヤ人に伝えたいという強い願いを持っていたのに、こんな大失敗をしてしまいました。パウロは、彼らの心を捉えることができると確信していましたが、失敗してしまったのです。パウロは彼らに対してとても強い愛を持っていたので、もしできることなら、もしよければ、彼らが救われるために彼自身が神にの

ろわれた者となることさえ願いました。(ローマ9:3参照) 彼らに対するパウロの愛と重荷はこれほど深かったのです。それでパウロは、落胆し、がっくりきて、落ち込んで座っていました。

そして、「主がパウロのそばに立って、」とあります。牢屋の部屋の暗闇の中に、突然他の方がおられることに気付きました。主が立っておられました。そして主はパウロに、「勇気を出しなさい。」と言われました。これによって、パウロが実際がっかりし、落胆していたことがわかります。主は、彼に慰めと励ましのことばを与えられました。イエスは、「勇気を出しなさい。(Be of good cheer)」ということばをよく使われました。中風の人のことを覚えていますね。身体障害者になっていました。床に横たわり、ただ震えていました。彼がいやされるために、友人が彼をイエスのところに連れていくことに決めました。その家に来た時にたくさんの群衆がいるのを見ました。それで、家の中を通るのは不可能だと、家の中に入ることも不可能だと気付きました。それで、屋根に上って瓦をはがして、イエスの前に中風の人を降ろしました。イエスが、この人がどうしようもない状態で横たわっているのを見て、「さあ、勇気を出しなさい。あなたの罪は赦されました。(現代訳マタイ9:2)」と言われました。他の時には、弟子がガリラヤ湖の真中にいた時、逆風の中を漕いでいましたが、前進しているわけではありませんでした。彼らが苦しんでいるのをご覧になり、イエスは水の上を歩いて、彼らに近づいて行かれました。しかし、弟子たちは幽霊だと思い、おびえて叫び声をあげました。それでイエスは、「しっかりしなさい(Be of good cheer)。わたしだ。恐れることはない。(マルコ6:50)」と言われました。イエスは弟子にこう言われました。「あなたがたには世では苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。(新共同訳ヨハネ16:33)」と言われました。パウロはこの苦難を経験していましたが、イエスはそばに立って、「勇気を出しなさい。」ということばを繰り返されています。

イエスは、「あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、」と言われました。イエスは、パウロがご自分のことをあかししたことを認められました。私たちは、「でも、あんまり成功しなかったではないか。どちらの場合も、群衆を怒らせて逆上させたではないか。」と言ってしまうかもしれません。主はこのあかしの反応については何も言及されてません。ただ、あなたはあかしした、と認められただけです。私たちのあかしに対する反応は、報いと全く無関係であることを知ることは非常に大切だと思います。主は、私たちが主のことをあかしすることを要求されております。このあかしから出てくる結果は、主の御手の中にあるものです。主は、私のあかしに対して報いて下さるのであって、あかしの結果に対するものではありません。私たちは商売じみて、自分たちをセールスマンのように考えて、福音を人々に販売するものだと考えています。署名のために引かれている点線の上に署名させなければ、その手数料はもらえないと考えているのです。私たちのベルトの上の得点を指して(訳者注：西部開拓時代に、殺した人の数の刻み目をつける風習があった)、「ほら、僕にはこんなに得点がある。」と言うのですが、隣人は、あなたと同じ位あかしをしたのですか、得点は全然ありませんでした。面白いことに、主は、ベルトにある得点にしたがって私たちを報いられないのです。私たちが忠実にあかししたことに報いられるのです。私は100人の人にあかししても、誰も信じないかもしれません。一方、隣にいる人が100人にあかしして、全員が信じたとします。けれども、私たちが主の御前に出て報いを受け取るとき、私の報いは彼の報いと同一なのです。なぜなら、私はあかしをすることに忠実であったからです。あかしから出てくる結果は、主が私に与えられる報いと何の関係もありません。主は私たちに、主のことをあかしする責任だけを課されます。あなたは、イエスを人々に連れて行かなければいけないだけであり、人々をイエスに連れて行くことはあなたの責任ではありません。これは、聖霊の

責任であり、あなたが何かできるものではありません。ですから、主はあなたに主のことをあかしする責任を課されます。「パウロ。あなたはあかししました。騒動になってしまったが、パウロ、それでもあなたはわたしのことをあかししたのです。」と言われるわけで、あかしをすることが大事なのです。

けれども、主は言われました。「ローマでもあかしをしなければならない。」言い換えれば、これでお終いではないということです。パウロはきつとがっかりして、「もう宣教は終りだ、この任務はもう終りだ。僕がめっちゃくちゃにしたんだ。とんでもない間違いを犯した。異邦人を口にして、みんなを怒らせたから。僕の任務はお終いだ。」と聞いていたでしょう。けれども主は、「いいえ、パウロ。まだローマにも行かなければならないのです。」と言われました。パウロは、ローマに行くことを実際に望んでいたのです。ローマの教会に手紙を書いた時、彼らに会いたいと望み、御霊の賜物をいくらかでも彼らに分けて、ともに励ましを受けたいことを語りました。(ローマ1:11、12参照)パウロは、エルサレムで牢につながれて終わるといふ、みじめな宿命の旅を始めましたが、アカヤとマケドニヤに向けて出発する前に、「私は、アカヤとマケドニヤに行き、エルサレムに行き、それからローマも見たいと願っている。」と言いました。(使徒19:21参照)パウロの心にはローマで福音を宣べ伝える願いがありました。何か方法や手段があるなら、ローマで福音を伝えることができるかもしれない(ローマ1:15参照)、というパウロの願いがありました。ですから、主は、「パウロ、ローマで福音を伝える願いはかなえられる。」という確認をされたのです。「あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかししなければならない。」

さて、このことによって、状況がどんなに悲惨になっても、イエスが、「あなたはローマでもあかししなければならない。」と確認されたのですから、確かにローマに行きあかしをするという確信が与えられます。パウロがローマに着くまでには2年以上もかかりました。主がみこころを私たちに示される時、私たちは、それがすぐにそれが成就しなければならない、「主が昨日語られたが、いつ始まるのか。」と思うことがあります。しかし、パウロはカイザイヤで2年以上も牢の中にいて、政治的に利用されていました。彼らは、彼をただ政治的な目的で利用していたのです。支配者たちは、その場しのぎでしかパウロの受け答えをしていませんでした。パウロは、ひっきりなしに提訴されたりしていましたが、裁判をしてもらえませんでした。しかしながら、パウロはがっかりすることはないのです。なぜなら、自分の宣教の任務がこれでお終いではなく、ローマに行くことがわかっていたからです。ローマへの旅は快適な旅ではありませんでした。彼は囚人でした。彼らがキプロスにいたときは、秋の終りに近付いていました。賢い航乗りは、冬の季節の嵐があるので、冬の季節に地中海に入ったりしないのが一般的でした。ですから、彼らは冬を過ごすのに格好の場所であるキプロスにいたわけです。その日は天候もよく穏やかな風が吹いていたので、船長は、「やってみるべきだ。冬の前にローマに行くことができると思う。」と言いました。パウロは、「みなさん、それはやめた方がいいと思います。出帆したら大きな気害があります。」と言いました。「おまえに何がわかるんだ。俺はこの海が職場だ。おまえは天幕作りをしているだけじゃないか、おまえには分からない。」と船長は言いました。それで、百人隊長は、出帆することに同意しました。けれども、出帆して二日もしたら暴風が襲ってきました。14日間、彼らは太陽を見ませんでした。彼らは方角がわからなくなりました。船はただ波や暴風雨や風で翻弄されていました。彼らはずいぶん生きる望みを失いました。きつともうお終いだ、もうこれでは生き残れない、と。パウロが立ち上がって言いました。「元気を出しなさい(Be of good cheer)。昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って、『いのちを失う者はひとりもいない。船は失われるが、船にいる者はすべて救われます。』と言って、安心させてくれまし

た。なぜなら、私は、カイザルに会うことになっているからです。私は神によって信じています。（使徒27:22-25参照）」ですから、パウロは、14日たって彼らが絶望してどうしようもなくなっているときに、「元気を出しなさい。なぜなら、主は私のそばに立ち、カイザルに会うことを保証されたからです。」という同じ言葉を持って彼らを励ましていたのです。「あなたはローマでもあかししなければならない。」

自分の間違いで自分の奉仕の働きは終わってしまった、これでお終いだ、とってしまうことがよくあるのではないのでしょうか。サタンはこうした嘘を植え込むのが好きだと私は思います。私たちの弱さや人間的な欠点を指摘して、「神はあなたが再び奉仕をするように信用して下さるとでも思っているのか。」と言います。きっとあなたは自分を失格者とするでしょう。牢にいた時パウロはこうした気持ちを持っていたと私は思います。彼は自分を失格者のようにしていたのでしょうか。ユダヤ人に伝えるのに失敗したのです。自分が異邦人に召されているなどと言って間違いを犯したのです。主は言われました。「勇気を出しなさい。まだお終いではない。パウロ。もっとしなければいけないことがある。ローマでもあかしをしなければならない。」

旧約聖書に預言者エリヤの話があります。彼は、バアルの預言者に競争を挑みました。民の前で、バアルなのか、彼らの父祖の神か、どちらがまことの生ける神であるか証明するためでした。それで、それで彼らをカルメル山に連れてきて、両方とも祭壇を建てるようにしました。「あなたがたはバアルのために建てなさい。私はエホバのために建てる。いけにえを祭壇に載せるが、火をつけてはならない。火をつけていただくように神の名を呼びなさい。火をつけられる神がまことの神であるようにする。」彼らはこの挑戦を受け入れました。約400人のバアルの祭司は、祭壇を建てて、バアルが火をつけていけにえを燃え尽くしてくださるように祈り始めました。午前中ずっと祈っていたのに何も起こりませんでした。それでエリヤはちょっとからかうことにしました。「あなたがたの神は寝ているのだろう。昼寝をしているから、もっと大きな声で・・・たぶん、旅に出ているのかもしれない。どこかで休みを取っているのだろう。もっと大きな声で呼んでみよ。」それで、彼らは本当にできる限り叫びはじめ、祭壇のあたりを踊り回り、自分たちの身を傷つけて騒ぎ立てましたが、昼が過ぎても何も起こりませんでした。エリヤは、「もう十分だ。下がっていなさい。」と言い、さらに意地悪く「私の祭壇の回りにみぞを掘れ。」と言いました。彼らがみぞを掘ると、「全部に水を注げ。」と言いました。彼らが水を注ぐと、「もっと水を！」彼らは水を注ぎ続けたので、みぞに水が満ちるほどになりました。それでエリヤは、「主よ、彼らにあなたがまことの神であることをお示してください。」と言いました。天から火が降って来て、いけにえと祭壇を焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしまいました。民はみな、これを見て、「エホバこそ神です。エホバこそ神です。」と叫びました。この真っ最中に、彼は、バアルの預言者をキシオン川に連れて下り、400人をみな殺しました。次の日に、女王イゼベルが自分の預言者にエリヤが行なったことを聞き、誓いを立て言いました。「預言者エリヤの頭をもらわなかったら、神が私にもこのことをさらにして下さいように。」エリヤはこのこと、女王が彼を追っていることを聞くと、逃げ出しました。はるばるホレブ山まで、シナイ山の方まで逃げて、ほら穴に隠れていました。主は、「エリヤよ。ここで何をしているのか。（列王記第一19:9）」と仰せられました。エリヤは言いました。「私は神に熱心に仕えました。彼らは神の預言者をみな殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らはわたしを殺そうとねらっています。」さて、神は彼に問題は何かと聞かれたのではありません。神は、ここで何をしているのか聞かれたのです。エリヤは質問に全然答えていません。彼は神に不平をもらっただけです。実際は彼は何もしてなくて隠れていたのです。神にはエリヤにしてほしい仕事があったのです。「ここで何をしているのか。」「何もしていません。」これが正直な答

えでした。でも長々と大げさにしゃべっただけです。それで神は、「ほら穴から出てきなさい。」と仰せられました。ほら穴から出てくると、次の話をおぼえていると思いますが、そこに火がありました。神は火の中におられません。大風がありましたが、神は風の中におられません。地震があり、その地が揺れましたが、神はそこにもおられません。それから、かすかな細い声がありました。神はこのかすかな細い声におられました。かすかな細い声は何だったのでしょうか。「エリヤよ。ここで何をしているのか。(列王記第一19:13)」です。同じ質問です。「あなたは答えていない。答えるチャンスをもう一度与えよう。ここで何をしているのか。」エリヤは、自分の働きはもう終わってしまったと思いました。「彼らは預言者をみな殺して、私だけが残りましたが、彼らは私を殺そうとねらっています。」自分の働きはもう終わってしまったと思ったのです。けれども、主は仰せられました。「さあ、シリヤ(訳者注:アラムのこと)へ帰って行け。ハザエルに油をそそいで、シリヤの新しい王とせよ。エフーに油をそそいで、イスラエルの王とせよ。エリシャに油をそそいで、あなたに代わる預言者とせよ。」言い換えると、「まだやることがある。それに着手しなさい。」ということです。ほら穴に隠れている必要はありません。まだやらなければいけない事はあるのです。神の預言者や神のしもべは、がっくりきて、絶望して、どうしようもなくなる時がよくありました。状況が全く良くなく、パウロも感じたようなことを感じたのです。主は、再び任命されます。「パウロよ。ローマでもわたしのことをあかししなければならない。まだお終いではない。あなたの任務は終わっていない。」

きつとペテロは、主を三度否定した後、自分の任務は終わってしまったと思ったと思います。主がペテロを再び信用して下さることがありましようか。彼は主を決して否定しないと誓ったのに、あわれにも否定しました。「主が私を信用されることはまずない。宣教に用いられることはまずない。」けれども、主がガリラヤ湖でペテロのそばに座っておられた時に、「ペテロ、この人たち以上に、わたしを愛しますか。」を言われました。ペテロは、「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです。」と言いました。「わたしの羊を飼いなさい。」これらは全て、ペテロを主の御業に再び任命なさることでした。ペテロが、このようなことはまずない、もう資格を失った、任命されるなどもうないだろう、と感じていたときに、主はそれでも彼を再び任命されるためにそこにおられたのです。パウロの場合も同じです。それは再び任命することでした。「パウロよ。もうお終いではない。終わっていない。まだ仕事がある。」

「主が(パウロの)そばに立って、」私はこれが大好きです。お叱りになるために立たれたわけではありません。主は、「パウロよ。なんで異邦人という言葉をお口にされたのだ。馬鹿者めが。この言葉が火種をつくることはよく知っていただろうに。パウロよ、なぜそのような事をしたのか。どうしたのか。頭を使わなかったのか。」とは言われませんでした。主は、お叱りになるためにそこにおられたわけではありません。ペテロの場合もそうです。「ペテロよ、なぜそのような事をしたのか。あなたは結局座って・・・どうしてそのような事をしたのか！」とは、決して言われませんでした。主は優しくふるまい、慰めのことばをかけられたのです。批判ではありませんでした。私たちはどうして、主が強烈に批判的で、私たちが失態を行なったから私たちに叱るのを待っておられる、と考えるのでしょうか。いいえ、主は慈しまれて、あわれまれるのです。回復したいと願われているのです。主が、「ほら、言った通りではないか。」と言われるものでもありませんでした。主は既に前に、「エルサレムを離れなさい。彼らは、あなたの言うことを聞き入れないからです。(使徒22:18参照)」と言われました。パウロは言いました。「しかし、主よ。私はこの者たちをよく知っています。彼らがどう考えているかわかっているのです。それに、・・・」「ここから離れなさい。彼らは聞かないのだ。」それで、パウロはその時は

そこを去ったのですが、また戻ってきたのです。彼らは必ず聞き入ると思っていたのです。主は、「ほら、言った通りではないか。ほら見る。」とは言われなかったのです。ペテロもそうです。彼も反論しました。「私を殺そうとも私はあなたを否定したりいたしません。」「ペテロよ。鶏が鳴く前に、わたしを知らないと言い・・・」「いいえ、他の者はそうかもしれませんが、私はそんなことしません。」主は、「言った通りではないか。」とは言われませんでした。主は、私たちの誤りを思い起こさせるために来られません。主は、赦し、慰め、励ますために来られるのです。私たちが行なったことを認めるために来られるのです。「パウロよ。あなたはエルサレムでわたしのことをあかしした。あなたはやったのだ。これで終りではない。ローマでもあかしをしなければならない。まだ仕事がある。」これが大好きです。本当に好きです。神は、もう終りだ、何も残っていない、と感じている落胆した奉仕者たちを優しく世話されるのです。たぶん彼らは自分の失敗を感じているでしょう。しかしながら、主は実に恵み深く、「勇気を出しなさい。あなたはあかししたのだ。さらにしなければならないことがある。」と言われるのです。

使徒行伝24章(6/16/96)
使徒行伝24章25節(Acts24:25)
「正義と節制とやがて来る審判」#8622
交読文：詩篇145篇

聖書通読の学びをしています。今週で使徒行伝24章まで来ました。今朝は使徒行伝24章を開いて、24節と25節を見ていきたいと思います。今夜この章全体を学びます。「数日後、ペリクスはユダヤ人である妻ドルシラを連れて来て、パウロを呼び出し、キリスト・イエスを信じる信仰について話を聞いた。しかし、パウロが正義と節制とやがて来る審判とを論じたので、ペリクスは恐れを感じ、『今は帰ってもよい。おりを見て、また呼び出そう。』と言った。」

ペリクスと妻ドルシラについてです。ペリクスはローマ帝国の属州ユダヤの総督でした。かつて彼は奴隷でした。その時まで、奴隷から総督まで立身出世した奴隷は唯一ペリクスだけでした。これは主に兄パルラスの影響によるものでした。パルラスとネロは親友だったのです。それで、パルラスは弟ペリクスのために執り成しをしました。ネロはペリクスを属州ユダヤの支配者、総督にしました。ペリクスは2年間サマリヤの総督をしていましたが、ネロはその範囲をユダヤ地方全土に広げました。ローマの歴史家タキトゥスはペリクスについて書きましたが、ペリクスが奴隷だったということで彼を見下して、かなり辛辣な論評をしました。「ペリクスは王の特権を奴隷の精神で行使した。」と言いました。ヨセフスは、このペリクスという男の腐敗について語っています。非常に腐敗した人物でした。ペリクスは、次々と三人の王女と結婚しました。最初の王女の名前はわかっていませんが、二番目の妻はアントニウスとクレオパトラの孫娘で、三番目の妻はヘロデ大王の曾孫娘でした。ドルシラは、バプテスマのヨハネを殺したヘロデ・アンティパスの孫娘で、ヨハネの兄弟ヤコブを殺させたヘロデ・アグリッパ一世の娘でした。ドルシラは、次の章に出てくるヘロデ・アグリッパ二世の姉妹でした。ペリクスは管理と統治がお粗末だったために、最後には罷免されました。実際、兄パルラスの執り成しが再びなければ、ペリクスは処刑されていたはずでした。しかし、処刑にはならず消息をたちました。極悪な邪悪な人でした。ペリクスがどれほど悪人であったかは、ある時に親友の一人を殺すために殺し屋を雇ったことでもわかります。実に邪悪な人でした。彼の妻ドルシラは、まず、エメサの王アジザス(Azizus)という名の男と結婚しました。しかし、アトマスという名の魔術師の助けを借りたペリクスは、ドルシラを口説き、ドルシラはペリクスの三番目の妻になりました。二人は、公然と放蕩な生活をしていました。ペリクスの名は悪と同義語になりました。

それなのに、二人はパウロを呼び出し、キリスト・イエスを信じる信仰について話を聞きました。「パウロが・・・論じた(reasoned)。」と書かれています。イエス・キリストの福音の主張していることはとても理にかなっています(reasonable)。もし、立ち止まって本当に考えてみるなら、神は、人に与えることのできる最も理にかなったことを、あなたに差し出して下さっていることがわかります。預言者イザヤは、「『さあ、来たれ。論じ合おう。』と主は仰られる。『たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。(イザヤ1:18)』」と言いました。神は人に、完全で完璧な罪の赦しを差し出しておられるのです。あなたがどのような間違いや悪を行なったとしても、神はあなたに赦しを差し出しておられます。この赦しは、イエス・キリストによって与えられます。神はこの方をこの世に遣わされ、この方があなたの罪やその罰をご自分の身に受け取り、あなたの身代わりになって死なれました。神は、あなたがご自分の子イエス・キリストを信じて信頼すれば、あなたを義と認めて、すべての罪を赦すことをお示しになりました。

罪の中に生きている人は、あまり合理的に考えていません。なぜなら、罪は破壊的で、あなたの滅びを進行させているからです。罪の定義の一つは、「滅ぼすもの」であるかもしれません。というのも、神が罪に分類されたものはみな破壊的だからです。神は一つたりとも、まともなことを禁止されたりしません。すべて良いもの、正しいもの、尊敬すべきものは、神は、「行ないなさい。しなさい。」と言われます。すべて腐敗しているもの、悪であるもの、破壊する性向を持つものは、神は、「行なってはいけません。」と言われます。罪はあなたを滅ぼしています。さて、神はすぐには打たれないので、多くの人は思い違いをしています。罪の結果は、いつも罪を犯したらすぐ見ることができるわけではありません。罪の破壊的な面は、癌のようなもので、最初は見ることでも感じることもできませんが存在し、働きを始めているのが事実です。罪は、時間が経つと現れてきます。罪を犯し続けると、罪の破壊的な要素があらわになってきます。でも、最初は見えて来ません。最初は見えてこないで、多くの人は罪を犯しても大丈夫だと思っています。罪は自分を傷つけてはいない、苦しめていないと思うのです。罪の結果は被っていないと思っているのです。彼らは、どういうわけか罪の破壊的な面を免れていると感じているので、思い違いをしているのです。けれども聖書は、「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。（ガラテヤ6:7）」と教えています。罪はめぐりめぐって、あなたはいつの日か自分の悪の結果を体験するのです。使徒パウロはローマの教会にあてた手紙の中で、「あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか。それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導く時と機会を与えて下さっているのも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。忍耐をもって前を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、神は永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。患難と苦悩とは、悪を行なうすべての者の上に下ります。（ローマ2:3-9の言い換え）」と述べました。パウロは、次のように言っているのです。「あなたは罪の結果を免れることができるかとでも思っているのですか。何とかしてうまく逃れることができるかと思っているのですか。あなたは思い違いをしているのですか。犠牲を払わなくても済むかとも思っているのですか。いつの日か神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。」

ですから、パウロは、ペリクスとドルシラに正義を、正しい生き方をすることを論じました。彼らは非常に悪い人たちだったからです。彼らは公然と神の律法を無視した生き方をしていました。ペリクスは、腐敗した政治で知られていました。それで、パウロは、ペリクスに正義について話をしました。神の前に正しい生き方を、神と正しい関係の中で生きること、仲間の人と正しい関係の中で生きること、神の望まれている生き方を、神を喜ばせる事を行なうこと。これらは、正しい生き方です。正義とは、正しいことを行なうという意味です。あなたは神と正しい関係の中で生きていますか。神は、あなたの人生において、他のものの全てにまさって神を第一とすることを求めておられます。これを、神は正しい生き方だとおっしゃっています。他の全てのもの、どのようなものよりも、神をまず第一に求める、神を第一とすることです。あなたは、仲間の人と正しい関係の中で生きていますか。神は、「あなたがたは互いに愛し合いなさい（ヨハネ15:17参照）。憎んではいけません。」と言われました。神は次のことを求めておられます。「互いに偽ってはいけません。」「互いに盗んではいけません。」「ごまかしてはいけません。」「他人の妻を誘惑してはいけません。」「姦淫や不品行の生活をしてはいけません。」

ん。」神は、他人があなたにした悪を赦すように求めておられます。その人たちにあわれみを示すように、神は求めておられます。親切に、心優しく、赦すように求められています。さて、ペリクスとドルシラは、これらのどれにも当てはまりませんでした。無慈悲で、執念深く、冷酷でした。それで、パウロは彼らに正義について話しました。

そして、節制について話しました。これは、ほどほどにする、自制するということです。欲望に負けて、自分の欲にふけるのではなく、自制をして生きることです。ペリクスとドルシラは、卑しい不節制な生活をしていました。「明日がないかのように生きる。」という文句を聞いたことがあるでしょうか。これは二人のことを説明しています。たくさん人のことを説明していますね。明日がないかのように生きている人が大勢います。自分のしていることで当然差し迫る結果が、まるでないかのように生きています。煙草を吸っても、心臓や肺に害を与えていることを全然考えないのです。自分は肺への害を免れることができる、肺癌や肺気腫にはならない、ひどい痛みに襲われて、一呼吸のためにあがくような日なんか来ないとも思っているようです。「他人には起こっても、自分には起こらないさ。」と言うことで、その結果を考えもせずに喫煙しているのです。また、アルコールが脳細胞を破壊しているのを知らずに、飲酒するのです。肝臓がアルコールをそんなにたくさん処理できるわけがなく、肝臓が破壊されていることに気づきません。いつの日か、もはや肝臓が機能しなくなって、毒を体から排除することができなくなり、肝硬変になってしまうことを考えないのです。不節制をしてもいいですが、いつの日かその代償を払わなければならないのです。免れることはできません。人々は、淫らなセックスをしてもいいと考えていますが、自分を性病にさらしている事実を考えていないのです。現在たくさんの多数の性病が、不倫や淫らな性的関係によって感染しています。罪の中に生きているのに、それによってあなたがどうなるのか、今どうなっているのか、その結末を考えないのは賢明ではありません。

パウロは、やがて来る審判を論じました。やがて清算日が来ます。いつの日か自分の過去の精算をする時が来ます。あなたは神の御前に立ち、さばかれなければいけません。箴言1章で、神はこのように言われます。「わたしが呼んだのに、あなたがたは拒んだ。わたしは手を伸べたが、顧みる者はない。あなたがたはわたしのすべての忠告を無視し、わたしの叱責を受け入れなかった。それで、わたしも、あなたがたが災難に会うときに笑い、あなたがたを恐怖が襲うとき、災難がつむじ風のようにあなたがたを襲うとき、苦難と苦悩があなたがたの上に下るとき、そのとき、彼らはわたしを呼ぶが、わたしは答えない。わたしを捜し求めるが、彼らはわたしを見つめることができず、なぜなら、彼らは知識を憎み、主を恐れることを選ばず、わたしの忠告を好まず、わたしの叱責を、ことごとく侮ったからである。それで、彼らは自分の行ないの実を食らい、自分のたくらみに飽きるであろう。わきまえない者の背信は自分を殺し、愚かな者の安心は自分を滅ぼす。(1:24-32) 」 「私は、自分がよいと思う時に、神と和解する。」と考えていらっしゃるなら、それは間違いです。「どのように生きるべきかは知っている。いつか変えようと思っている。自分を滅ぼすようなことは、いつかやめようと思っている。よい生活を始めようとは思っている。」あなたが呼び求めるまで神は忍耐深く待っていてくださり、その時には神は助けると考えているなら、それは大変な間違いです。神はこの箇所です。「ご覧。あなたはわたしのことを聞かなかった。わたしが手を伸ばしたときに、あなたは答えなかった。それで、災難の日が来て、大問題を抱えて、わたしを呼んでも、わたしはあなたのことを聞かない。あなたに答えない。」とおっしゃっているのです。神に対して無責任なことをするのは、恐ろしいことです。なぜなら、自分自身の運命に対して無責任なことをしていることだからです。伝道者の書で、ソロモンは言いました。「若い男よ。若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなた

の目の望むままに歩め。しかし、こららすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。(11:9-11) 」さばきを逃れることはできません。伝道者の書12章14節で、ソロモンは、「神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」と語りました。

それでパウロは、正義と節制とやがて来る審判とを論じました。そうしたら、ペリクスは恐れを感じはじめました。ペリクスが恐れを感じたのは、自分の生き方が間違っていることに気付いたからでした。彼は自分の悪を見ました。自分がどれほど悪い人であるか気づきました。そして、恐れを感じました。当然ですが将来に恐れを感じました。ペリクスは恐れを感じたのに、行ないを改めませんでした。罪の自覚があっても、悔い改めないことは可能です。神の御霊が、あなたの前であなたを写す鏡を持っておられるかもしれません。神があなたをご覧になるように、あなたは自分を見ることができるようかもしれません。あなたは、いつもの通り薔薇色の色眼鏡で鏡を見るのではなく、神があなたをご覧になるように自分を見て、恐ろしくなります。そんなことをするなんて、そんな立場に立つなんて、あなたは想像だにできなかったことです。自分の罪の自覚のために、実に恐れで身震いすることもできるのです。でも、それがあなたを救うことはできません。悔い改めて、その悪から離れ、神の方に向かなければなりません。イエスがお話になった金持ちのような人がたくさんいます。この金持ちは将来の素晴らしい計画を話していました。自分はどう準備するか、自分が何をするかなど話しましたが、イエスは、神は、「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。(ルカ12:20)」と言われました。「あなたはいろいろ計画を立て、いろいろ準備したが、あなたは愚か者だ。これでもう終りだ。今夜あなたは死ぬ。」自分の気まぐれで来ることができると考える間違いをすることが、あまりにもよくあります。ペリクスは恐れを感じただけではなく、決断を先送りしました。ペリクスは、「今は帰ってよい。おりを見て(訳者注：英語の直訳は、「もっと都合がよい時に)」)また呼び出そう。」と言いました。しかし、もっと都合がよい時は二度と来ませんでした。ペリクスはほどなく罷免されました。自分の地位と、悔い改めをする機会を失いました。正しく生きる、節制をもって生きる機会はなくなり、ペリクスは神のさばきに会いました。

いつかは神との関係を正すと思っていた人が、現在どれほど地獄にいるのでしょうか。イエス・キリストの主張を考えようと、もっと都合がよい日を待って、もっと都合がよい時を待っていた人が、今地獄にどのくらいいるのでしょうか。聖書は、「今は救いの日です。(2コリント6:2)」と教えています。また、「近くにおられるうちに、主を呼び求めよ。

(イザヤ55:6参照) わざわいの日が来ないうちに、また『何の喜びもない。』と言う前に。

(伝道者の書12:1参照)」と教えています。聖書は、「今が決断の時だ」と繰り返し警告しています。神のために、また永遠のために価値のある生活をする決断をするのは今です。

「もはや自分勝手な生活はしない。肉に属することや自分の欲望にふける生き方をするのではなく、何か永遠に価値のあるもののために生きるのだ。自分の人生を明け渡して、イエス・キリストのために生きるのだ。」と。「ええ、いつの日かそうするつもりです。はい。いつの日かこんなことはやめます。やめますよ。自分によくはないことはわかっています。わかっていますよ。やめますから。」と言うのです。ああ、そうですか。いつの日かもっと都合のよい時にですね。そう言い続けてどのくらいになりますか。もし、もっと都合のよい時を待つのであれば、ペリクスが発見したように、その日は決して来ないことがおわかりになるでしょう。あなたの人生をイエス・キリストにゆだねるのに、今が一番都合がよい時なのです。

使徒行伝 25 章 (6 / 30 / 96)

使徒行伝 25 章 19 節 (Acts 25:19)

「死んでしまったのか、それとも、生きているのか」 # 8623

交読文：詩篇 16 篇

私たちは聖書通読の学びを続けていますが、使徒行伝 25 章に来ました。今晚、使徒行伝 25 章の学びをしますが、今朝は、使徒行伝 25 章 19 節を見たいと思います。

24 章の最後の節は、24 章に書かれている出来事が起きてから二年後に、ペリクスの後任としてフェストが来たことを私たちに教えています。すでに言及しましたが、ペリクスは腐敗した総督でした。とうとう腐敗が発覚して、ローマ帝国の上院はペリクスを罷免しました。政府を腐敗させたためにペリクスは処刑されるはずでしたが、兄パルラスがカイザル・ネロの親友だったため、ペリクスのために執り成しをして、彼は助命されました。フェストは、ペリクスの後任としてローマ帝国から派遣されました。フェストは、再び州内にローマ帝国の正義を確立させました。彼は州内に入ると、その首都はカイザリヤだったので、まずエルサレムに行きました。フェストは、ユダヤ人指導者たちと知り合いになるために、顔見せをしたかったのです。ユダヤ人指導者たちと会い、自分の信任書を奉呈し、これから自分がユダヤにおけるローマ帝国の権威の代表者であることを彼らに知らせる、外交的な表敬訪問でした。エルサレムにおいて宗教指導者に顔見せをした際に、彼らはパウロの問題を出しました。その時、パウロはカイザリヤの牢屋に二年間拘置されていました。パウロが不法に拘置されていたことに、気がつかなければいけません。罪状を特定せずにローマ市民を拘置することは、不法だったからです。しかし、先に言及しましたようにペリクスは腐敗しており、ペリクスは釈放と引き換えにパウロから賄賂を受け取りたいと願っていました。しかし、パウロはそのようなことに屈する人ではありませんでした。それで、彼らは依然として、カイザリヤの牢屋にいたパウロのことをフェストに伝えました。彼らはもうその頃までには、すでにパウロのことなど忘れてしまったと思われるでしょうが、パウロに対する彼らの苦みは実に根深く、二年後のこの時でさえ、パウロの問題を出してきました。それで、彼らはフェストに対しパウロをエルサレムのユダヤ人の議会に送るように願いました。彼らが意図していたのは、パウロがエルサレムに来る途中で待ち伏せし、殺害することでした。しかしフェストは、「あなたがたがカイザリヤに下って来なさい。そうすれば、パウロの件について私が聞こう。」と言いました。それで彼らは、パウロを告訴するためにカイザリヤに下りました。フェストは、ある程度中身のある訴えであろうと思っていましたが、訴えを聞いた時、彼らの訴えは中身のないものであることに気づきました。パウロは尾籠な訴えに対し、ただ、「私は、カイザルに対しても、またユダヤ人の律法に対しても、何の罪も犯してはおりません。」と言って、弁明しました。

それで、フェストは、「あなたはエルサレムに上り、裁判を受けるのを願うのか。」と述べました。その時点でパウロは、「セサリアム・アペリ」と言いました。「私はカイザルに上訴します。」さて、ローマ市民はみな、ローマの法廷で不当な扱いを受けたと感じるのであれば、最終的な処分について、カイザルに上訴する権利が付与されていました。パウロは、自分が政治の道具に利用されていることに気づきました。つまり、ただユダヤ人の歓心をひくだけのために、依然として牢屋につながれていたのです。パウロは、政治の道具に利用されることに嫌気がさしていました。フェストがこの領地のことを知っており、ユダヤ人の怒りをなだめるために、パウロをエルサレムに送ろうとして、パウロを引き続き政治の道具に利用しようとしたとき、パウロは自分の裁判をカイザルに上訴するというローマ市民の権利を行使しました。ですから、パウロが、「セサリアム・アペリ」と

言ったとき、フェストは、「セサリウム・アペレスタイ・アド・セサリウム・エビス」と法律用語で答えました。「あなたはカイザルに上訴したのだから、カイザルのもとへ行きなさい。」と。しかし、このことはフェストにとってはジレンマでした。それは、フェストが本当には、中身の無い訴えがパウロになされていることを認識していたからでした。フェストが何らかのユダヤ人の律法の問題について、フェストがここで「彼ら自身の迷信（訳者注：英語では their superstitionとなっていますが、新改訳では「彼ら自身の宗教」と訳されています。）」と言及しているものについてパウロをカイザルに送るなら、フェスト自身はカイザルの目にはよく見られません。カイザルは、不正な取扱いが、ローマ市民にローマの法廷でなされたことに気づくかもしれません。それは、フェストの業績に汚点を残したであろうからでした。ですから、パウロがカイザル・ネロの前に出廷する時に、訴えの個条を書き送らなければならなかったのも、何とかしてフェストはパウロに対して罪状をでっち上げなければならなかったのです。フェストがユダヤ州の総督に着任したことを歓迎する表敬訪問のために、アグリッパ王がフェストに会いに来ました。それは、アグリッパ王二世がその領土全体のを支配していたためでしたが、その時にフェストは言いました。「問題があるのですが。ここにもう2、3年も牢屋につながれている男がいます。ユダヤ人らが私にそのことを訴えましたので、その一件を聞こうと言いました。中身のある訴えではありませんでした。ただ、罪状を申し立てただけでした。死んでしまったイエスとかいうものを話しているのですが、その者がパウロは生きてると主張しているのです。ですから、ネロのところへパウロを送る時、何か訴えの個条を書き送れるように、パウロがカイザルの前に出廷する時、少なくとも中身のある訴えとなるように、この一件について話を聞いていただけないでしょうか。」アグリッパ王二世は、その一件について話を聞くといいました。それで、この章の残り、というか実際は次の章、・・・みなさんこれは来週までお楽しみになりますが・・・次の章は、アグリッパ王二世のパウロについての聴聞会について書いています。しかし、これが争点でした。これが核心だったのです。つまり、死んでしまったイエスをパウロが生きていると主張していたことでした。これが問題の核心でした。そして、現在に至るまで引き続き核心となってきたことでした。というのは、イエスは、死んでしまったか、生きているかのいずれかだからです。

今日たくさんの方がイエスは死んでしまったと信じています。イエスが死者から復活したという福音書の記述を信じないのです。この人たちにとって、空っぽの墓の話は、おとぎ話か、よく彼らが言うように、「クリスチャンの神話」なのです。イエスは死んでしまったと信じている人たちは、非常に暗く希望のない世界に住んでいます。現在の真の希望はありません。私たちのまわりの社会が崩壊するのを見るにつけ、変化をおこす真の希望はありません。ギャングの抗争があります。性病の増加を見ます。政府の腐敗を見ます。状況は好転しているのではなく、どんどん悪化していることに気づきます。状況がいつか変わるという真の希望は全くありません。私たちは、破壊の悪循環の直中にあるようです。私たちの道徳全般も社会全般もそうです。何もその速度を落とすことはできないように見えます。しかも、現在の希望がないだけでなく、将来の希望もありません。もし、イエスが死んでしまったと信じるなら、あなたはただ高等に発達した動物でしかないのです。そして、死によってすべてがお終いになります。豚のように生き、犬のように死にます。死ねば、それで完です。それで、お終いです。将来はありません。死者の復活はありません。死んだ人は滅んだのです。しかし、希望のない結果ですが、面白いのは、数年前にヨーロッパで、コペンハーゲンの至る所で見えたホスターには、希望がない(No Hope)と書かれていました。そして、そのポスターには全く絶望した顔をしている人がいました。希望がないというのが全体の共通の感情でした。明日の希望はない。改善のための抜本的变化の希望はない。どうしようもない状況に生活していると、絶望が生まれます。そし

て、絶望の中で生きるのは困難です。今日たくさんの人が、絶望に満ちあふれたどうしようもない状況の中で生活しています。内側の奥深くにある空しさを何とか埋めることができるのではないかと、新しいことを試し続けます。お金ではだめでした。セックスではだめでした。麻薬ではだめでした。名声ではだめでした。ですから、多くの人がマドンナのように、赤ちゃんがいればと感じています。それで、たくさんの人が妊娠し、子供を持てば充足と満足を得られるのではと考えています。でも、それもだめなのです。イエスが死んでしまったと信じる時、どうしようもない状態の絶望を拭い去るものは何もないのです。それだけではありません。私たちが住む世界を見回して見ますと、死後の人生がないのであれば、人生はとても不公平で残酷だと気付きます。こんな善い人が余りに若くして死んでしまうことを、どのように説明できますか。ひどい悪人が年をとって死ぬことを、どのように説明できますか。恒久的な身体障害を持って子供が生まれることを、どのように正当化できますか。そのようなことは、とにかく不公平なのです。もし、将来がないのであれば、人生はとても残酷な、冷淡な、冷酷なものになります。

これらの人たちはイエスが死んでしまったと言っていました、パウロはイエスが生きていると主張していました。さて、パウロはかつてイエスが死んでしまったと信じていました。パウロは、イエスが死んでしまったと信じていた人たちといっしょにいました。そして、パウロは、自分自身イエスに会うまでずっとそう信じていました。イエスは、パウロに話をされました。イエスにお目にかかり、話をした後、パウロは、イエスが生きていると確信するようになりました。誰かを見て、誰かに会い、その人と話をするなら、それはその人が生きているしっかりした証拠になります。パウロの人生の中で大きな変化が起こったことを見ることができます。余りにも変化が劇的で大きかったので、その変化をイエスは生きているとのパウロの確信と切り離して考えることはできません。よかれあしかれ、パウロはイエスが生きていると信じていました。パウロがイエスは生きていると信じていたので、パウロの人生に抜本的な変化をもたらしました。パウロは、キリストの敵からキリストの味方になりました。パウロは、イエスの迫害者から、イエスが主であると告白する者になりました。パウロはイエスを憎む者から、イエスを愛する者になりました。教会を憎む者から、教会を愛する者になりました。信者を苦しめる者から、キリストのために自分自身が苦しむ者となりました。パウロがキリストのために受けた苦しみをすべて見てみると、確かにパウロがイエスは生きていると信じていたと認めざるを得ません。パウロは、コリント人への手紙の中で、イエス・キリストのために忍耐した苦しみの幾つかを話しています。パウロは言いました。「ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。(2コリント11:24-28)」イエスが生きているという確信がないのであれば、誰もそのようなものを通ったりしません。キリストのためにパウロが耐えたことは、パウロの真の信仰を確認しています。ヤコブは、「行ないのない信仰は死んでいるのです。(ヤコブ2:26)」また、「あなたの行ないを私に見せて下さい。そうすれば、私はあなたの信仰を見せてあげましょう。(ヤコブ2:28参照)」と言いました。ですからパウロを見る時、イエスが生きていると信じていたために受けた苦しみ、耐えた苦しみを見る時、それは、彼が心から信じていたことの証拠、証明になります。イエスが死者からよみがえったと堅く信じていない限り、誰もそのようなものを通ったりしません。

では、もしイエスが生きているとするなら、それはどのような意味を持っているのでしょうか。まず、それは、イエスがそうであると主張されたとおり、イエスが神の御子であることを証明しています。神がイエスをこの世に遣わされ、罪と罪の結果から人間を贖うために、御自身のいのちをささげて下さったことを証明しています。イエスが言われたように、「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。(ルカ19:10)」つまり、イエスを信じない人は、自分たちの罪の中で滅び、神から引き離され、永遠の地獄に直面するという意味です。つまり、イエスを信じる人は、自分がこれまでに犯したすべての罪を赦してもらい、イエスとともに天の御国の栄光の中で永遠に生きるという意味です。この御国は、義と平安と喜びがその特徴です。基本的には、イエスが生きていると信じている人は、今心の中に生ける望みを、より良い世界への希望を、永遠への希望を持っているということです。イエスが生きていると信じない人は、この世でも、来る世でも、希望が全くありません。

しかし、ここには興味深い常識からのずれがあります。それは、イエスが生きていると信じている人で、自分の罪と罪過の中で死につつある人がたくさんいるということです。この人たちは、イエスが生きていると信じているのですが、死んで、天国には行きません。イエスが死んでしまったと信じるよりもっと悪いのは、イエスが生きていると信じているのに、あたかもイエスが死んでしまったかのように生きることです。今日、多くの人がある場合に当たります。世論調査をして、あなたはイエスが生きていると信じますかという質問をしたとすると、きっと大半の人が「はい」と肯定的に答えると思うのです。

「私はイエスが生きていると信じます。」と。しかし、この人たちの生きざまによって、生活が、イエスは死んでしまったと証しているのです。口では、イエスが生きていると肯定するかもしれませんが、あたかもイエスが死んでしまったかのように生きているのです。この人たちの信仰はまったく中身が伴っていないのです。「行ないのない信仰は死んでいるのです。」イエスが生きていると信じているけれども、あたかもイエスが死んでしまったかのように生きている人は、実はイエスのことを一度も聞いたことがない人よりひどい状況にあるのです。「では、世界の辺境の地で、原始的な文化の中で生活し、イエス・キリストの福音を一度も聞いたことのない人はどうなるのですか。この人たちは、永遠にどうなるのですか。機会が全然なかったのに、この人たちは、神から永遠に引き離されるのですか。」という質問をよく聞きます。私はこのことが気になりますが、神は義であり、公平であるという事実にあらざるを得ません。神がどのようにその人を取り扱われるのかわかりませんが、その扱いは公平です。それは分かっています。神が何をなさるかはわかりませんが、神が取り扱われるときは、公平に取り扱われます。私が気になっているのはそのようなことではなく、本当に気になっているのは、聞いたけれども、またイエスが生きていると信じているとまで言ったのに、あたかもイエスが死んでしまったかのように生きている人のことです。そのような人は、御霊に従って生きていません。神に従って歩んでいません。生活の中で、神のことを考えたりしません。彼らの生活は、肉欲に支配されています。あたかもイエスが死んでしまったかのように生きています。

ペテロは、第二の書簡の中で、「義の道を知っていながら、自分に伝えられたその聖なる命令にそむくよりは、それを知らなかったほうが、彼らにとってよかったです。(2ペテロ2:21)」と言いました。いったん真理を聞いてそれに背くより、それを聞かないほうがよかったです。イエスは、ルカの福音書12章で、ご自分が任されたしもべのひとりのことを話されました。イエスはその者の奉仕に、卓越した立場を与えられました。このしもべは実際、他のしもべを監督していたのです。そのしもべは、予期していたとき、期待していたときに、主人が帰って来なかったので、「主人の帰りはまだだ。」という態度になり、酒に酔って、他のしもべを打ちたたき始めました。自分に与えられた信用を誤用した

のです。それでイエスは、言われました。「わたしは、思いがけない時間に帰ってきます。そして、不信仰な者どもと同じめに会わせます。(訳者注：新改訳で「不忠実」というところは、欽定訳でunbelieverとなっています。)」というのも、イエスは、「主人の心を知りながら、その思いどおりに用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむち打たれます。しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、打たれても、少しで済みます。すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。(ルカ12:47-48)」と言われたからです。何年も教会に忠実に出席し、みなさんが今日座っていらっしゃるように座り、神のみことばを聞き、「はい。イエスは生きていますと信じます。」と同意さえするのに、そう信じることによって、人生が変えられたり変化することがなく、あたかもまだイエスが死んでしまったかのような生活をしている人がいる、イエスによって人生に何の影響も与えられず、肉に、肉的なことに従う人のことを知ると、心が張り裂けんばかりになります。教会出席は忠実で、神のみことばを聞いているにもかかわらず、この人たちが天の御国に入ることにはないことを知ると、心が痛みます。近いのですが、それでいて余りに遠いのです。イエスが死者からよみがえったと信じているかもしれませんが、イエス・キリストの力によって、この人たちの人生が変えられていないからです。ただ、イエスが生きていますと信じるだけでは十分ではないのです。パウロは、「すなわち、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。

(ローマ10:9)」と言いました。イエスが生きていますと信じるのは半分にはかきすぎず、十分ではないのです。イエスが主であると告白し、イエス・キリストに支配していただくために人生をイエスにゆだねる、あなたの人生をイエスに支配していただくという、最初の半分が必要です。神がイエスを死者からよみがえらせて下さったというあなたの信仰が、あなたに救いの効果をもたらすのは、イエスが実際あなたの主である時だけです。

会衆を見回し、みなさんの顔を見ますと、もう30年以上も神の真理をみなさんにお分かちすることができたことは、私にとっては喜びであり、祝福となってきました。いつの日か、私たちは神の御座の前に立ちます。教会に人が集まっているのを見る時に、みなさんの顔をそこで見つけることができることを願います。みなさんの信仰がただイエスは生きていますと信じるだけでなく、あなたの生活に影響を与えるほど強い信仰であり、生ける主と、生き生きとした関係を持って生きていかれることを願います。

使徒行伝 26 章 (7 / 7 / 96)
使徒行伝 26 章 18 節 (Acts 26:18)
「福音の力」 # 8624
交読文：詩篇 71 篇

私たちは、使徒行伝 26 章まで来ました。今夜はアナハイム・スタジアムで集会を持ちますので、26 章に 2 週間をかけます。ですから来週の日曜日にならないと、26 章の注釈をすることはできません。ですから、みなさんは余計に一週間、使徒行伝 26 章を勉強することができます。

しかし今朝は、26 節の 18 節に注目していただきたいのです。パウロがアグリッパ王に、ダマスコに行く途中でイエス・キリストに遭遇したことを話していました。主がパウロの人生を変えられて、彼を任命されました。それから、パウロは主から任命された事について話していますが、主は異教徒あるいは異邦人のところに行きなさいと言われ、それはまず最初に、「彼らの目を開く」ためである、と言われた、と話しました。神が彼らの目を開くように召されたのであれば、彼らが神の真理に対して閉じていたという想定があります。それは、彼らが霊的な盲目 (spiritual blindness) 状態にある、ということです。実際その通りです。イエス・キリストの知識に達していない人たちは、霊的な盲目状態にあります。パウロは、コリント人に手紙を書いて、「この世の神が不信者の思いをくらませて (blinded)、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。(4:4)」と言いました。つまり、パウロは、人の心がサタンによってくらまされていて、イエス・キリストのところに来ることができないでいることを語っているのです。パウロはエペソ人に、「彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心 (blindness of their hearts) のゆえに、神のいのちから遠く離れています。(4:18)」と言いました。ですから、主はパウロに彼らの目を開くように命じられました。「サタンが、彼らに真理を見えなくした。パウロ、彼らが真理を見るように、彼らの目を開きなさい。」と。

サタンの戦略の一つは、人が自分の現実の状態を見ることができなくすることです。アル中の人に自分がアル中だと認めさせるには、相当の時間がかかります。本人がこの事実を認めずずっと前から、その者の回りにはいる人たちはそのことに気づいているのに、本人は否定するのです。職場にいる人たちは、その人がかなり飲酒の問題があることがわかっているのに、家族は彼が飲酒の問題があることがわかっているのに、本人は自分の問題が見えていないのです。自分がアル中であることを否定します。止めようと思ったときには止めることができると誓います。自分は、自制できる、と。麻薬中毒者が、自分で麻薬中毒だと認めることはほとんどありません。自分で、「俺は、麻薬常用者だ。」とか、「私は、麻薬中毒者だ。」と言う人には、決して会いません。ひょっとすると、やや麻薬の問題があることは認めるかもません。しかし、どういうわけか、まだ自制できていると感じているようです。けれども、事の実態は、どうしようもなく、絶望的なほどに中毒になっているのです。

いつの日か神の御前に立ち、神に自分の罪をさばかれる事実を人々は見えないようです。死が終りである、という信条が一般的にあります。死んだ瞬間に、自分が存在しなくなると信じています。けれども、そうではありません。聖書は、「人間には、一度死ぬことと死後に」死が終りではないのです。「死後にさばきを受けることが定まっている (ヘブル 9:27)」と教えています。いつの日か、すべての人は神の御前に立ち、自分のことを申し開きすることになります。人々は、この事実に見えなくなっているか、忘れてしまっているようです。悪いことをしても、それでしおおせるとでも思って生きています。彼らは

危険に気づかず、自己満足しています。若気の放蕩をしても、後にはおさまると思っています。どういうわけか、神の御前に立てば、自分のした善行を申し立てればよいと思っ
ている人たちがいます。自分が他の人に行なった、行なおうとしていた、行なうつもりで
いた善行があるのだから、神はきっと受け入れてくださると思っ
ています。三番目の「行な
うつもりでいた」という場合が実に多いのです。「神は、それを考慮してくださるだ
ろう、正しい態度と心があったのだから。やるうと思っ
ていたのだから。いつかはやるう
と思っ
ていたが、時間ぎれになってしまった。」と。しかし聖書には、「私たちの義は
みな、不潔な着物のようです。(イザヤ64:6)」と書かれています。パウロはローマ人に手紙
を書いて、「あなたは、自分は神のさばきを免れるとでも思っているのですか。(2:3)」と
言いましたが、まさにこれは多くの人
が思っていることなのです。自分のした悪い行ない
について申し開きをしなくてもよい、と思っ
ています。

彼らは、新しく生まれなければ、神の国に入れない事実が見えなくなっ
ています。す
べての道は神に通じる、というよう
な気持ちがあります。確かにそう通りです。す
べての道がある神(a god)には通じてい
ますが、宇宙の創造主であり私たちの主イエス・キリストの父
である永遠の神(God)に通じているわけでは
ありません。実は、永遠の神に通じてい
るのは、たった一つの道しかありません。イエス
は、「わたしがその道であり、真理であり、
いのちなのです。わたしを通してでな
ければ、だれひとり父のみもとに
来ることはできません。(ヨハネ14:6参
照)」と言われました。天の父、真の生
ける神(the God)に通じてい
る道は、たった一つしかありません。天
国への門は、人間が信じてきたものよ
りもずっと狭いのです。イエスは、「い
のちに至る門は小さく、その道は狭
く、それを見いだす者はまれです。
(マタイ7:14)」と言われました。天
国への門は、ある人たちが考えてい
るようには簡単ではありません。パウ
ロはコリント人に手紙を書いて、「あ
なたがたは、正しくない者は神の国
を相続できないことを、知らないの
ですか。だまされてはいけません。
不品行な者、偶像を礼拝する者、姦
淫をする者、男娼となる者、男色
をする者、盗む者、貪欲な者、酒
に酔う者、そしめる者、略奪する
者はみな、神の国を相続すること
はできません。(6:9-10)」と言いま
した。彼はガラテヤ人に手紙を書
いて、「肉の行ないは明白であって、
次のようなものです。姦淫、不品行
、汚れ、」これは性的に不潔なこと
です。「好色、偶像崇拜、麻薬中
毒、敵意、争い、そねみ、憤り、
党派心、分裂、分派、ねたみ、殺
人、酩酊、飲み会、そういった類
のものです。前にもあらかじめ言
ったように、私は今もあらかじめ
言っておきます。こんなことをし
ている者たちが神の国を相続する
ことはありませ
ん。(訳者注:5:19-21参照 欽定訳
には、新改訳のリストの他に、姦
淫と殺人があります。またチャック
は、魔術を麻薬中毒に、酩酊を飲
み会に言い換えています。)」と言
いました。パウロは、エペソ人に
手紙を書いて、「あなたがたがよく
見て知っているとおり、不品行な
者や、汚れた者や、むさぼる者――
これが偶像崇拜者です。――こう
いう人はだれも、キリストと神と
の御国を相続することはできませ
ん。(4:5)」と言いました。ずいぶ
ん
列挙されていますね。これらの中
に、あなたに当てはまるものはあ
りますか。これらの範疇の中に
あなたは当てはまりますか。私
たちはすぐさま、姦淫や不品行や
殺人を見て、「私には当てはまら
ない。」と言いますが、憤り、争
い、敵意、ねたみ、飲み会を見
過ごしてしまうようです。これら
のものは、義と平和と喜びの国
である神の国にそぐうものでは
ありません。

罪の中に生きている人は、実にあ
われです。なぜなら彼らは、罪が
自分にしていること
が見えなくなっているからです。彼
らは滅びつつあるのに、その事実
が見えていないのです。罪の中に
生きている人は、どこへ行くのか
本当に知りませ
ん。ヨハネはこう書きました。「
兄弟を憎む者は、やみの中にお
り、やみの中を歩んでいるので
あって、自分がどこへ行くかを
知らないのです。やみが彼の目
を見えなくしたからです。(1ヨハ
ネ2:11)」本当

に多くの方が、やみの中に生きています。彼らはどこへ行くのか知りません。自分の運命をきちんと考えていません。なぜなら、やみの中に生きてるので、前方に何があるのか見えないのです。

もし神の真理に対してあなたの目が開いたなら、自分についての真理に対してもあなたの目が開きます。神を見てはじめて、聖でありきよい神の本当の幻を見て、神の恐ろしさを見てはじめて、自分の本当の姿を見るのです。自分を適切に評価するには、神の観点から自分自身を見なければいけません。パウロは、他人と比較したら間違いを犯す、と言っています(2コリント10:12参照)。見回せば、いつも自分よりも少し悪い人を見つけることができるからです。「俺は、そんな悪くない。あいつは俺よりもずっと悪いことをしている。自分の顔が汚いことはわかっているが、あいつの顔を見てみるよ。すごく汚いぜ。」「まあ、私はチャックよりもまだから。」とおっしゃるかもしれません。おそらくあなたは正しいでしょう。けれども、私は義の基準ではないのです。イエスが、神の立てられた義の基準なのです。それが、私たちを神が天国に受け入れて下さる基準です。イエスは言われました。「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません。(マタイ5:20)」それでは誰が救われるのか、とあなたはおっしゃるでしょう。鋭い質問です。私たちはだれも、自分の行ないや、自分の義によって救われることはありません。そのため、神がご自分の御子を遣わされたのです。それは、私たちの罪を取り除き、私たちの身代わりになって死んで下さるためでした。イエスを信じ、信頼して、この方に自分を明け渡すことによって、神は、私がキリストのように正しいと認めてくださいます。したがって、私が持っている義は、自分の行ないや努力によって縫い合わされた不潔な着物ではなくて、イエス・キリストを信じることによって、神からの義を着るのです。これが、神に受け入れられる義です。イザヤは、次のように言いました。「ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた主を見た。栄光が宮に満ちた。そこで私は言った。『ああ、私にわざわいが来る。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。』(6:1、5参照)」「私は主を見た。」とあって、その次に私自身を見て、「ああ、私にわざわいが来る。私はもうだめだ。私はくちびるの汚れた者だ。」と言うのです。ペテロが主を見た時、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い者ですから。」と言いました(マタイ5:8)。ダニエルが主の幻を見たとき、「私の尊厳はみな、破壊であった。破壊に向いた。(訳者注:10:8の新改訳脚注参照)」と言いました。霊的に高ぶっている人、霊的に誇っている人は、まだ主を見たことのない人なのです。霊的に何の助けもいらぬ、自分自身で何とかやっていけると言う人がいますが、その人は主を見たことがないのです。いったん主を本当に見たのなら、真理に自分の目が開いたら、盲目が除かれて主を本当に見たら、自分自身を見て、自分が神をどうしようもなく必要としていることを見るのです。

パウロは主から、異邦人のところに行くように任命されました。「パウロ、彼らの目を開きなさい。彼らに真理をもたらしなさい。彼らを欺きから、暗やみから離れさせなさい。」それで、二番目の任命は、暗やみから光に立ち返らせることでした。神の国は、光といのちの国です。現在の世界は、暗やみの世界に包まれています。パウロは、コロサイ人に手紙を書いたとき、「光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、感謝をささげることができますように。神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、御子のご支配の中に移してくださいました。(1:12、13参照)」と言いました。このような暗やみに包まれている、私たちの住むこの世界に私は愕然としています。ニュースで報道される事には、信じがたいものがあります。報道されてくる、人々がこの暗やみの世界に住んでいて行なっている事は、私に思いとは完全にかけ離れてい

て、多くの場合私の思いは、嫌悪感を覚えて拒絶反応を起こします。私がどんなに途方もない想像力を働かせても、親が自分の子を性的に虐待するなんて、私にはどうしても理解できないからです。こんなことは、私の思考回路とは、完全にかき離れています。こういう事を読むと、こんなことが本当にあるのかと私は愕然とするのです。私たちは、暗やみの世界に住んでいます。男が、別の男を愛するような暗やみの考えは、私には想像不可能です。政府が毎年何百万人もの赤ん坊の死に同意し、この子たちの死に補助金まで出すとは、到底私には理解できません。この同じ政府は、もしあなたが鷲の卵を潰すようなことがあったら、重い罰金を課し、ひょっとすると禁固刑を課すかもしれないのです。政府が、まだ生まれていない赤ちゃんよりも鷲の卵を大事にするとは、何かがおかしいのです。極端におかしくなっています。ねずみの生命を、赤ちゃんの生命よりも大事にしています。なぜなら、もしカンガルーネズミを殺したら、重い罰金が課せられます。実は、ミュリエッタの許可（訳者注：パイブルカレッジを開校するための許可。）を得るために、現在郡と交渉中ですが、私たちが望んでいる許可を得たければ、カンガルーネズミを保護するために何千ドルも徴収すると言うのです。学校のためとかのお金ではなく、誰もカンガルーネズミを虐待しないように巡回する人々のために、出費しなければならないのです。神よ、助けてください。狂った、めちゃくちゃな世の中です。みなさん、世界は暗やみの中にあります。パウロはイエスから、彼らを暗やみから光に立ち返らせるように命じられました。

聖書の中では、暗やみは悪の象徴で、光はきよさの象徴です。パウロはエペソ人に、「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。(5:8)」と書きました。イエスは、「人々は光よりも暗やみを愛した。その行ないが悪かったからである。」と言われました（訳者注：ヨハネ3:19 欽定訳は10節から21節まで、イエスさまが言われたことになっています。）。彼らは、暗やみが悪を覆うと思っています。暗いので、誰も見られないと思っています。自分の外套が悪を覆ってくれると考えていますが、そうではありません。彼らは真理が見えなくなっています。あなたはきょう、暗やみの中を歩んでいるか、光の中を歩んでいるかのどちらかです。主はパウロに、彼らを暗やみから光に立ち返らせなければならぬと言われました。

最後に、主はパウロに、サタンに支配から立ち返らせなければならぬ、と言われました。あなたは以前は、サタンに支配されていました。パウロはエペソ人に手紙を書いたとき、「そのころは、それらの罪の中にあって（暗やみにある）この世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。(2:2)」と言いました。世界の制度は、サタンによって治められています。世界の権力にサタンの支配があるので、この世は暗やみの中にあるのです。あなたはかつて罪の奴隷でした。しかし、サタンの奴隷状態からあなたを贖うために、イエスは死なれました。それは、あなたを暗やみの力から解放するためです。パウロは、ローマ人に手紙を書いてこう言いました。「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、従順の奴隷となって義に至るのです。神に感謝すべきことは、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの基準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。・・・あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。罪の奴隷であった時は、あなたがたは義がありませんでした。その当時、今ではあなたが恥じているそのようなものから、何の実も得ていません。それらのもの行き着く所は死です。しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、あなたの得る実は聖潔です。その行き着く所は永遠のいのちです。(6:16-22 一部言い換え)」あなたが

たは、もとは肉の欲望の奴隷でした。私たちは自分の肉の欲望を制御することはできませんでした。肉の欲望が、私たちを支配していたのです。不思議なことに、ただ実験しているだけだ、試しているだけだと言って、戯れるように一つの罪を始める人が多いのです。多くの場合、興奮があり、感激があり、スリルがあります。けれどもしばらくすると、罪があなたを捕らえて、奴隷にします。止めたいと願っても、止められません。もうその罪の奴隷になっているからです。そのことをパウロは話しているのです。あなたはかつて罪の奴隷でしたが、今はイエスによって自由にされました。「異邦人のところに行きなさい。異教徒のところに行きなさい。パウロ。自由の中に生きるとはどういうことかわかるように、イエス・キリストにある私たちが持っているすばらしい自由とは何かわかるように、彼らを罪の力から解放しなさい。(使徒22:21参照)」とパウロにイエスがおっしゃったとき、このことを言われていたのです。

今日いらっしゃるみなさんの中には、私がまさに言わんとしていることが何かおわかりの方がいらっしゃるでしょう。かつて、あなたは罪の力のもとにいて支配されていました。止めようとされたのです。自分ではできる限りのことをしたのです。いろいろな提案がなされましたが、どれも役に立ちませんでした。そして、ある日あなたはイエス・キリストのところに来られました。そして、イエス・キリストがあなたを自由にしてくださいました。そして、聖書が言っているように、「子が自由にする人は、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。(ヨハネ8:36参照)」ということを見えられました。ヨハネは、「罪を行なう者、罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。このため、神が御子を世に遣わされました。御子が悪魔のしわざを打ちこわすためです。(1ヨハネ3:8の言い換え)」と書いています。あなたの生活を支配している悪魔の力を打ちこわすためです。イエスが、イエスのみが、暗やみの力からあなたを救い出すことができになります。これが、福音のすべてです。罪のわなに陥った人にとって、罪によって自分を滅ぼしている人にとって、これはよい知らせです。その時は、それが見えなくなっていますが、聖書はあなたの目を開き、真理と、あなたについての真理と、私たちの住んでいる暗やみを見ることができるようになります。聖書は、神の愛のすばらしい光を開いてくれて、何が本当なのか見えるように真理を開いてくれます。人の目を真理に開いて、暗やみから光に立ち返らせ、サタン力から解放し、イエス・キリストのしもべになるようにすること、それが福音のすべてです。それゆえ、ずっと前に神は私の心に語られました。私は、罪の暗やみの中で死んでいる人々に、よい知らせをもたらすことに、自分の人生を喜んでささげました。希望もなく罪の奴隷になっている人々に、希望があることを知らせるのです。救いがあることを知らせるのです。イエス・キリストの御力は、彼らを縛っている鎖を壊すことができます。この方があなたを自由にし、義ときよさのすばらしい人生を、私たちの主とともに光のうちに歩む人生を送るようにしてくださいます。聖書は、こう言っています。「もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、イエス・キリストの血はすべての罪から私たちをきよめます。(1ヨハネ1:7参照)」神がきょう、イエスの御名によって、あなたの目を真理に開いてくださいますように。

使徒行伝 26 章 (7 / 14 / 96)
使徒行伝 26 章 18 節後半 (Acts 28:18b)
「福音の結果」 # 8625
交読文：詩篇 32 篇

先週日曜日にあったハーベスト・クルセードのため、今夜は使徒行伝 26 章を学びます。つまり、使徒行伝 26 章に 2 週間かけることとなります。でも、とてもすばらしい章ですから、みなさんきっと祝福を受けておられることでしょう。今夜は使徒行伝 26 章を学びますが、私たちといっしょに、創世記から黙示録まで聖書を通読し、神がどのような方か、神の言われたことが何かを学ぶことをお勧めします。

今朝も 18 節に注目していただきたいと思います。先週は、18 章の前半部分を学びました。そこで、救いと、救いの力を取り扱いました。後半部分を学びたいと思いますが、そこで、パウロは救いの備えについて話しています。パウロは、自分が宣べ伝えている福音を弁明するために、アグリッパ王の前に立っています。彼はアグリッパ王に、自分がダマスコに向かう途中で主に会ったことと、主が異邦人のところへ遣わされたことを話しました。それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの力から神に立ち返らせるためでした。救いは、罪のために盲目になっている人々の目を開く力があります。また、暗やみの国から光の国へと、サタンの力から神へと、罪の奴隷からイエス・キリストのしもべへと救い出す力があります。

パウロは続けて、救いの備えを話しています。まず、救いは罪の赦しを備えています。パウロは、「彼らに罪の救いを得させ」と言いました。あなたの罪に起こることは、二つのうちのいずれかしかありません。あなたの罪は、神に赦されるか、神にさばかれるかのどちらかです。もしあなたの罪が赦されなかったら、罪の申し開きをするために神の御前に立ちさばきを受けなければなりません。そして、神はもうすでに、その宣告を言い渡されているのです。神は、「罪を犯す魂は死ぬ。(口語訳エゼキエル 18:20)」とされています。神は、「罪から来る報酬は死です。(ローマ 6:23)」とされています。ですから、あなたに対する罪の宣告は、もうすでに言い渡されたのです。もし罪の赦しがないならば、あなたは自分の罪のために死に、神のさばきを受け、その刑罰は死です。パウロはローマの教会に、「あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか。(2:3)」と聞きました。ヘブル書の著者は、興味深い質問を投げ掛けています。「私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにしたばあい、どうしてのがれることができますでしょう。(2:3)」神は、ご自分の愛のゆえに、私たちに罪の赦しを与えられました。神の条件は、私たちが神の子イエス・キリストに自分の人生を明け渡すことです。私たちがそれを行なうことによって、神は、私たちをご自分の子どもにし、私たちの罪をすべてきよめられます。罪を犯している人間に対して、罪の赦しというすばらしい申し出をして下さっています。しかし、私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、私たちが神の申し出を受け取らない場合、どうしてのがれることができますでしょう、という質問があります。神のさばきからどうしてのがれることができますでしょう。これに対する答えは、のがれることはできない、です。ヘブル書に書かれている通り、「その人には、敵対する者を焼き尽くす、神様の激しい怒りと恐ろしい刑罰が待っているだけです。(リビングバイブル 10:27)」「私たちは、『復讐はわたしのすることである。』・・・と言われる方を知っています。(10:30)」そしてまた、「生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。(10:31)」神は備えをつくられ、それによって私たちは罪の赦しがあります。この備えをないがしろにする、あるいは、拒否するなら、選択肢は一つしか残されていません。つまり、自分の罪のためにさばかれることです。ですから、罪の赦しが自分の人生の中で最も必要な

ことであると言うことができます。

赦されない罪は、あなたの心を絶えず苦しめます。あなたを悩まします。詩篇の記者が、「私の罪は、いつも私の目の前にあります。(51:3)」言ったように、それはただ、あなたの心を絶えず苦しめます。心理学者の多くは、精神面での最大の問題は、赦されない罪の結果、あるいは彼らの言葉では罪責複合(guilt complex)の結果であると考えています。つまり、神経症的な行動は、通常、無意識に罰を願望していることに由来するというものです。罪責感があるので、罰を受けたいと感じるのです。無意識的に非難や罰をもたらすような、神経症的な行動をつくりあげます。心理学者たちは、自我(ego)と超自我(superego)のことを話します。自我は、本当の自分、あからさまな自分です。超自我は、理想の自分です。これは、自分自身のことを描いて、もしこんな状況がつくりだされなかったら、もしあんな状態でなかったら、本当の自分はとても親切で、優しく、情深く、丁寧で、すばらしい人なのだ、というものです。けれども本当の自分がいて、誰かが高速道路で前に割り込んで来たら、怒ったりしてと、本当の自分と理想の自分がいるのです。理想の自分は、高速道路で前に誰かが割り込んで来たら、「おやまあ、兄弟。無事故で家に帰れるようにね。」と言っています。本当の自分は、クラクションを鳴らして、「(こぶしを振りかざして)、ちゃんと見て運転しろ、ばか野郎!」と言います。本当の自分と理想の自分の間には、いつも格差があるのです。心理学者たちは、この二つに大きな格差があると、その人は精神障害者だと言います。理想が、自我と超自我が近くにあればあるほど、あなたはもっと調和がとれた人なのです。さて、神は本当の自分を、私にある罪と罪責感を取り扱われます。私に罪の赦しを与えてくださるのです。神は、私を、私の罪を赦すために、御子を遣わし恐ろしい代価を支払われました。御子は、私の死の宣告を受け取られました。私が自分の罪のために死ななくてもいいようにするため、この方は私の代わりに死なれたのです。

今朝私たちが読んだ詩篇の中に、ダビデは、「祝福されている(Blessed is the man)」と言いましたが、ヘブル語の「祝福されている」は、文字通りですと、「幸いなことよ」です。「そのそむきを赦された人は。」ダビデは、神に対し罪を犯しました。このことが、彼を悩ました。彼の良心を悩ました。彼は、毎日自分の上に神の御手が重くのしかかっていたことを話しました。自分のうちに、うめきがあったことを話しました。夏のひでりのように、霊的な乾きがあることを話しました。ダビデがこの経験を表現しているように、みなさんの中には、「(顔を両手で覆って) ああ、私にはわかる。御手が重くのしかかって、内側が霊的にかわききっているように感じる。自分のしたことで、内に混迷を感じる。」と言っている方がおられるでしょう。それは、告白されていない罪です。ダビデは、自分の罪を隠そうとしました。彼はさらに深みにはまり、さらに悪化しました。ついに神の預言者がダビデのところに来て、彼の罪を直視させました。神の預言者が彼の罪を直視させて、ダビデが、「私は罪を犯した。」と叫ぶと、預言者は、「主はあなたの罪を赦してくださった。」と言いました。ダビデは座って、「幸いなことよ。そのそむきの罪を赦され、罪をおおわれた人は。」と書きました。

主が、「あなたの罪は赦された。」と言われるのを聞くことは、何と興奮することでしょうか。自分の罪の過去が拭い去られたことがわかるのです。友人によってイエスのところに連れてこられた人は床に運ばれてきましたが、中風と聖書で呼ばれている身体の不自由を起こした性病にかかっていた。中風は、当時の梅毒の末期症状でした。この人は、自分の罪のためにどうしようもない状態にあったのです。来る日も来る日も、彼は動くこともできませんでした。自分の愚かさのため、自分の罪のため、何も自分ではできませんでした。彼の心が絶えず苦しんでいたのがわかりますか。来る日も来る日も床に伏せり、どうしようもなくなっており、彼の心は絶えず苦しんでいました。「なぜ、こんな馬

鹿なことをしたのか。なぜだ！」と、彼は悩みもだえました。友人が、彼をイエスのもとに連れて来たとき、イエスの目を見ました。イエスはほほ笑んでおられたと思いますが、「しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。(マタイ9:2)」と言われました。何と麗しいことばでしょうか。「あなたの罪は赦された。」というイエスのみことばを聞いて、非常に重い重荷が取り去られたのがわかりますか。姦淫の現場で、ある女が捕らえられました。彼らは彼女を、イエスのところに引きずってきました。「私たちの律法は、この女を石打にするように命じていますが、あなたは何と言われますか。」と言いました。イエスは彼らに、「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」と言われました。それからイエスは身をかがめて、地面に書かれました。彼らの名前と、彼らの犯した罪を書いておられたと私は思います。彼らは、ひとりひとり出て行き、誰もいなくなりました。イエスは身を起こして、その女を見て言われました。「あなたを罪に定める者は、どこにいますか。」女は、「主よ、だれもいないと思います。」と言いました。イエスは、「わたしもあなたを罪に定めない。(ヨハネ8:11)」彼女がどんなに喜びを感じたかわかりますか。イエスが、「わたしはあなたを罪に定めない。」と言われたのです。十字架の上の強盗は自分の罪のことを気づき、自分の友人がイエスに悪口を言ったとき、彼をとがめました。彼は、「私たちは有罪なんだから、ここにいるのだ。」と認めて、「われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。この方の悪口を言うのはやめろ。」と言い、イエスの方を向いて、「主よ。あなたが御国に行かれたときには、私を思い出してください。」と言いました。イエスが、「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。(ルカ23:43)」と言われたことばを聞いたとき、喜びでその男の心は一杯になったことでしょう。「幸いなことよ。そのそむきの罪を赦された人は。」ここにすばらしいことばがあります。「わたしもあなたを罪に定めない。」

神は、私たちに救いを、罪の赦しを与えてくださいました。それは、全く無償で、あり余るほどです。それは、イエスを受け入れる者には誰でも無償で与えられるものです。イエスが代価をすべてを支払われたからです。聖書は、「渴く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。(黙示22:17)」と言っています。それは、あまりに十分なので、私たちのすべての罪をおおいます。神の子イエスの血は、人のすべての罪をきよめ、それはすべての者があずかることができるものです。場合によっては、それが嫌な時があります。時々、実にひどい罪を犯して、とんでもない残酷なことをした人の話を読みます。私たちは、神がその人を赦すとは考えたくありません。その人が、自分のした事に対して苦しんで、罰を受けるべきだと考えます。ある男が自分の小さい息子に火をつけたことを、最近また新聞で読みました。この男は、刑務所から自分が申し訳ないと思い、悔い改め、イエス・キリストを受け入れて、テープと聖書の勉強をととても楽しんでいるとの手紙を私に書いて来ました。多くの人は、そのような事は嫌なのです。神がこの男を赦すと考えるなんて、とてもひどい事だと考えます。大勢の人を殺したバンディーは、ジム・ドブソンに会いたいと言いました。ドブソン博士は、バンディーに会うためにフロリダに行き、彼といっしょに祈り、バンディーはイエス・キリストへの信仰を告白しました。その告白は誠意ある真実なものだったとドブソン博士は感じました。そのことが新聞に掲載されました。おもしろいことに、その後、編集者に投書が何通か寄せられました。人々は、神がこんな男を赦すことに完璧に怒って、気分を害しました。こんな残酷なことをした奴が、天国で永遠を過ごすなんてとんでもないことだと、これらの手紙はみな怒りに満ちていました。こんな酷いことをした者が、神に赦されるのかと思ったからです。実を言いますと、私も嫌です。神が私よりもはるかに恵み深いことに、みなさんは感謝するでしょう。けれども、福音が告げているのは、このことなのです。このことを聖書は告げ

ているのです。神の子イエスの血は人のすべての罪をきよめ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなります（イザヤ1:18参照）。神がすべての人に与えられた罪の赦しは、全く無償で、あり余るほどなのです。「幸いなことよ。そのそむきの罪を赦され、罪をおおわれた人は。（詩篇32:1）」

救いは、罪の赦しを備えているだけでなく、栄光に富んだ永遠の神の国の相続財産を備えています。イエス・キリストを信じる信仰によって、私たちは、神の子どもになりました。パウロは、「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストとの共同相続人です。（ローマ8:17参照）」と言いました。私たちは、天の御国を受け継ぎます。パウロというか、ペテロはこう言いました。「神がほめたたえられますように。神は、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。また、朽ちることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。（1ペテロ1:3-4参照）」多くの場合、私たちに地上での相続財産が与えられますが、欺きや腐敗や他の家族の者によって取られてしまうかもしれません。子どもたちが遺産相続をめぐる争いで、残念なことに死によって家族の離反を生んでしまうことがよくあります。貪欲によって、多くの家族が破壊されました。本来は自分たちの物である相続財産が、奪われてしまうことが多いのです。今週、手紙をいただきました。すぐに出なければならなかったのに、一瞥しただけで全部は読めませんでした。その人は私たちの教会に来ている人で、もうパラダイスへ行った公務員によって、家族の相続財産を奪われた人でした。これは悲劇で、もうパラダイスにいる人が、公的な職務において強い政治的影響力を持っていたため、この人は自分の住んでいる町では訴訟のために弁護士を雇うことができませんでした。その人が政治的に幅を利かせていたからです。これは悲劇です。地上の相続財産をもらうことはできるかもしれませんが、腐敗して汚れてしまうので、自分から取り去られてしまうのです。

けれども、天における相続財産は違います。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。それは、イエスを信じる信仰により、神の御力によって守られています（1ペテロ1:4-5参照）。私たちに、すばらしい相続財産があります。イエスは弟子たちに、ご自分が栄光と力を帯びて地上に戻って来て、御国を立てられるとき、その右にいる者たちに、「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を受け継ぎなさい。」と言うことを教えられました（マタイ25:31-34参照）。ダビデはこう言いました。「あなたのいつくしみは、なんと大きいことでしょう。あなたはそれを、あなたを恐れる者のためにたくわえ、あなたに身を避ける者たちのために人の子の前で、それを備えられました。（詩篇31:19）」あなたにたくわえられた神のいつくしみは、なんと大きいことでしょう。パウロがのべているように、「目が見たことがないもの、耳がきいたことがないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。（1コリント2:9）」のです。何年も前には、私たちは次のような賛美を歌いました。「この方は、幾千もの丘で家畜を飼っておられる。すべての宝庫に富がある。この方は、川と岩と小川と輝く日と月を持っておられる。この口で言い表せないほどのすばらしい富だが、この方は私の父だから、その富はまた私のものだ。この方は、幾千もの丘で家畜を飼っておられる。確かにこの方は、私に心を留めておられる。」そうです、この方は私の父ですから、それは私のものであるのです。私は、神の相続者であり、キリストとの共同相続人です。光の中にいる聖徒へのすばらしい相続分です。パウロは、「光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった神に、感謝をささげることができるように。（コロサイ1:12参照）」と言いました。

本当によくあることですが、人は地上での一時的な財産と天にある永遠の財産のどちらかを選ぶ選択がありますが、一時的な財産を選ぶことがとても多いのです。そのような人たちは実際、物質的な報酬や取得の約束を求めて、主との関係を犠牲にします。物質的に勝ち得るため、高潔や正直を進んで妥協します。彼らは、滅んで消え去る1ドルのために、自分のたましいを売ります。イエスは、「自分の宝は、地上ではなくて、天にたくわえなさい。（マタイ6:20参照）」とされました。イエスは、地上の宝がどれほど朽ちやすいものか、盗まれるかを語られています。しかし、天にある宝はとこしえのものです。モーセは、「はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は永遠のものを求めていたからです。（ヘブル11:25、26参照）」とあります。もし、パ口の娘の息子と呼ばれ、エジプトの国を受け継いでいたら、それは、モーセは120歳まで生きたのですから、せいぜい80年ほどしか続かなかったでしょう。もし私たちが、モーセを証人として裁判所に立たせることができたとして、反対尋問をして、「モーセ、あなたは神の民とともに苦しむために、荒野で困難と危険に耐えるために、エジプトの王座と宝をあきらめましたね。モーセ、それだけの価値はありましたか。」と聞きます。モーセは、3000年間の栄光に満ちた神の国のことを証言するでしょう。彼はきっとこう言うでしょう。「永遠の御国の宝を犠牲にして、この世の宝にしがみつく者は愚かです。」私たちに、相続財産があります。

最後に、私たちは、イエス・キリストを信じる信仰によって、聖なるものとされました。さて、「聖なるものとする」という言葉は、「全く神のみに用いられるために、取っておく。」という意味です。私たちの人生は、神に用いられるように取っておかれています。理想的には、全く神のみに用いられることです。私たちは、「私は、外国の神や、他の宝に仕えない。」と賛美します。これがまさに聖化なのです。「外国の神や、他の宝に仕えません。私はあなたのもので、全くあなただけのものです。私の人生は、あなたのご計画とみこころにささげられています。」聖書は、神が七日目を聖なるものとされたことを語っています。神は、ご自身のために七日目を取っておかれました。この日は、神を礼拝し神と交わるだけに用いられるためのものです。六日間は仕事や雑事をするためにありますが、神との関係のために、神と時間と持つだけのために、取っておかれました。聖書は、幕屋で用いられる器が聖別されなければならないことを語っています。つまり、彼らが、他のもののためには用いられず、ただ神だけのために用いられることでした。それらは、神への奉仕のために存在していたのであって、他の目的には使われていませんでした。幕屋そのものも聖別されました。すなわち、そこが神の民が来て神と会見する場所である、ということです。劇や、政治集会のため用いられのものではなかったのです。神の民が神を知り、神を礼拝するために取っておかれたのです。ですから、何かがかく神のみに取っておかれると、それは、「聖なるものとされた」と呼ばれました。神の目的のために取っておかれることです。さて、あなたがたは、神の目的のために、聖なるものとされました。パウロはテモテにこう言いました。「俗悪なむだ話を避けなさい。ですから、自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なものとなるのです。（2テモテ2:16、21参照）」あなたの人生は、神が尊いことに使われる器となります。しかし、あなたは俗悪なむだ話から、争いから避けなければならないのです。こういうことに入り込まないで、全く神だけのために生きなさい、ということです。

今週私は、中学生たちとキャンプ場において、とてもすばらしい時をいっしょに過ごすことができました。火曜日の夜に、キャンプ・ファイアーを囲み、私は、イエス・キリストにささげるとはどういうことかを話しました。イエスは、「だれでもわたしについて来た

いと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と言われましたが、これがどういう意味かについて話しました。50年ほど前の夏期キャンプで私が10代だったとき、私がキャンプ・ファイアーのそばで立っていたことを彼らに話しました。私は、イエス・キリストに自分をささげるようにとの促しを受けました。これは、全くこの方のためだけに生きることです。その夜に、私はこの方のために生きるため自分をささげる決心をしました。50年後の今、キャンプ・ファイアーのそばに立って、私の願いが依然として主のために生きることであること、50年前に決心した献身を再確認したい、と言いました。それは、聖められることであり、神のご目的、神の願い、神のご計画を達成して、全く神のだけのために生きることです。自分にとって、これが人生の上で急激な変化であったことを彼らに話しました。私は医者になりたかったのですが、神は霊的な必要と人類の病に仕えるために私を召されたのです。でも50年間、神に仕えることは、ただ喜びでしかありませんでした。私は、50年以上前に立っていましたが、今また立っています。今夜、私は神の御前に立って、再確認します。主よ、私の人生はあなたのものです。私は、あなたのために生きます。そして、中学生のみんなも、主に仕える献身をしたい人は、私といっしょに立ってくださいと言いました。神は、みなさんが医者になってほしいと願っているかもしれませんが。神は、他の分野で奉仕してほしいと願われているかもしれません。それが何であれ、神が望まれている者に私はなりたいたいです。子供たちが私とともに立って、主への献身の歌を主に向かって歌いましたが、本当にすばらしいものでした。

救いは、あなたの罪の赦しです。神が備えられている相続財産の希望です。しかし救いは、神のために生きることです。イエス・キリストのしもべとして自分を取っておき、自分の人生をささげることです。

使徒行伝 27 章 (7 / 21 / 96)

使徒行伝 27 章 25 節 (Acts 27:25)

「嵐の中でそばにおられる」 # 8626

交読文：詩篇 107：1-32

使徒行伝も終りに近づきました。現在は、今週 27 章に入っています。あと 1 章だけです。今夜は 27 章を学びます。今朝は 25 節に注目してください。パウロは、地中海で激しく揺れる船の中で立ち、「ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられた通りになると、私は神によって信じています。」と言いました。

ついにパウロは、ローマに行くことになりました。彼は、ローマに行きたいことをすでに話していました。「ローマも見なければならぬ。(使徒 19:21)」と言いました。ローマ人への手紙で、彼らのところに行きたいことを語りました。御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けるためでした(1:11 参照)。しかし、異邦人から集めた献金を届けるために、まずエルサレムに行かなければならぬと感じていました(1コリント 16:1-3 参照)。けれども、エルサレムにいる間に捕らえられ、監禁されました。それは、実際はローマ政府から保護を受けるための監禁でした。そこにいる間、宗教会議で弁明する機会を得ました。それは結局暴動になってしまったので、裁判にかけられるために、さらに束縛されました。2、3 年が経って、自分が政治的な利得のために利用されていることを悟り、政治的に操られていることに疲れ果てました。不正が行なわれていることを悟り、ローマ市民の権利を行使しました。この訴訟をカイザルに上訴したのです。ついにカイザルのところに向かっていました。

ユリアスという名の百人隊長は、王朝の名士の出身でした。宮殿の護衛者の一人でした。パウロを安全に、ネロまで保護し送り届ける命令を受けたのです。ユリアスとパウロの間には、きずながすぐに出来上がりました。ユリアスは、パウロを深く尊敬しました。それで、岸に沿って航海を始めてシドンに入港すると、ユリアスは、パウロがシドンにいる教会に、信者に会いに行く自由を与えました。地中海の航海を続けましたが、向かい風なので普段よりもずっとゆっくり進みました。そのため、前進するためには、間切って針路をしばしば変えなければなりませんでした。けれども、ただ航海の時間を引き伸ばすばかりでした。それでミラに着いた頃には、季節がだいぶ遅くなっていましたが、イタリアへ行く商船を見つけました。これは、エジプトのアレキサンドリヤからの穀物を運んだ大きな船でした。それで百人隊長は、パウロやルカやアリストアルコや、他の囚人のために乗船を予約しました。それで、その船は、全員で 276 人の乗客と麦の積荷になりました。そしてイタリアへ向かい出港し、まずクレテの島に航行しました。けれども再び、向かい風だったり風が吹いてこなかったりして、航行が非常に遅くなりました。それで、良い港と呼ばれる入り江に着いた頃には、・・・これは港町ではなくただの入り江であり、近くにラサヤという小さい町がありましたが、水夫が 2、3 ヶ月滞在したいと思うような場所ではありませんでした。冬の季節は、嵐などがあるため地中海を航海しませんでした。普通は、冬に 2、3 ヶ月時間をつぶす港を探しました。水夫が自分達の楽しみを得ることができるよう、比較的大きな町が好まれました。奔放な快樂を楽しむ機会があまりないので、急ぎたかったのです。クレテの島のもっと先に行った所で、冬の季節をずっと楽しく過ごせる所に着きたかったのです。けれどもパウロは言いました。「皆さん。航海はしないほうがいいと思います。今出帆したら、多くの困難に出会うでしょう。今航海するなら、多くの問題にぶつかると、私は考えます。外洋を航海する時は過ぎました。冬をここで過ごすべきです。」けれども船長や船主や水夫は、百人隊長に言いました。「この男が、航海のことを知っているとも言うのですか。私たちは、生涯海にいるのですよ。私

たちはプロの航海士です。私たちならできます。ここで冬を過ごしたくありません。向こうの場所の方が、ずっと快適で冬の嵐からもっと守られます。やれますよ。」朝に穏やかな南風があると、航海には絶好の天候だということで、帆を上げて出発しました。

外洋に出たか出ないうちに、ものすごい暴風が吹きつけたのです。その地域では、それはユーラクロンと呼ばれていました。さらに北方では、「北東風」として知られていました。それは、恐ろしい、北極の冬の嵐です。そして、今回のは特別に激しい暴風でした。どこかへ入港しようとしたのですが駄目でした。そのため、アフリカの方まで押しやられるのを恐れて、帆を下げて吹き流されるままにしました。幾日も嵐に吹き流されて、太陽も星も見えず全くの暗やみでした。2、3週たった後、もうおしまいだと思いました。生き残る望みが絶たれようとしていました。きっと地中海に沈んで溺れ死ぬだろうと思いました。航海士のすべての知識を使って、船が浮かんでいるようにしました。重量を軽くしました。ルカは、実際に「自分の手で船具までも投げ捨てた。」と言っています。できるだけのものを捨てて、荷物をあまり積まないようにして、船が水に浮いているようにしたのです。また、船の下部を堅く縛りました。綱を巻いて、荒れに荒れた海の中で船体が壊れないようにしました。今や、望みもなくなりました。船が沈むのをただ待っていただけでした。この時点で、パウロが進み出ました。そして、この状態全体の指揮を取るような形になりました。彼らの中に立って、こう言いました。「私の言うことに聞き入れて、出帆しなかったらよかったです。出帆しなかったら、今こうむっている損失をこうむらなくて済んだのです。しかし、元気を出しなさい。いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです。昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って、こう言いました。『恐れてはいけません。あなたはカイザルの前に立たなければならぬからです。』また、私とともにいる者はみな救い出されて、いのちを失う者はひとりもないことを伝えられました。すべて私に告げられたとおりにになると、私は神によって信じています。（訳者注:27:21-25参照。欽定訳では、「私の主」が「わたしはあるという方」となっている。）」パウロは、神のみことばに信頼を置いていることを言い表しました。「元気を出しなさい。私は神によって信じています。ちょうど私が告げたようになります。船は難破しますが、人間のいのちはひとつも失われません。」大しけの海の中での長い旅路で、誰も食べる気がしませんでした。最も熟練した水夫でさえ、船酔いになったと思います。けれどもパウロは、「あなたがたは、ずっと何も食べずに過ごしています。食事を取らなければいけません。体が衰弱しています。」と言いました。食欲がないので食べるのは大変でしたが、パウロが食べ始めたので、一同も元気づけられ食事をとりました。

この話から、特別なことに注目する必要があります。パウロは、全く自分が原因ではなくて、荒れ狂った嵐の中にいました。自分で自分を危険にさらすことはしませんでした。自分は何も間違いを犯しませんでした。実際、航行しないように警告したのです。神のしもべが気が付くと、嵐の中にいることがよくあります。嵐は、自分が犯した過ちによるものではありません。恐ろしく、激しい嵐です。私たちが自分の人生をイエス・キリストにささげたら、ずっと穏やかな航行になるとは、神は約束されていません。イエスに自分をささげたら、穏やかな風が後ろから吹いてきてあなたの生活を漂わせ、静かな海があって航行が安楽になる、というわけではありません。いいえ、そのようにはなりません。神のしもべは、気が付くと、荒れた海の中にいることが多々あります。運命を支配することができなくなり、船は嵐の中で流れに任されました。状況を自分で支配することができなくなることは、自分で生活をもう管理しきれなくなることは、とても辛いことです。私たちは自分で管理して、自分で支配できるようにしたいのです。状況があまりに厳しくなると、とても大変です。自分が支配できないように感じます。どうしようもないと感じます。状況

に引き回されて、自分の生活に起こっていることに何もすることができません。そのようなことを直面するのは非常に困難です。14日も、太陽も星も見えないとあります。これもまたよくあることで、私たちは暗やみにおおわれる時があります。トンネルの最後にある光を見ることができません。暗やみの中で滅び、暗やみに飲み込まれてしまうと感じる時があります。どんな解決方法も見いだせないのです。周りが暗やみに見えました。生き残る望みは、消え失せました。この中にも、望みを捨てようとしている人たちがいるでしょう。解決方法を見出だせないのです。状況を動かすことができなくなっています。もうこれで終りだと思っているのです。

嵐の中で、主がパウロとともにおられたことに注意してください。主は、嵐から彼を救い出されませんでした。嵐の中にもともにおられたのです。他に自由に選択できるものがあったら、できれば嵐に全く遭いたくはないでしょう。けれども、そのようにはならないのです。イエスは、私たちが嵐に遭わないとは約束されていません。むしろ、嵐があります、と約束されているのです。こう言われました。「わたしのために、迫害されたり、ののしられたり、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいからです。

(マタイ5:11-12参照)」イエスは弟子たちに言われました。「彼らはわたしを拒むのなら、あなたがたをも拒みます。しもべはその主人にまさるものではありません。(ヨハネ15:18、20参照)」イエスは言われました。「あなたがたは、世にあっては患難がありません。(ヨハネ16:33)」しかし主は、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。(ヘブル13:5)」と言われました。嵐の中でさえ主がともにおられるという約束は、とても励ましになります。パウロは言いました。「昨夜、主が私の前に立っていました。

(使徒27:23参照)」嵐の直中に、主がパウロの前に立っておられました。興味深いことですが、主は何回かパウロに現れましたが、それはだいたい暗やみの時でした。パウロへの主のことばは、たいてい「元気を出しなさい(cheer up)。恐れてはいけません。」でした。つまり、パウロはがっかりしていたのです。それに、状況から来る不安や恐れもありました。パウロはエルサレムにいた時、自分がキリスト教へ回心した証を伝えていたのに、とてもがっかりするような経験をしました。その夜、牢の中で座っていると、主が来られて、「パウロ、勇気を出しなさい(cheer up)。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければなりません。パウロ、あなたはローマに行くのです。」と言われました。自分の宣教はもう終りだ、これでおしまいだ、もう駄目だ、というような時はいつも、主は、パウロのところに来られて、パウロを励まし、さらに任務を与えられました。ですからここにおいても、もうおしまい、もう駄目、もう今度は無理だ、と思うような時に、主は彼のそばに立たれて、「元気を出しなさい。パウロ。あなたはカイザルの前で、わたしのことをあかしします。まだ、終りではありません。」と言われました。主の働きの任務を、さらに与えられたのです。面白いことに、パウロは主のみことばを受け取ってから、それを船にいる者たちに伝達したことです。こう言いました。「元気を出しなさい。いのちを失う者はひとりもありません。」「あなたはカイザルの前に立ちます。あなたは生き残ります。」イエスは言われました。「あなたは必ず(must)、カイザルの前に立ちます。」「必ず」なのです。

この話の中に、二番目の「必ず」があります。「私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。(27:26)」とあります。島だったらどこでも(any)、ということではなく、どこかの(acertain)島に打ち上げられる、と言っています。このことから、船が嵐に翻弄されたけれども、実は神に導かれていたことがわかります。海の嵐と風のなすがままにされていると思っていましたが、実際は神がおられて、船をどこかの島に導かれていたのです。神は御手を置かれて、船を導かれていたのです。この島は、神がパウロに大きな宣教の機会を与

えられるところでした。嵐や試練の目的が見えない時が、実に多くあります。この状況から、何か良いものが出てくることがあるのか、と考えてしまいます。なぜこんなことを神が許されるのか。嵐の中でさえ、神の御手が自分の生活を導いていることを見ることができません。神は、ご自分の目的と計画を達成されようとしている最中なのです。「私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。」この嵐の目的が、次の章になるまで明らかにされないことは、とても興味深いと思います。生活の中の辛い経験において、神の目的は、次の章になるまで理解できない時がたくさんあります。嵐が自分のいのちを脅かしているような章にいるとき、先が見えなくて、何が襲って来るのかわからないときに、それは、私たちをささえる神のみことばを信じて、信頼する章なのです。「すべて私に告げたとおりになると、私は神によって信じています。」神のみことばを信じるのが支えとなり、神が達成されようとしているすばらしい計画をまだ見なくても、神がパウロのために計画された次の章は、全くすばらしく、すごいのです。マルタと呼ばれる島に漂着したのです。神は、この島の住民をパウロに与えようとされています。パウロが、福音を伝えて、数百の人が新たに生まれ、神の力が現れると福音に応答しました。マルタの島は、震撼しました。パウロはこのことをまだ知りません。彼はただカイザルに会い、その前に島に、どこかの島に打ち上げられることしか知りませんでした。けれども、神は永遠の目的を、パウロが全く知らなかったすばらしい計画を実行されようとしていたのです。

今嵐の中を通っている人たちは、元気を出してください。光を見ることができないところに、いらっしゃるのでしょうか。暗やみの中に、将来がわからないところに入り込んでしまった、とお思いでしょう。あなたの道を主にゆだねると、主がその道を導かれます。人生にあるすばらしい目的を、神は実行され、達成されます。人生の次の章は、とてもすばらしいものになります。神の御働きを見るとき、突如として理解できるようになります。

「ああ、そうだ。あなたはこのことを行なっておられたのですね。なるほど、わかりました。主よ。」来週、使徒行伝の学びの中で、その章に行きます。嵐の結果は、すばらしいのです。神が、さらにすばらしい宣教へと導かれました。

後にパウロは実際にローマに着き、カイザルの前で法廷に立つとき、独房からピリピにある教会に手紙を書きました。基本的に、パウロは、自分が牢にいるときに彼らが送ってくれた援助に感謝の意を表したかったのです。けれども、「私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。わたしがキリストのゆえに投獄されている、ということは、総督官邸に明らかになり(1:12、13参照)」と言いました。カイザルの官邸全体に、キリストについて、このキリストのしもべについて、うわさが飛び交っていました。ユリアスがこのうわさを言い広めたに違いありません。このローマの百人隊長が、暗やみのときに勇気を持って力強く、パウロが立ち、人々を元気づけ、事態の指揮を取ったのを見ていました。パウロが、船の中で命令を出し始めました。「みんな、食事を取りなさい。私たちは浅瀬に乗り上げますが、だれも被害をこうむりません。みな大丈夫です。」水夫の一部が、錨をおろすふりをして、救命ボートを降ろして逃げようとしたが、パウロは、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたも助かりません。」と言いました。それで、救命ボートの綱を断ち切って、そのまま流れるのに任せました。夜が明けると、小さな入り江が目にとまりました。そこに船を乗り入れようとした。帆を上げて、この入り江に近づこうとしたが、浅瀬に乗り上げてしまいました。波に打たれて船が破れ始めました。泳げる者は岸まで泳ぐように命じました。サーフィンの最初の記述がこの章の最後の方にあります。サーフィンに熱中している人たち、これは聖書的なのです。44節に、「残りの者は、板切れや」とあります。なるほど！「その他の、船にある物につかまっていくように命じた。こうして、彼らはみな、無事に陸に上がった。」ユリアスは、パウロのすることを見ていました。激し

いプレッシャーの中で、全ての者が生き残る望みを捨てようとしていたときに、パウロが立ち上がり、主が自分に語ったことを話すのを見ました。それから、数百の者が来始め、パウロが福音を、イエス・キリストの知らせを話すのを聞くのを見ました。パウロによって行なわれた多くの奇蹟を見ました。それで、カイザルの家系にいる者も、信者になりました。ですからパウロは、「私の身に起こったことが、かえって福音の前進させることになったのです。」と言いました。

一時的な困難によって、嵐によって、神が私たちの中で働かれることが実に多いのです。後にパウロは、コリント人へ手紙を書きました。「すべての慰めの神が、私たちが苦難を受けたときに、自分自身が受けた慰めによって、あなたがたを慰めてくださいます。もし私たちが苦しみに会うなら、それはあなたがたのためです。私たちが神の助けを得て、あなたがたを励ますことができます。なぜなら、私たちも苦しみに会ったからです。(2コリント1:3-6参照)」神はパウロに嵐を許されました。それは、パウロが嵐の中にいる人々を励ますためでした。奉仕に携わっている人にとって(訳者注:ここでは、牧師や他の指導者のことを指している。)、すべてが安全な航行だと思わないでください。私たちにも、嵐はあります。神は、私たちが嵐に会うのを許されます。それは、神に依り頼むためです。神はよく、私たちが神に寄り掛かるために、それは、地上からの支援を取り除けられます。嵐の中でさえご自分が真実であることを示すため、他の人が来て、問題に直面したとき、暗やみに圧倒されたとき、私たちはこの人たちを、私たちが似たようなことを経験したときに受けた慰めによって、慰めることができます。そうです、神は働かれており、私たちの人生に、とこしえの計画を実行されています。時には、私たちの注意を引いて神が働くことができるように、嵐が必要になります。それは、神がさらに私たちを通して働かれるために、私たちを整え、用意させるためです。この中に、今嵐に会っている人がいらっしゃるでしょう。元気を出してください。主はともにおられます。「わたしは決してあなたを離れず、あなたを見捨てない。」と言われます。

使徒行伝 28 章 (7 / 28 / 96)
使徒行伝 28 章 23 - 27 節 (Acts 28:23-27)
「イエスについて説得する」 # 8627
交読文：詩篇 118 篇

使徒行伝の最後の章まで来ました。初代教会史の最後の章まで来ました。1章に戻りますと、イエスは弟子たちに、「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、私の証人となります。(1:8)」それで使徒行伝を見てきましたが、エルサレムでイエスについての証言を見ました。それから、これがユダヤに広まったのを見ました。それから、ピリポがサマリヤに行きイエスを宣べ伝え、証言がサマリヤまで広まったのを見ました。それから、パウロによって、福音が地の果てにまで伝えられたのを見ます。ですから使徒行伝は、1章にあるイエスの預言の成就なのです。パウロは、今ローマにいます。そこは、当時の世界の文化の中心地でした。ローマにいる人々に福音を宣べ伝えていました。つまり、地の果てのような所でした。パウロは、もう既にローマの教会に手紙を書いていました。実際これは、私たちが来週から読み始める手紙です。みなさんへの宿題は、ローマ人への手紙 1 章です。私は、ローマ人への手紙の学びを楽しみにしています。「ローマ書は、どんな会衆にも大変革を起こす。」と言う、大学の教授がいました。ですから、向こう 12 週間で、大変革が起こるはずです。神の御霊が、私たちの人生を変えてくださるでしょう。数年前に、真の大変革が必要だった教会があったので、この教授が正しいかどうかを調べるために、ローマ書を教えることに決めました。ローマ書を教えていますと、私自身が大変革を経験しました。すばらしい神の恵みを見ることができ、ローマ書によって私のクリスチャン生活に大変革が起こりました。パウロはローマにいましたが、もう既にローマ人に手紙を書いていました。その手紙の中で、ローマに行って福音を宣べ伝えたい願いを言い表しました。「私はイエス・キリストの福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。(1:16 参照)」と言いました。ですからここ 28 章で、パウロがローマにいて、福音をユダヤ人に宣べ伝えているのを見ます。

パウロがローマに到着したとき、自分の家を借りることが許されました。24 時間鎖でローマの番兵につながれて、家の中で監禁されていました。けれども、少なくとも自分だけの家に住んでいたのです。ユダヤ人の共同体の指導者たちを、自分の家に呼び集めました。カイザルの前に出る目的が、ユダヤの国やその民を告発するのではないことを話したかったのです。このことが目的ではないことを説得しましたが、彼らはこう言いました。「あなたの裁判について、わたしたちは何の知らせも受けていません。何が起こったのか、私たちは耳にしておりません。このことについては、私たちは何も知らないのです。けれども、教えてください。彼らが至るところで話しているこの宗派について、あなたはどうかお考えになっていきますか。(28:21-22 参照)」おお、これはいいチャンスです。彼らはパウロに、ユダヤ人の信仰の新しい宗派について、メシヤであるイエス・キリストについて話して欲しいと呼びかけたのですから。そこで、彼らは日を定めて、みなパウロの宿にやって来ました。パウロは彼らに、この新しい宗派について知っていることを話しました。この宗派のユダヤ人たちは、イエスが事実メシヤであることを確信していたのです。パウロが、ローマで福音を宣べ伝えたい願いは、いま実現しました。

この、ローマで福音を宣べ伝えたい願いが、神から来たことは間違いありません。興味深いことに、主は、何か願いを私たちの心に置いてくださることによって、私たちが導かれることがよくあります。神は言われました。「わたしの律法を石の板ではなく、彼らの

肉の心に書くときが来る。(エゼキエル36:26参照)」この意味は、神があなたの心に、あなたのためにご自分のみこころと願いを置かれるということです。ローマに行って福音を宣べ伝えたいという願いは、主によってパウロの心に置かれたのです。聖書は、「主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。(詩篇37:5)」と言っています。つまり、主を自分の喜びとすれば、主がご自分の願いを植えて下さるということです。もし主を自分の喜びとしないのなら、この通りにはなりません。「俺には願いがあるから、これが主のみこころだろう。」と言わないでください。そんな馬鹿なことはありません。そのようなことはありません。自分が主にささげ、主を自分の喜びとするなら、その時のみ、あなたの肉の心にご自分の律法を書いてくださるのです。ご自分の願いを置かれるのです。それで、「あなたのみこころを行なうことが、私の喜びです。」と言うことができるのです。なぜなら、それがあなたの願いだからです。神は、あなたが神を自分の喜びにしているので、その願いをかなえてくださっているのです。

それで、23節には次のようにあります。「そこで、彼らは日を定めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやってきた。彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした。」ああ、自分がそこにいることができたらと思います。一日中、使徒パウロと朝から晩までいっしょにすることができればと。聖書についての実用的な知識に満ちていたこのきわだった男が、聖書を手にして座っていたのです。モーセの書を、律法をずっと見ていきました。預言者たちの書をずっと見ていきました。そして、モーセや預言者がメシヤを預言して、イエスを証言していることを示していきました。自分がメシヤと主張するどんな者にも要求される多くの条件を、イエスがどのように満たしていったかを示していきました。ですから、彼ら自身の聖書から、モーセの律法と預言書から、イエスのことについて彼らを説得しようとしてきました。

イエスが約束のメシヤであり、神の子であり、世の救い主である最も強力な証拠は、律法と預言書にある多くの予言を、メシヤについての条件を成就された事実にあると思います。この予言の成就是、聖書の他の宗教の經典との違いをはっきりさせます。イエスが多くの予言を成就されたことは、他の宗教の指導者とも違いをはっきりさせます。孔子、仏陀、モハメッドのうち誰も、この書物が自分がこうなり、こうすると言っていたことを自分はここで成就している、と言うことはできませんでした。彼らの到来を前触れし、その生涯の出来事を語っているようなものは、何もありませんでした。けれどもイエスは、「あなたがたは、聖書の中にいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。(ヨハネ5:39参照)」と言うことがおできになりました。「さあ、わたしは来ました。聖書にある巻に、わたしについてしるされているとおり、神よ、あなたのみこころを行なうために。(ヘブル10:7)」とイエスは言うことができたのです。その誕生、生涯、死、埋葬、復活などについて、イエスは、旧約聖書にある、300以上のメシヤであることの条件を満たされたのです。合成確率の数学の法則を用いると、これら300の条件すべてををひとりの人が満たすことは、数学的に不可能です(訳者注:これは、数値として出てこないほど、確率が低いことを言っているのだと思います。)。他のどんな者も、自分がメシヤであることを主張するのは数学的に不可能です。イエスのみが、この主張をすることがおできになるのです。エルサレムを再建せよ、再興せよという命令が出てから約450年後に、ひとりの息子を生んだ処女がベツレヘムに、何人いたと思われますか。紀元前445年3月14日の再建の予言が与えられてちょうど483年後に、エルサレムへるばに乗って、自分がメシヤであると主張する人はどのくらいいると思われますか。今日読んだ詩篇の中の、「家を建てる者たちの捨てた石。(118:22)」は、彼らはイエスをメシヤではないと拒んだことで成就しました。イエスは

ご自分を示されましたが、彼らは拒みました。イザヤは、「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っている。(イザヤ53:3)」と言いました。メシヤについてのダニエルの預言では、彼は、御国を受け継ぐことなく「油注がれた者は断たれ」ることを話しました(9:26)。ですから、メシヤについての予言はすべて、・・・私たちが今朝読んだ詩篇118篇の中には、「家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石となった。」とありましたが、読み進めると、実にこの方の勝利の入城の日について語っています。「これは、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。・・・どうぞ救ってください。・・・主の御名によって来る人に、祝福があるように。」ヘブル語の「どうぞ救ってください。」は、ホサナです。イエスが勝利の入城をされたときに、弟子たちが、「ホサナ、ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる王に。(マタイ21:9等参照)」と叫んだのをおぼえていらっしゃるでしょう。イエスは完全に成就されたのです。ゼカリヤの預言でもそうです。「大いに喜び。エルサレムの娘よ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方はへりくだり、ろばに乗られる。(ゼカリヤ9:9参照)」イエスは、ダニエルの預言のメシヤが来ると約束されたまさにその日に、ろばに乗って来られたのです。聖書を調べると、メシヤに関して300の条件をイエスが成就されたことがわかります。これについて、偶然に起こった要素を計算するなら、数学的に不可能な数字になります。世の宗教の指導者すべての中で、イエスは無比の存在です。

パウロはコリント人へ手紙を書きました。「私があなたがたに宣べ伝えた福音です。イエスは、聖書の示すとおり、死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って、三日目によみがえられたこと、(1コリント15:3-4参照)」パウロがコリント人に宣べ伝えた福音は、もちろんこの日にローマ人に宣べ伝えた福音と同じものです。パウロは福音を伝えて、イエスについて彼らを説得して、律法と預言者たちの書を見せて、イエスがこれらの予言を成就されたことを示しました。聖書に従って、イエスが私たちの罪のために死なれたことを示しました。聖書に従って、イエスがよみがえられたこと、葬られたことを示しました。聖書に従って、イエスが死者の中からよみがえられたことを示しました。詩篇22篇やイザヤ53章や、メシヤの死について語っている他の聖書の箇所を見せたのでしょうか。イエスが葬られたことを、イザヤ53章を使って見せたのでしょうか。詩篇を使ってイエスの復活を示したのでしょうか。「あなたは、私のたましいをハデスに捨てておかず、あなたの聖者が朽ち果てるのをお許しにならないからである。(使徒2:26から引用)」イエスがメシヤであることを、彼らに示したのです。彼らを説得しました。心を開いた人になら誰でも、神がイスラエルの民に遣わされるメシヤについて、イエスが旧約聖書の中についてのこれら預言の成就であることを説得することはできました。

パウロが伝えた結果は、次の節にあります。「ある人々は彼の語る事を信じたが、ある人々は信じようとしなかった。」これは、いつも起こる事です。人々は、神の真理を聞きます。隣り合わせの場所に座って、同じメッセージに、同じ真理にさらされていても、ある人々は信じて、ある人々は信じないことがあります。自分の罪を赦されて立ち去った人がいました。また、依然として自分の罪の下にあって、立ち去った人もいました。永遠のいのちに入り、神からの賜物を受け取った人もいました。永遠のいのちを得ずに去っていった人もいました。聖書は、「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。(ヨハネ1:12)」と言いました。このことは、信じるとは、実は選択の問題であることを指し示しています。私たちは個々の人であって、選択の能力があります。それで、イエスがメシヤであることを、提示された証拠に従って信じることを選ぶのです。圧倒的な量の証拠があります。それで、信じることを選ぶのです。あるいは、信じないことを選びます。拒みます。面白いことにイエスは、「わたしが行なっているわざそのものが、わたしについて証言しているのです。

(ヨハネ5:36参照) 」と言われました。ピリポがイエスに、「私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。(ヨハネ14:8) 」と言いましたが、イエスはこう言われました。「こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを見なかったのですか。わたしを見た者は、父を見たことがわからないのですか。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。(ヨハネ14:9、11参照)」けれどもヨハネは12章で、人々がこの御業を見ているのになぜ信じないのか、その混乱を語っています。すばらしい御業を見ていたのに、多くは信じませんでした。ヨハネは、彼らが信じなかったことを、イザヤの預言の成就だと見ています。「主は彼らの目を盲目にされた。また耳を遠くされた。それは、彼らが目で見、その耳で聞き、回心することがないためである。(12:40参照)」

さて、ここでパウロは、彼らが信じないことを見ています。すべての預言がありましたし、証拠がありました。イエスの御わざが、この方が超自然的な方であること、神の御子であること、メシヤであることの証拠でした。病人をいやし、盲人の目を開け、死人を生き返らせましたが、これらすべてが証拠です。事実、ユダヤ人の指導者の一人がイエスのところに来て、こう言いました。「私たちは、あなたが神から来られたことを知っています。あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行なうことができません。(ヨハネ3:2参照)」神がともににおられるのでなければ、このようなことを行なうのは不可能です、と。ですから、心を正直にしている人には、それを認めることができたのです。この証拠を見たら、神の力がその者に宿っていなければ誰もこんなことはできないと、わかるはずです。さて、パウロが提示した証拠をこれらの人々は見ました。パウロは聖書から彼らを説得して、イエスがメシヤであることを、実に聖書の中から証明しました。ある人々は信じましたが、ある人々は信じようとしませんでした。同じメッセージから、それを聞くいろいろな人々の反応が様々に出て来ます。

イエスは、神の国は蒔かれた種のようなと言われました。道ばたに落ちた種があり、別の種が岩地に落ち、別の種がいばらの中に落ち、別の種は良い地に落ち、実を結び、30倍、60倍、100倍になりました。イエスは、種が神のみことばであると言われました。いろいろな地は、さまざまな人々にみことばがどのように受け入れられるかを表しました。農夫が、種を散布しています。種の幾つかは道ばたに落ち、農夫の後ろに鳥がいて、道ばたに落ちた種を摘みとってしまいます。種が落ちるとすぐに食べてしまいます。風が吹いて、種の中には岩地に落ちるものもあります。これは多くの場合、くぼみが1から2インチ(訳者注:2.5から5センチ)の深さの土で埋まっている平たい石です。風が吹いて、別の種はいばらの中に落ちます。それから、多くの種は耕やされた土に落ちます。農夫によって耕された肥沃な土にです。イエスは、種が神のみことばであり、人々がこれをいろいろな受け入れ方で受け入れることを言われました。ある人々は、みことばを聞いてもまったく影響されず、心にしみ込むことはありません。農夫の前から2、3歩幅の所で去ってしまいます。これは、完全な無感覚状態です。神に属する事について、心がかたくなになっています。みことばを聞くことさえしません。みことばが土の薄い岩地に落ちるような人々もいます。「ほう、これはすばらしい。」と外面的には受け入れますが、それ以上行くことはありません。深さがありません。そして勿論、多くの人は、いばらの中に種を蒔くのと似ています。種は成長するのですが、いばらも伸びて、それをふさいでしまいます。みことばが実を結びません。イエスは、神のみことばが心に植えられても、世の心づかいや、富の惑わし、その他のいろいろな欲望がはいり込んで、神との関係をふさいでしまい、実を結ばないと言われました。けれども、良い地に落ちたものは、実を結び、30倍、60倍、100倍になった、と言われました。

とても面白いと思う事があります。主が、みことばを種にたとえておられることです。というのは、種はDNAを包んでいるからです。この小さい種の中に情報が暗号化されていて、正しい地、正しい条件の中に置かれれば、この種は、植物、木、いろいろな色をもった花を生むのです。すべての暗号が、この小さい種に指定されているのです。とても面白いですね。牧師会議がヘルモン山のところで行なわれたとき、私は巨大なレッドウッド（訳者注：赤色木材の採れる各種の木）のところにいました。私と幾人かの牧師は、レッドウッドの森林の中に入りました。それは巨大な木々でした。その中には、樹齢が2000年のももあります。この巨大な木々を見ていると、地面に小さな種のさやを見つけて、それを拾い、この巨大なレッドウッドの種を振って出してみました。私の手のひらに、とてもとても小さい焦げ茶色の種がありました。私は同僚に、手のひらの種を見せてこう言いました。「DNAがこの種の中に暗号化されていて、今見ている、あの巨大なレッドウッドの木に関する情報がすべてあるのがわかりますか。」この小さな種に、巨大なレッドウッドを造るすべての情報があるのです。面白いことに、この巨大なレッドウッドの一つを見ると、枝が出て、木の幹と平行に伸びているを見ました。巨大な枝で、実に二つ目の幹を形造っていました。だいたい、地面から30フィート（訳者注:9メートル）ぐらい伸びていて、巨大な木の一部でした。重さは、何トンもあったに違いありません。けれどもその枝の下に、大きな丸くふくらんだ部分が成長していて、この二つ目の幹の重さを支えていました。もしそれがなかったら、ただ倒れ落ちているでしょう。これまた、小さい種の中にこれらすべての情報はいっているのです。何かが伸び出てしまったら、下に大きな丸くふくらんだ部分を造って、それを支えるという情報を持っているのです。驚くべきことです。これは、進化論を許しません。なぜなら、もしすべてが偶然に進化したというのであれば、何が起こったとしても、木は、二番目の部分が伸びたら、大きな丸くふくらんだ部分が造られなければいけないことを知っておかなければいけなかったはずだからです。すべては、偶然によって進化する云々とされているからです。すごいことです。さて、イエスは神のみことばは種であると言われました。これは何を意味するのでしょうか。神のみことばはDNA分子のようなもので、みことばに暗号化された体系があって、あなたがみことばを読むと、みことばにはイエスに似た者になる、すべての情報が暗号化されて入っていて、あなたの生活に実を結び、あなたの生活を変えます。すべてがその中にあります。あなたの心に植えられた神のみことばには、イエスに似た者になる暗号化された情報があります。パウロは、「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、栄光から栄光へと主と同じかたちに変えられて行きます。(2コリント3:18参照)」すべてが、みことばの中にあります。

ある人々が信じないのはなぜでしょうか。パウロはまた聖書をひもといて、答えを見つけました。ヨハネの結論と同じ答えで、イザヤの預言の成就だと言うことです。彼らの心はかたくなで、鈍くなったということです。神は預言者イザヤに言われました。「この民のところに言って、告げよ。あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、その目はつぶっているからである。」ですから、ヨハネはパウロと同じ箇所を使っているというか、パウロはヨハネと同じ箇所を使っています。これによって、人々の不信仰を説明しました。基本的に、人はイエスについて心を定めているから信じないのです。世にいくら証拠があっても、その人は少しも自分の心にきめたことと違うことを説得されることはありません。信じたくないから信じないのです。真理を聞こうとしません。真理を見ようとしません。合理的な決断をしていると思っているようですが、そうではなく、彼らの決断は憶測に基づいているのです。それとも、とても愚かなものに基づいています。今日多くの人々は、ある時教会で嫌な思いをしたので、信じません。今、苦々しく思っています。「教会

の長老が、自分をひどくあしらった。僕は仕返しをする。僕は地獄行きさ。」「サーカスにいるやつに仕返しをした。入場券は買ったけれども、入場しなかった。」と言っている人のようなものです。人々は、信じない理由として実に薄っぺらな言い訳をします。こういう人たちは、あなたが被告人の場合、法廷で陪審員であってほしくない人たちです。なぜなら、彼らは適切に証拠を分析することができず、あなたを既に有罪に定めているからです。どんなにたくさんの証拠があっても、彼らを逆側に説得することはできません。したがって、多くの人は、イエスについて大きな偏見を持っています。イエスについてほとんど知らないのです。しっかりと事実を調べてみたことがありません。自分が聞いたことのある不十分な、不完全な、あるいは誤った証拠でもって決めつけているからです。彼らの思いに偏見があり、この方に反抗しています。それで彼らは、目で見、その耳で聞き、回心することがありません。

イエスは信じない人のことを、こう言われました。「人々は光よりもやみを愛した。」イエスを信じることを選べば、自分の生き方を変えなければならないことをその人たちは知っています。彼らは、悪い生活をしており、その悪を愛しているのです。肉の欲を捨てることを望まず、肉の欲にふけることを望みます。自分の快樂だけを考え、他人のことを省みません。イエスが、「互いに愛し合いなさい。(ヨハネ15:15:12参照)」と言われたように愛すること望まず、憎しみでいっぱい、仕返しをしたいと願っています。イエスが言われたように赦すことを願いません。イエスが命じられたように、きよく、汚れのない生活を持ちたい思わず、汚れと罪の中に生きたいのです。それで、イエスはこう言われました。「彼らは、光のほうに来ない。その行ないが悪かったからである。(ヨハネ3:19-20参照)」このように、人々が信じない理由はいろいろあります。心がかたくなになっているため、目が見えなくなっているため、または、イエスが、良い、汚れのない、きよい生き方をするように命じられたので、信じたくないのです。

しかしなぜ、もしここに信じていない人がいるなら、なぜその人は信じないのでしょうか。もし、100字以内で、「私はイエスがメシヤだとは信じません。なぜなら、・・・」と書いてくださるなら、何をお書きになりますか。あなたからの便りを楽しみに待っています。どうぞ私に、手紙を書いてください。短くしてくださいね。でも、あなたの言い訳をお伺いしたいのです。なぜ、イエスがメシヤだと信じないかを。それはあなたの心が堅くなっているからですか。こうした事に対して、思いを閉ざしているからですか。「事実を突き付けて、俺を混乱させるなよ。もう心を定めてしまっているから。」とおっしゃるのでしょうか。それとも、罪の中に生きたいからですか。なぜ信じないのでしょうか。言い訳がどのようなものであれ、イエス・キリストを信じなければ、天の御国に入る望みは到底ありえないという事実と直面しなければなりません。イエスは、「わたしは門です。他に入ろうとする者はみな、盗人で、強盗です。(ヨハネ10:8-9参照)」と言われました。イエスはこう言われました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。(ヨハネ14:6)」ですから、もしイエスを信じないことを選ぶのなら、神の御国にある永遠のいのちを受け継がないことを選ぶことになります。とても貧弱な根拠によってなされた選択により、このような重大な結果を招くのです。それゆえ聖書は、「『さあ、来たれ。論じ(reason)合おう。』と主は仰せられる。(イザヤ1:18)」と言っているのです。神が私たちに今日下さるうとしている救いは、世界中で最も理にかなって(reasonable)います。神は、前もってこの計画を立てられ、計画どおりに実行されました。神は、それを語られ、それを行なわれました。証拠は、豊富で十分にあります。イエス・キリストを拒むのなら、それは自分が持っている知性を殺すことです。目が盲目になっているはずで、これは、意図的な故意の盲目です。それはもっと悪いのです。見ようとしぬ人ほど盲目な人はいない

からです。さもないければ、偏見によって盲目になっていたのかもしれませんが。この偏見は他の人から来たものであるか、あるいはサタンが目をくらまして、イエス・キリストの真理を見えなくしているのです。それが何であれ、言い訳はできません。なぜなら、今日あなたに信じる選択が与えられているからです。そして、あなたの人生を、福音の力によって変えられて、直していただくことができます。今日の種は、ちょうど今蒔かれています。道ばたに落ちている種があります。「えっ、こんなの信じるわけがないだろう。」と言っています。心の中に入ってさえもいません。ある人たちは、「良さそうに聞こえるから、試してみよう。」と言っていますが、それは感情だけで、身が入っていません。ある人は、さらにもう一步進んでいますが、間もなく、欲望と肉に従った生活と、御霊に属する事に従った生活の間に問題が起こり、教会に行き、正しいことをするのですが、こうした世の欲が実を結ばせなくします。けれども、神に感謝します。神のみことばが、心の肥沃な地に入っていく人たちがいます。みことばが、その人たちを変える働きを始めます。生活は、劇的に変わります。神の御霊が神のみことばを取って、全体のメッセージが実を結び、30倍、60倍、100倍になります。